精霊使い

黎奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
精霊使い

【Ｎコード】
Ｎ６１７７Ｍ

【作者名】
黎奈

【あらすじ】
精霊使いになり立ての未熟なルミルはシンジとともに精霊使いとしての目的を果たすべく旅を続ける。
精霊や人間を襲う精魔を倒しながら修行をする二人だった。
ルミルとシンジは従兄妹同士の関係にあるが、ルミルは小さいころにシンジと会った記憶はない。
そんなルミルとシンジの旅が始まった。

第一話　精霊使いの旅

「・・・見て、シンジ！！倒したよ！！」
私は近くにいる少年に向かって叫ぶ。
「・・・はしゃぎすぎだ。・・今の奴は、初級の中でも弱い精魔だ。・・さぁ、いくぞ。」
少年は冷たく言い放った。
「・・・少しはほめてくれたっていいのに・・。」
そう呟き、目の前を歩くシンジについていく。
私の名前はルミル。シンジは旅の連れなの・・というよりシンジと旅の連れといったほうがいいかもしれない。
旅をしているのには理由があった。
ーーー精霊使いとしての目的を果たすためーーー
それが理由。
精霊使いになりたての未熟な私を連れてシンジは旅をしてくれている。
シンジと出会ったのは今から、一週間前のことだった。

その日、私は庭で遊んでいた。
「お～い、ルミルや～いるかのぉ～」
聞き覚えのある声がした。
とっさに振り向くと、私から少しはなれたところに、おばあちゃんと私の知らない少年がいた。
「い、いるよぉ～。い、今、行くからぁ～」
私の声はなぜか裏返った。
多分知らない少年がいるからだと思う。
私は飛びたいと強く心の中で念じた。
すると体は宙に浮いた。これが私の能力だ。

私は能力をコントロールして二人のいるところに向かう。
そして二人の目の前の降り立った。
「こんにちは、おばあちゃん。久しぶりだね。・・・え～と・・・」
おばあちゃんに挨拶してその隣にいる少年に視線を向けたが私は戸惑った。
「あ～こいつはシンジって言うんだよ。ルミルとシンジは従兄妹同士だったはずじゃが・・果て、あったことあるかの？」
おばあちゃんはそういって、少年を紹介してくれたけど、会ったことがあったかどうか考え込んでしまった。
私には記憶にないのだけど。
「・・私、ルミルですっ。よろしくねッ。」
頭をペコッと下げ、自己紹介をした。
いくつか歳がはなれてると思った。背が私の頭分、私より高い。
「・・・。」
驚いた顔をしている。飛んできたからかな？それともほかの事？もしくは、両方？
「あの～。」
私が困っている顔をすると、ようやく気づいてくれたのか、
「・・・！・・シンジ・・だ・・」
と、自己紹介？をしてくれた。
結構、無口なタイプの人かな？クールな人は嫌いじゃないけど・・。
「さて、ルミルや。精霊使いになるための試験を受けるかの？」
「はいっ。もちろん！！そのためにこれまでいろいろ準備してきたのだから。それに・・父さんも認めてくれるでしょ？」
父さん・・・数年前、父さんは、精霊使いとして、依頼を受けた。
そして、いつまでたっても戻ってこないと思ったら、そのとき、亡くなったことを聞いた。
「そうじゃのぉ。あいつも認めてくれるじゃろう。では、奥で準備するから二人は呼ぶまで待っておるのじゃぞ。」
そういって、私の家の奥に入っていった。

私と少年の間に長い沈黙が訪れた。
「あ、あの、シンジ君・・・」
「・・・シンジ・・でいい。」
私の呼び方を訂正する少年。
君付けいけなかったのかな?・・呼び捨てにしろって言いたいのかな?
「あ、あの・・シン・・・!」
私は訂正しようとしたが言葉を飲み込んだ。
笛の音が聞こえる。耳に手をかざし、家の奥を見つめる。
「?」
私の言葉と動作を不思議にお待っているような表情を見せるシンジ。
「・・笛が・・・呼んでる・・」
「ん?」
シンジは私の呟きが理解できていないようだった。
「笛が呼んでる。・・行こう。」
再び言って、今度はシンジの手を引っ張って家の奥を進む。
シンジは理解できずにルミルの連れて行かれた。
そしてルミルは立ち止まった。
「・・・!!」
何も言わないでついてきたシンジは驚いた顔をしていた。
目の前に、精霊使いになるための試験の用意はできていて、おばあちゃんは笛を手に持っているのだから無理もない。
「おぉ、笛の音が聞こえたのじゃな。では、はじめるぞ。」
「はいっ。」
私は、シンジの手を離して魔方陣の中央に立つ。
魔方陣は精霊を呼び出すためのものにしか過ぎないが。
私は精霊に呼びかけの言葉を言った。
言葉が終わると同時に魔方陣が輝きを放った。
そして、時期に輝きは失い、一体の・・いや、一匹のといったほうが的確なかわいらしい精霊が現れた。

精霊はふわり、ふわりと、宙に浮いている。
つむじ風と音符がその精霊を囲んでいる。
「あなたなら、契約してもいいよ。」
精霊が言う。
「ありがとう。あなたは、ウィーミアね。私はルミル。じゃぁ、契約しよう。」
私は、精霊の名を当てて、契約を交わす言葉を言った。
契約とは、精霊使いと精霊の行う儀式である。リングに精霊を呼び出す力が備わる儀式。
使い手にとって、精霊がすぐ呼び出せるように。
精霊にとっては使い手が使い手として役目を果たすかどうか見るために。
そして契約を交わした。
「ルミル、あなたはすごいよ。私の名を当てることができた使い手は初めてよ。これからよろしくね、ルミル。」
「えぇ、ウィーミア。こちらこそ、よろしくね。」
私がそういうと精霊は笑ってリングに戻る。
「風と音のつかさどる精霊だのぉ。これは珍しいものじゃ。さて、出発の準備が整ったのぉ。」
「え?」
私そんなこと聞いていないけど?
「何、今知ったという表情をしておるのぉ。精霊使いは旅をするものなんじゃよ。シンジと旅をしてくるのじゃ。」
「はぁ。」
私は頷きこそしたものの頭は混乱状態に陥っていた。
え、えぇ?本当、本当に!?シンジとなんて・・聞いてない~~!?
私の意思には関係なくもう決まったことみたいだ。
シンジは平然としている。
私と行くことを前々から知っているかのように。
だから、ここに来たのか。

頭の中は整理がつかぬまま、翌日にシンジとともにする旅を見送られた。

こうして、私は、今まであった記憶のないシンジと旅をすることになったのだった。

第一話　精霊使いの旅（後書き）

いろいろとご迷惑をかけてしまいますが、ぜひ読んでくださるとうれしいです。

第二話　旅の目的

ルミルは、はぁーと息を吐いた。
その理由は私の前を歩くシンジのせいだった。
私が頑張って精魔をウィーミアと一緒に倒したのに、その喜びを分かち合う時間さえくれない。
その上、冷たい言葉を淡々と言う。
図星だから反論はできない。でも、少しぐらい共感してくれたっていいじゃない。
そう心の中で反論している。言葉に出せば、絶対、私が押し黙るようなことしか言わない。
無口で冷静で冷たい人。そう思えて仕方がない。
だって数々の仕打ちがそうだといわせるもの。
旅を始めたその日から、精魔に襲われた。私は何もできなかった。
というか、恐怖で身がすくんじゃった。そのとき、シンジが、
「・・俺が精霊使いの戦い方を教えてやる・・」
そういったのだった。その日から、もう、毎日毎日休まず特訓を受けてきた。
おかげで、何とか初級の中の弱い部類の精魔には対抗できるようになった。
それは、シンジのおかげとしかいいようがないけど、でもでも、少しは努力したことほめてほしい。
はっきり言って、一言多いのだ、シンジの言葉は。
シンジが、年に一度開かれる大会に出場しようと頑張っているのは以前聞いた。
私はシンジにとって足手まといなんだ。
それが悔しくて文句を言わず、苦しいことにも疲れたと弱音を吐かず頑張って努力した。
今は少しだるい程度に収まっているので、シンジには何も言わない

でいる。
　私も今年は大会に出ずともいつか出てみたいと思っている。
それに、それだけが精霊使いとしての目標ではない。もう一つあることも聞いた。
それは、それぞれの生息地に住む精霊との交友の場を広げることだ。
その生息場所に出向くだけでも歓迎されるらしい。
それと、精霊使いにとってメリットもそこにはあった。

精霊の依頼を聞き成功させることができたのなら、契約することができることもありうると。
私は、自分のパートナーのウィーミアしかまだ精霊を見たことがない。
シンジが精霊を出したところも見たことがない。
私はシンジの精霊をまだ見たことがなかった。
さっきの戦いもシンジは見てるだけだった。そのとき、むやみに能力を使うなと説教されたが・・。
　まだ、いろいろ反省点の多い私である。

「ねぇ、どこの向かっているの？」
私は聞いた。
　精霊使いとしての目的は聞かされたが、具体的な目的を聞いたわけではない。
「この森を抜けたら、緑属性の精霊が住む場所に着く。」
今、私とシンジは森を切り開いているような舗装された道を歩いていた。
でもそのおかげで森がつながっているのも分かったし、森をぬけたところも遠かったけど少し見ることができた。
最低限のことしか言わないシンジに対し、
「ふ～ん。緑属性の精霊かぁ～あってみたいなぁ～。ねぇ～ウィーミア？」

「はい、会いたいですよ。お会いしたことがないけれど、きっと木や葉を操るんだと思いますよ。」
「へぇ〜、会いたいな〜。」
私はのんきにウィーミアと会話をしていた。
そのとき、シンジから異様な雰囲気(オーラ)が漂った。
「・・いい加減にしろよ。・・これで何回目だ?精神力を消耗するといっているだろ?」
シンジは怒鳴ることこそしないがシンジからあふれる異様なオーラはすさまじいものだった。
それが教えてくる。はむかうなと。いい加減分かれと。
「だって・・会話が・・・・いえ、その、ごめんなさい」
言いつくろうとしたが、シンジと目が合ったとき何もいえなかった。
だって、シンジってすぐ黙っちゃうんだもん。会話が続かないよぉ。
「ごめん。ウィーミア、帰ってくれる?」
「はい、そうします、シンジ・・様、今日なんか怖いし、厳しいですから・・。」
そういって戻っていった。
「俺・・そんなに怖いのか・・・いや、・・そんなにきびしくした・・う〜ん・・だが・・」
ぶつぶつと小さく呟くシンジを見て、
十分怖いです。口調もオーラも・・。
と心の中で呟く。
でも・・今はそんなに厳しくない。私が怪我するたびに特訓はやめてくれた。・・でも・・だからといって、甘えることはできない。
私はシンジの足手まといなんだ。もっと強くならなくちゃッ。
そう自分に言い聞かせていたとき、
「ん?」
私の頬に一滴真上から落ちてきた。雨のしずくだった。
「雨・・降るな・・これだと・・。」
シンジが呟いた。そしてそれからまもなく、ざーざーと、雨が降っ

てきた。
「あーぁ～～、雨、雨、あめ～」
私があわてると、
「森で雨宿りする・・走れ。」
シンジはいい終えるより早く走り出した。
私も続いて走る。
森の中で洞窟を見つけた。その中へ駆け込み、乾いている地面に座り込んだ。
濡れた自分の髪を拭く。シンジも自分の髪を拭いている。
シンジの髪は紫。雨で濡れたその髪はつやつや光っていた。
私は髪が長いから乾くのに時間がかかる。私の髪色は青。
「さ、さむい」
私がそういって身震いしたときだった、がさっと音を立てて何かが私の上から降ってきたのは。
「!?」
それをつかんだ私はすぐにシンジのものだと分かった。
「・・・着てろ・・風邪を引く。」
「え・・で、でも・・シンジが・・」
私がいい終えるより早く、
「俺は平気・・・まきを取りに行ってくる。・・ここから動くなよ・・。」
シンジは言った。
「いってくる。」
「うん。」
私は頷いた。それを確認して、シンジはまきを取りに行った。

第三話　シンジのやさしさ

シンジがまきを取りに行ってから少したつ。
私の意識は朦朧(もうろう)としていた。
頭痛がする。体が寒くて震える。視界がぼやける。息苦しい。
頭痛やほかの苦しみに耐えながら思う。
今までの疲れが雨を体が受けたのがきっかけで、限界だといっていることを。
でも、耐えなければならない。シンジに・・迷惑をかけちゃいけないんだ。
ただでさえ、足手まといな存在なのだから。
そう強く思ってもいずれ限界が来ることは知っている。
でも、せめてぎりぎりまで、迷惑はかけたくない。
まだ、平気。大丈夫。
そう自分に言い聞かせた。
シンジの言うとおり、精神力を使うようなことをしなきゃ良かった。
そうは思いたくない。
私は私なりに精霊を接したい。
シンジは、勝つことにとらわれすぎている。
とらわれすぎて、周りが、精霊の意思が見えていない。
そんなのにはなりたくない。
そう思ったとき、ふいに視界が歪んだ。
「うっ”」
私はうめいた。そして体が前に倒れこむ。
ここで私は意識を失った。

このころ、シンジは湿っていないまきを探すのに苦労していた。
手で触って湿っているか確認して手に取る。

シンジはその動作を何回か繰り返しながら思った。
あいつは・・ルミルは・・俺とは違う。違うのは当たり前だが・・・
守れといったものの大半は守らないことが多い。
俺と考え方が明らかに違う。それはあいつを見ていて分かる。
なのに反論はしてこない。守らないのにだ。
そう思いながら、だいぶ集まったと思って、洞窟に向かった。
雨のせいなのか、時間帯のせいなのかやけに薄暗い。
洞窟はもう目の前。
ルミルの座り込んだ姿が見えない。
薄暗くても見えるはずだ。なのに・・。
俺は急いで向かった。
洞窟の中に入った。
「!?」
姿が見えなかった理由がよく分かった。
俺はまきをおいて火を灯す。
そして洞窟の中は照らされ少しは温まることができるようになった。
俺はルミルを抱き起こし揺すった。
ルミルの呼吸は浅く、寝ているには呼吸が速すぎた。
「・・おいっ、・・おいっ。」
言葉を投げかけながらルミルの体を揺する。
「んっ」
ルミルはまぶたを少し開けた。
視界にはシンジの姿が映っている。
「・・・大丈夫か?・・」
シンジの声でルミルははっとして、
「だ、大丈夫・・・だから・・っ」
シンジからはなれようとした。
心配かけちゃだめッ!
その思いが私に意識をはっきりさせた。
「お、おいっ。」

シンジは、はなれようとする私をつかもうとする。
私はシンジの手を振り払ったとき、頭痛とめまいが襲った。
体はバランスを崩し倒れこむ。
シンジはとっさにルミルを支えさっきと同じような形に戻す。
シンジはようやくルミルの異常に気づいた。

さっきの時点で気づけ。と突っ込みたい人もいるだろうが、とにかく今気づいたのだ。

ルミルは意識がもうろうとしているようでさっきのような抵抗を全くしない。
呼吸がさっきよりも速く、それと体が震えていた。
シンジはルミルの額に手を当てた。
ーーーーーーー熱いーーーーーーー
熱がある。おそらく雨と今までの疲労のせいだろう。
さっきの反応からして、俺に何も知られたくなかったようだった。
俺は後悔した。
ルミルと旅を始めてからの生活が脳裏によぎる。

旅を始めてから今までの間、毎晩、ルミルは呼吸を乱していた。
『どうした?』
『・・・だいじょうぶ・・だからぁ。』
『?』
『熱はないし、少し疲れただけだから・・心配しないでぇ。』
俺はどうしたと聞いたのに熱はないとか疲れたとか言う。
ここでおかしいと思うべきだったんだ。

そうだ、気づけ。といいたい人。言いたくても我慢。

俺はとりあえずルミルの震えがなくなるまで、火のそばで暖めてい

た。
その後、寝袋にユウナを寝かせた。
　まだ雨が降っていた。
俺は竹の筒をリュックから取り出し、雨のしずくを入れる。
竹の筒に、入れれるだけ雨水を入れる。
そして、俺は右手の中指にはめているリングに向かって、
「アーウィル」
といった。
すると俺のパートナーである精霊、アーウィルが現れた。
「どうしましたか？シンジ様。」
アーウィルが言う。
「この筒に入れた雨水を、飲み水にできるか？」
俺は問う。
「お安い御用ですが。なぜそんなこと聞くんですか？あなたは、戦い以外で呼ぶことなんてないに等しかったのに・・。」
俺はその言葉にどう答えればよいものか考えた。
そして、俺は俺の後ろで眠るルミルをあごで示した。
「かわいらしい娘ですね。確か前にはいなかった気が・・。あぁ。分かりました。この者のためにシンジ様は・・・」
「いいからやれ。」
「はい。あなたはそういう人だから契約したんですけどね。」
アーウィルはぶつぶついいながら雨水を飲み水に変えた。
その後、アーウィルは帰っていった。
俺は汗拭きタオルサイズの布に今さっき、替えてもらった水を少しかけて湿らせた。
その布をルミルの額におく。
そして、俺も自分の寝袋の中に入って寝た。
朝、シンジが目を覚ましたときにはすでにルミルも起きていた。

「シンジ、起きた？もう、朝食作ったよ。」
シンジに向かってルミルが元気よく言う。
「・・・熱は？・・・」
「ん？熱？・・もう・・・ないよ。ありがとね、シンジ。」
シンジの問いかけにルミルはびっくりした。
　でも正直に言うとまだ少し微熱はある。
でも、頭痛もしないし、めまいもない。少しだるいことは言わないでおく。
それを隠すために、シンジに笑いかけた。
「・・・・・。」
シンジは疑い深い視線を送ってきた。
「さ、さぁ、朝食にしよ。森で取れたものばかりだよ。さぁ、どうぞ。」
　あたしは朝食をシンジの目の前に置く。
木の実に果物、そしてきのこ。いろいろ野菜が詰まった野菜炒めってかんじの朝食。
「・・・・。」
シンジは黙って朝食を食べはじめる。
手を止めず黙々と。
シンジは
・・・・味は悪くない・・・・・。
と思いながら食べた。
ルミルは笑った。
　無口で冷静で頭もいいと思えるようなシンジはなんかどこかしら鈍いところがある。
シンジに迷惑をかけてしまった。もう、迷惑をかけたくない。
　少し鈍いシンジであることに少しほっとするルミルだった。

第四話　精霊の里

私とシンジは緑属性の精霊の住む場所に、今、向かっている。
今の私はすごく元気いっぱい。体に異常はない。
それはシンジのおかげだった。・・不本意だけど。
あの後、私が微熱があることに気づかれた。
鈍いといったことを取り消しますぅ。
鋭かった・・。鋭すぎなんだぁ・・。
私が平気だと、大丈夫だといっても聞いてはくれなかった。
結局、その日は一日中寝かされた。
だからといってもいい。本当に今は健康状態なんだということを。

「わぁー。ここが、精霊の街なんだぁ。」
思わず、感嘆の声を漏らす。
森を向けたその先は、大きく聳え立つ二つの柱に一つずつ掲げてある『自然の街』『精霊の里』と書かれた旗があった。
その名のとおり自然で作られているもので建物が建っているようだった。
この街のどこを見ても自然いっぱい。
それに、人やら、精霊やらでにぎやかったらありゃしない。
でも、シンジはにぎやかな町並みではなく、精霊の里のほうへ向かいだした。
私もその後を追う。
精霊の里には、テントのようなものが並んでいた。
いろいろなものを売っているようだった。
その一つである果物屋の前でシンジは止まる。
「いらっしゃい。」
店の主人らしき精霊が言う。
シンジがたくさんの中の果物の中で、一つのりんごを手に取った。

「それは・・」
「シンジ、それ、幻だよ。」
店の主人と私の声が重なった。
「!?」
店の主人もシンジも驚いた表情をしている。
「だから、それ、幻だって。」
再び私が言う。
シンジが何か言う前に、店の主人が、にやりと笑い、
「ほぉ。お嬢ちゃんは、それを幻だというのかい?だったら、その証拠を見せてほしいなぁ。」
と、私に向かって言う。
できないよね?というような、皮肉な言葉で言うから思わず、
「はいっ。お見せしましょう。それが幻であることを、ね。」
と、私は言い返す。私は知っている、幻覚の見破り方を。
「シンジ、その幻のりんご、持っててね。」
私はそういって、リュックからとあるペンダントを取り出した。
「それはっ!?」
店の主人の表情がさっきと打って変わった。
シンジもさっきとは違う表情を見せる。
私は幻覚を破る真実の呪文をペンダントを持って唱える。
「その呪文は!!?」
店の主人は驚愕の声を漏らす。
真実の呪文が唱え終わると同時にシンジの持っていた幻のリンゴは消えた。
「ほら、いったでしょ。ま・ぼ・ろ・し・だって。」
私は言った。
「やるじゃん。僕の幻覚を見破るなんて。お前が初めてだ。」
「!!」
突如聞こえたその声の持ち主は私の真後ろにいた。
「こらっ。お客さんにそんな言葉遣いを。・・すみませんね。こい

つは不肖の息子ですから。」
店の主人が言う。
「君の幻覚だったんだね。あれはすごいよ。私びっくりしちゃった。それはそうと、ねぇ、知ってたでしょ？」
私は店の主人に問いかける。
「は、はい、まぁ。でもこの幻のりんごを見破ったのはさすがでした。正直に言いますと、息子の仕業かもと思いながら、幻じゃないと思いましたがね。」
ため息をつきながら店の主人は言う。
「お前、名前はなんていうんだ？僕、リュクって言うんだ。なぁ、名前は？」
リュクと名乗った精霊が聞いてくる。
「私、ルミルって言うの。よろしくね。」
私はリュクに笑いかける。
「・・ルミル・・聞いたことあるかもしんない。・・まぁ、いいや。僕は、幻覚使いなんだ。もちろん、緑属性だけどな。なぁ、お前なら、契約してもいいぞ。僕と、契約しろっ。」
「え？契約？」
私が戸惑い、視線を周囲に泳がすと、シンジは私から目をそらしたが、
「してあげてください。親からも、お願いします。」
と、店の主人が言葉と同時に頭を下げてまで私に言うので、
「分かった。契約する。」
私は断れなかった。それに断るなんて私にはできないし、それにしたくなかった。
リュクは笑った。
そして、ウィーミアのときと同じようにリュクとも契約を交わしたのであった。
リュクのリングには、自然と幻覚を象徴する暁が刻んであった。

「ご迷惑をおかけするかもしれませんがリュクをお願いします。」
「い、いえ。とんでもございません。」
私はあわてた。
精霊に頭を下げられる日が来ようとは思っても見なかった。

この後、リュックに食べ物を詰めて、精霊の街のほうに向かった。
シンジは、黙ったまま歩き続ける。
シンジの背中に少し違和感を感じた。
りんごを幻だと気づけなかったことが悔しいのかもしれない。
シンジの系統は知らないけど系統によって、その属性に有利か不利かは違ってくる。
だから、そんな悔しがったりするものでもない気がするんだけど・・。

それは言えるはずもなかった。
シンジの背中から飛び交う怖いオーラが言わせてはくれなかった。
私が言おうと口を開きかけると、シンジのオーラはいっそう増してしまうのだから。

私とシンジは気まずい空気のまま、精霊の街に向かうのであった。

第五話　シンジの知り合い？

シンジとルミルは精霊の街の真っ只中を歩いていた。
道の幅は大きいはずなのに、人の行き交いが多いせいでとても窮屈に感じる。
私とシンジもその中の二人なのだが・・。
シンジはその中を平然と歩いている。
慣れているんだろうな、きっと。
そう思いながら私はシンジについていった。
シンジの歩きには何も迷いはなく目的があっての歩きだと私は思った。
シンジが『依頼屋』という看板の店に入ろうとしたとき、
どんっ！！
誰かとぶつかった。
シンジはその反動で後ろに下がるから私はシンジの背中を手で押さえた。
シンジの背中は意外に大きかった。
「なんだってんだよ、なんだってだよ！俺にぶつかりその挙句にしりもちをつかせやがってぇ。」
シンジにぶつかった人が叫んでいるようだった。
私はシンジの背中しか見えないから、叫び声しか聞こえない。
でも、その言葉から、その人がしりもちをついたことは分かった。
「いったいなんだってんだよぉーー～～うおぉ？　シンジじゃねえかぁ！悪かったなぁ。」
ぶつかった人は相手がシンジだと分かったら、急に態度を変えた。
知り合いなのぉ？
そう叫びたかったけど我慢した。
「・・・。」
シンジは黙ったままだ。

シンジの背中しか見えない私はシンジの表情は見えない。
一体どんな表情をしてるのか見てみたい。
そんな好奇心を心の奥にしまいこんだ。
「いや～。久しぶりだな、シンジ。元気だったか？・・・お、そうだ、忘れてたッ。おい、サトルっ、来いよ。シンジがいたぞ。」
「シンジが！？今行く。」
シンジにぶつかった相手はサトルという相手を呼び、そのサトルもその呼び声に答えた。
「・・・！」
シンジの表情がまるっきり分からない私だが、シンジの背中から私の手を通してシンジの表情がさっきと一変したのがすぐ伝わった。
「・・・シンジ・・久しぶりだな・・ん？シンジの後ろにいる奴、誰だ？」
その、サトルという人の声を聞いて私はビクッと震えた。
とっさにシンジの背中から手を放しシンジの横に並んだ。
「・・私、ルミルって言います。私、つい最近、精霊使いになったばかりで・・・」
「なぁんだ、ルミルも精霊使いになったんだ。俺はジュンって言うんだ。よろしくなっ。」
私の声をさえぎってシンジのぶつかった相手は名乗った。
私はさえぎられたことに驚く。
でもそれ以上にこの、ジュンっていう人が心の中で引っかかる。
それに、私を呼び捨てで言った。
いや、別にそこは問題でもなんでもないけど・・。
「俺は、サトル。よろしくな。」
サトルという人は自ら名乗った。
「こ、こちらこそ、よろしくお願いします。」
私はそういいながら、ペコっとお辞儀をした。
「あぁー～。俺、敬語苦手なんだ。だからさ、やめてくんない？後、呼び捨てでいいからな？」

ジュンって人が苦笑いで言う。
「俺も、同じく。歳だって近いんだから、互いに敬語はなしにしようぜ。」
サトルって人も苦笑いで言う。
「・・・。」
シンジはいまだに何もしゃべらない。
「なぁ、シンジ。久しぶりなんだから、バトルしようぜ。な、いいだろ?バトル。」
ジュンは早々に話を切り出して言う。
その瞬間、シンジの表情と、サトルの目つきが変わった。
「俺も、シンジとバトルがしたいぜ。」
サトルも言う。
「・・・。」
シンジは少し考えたそぶりを見せた。
「なぁ、だったら、こういうのはどうだ?四人でさ、くじを引いてその番号が同じの奴とバトルするってのは?」
いい考えだろ?だろ?
と、言いたげなジュンが私とシンジとサトルに聞いた。
「いいな、それ。俺はいいぜ。あ、でも、ルミルはやれるか?」
私にサトルが聞いてきた。
「やりたいです。でも、成り立てだから、ルールが分からなくて・・。」
私は不安げに言った。
「大丈夫だって。簡単なルールさ。精霊を出し合ってバトルするだけなんだからさ。シンジだっていいだろ?」
ジュンの言葉に私は少しほっとする。
それは、おばあちゃんに聴いた言葉と同じ内容だったからだった。
「あぁ。いいだろう。」
シンジはジュンたちとあってはじめて口を開いた。
「やったぜ」

ジュンがサトルに向かって言った。
「やったな」
サトル目でジュンに向かって言う。

そのあと、私たちはとりあえず、依頼屋の中に入り、テーブルに腰掛けた。
そして、私たちは今まさにくじを引こうとした。
『同じ番号の奴がバトル相手だぜッ。』
ジュンの言葉が脳裏によぎる。
二人とも強そう。いや、シンジもだね・・。
というか、なんかシンジ、いつにも増して真剣な顔をしてるなぁ。
そう、くじを見つめるシンジはいつもと違う雰囲気を出していたのだ。
そして私たちは
『せーの!!』
と、言葉とともにくじを引いた。

第六話　ルミルの対戦者

ルミルの引いたくじの番号・・・
それは、　2　だった。
ジュンが、くじを作った。
そのとき数字が、1と2　が二枚ずつ書かれていたのが見えた。
　私はその中の一つ・・2　を引いたのだ！
「俺は1だぜ。みんなはどうだ?左からいってくれ。」
ジュンが言う。
「2だな」
「1だ」
「2だよ」
サトル、シンジ、私　の順番に言う。
どうやら、サトルが一回目の相手らしい。
「俺はシンジか。やったぜ。サトルはルミルか。サトルはその次だな。」
ジュンが言う。
「ルミル、よろしく頼むぜ。そんな固まんなくてもいいぞ。もっとリラックスしろよ。」
「う、うん。」
サトルが私に
リラックス、リラックス。
という風な感じで私の肩を軽くたたく。
私は頷く。
「・・・。」
シンジはその結果について何も言わない。
　表情もなんか微妙で、どう思っているのか判断がつかない。
「じゃ、バトルできるとこ、探すとするか。あぁ～早くやりてぇ。」

ジュンはうずうずしているしぐさを、見せて言った。
「俺らは今からやりたいが、そっちのほうは今からやれるか?」
シンジにサトルは聞いているようだ。
私はシンジを見る。
「あぁ。いまからでもいい。」
シンジは、当たり前だろという風な物言いで言った。
面倒だから早く終わらせたい　という風な意味でも取れるかもしれないな
と私は苦笑いしながら思う。
「よしっ、決まったな。じゃぁ、バトルできるとこ、探すとしようぜ。」
サトルもジュンも、うれしそうに笑う。
私もつられて笑った。
「・・・・・。」
シンジは黙ったまま、笑っている私はほか二人を見据えてる。

そして、四人は町外れにある森の中の人気〔ひとけ〕のない広場でバトルをすることになった。

「じゃぁ、俺らからでいいよな?シンジ。ルミルは成り立てだしなぁ。後のほうがいいだろ。」
「あぁ。さっさとかかってくるんなら来い。」
シンジがなんか微妙な感じでジュンに向かって言った。
そんなことはどうでもいい。
さっさとおわらせたい。
そんな意味がシンジの言葉から感じ取れる気がした。

私は精霊使いになったばかりの初心者だから、バトルは初めて。
だから先にやると言い出してくれたのかも。

「あいつな、ただ、シンジとは早くバトルをしたいから言っているんだぞ、きっと。
その辺は気にしないほうがいいぜ。」
サトルは私に向かって言う。

サヨウデスカ・・。そう心の中で呟く私。

きっとそうかも・・そう思ってしまった私は一体どうすれば・・？
「まぁ、でも、ジュンは前向きで突っ走るところが多いから迷惑かも知んないけど、
ジュンのとりえはそこしかないから、勘弁してやってくれ。」
さっきの言葉をとりなすようにして言うサトル。
「ジュンのこと・・よく知っているんだね、サトルは。」
「知ってるというか、なんと言うか。あいつと旅すれば、すぐ分かったことだからな。
ルミルも知り合って分かっただろ?あいつの性格がさ。」
私の言葉にサトルが付け加えるような形で言う。
「うん。なんか言葉遣いで・・。」
「だろうな。」
私の言葉に苦笑するサトル。

シンジとジュンは、木々に囲まれた広場の中央で一定の距離を保ちながらもう戦闘を開始していた。
私とサトルは、そこから離れたところで見ていた。

「同時に精霊を出せよ。では、はじめ！」
サトルの言葉でシンジとジュンは同時に精霊を出す。
「アーウィル、バトルスタンバイ！」
「ペルン、お前の出番だ！！」

前者がシンジ。
後者がジュン。
姿からして二人が出した精霊の属性は両方とも水のようだ。
「うお！同じ水か。こりゃぁ、わくわくするぜ。じゃぁ、早速俺からやらしてもらうぜ。」
ジュンは言葉を言い終えると、身構えた。
そして
「ペルン！ベールドーガン！！」
ジュンは叫びペルンという精霊はジュンの命令に従い攻撃に転じた。
シンジも身構え、
「アーウィル！ウォレイトだ。」
アーウィルに向かって叫んだ。
アーウィルはその言葉に従った。

言葉で表現すると、
ベールドーガンは、体全体をドリルのようなものにしてそのまま相手に攻撃という風な感じで。
ウォレイトは、シールドのようなものだったといえるだろう。

その二つの技はぶつかり合い、その結果、

バーン！！

という音を立てて互いに技を打ち消しあった。
ぶつかった衝撃が風になって、シンジとジュンを襲う。
シンジは身構えた状態でその風を受けている。
ジュンも、
「わぁぉ。」
といって身構え、風を受ける。
「やっぱりすごい迫力だぜ。目が離せないな。
・・ところで、ルミルはシンジをどう思うんだ？」
「え？どうっていわれても・・。」

「じゃぁ、聞き方変えるな。シンジの性格とかだよ。そのへん、どう思う？」

シンジの性格ねぇ。あんまり考えたことないけど・・

「う～ん、なんていうか、冷静って言うのかな。えたいが知れないし。

なんかなぞめいてるって感じになるのかな？」

素直に思ったことを言う。

「俺も実はそう思った。なんかあいつ、なぞめいてるんだよな。

でも、なんかあいつと話すと燃えるんだよね。

なんか心の奥から何か燃え上がるような感じで。」

「・・う～ん。分かる気がする。」

「だろ？」

「うん。」

私とサトルは互いにそういって笑い会った。

確かにそうかもしれない。

シンジは、ほかの人たちと違ってなんかなぞめいてるとこがある。

私はシンジとジュンのバトルを見ながらそう思っていた。

第七話　ルミル、初バトル観戦

シンジとジュンの迫力あるバトルにはルミルは目が離せなかった。
シンジはジュンからの攻撃をたやすくかわし、
それでも尚、ジュンは攻撃を繰り返す。
「ペルン！ウィングウォーラー！！」
「なに！？」
ジュンの声にシンジが叫ぶ。
ペルンは両腕に風と水の渦を巻きつけてアーウィルに向かって切りつけようと動く。
「アーウィル、レイルウォーガン！！」
ジュンが今までに繰り出した技の中でもっとも強力な技であるウィングウォーラーは
シンジにとって計算外のことだったらしく、とっさのことで少し反応が遅れたようだが、
シンジもこれを気にと思ってか強力な攻撃技を防御として使った。
レイルウォーガンは水のレーザーとでもいうような感じでペルンに向かって発射された。
二つの技が激突した。
その衝撃により爆風と、その風によって舞った煙で覆われ、
二体の精霊の姿は突如見えなくなった。
やがて煙がおさまり、二体の精霊の姿が見えた。
ジュンの精霊ペルンは息を乱していて、体はぼろぼろだった。
一方、シンジの精霊アーウィルは息一つ乱さず傷一つない。
「ペルン！！大丈夫かまだやれるか？」
「あぁ。こんなんでへばるほどやわじゃないぜ。」
ジュンの声にまだ強がって見せるペルン。
口だけは達者のようだ。
だが、ペルンの体はもう限界に達していた。

それは素人のルミルでも分かるものだった。
「無理するな、ペルン。」
「平気さ。主がこんなんじゃだめだぜ。」
「そうか、そうだよな。わかった。ペルン！！俺たちの気合をシンジに見せ付けてやろうぜ。」
「ペルン！ウォーラーカノン！！」
ジュンはペルンの言葉に気合を入れなおし再びペルンに命じる。
「アーウィル、ウォーズスカッシャーだ。」
シンジの声が広場に響き渡った。
ウォーラーカノンとウォーズスカッシャーがぶつかる。
レーザーのような攻撃、ウォーラーカノンと、数ある小さい水の刃物、ウォーズスカッシャー。
互角かと思った。
だが、結果は違った。
シンジの命じたウォーズスカッシャーの破片がいくつか残り、その破片がペルンを襲った。
「ぐっ、がぁぁ！！」
ペルンは刃物に襲われ、たまらずそこに倒れた。
そして、瀕死状態を表す文様がペルンから浮き上がった。
「ペルン戦闘不能。よって、勝者、シンジ！」
サトルが高らかにシンジの勝利を宣言する。
「ペルン、お前はよくやった。ゆっくり休んでくれ。」
ジュンは泣きそうな笑顔をペルンに向けて言い、
リングにペルンを戻した。
「あ～あ、負けちまったよ。だが、悔いはないぜ。バトルして楽しかったしな。」
「あぁ。いいバトルだった。」
ジュンの声にシンジは少し微笑んだ。

・・シンジが笑ってる！！

・・シンジ、きっと楽しかったんだろうな。・・・私もそんなバトルをしてみたい！
私は心の中で呟いた。

「だが、次は絶対勝つからな。覚えてろよ、シンジ！」
ジュンはシンジに宣言した。
それはきっと心からの宣言だったと思う。
「あぁ。だが、簡単に勝てると思うな。」
シンジは俺は負けないと宣言してるかのような口ぶりで言う。
「分かってるさ、そんなこと。」
ジュンが当たり前だという風に言う。
「次はサトルたちだぞ。ルミルのバトルスタイル、お手並み拝見だな。」
ジュンが笑って言う。
「ルミル、俺は手加減しないぞ。」
「うん。私も全力でいくから。よろしくね。」
サトルが私に手を差し出してきたから私も手を差し出して握手を交わした。
「互いにいいバトルしようぜ。」
「うん！」

そして、今、私の初バトル幕が開かれた。

第八話　ルミル、初バトル

「一対一のバトルだからな。同時に精霊を出せよ。じゃぁ、はじめ！」

ジュンの声を聞きルミルとサトルは、

「ウィーミア、出番よ！」

「ライデル、君に決めた。」

同時に声を張り上げ、精霊を出した。

「ルミルからいいぜ。」

「じゃぁ、お言葉に甘えて。・・ウィーミア、このバトルゾーンに風と音を広げて。」

サトルからもらったハンデを使い、ウィーミアに命じた。

ウィーミアは私の指示に従い、風と音をばとるゾーンに広げる。

ウィーミアは、人の形をした精霊だが、サトルの出した精霊ライデルは、獣の形をしていた。

獣の姿をしたライデルは体に電気を帯びていた。

雷の属性のようであった。

ウィーミアは、風と音だから、相性はまあまあかな。

「ウィーミア、風の刃！！」

私はウィーミアに命じた。

ウィーミアはほかの精霊と違い、　技自体に名前がない　という大きな利点があった。

欠点ともいえるけど・・。

そんな利点があるゆえ、私はウィーミアと相談し、この名前はこうだ、あーだ　とオリジナルを決めた。

風の刃は、風の刃物を相手にぶつける、いわば、遠距離攻撃技だ。

「ライデル、シールドだ。」
サトルの方は防御の呪文で対処してくる。
私はサトルの周囲の風と音を探る。
みきった！！
「ライデンソウルだ！！」
「空へ逃げて。」
サトルと私の声が重なった。
ウィーミアは間一髪ライデルの技を回避した。
私の判断が一歩遅かったらウィーミアは技を受けていたと思うとちょっと冷や汗をかく。
「なにっ！？」
サトルが叫ぶ。
予想してなかったと私は思う。
「ウィーミア、波動音！！」
私はすかさず命じる。
ウィーミアは風に攻撃音を混ぜて相手に攻撃する。
「ぐぐぐっ！がぁっ」
ライデルは攻撃を受けて悲鳴を上げる。
「ライデル！！・・反撃だ。ライニングボルト！！」
ダーン！！
ウィーミアに直撃してしまう。
「ウィーミア！！大丈夫！？」
「はい・・なんとか・・」
「じゃぁ、反撃。・・疾風竜巻！！」
私の言葉にウィーミアは頷いた。
そして、数え切れないほどたくさんで、それでいて威力のある竜巻を作った。
「いっけぇ～。」
「ライデル、サンダーボール！」

たくさんの竜巻とライデルの繰り出した電気の球がぶつかった。
だが、ぶつかって消えるわけではなかった。
「！？」
「！！」
二つの技は共鳴し合い、竜巻は大きな一つの竜巻となり、それに加え電気を帯びていた。
大きな電気竜巻は周囲に風を吹き散らした。
「ぐっ！！」
私はその風に吹き飛ばされ、数メートル離れた大木に打ち付けられた。
激しい痛みが背中に走る。
「・・つっ！！」
私のうめきにシンジとジュンが駆け寄ってくるのが視界の隅で見えた。
私はその二人を手で牽制した。
二人はぴたっと動きを止めた。
私は痛みをこらえながら、
「ウィーミア・・竜巻をライデルのほうへ・・！・・爆風波動牙！！」
と、私は叫ぶ。
ウィーミアは私に従い、大きな風を作り、その風を竜巻に送った。
竜巻はライデルのほうへと押し寄せ、ライデルは竜巻に飲み込まれる。
「ぐっ、ぐわ”ぁ”ぁ”！！」
ライデルの悲鳴が大きく聞こえる。
「ライデルっ！！・・・サンダーソウルだ！！」
サトルの悲鳴に近い声でライデルに命じた。
ライデルはおそらく従っただろう。
サトルの声に反応し、ライデルは体を金色に輝かせた。
そして、その体で、大きい竜巻をはじき、消し去った。

「ライデル！ボルトニングレーザー！！」
電気の光線をウィーミアへと襲わせる。
危ないッ！！
背中の激痛に何とかこらえて私は、
「ウィーミア！奏者爆風音覇！！」
と、叫んだ。
ライデルの技とウィーミアの技は一切、交わることなく両者へと襲った。
両者、その技をよけるすべがなく、攻撃を受けた。
そして、攻撃を受けたライデルとウィーミアの体はぼろぼろのずたずただった。
強力な技を受けたにもかかわらず二体は立っていた。
だが、二体にはもう戦う力は残ってはいなかったことはその後すぐ分かった。
そう、ウィーミアとライデルは同時にその場で倒れ、瀕死状態を表す文様を浮かべたのであった。
「え、え～と・・ウィーミアとライデル、両者、戦闘不能とみなし、引き分けとする・・・？」
ジュンの声がむなしく広場にとどろく。
「ウィーミア、ありがとう。ゆっくり休んで。」
「ライデル、よくやったな。ありがとう。」
私とサトルは精霊をリングに戻した。
このあと、ジュンと悟るとシンジは私のところに駆け寄ってきた。

第九話　ルミルの受けた傷

「ルミル、大丈夫か？背中に強く当たったんじゃないのか？」
「おい、ルミル。大丈夫かよっ。心配するじゃんか。あんなに強く風に吹き飛ばされたんだからさ。」
「・・・。」

サトル、ジュン、シンジは私を心配してくれているようだった。
シンジは何も言わないけど、表情から読み取れた。

「・・・ちょっと背中を打っちゃったみたい。でも大丈夫。・・・・・・うっ。」
私はそういって立ち上がろうとしたが、唐突に背中に激痛が走って立ち上がれず、うめいた。
「大丈夫じゃないじゃんか。」
「顔色も悪いぞ。・・医術師に見せたほうがいいぜ。」
「・・！・・・・・。」
ジュン、サトル、シンジの順番で話しかけてくる。
シンジは話しかけたには入っていないかもしれないけど・・。
「医術師を呼ぶほどひどくなんかないって。少しすれば、動けるようになれるし。だから、医術師は呼ばなくていいよ。ね？」
医術師だけは勘弁してほしい。背中だけは見せられないっ。
見せちゃいけないんだッ。

「だけど、念のために見せたほうがいいぜッ？万が一ってこともあるしさ。」
「そうだな。万が一ってことも考えたほうがいいかもしれんな。」
「・・・・・。」

ジュンが始めに言い出し、サトルがそれに賛成。
シンジは、私をじっと何かを見据えるように見てくる。

あきらめてくれないかな・・。
でも、これ以上反論すると疑われちゃう。
どうしよう?

私は悩んだ末いいことを思いついた。
「・・わかった。そこまで心配してくれるのなら医術師には見てもらうことにする。
ところで、まだ、シンジとサトルのバトルしてないでしょ?
その後でいいよ、見てもらうのはさ。そこまでひどくないもの。だからいいでしょ?」

私はどうしても時間稼ぎをしたかった。
これなら何とか時間を稼げる!

私の発案にみんなは一瞬黙ってしまった。
サトルが吹っ切れたように、
「・・・わかった。ルミルがそこまで言うのならやってやるさ。
だが、その後絶対に医術師に見てもらうこと、いいな?」
と、いった。
「うん。」
サトルの言葉に私は大きく頷いた。
「やろうぜ?シンジ。」
「・・・。」
サトルの言葉にシンジは黙ったまま私を見据える。

・・だめかな?

私がごくッとつばを飲み込んだ。
「俺がサトルたちがバトルしている間、ルミルに付き添うから心配しないでいいぜ。
俺もサトルたちのバトル、すっげーみたいからな。」
「・・・。」
ジュンの言葉を黙ってシンジが聴く。
「ジュンがそういってくれてるんだから、やろうぜ？シンジ。」
サトルがそういってシンジにもう一度いう。

・・ジュンとサトルがフォローしてくれてるから、シンジも折れてくれるかな？

「あぁ。」
シンジが諦めたように呟く。
ジュンとサトルと私が目を合わせて一緒に微笑んだ。
「やったぜ。」
これはサトルの言葉。
「じゃぁ、二人ともがんばって。私はここにいるから。」
私は二人に告げた。
「あぁ。」
「・・・。」
二人が私を見る。
私は二人に向かって微笑んだ。

そして、シンジＶＳサトルのバトルが始まった。

私は呪文を唱えながら背中に手を当てる。
「何やってんだ？」
ジュンが不思議そうに聞く。
「治療の呪文をかけてるの。少しは効くはずだから。」

ひどくないとは言ったけど背中に受けた衝撃は強かった。
それ以上に今はすごく痛い。
だから少しでも痛みを和らげないことには動くことなんてできたもんじゃない。

「だからといって無理すんなよ。精神力使い切ったら俺とのバトルが怪我治った後できなくなっちまうのはまっぴらだぜ。」
ジュンはそういってシンジとサトルのバトルを食い入るように見始めた。
「うん。そうだね。それにしてもシンジたちのバトルはすごいねぇ。」

『グレイト、アイスソード！』
『デルフィン、アイスガード！』
前者がシンジ。後者がサトル。
グレイトとデルフィンは両者とも氷属性だった。
　グレイトは、人の形をした青い瞳を持つ精霊。
デルフィンは、いるかのような姿をしていて、愛着のわくような容姿の精霊だ。
そんな精霊たちの攻防は息をするのも忘れそうなぐらい迫力あるものだった。

私はシンジから出る数々の指示や、それに対するサトルの対処法にすごく感心した。
「俺もそこは認めるぜ。だがさっきから、シンジのバトルスタイルから外れているような・・」
「え？」
「あ、いや、なんでもない。」
「そう？」

ジュンは途中で話をきったが、確かにちょっといつものシンジじゃないかもと思ってしまった。
でも、ほんとにちょっとだけだけど。

頭の中でそんなことを考えていたけど、今はそれどころじゃない。
私は必死に治療呪文を唱えて背中に手を当て続けた。
だが、痛みは少ししか治まらなかった。
鈍い痛みをまだ発する背中をさすりながら不思議に思った。

・・高度な治療の呪文を唱えているんだけど・・。でも、もしかしたら・・。

私は、打撲の治りの遅さに心当たりがあった。

治療の呪文は代々親から子へと語り継がれている魔法の一種だった。
この治療呪文を使っても普通の打撲ですら治りが遅いなんてことは前代未聞だった。

治りが遅い理由は私の背中にある。

私はひそかに仮説を立てた。

私の背中には、翼の文様が刻まれている。
それは、母親から譲り受けた能力だった。
でも、その力は私には強すぎた。
だから一部封印した。
封印されて私は譲り受けた能力の力を２０％しか使えていなかった。
それが空を飛ぶことだった。（ゆっくりと）

背中に衝撃を受けたことで、封印された能力の力にも影響が出てし

まい、
そのため、打撲の治りが遅いのではないのだろうと。
多分この仮説が当たっていると自分でも思った。
だから、治療呪文をかけることを私はやめた。

私がやめたそのとき、
ひんやりと冷たい風が吹いた。
「うおぉ、さむっ。・・グレイト、デルフィン、両者とも戦闘不能とみなし、引き分けとする。」
ジュンが声を張り上げ言った。
「グレイト、戻れ。」
「デルフィン、お疲れ。」
二人が精霊をリングに戻す。
二人は私のほうへ戻ってきた。
「いいバトルだったね。」
私は二人に向かって言った。
「引き分けに終わったけど、楽しかったぜ。次は勝つッ。絶対な。」
「あぁ。いいバトルだったな。」
サトルがそう言って、シンジも少し笑う。

シンジを笑わせることができるのはバトルだけかもしれないな。

「じゃぁ、医術師のところにいくか。・・ルミル、立てるか?」
「う、うん。」
サトルの言葉に私はゆっくりと立ち上がった。
鈍い痛みが背中を襲ったが、サトルやジュンが自分の肩に私の腕を背負って支えてくれたから、
バランスを崩さずにすんだ。

そして医術師がいるほうへ私たちは歩き出す。
「ごめんね。その、歩くの手伝ってくれて・・。」
「いいって。元はといえば、俺とのバトルでこうなったわけだしな。それに、けが人をほっとけるわけないだろ？」
「そうだぜ。それに困ったときはお互い助け合うってのは常識だぜ？」
「サトル・・ジュン・・ありがとう。」
私の言葉に二人が助けるのは当たり前といってくれた。
私は二人にお礼を言った。
二人は照れているのか、ただ笑うばかりだったが。
シンジは、黙って私たちの後ろを歩いていた。
私は、私を見るシンジの視線を感じていた。
痛い視線ではなかったが、何かを探るようなそんな疑い深い視線で。

第十話　ジュンたちの思い出

ルミルは今、医術師と依頼屋にある宿屋の一室にいる。
シンジたちには別室で待っていてもらっている。
医術師の名はレイラ。
精霊の街で暮らし人々を救う有名な人らしい。

「あなた、お名前は？」

「ルミルです。え～と、バトルでちょっと木に背中を打ってしまって・・・」

「そう。大変だったわね。じゃぁ、その背中、診てもいいかしら？怪我のぐあいを診ないことにはどうにもならないから。じゃぁ、背中を向けて。」

「はい。」

私は言われたとおり背中を見せる。

「！？」

「このことは他言しないでください。旅の連れは知らないんです。」

「え、ええ。」

私の背中にある文様を見たレイラは驚きのあまりに言葉を失いかけ

ている。

驚いて当たり前。

だって、世にも珍しい翼の文様だもの。

「ところで、打撲のほうはどうですか？」

「だ、打撲のほうはたいしたことはないわ。今、治療するから少し待っていて。」

レイラはそういって治療魔法を私の背中にかける。

背中からの痛みが薄くなりつつある。

「・・・治りが遅いわね。この文様にも影響が出てるかもしれないわ。」

「私もそう思うのですが。多少は歩くことはできそうですか？」

「え、えぇ。でも安静にしてね。無理すれば痛みがひどくなるから。薬を一応渡すわね。」

「これが塗り薬よ。」

「ありがとうございます。」

私は医術師のレイラから薬を受け取った。

レイラはいまだに驚いた顔をしてる。

チャンスはこの後。

医術師が部屋を出て行った瞬間にやれば・・

「じゃ、じゃぁ、私はこれで。くれぐれも安静してるのよ。お大事に。」

「はい。ありがとうございました。」

医術師が出て行ったのを見計らって私もすぐに部屋を出る。

そして私の少し前に背中を向けた医術師にめがけて魔法を放った。

医術師は一瞬ぴくっと止まったがすぐ普通に歩いていった。

私がほっとしたとき、

「おい。」

と、私の真後ろから急に声をかけられた。

私はビクッとしてとっさに後ろを振り向いた。

声からしてシンジかもと思ったが、どうやら当たってしまったようだった。

「シ、シンジっ！」

「何驚いているんだ?」

「え！い、いや別に。ただ、真後ろから急に声かけられたら誰でも驚くと思うけど。

・・・あ、そうそう。もう終わったよ。別にたいしたことないって。一応塗り薬もらったけど・・・。」

「・・・・。」

シンジが疑い深い視線を向けてきた。

ゴク。

つばを思わず飲み込んでしまった。

「な、何?」

「・・・・・あいつら待ってるぞ。」

「う、うん。」

私の問いには答えず、さっさと歩いてジュンたちがいるところにいってしまった。

私もゆっくり後を追って、ジュンたちのところに言った。

そしてジュンたちの部屋に入った。

「お、終わったか。どうだった?明日バトルやれるか?」

「背中のぐあい大丈夫か?ジュンがやりたがって仕方がないみたいで・・・」

「はい。たいしたことないそうです。明日やりましょう、バトル。」

ジュンとサトルの問いに私は笑って答える。

「・・・。」

シンジはなぜか黙って私たちの会話を聞いている。

「そうかっ。やったぜ!!明日は最高の日になりそうだぜッ。」

「ふぅ。大事に至らないでよかった。良かったな?ジュン。」

「あぁ。もう、最高だぜっ!」

「・・・。」

ジュンは私の答えに大喜び。
サトルは私の無事に安堵している。
シンジは・・・。

シンジの意味ありげな視線は私を妙に不安がらせる。

こうして、明日にジュンとバトルすることになった。

この後、寝るまでずっとジュンたちの話を聞いていた。
シンジもその場にいたが何もしゃべらずじまいだった。

特に印象に残ったことは、大きく分けて二つある。

一つ目はそれぞれ各地にいる精霊使いマスターが開いているジムを回ってバッチをゲットしてること。

ちなみに、今、ジュンたちは、ジムバッチ　7個　持っているらしい。

二つ目はシンジ、サトル、ジュンの出会い。

ジュンがそのことを話している姿と言葉の表現がすごくて笑いが止まらなかった。

「あのな。俺がはじめてシンジにバトルしようぜっていったらこいつこんなこといったんだぞ。
『お前、バトルの相手は誰でもいいんだろ?だったら、あいつとやればいい。』
っていったんだぞ。ひどくないか!ひどすぎるだろ!!あれは罰金ものだったぜ。」

「結局どうなったの?」

「あぁ、結局シンジはバトルしてくれなかったんだ。
でな、ここからがさっきよりももっとひどかったんだぞっ!!
俺がサトルとのバトルをシンジが見てたらしくてこのときシンジがなんていったんだと思う!?
『お前、あんな奴に負けるようじゃ、まだまだだな。』
だぞ!?ひどくないか!?これ以上にない言葉だったんだぞッ。
くぅー～今思い出しただけで腹が立つぜッ。」

特にこのときの会話をしているジュンの物言いが一番迫力があった。

このときの会話が一番心に残ってる。
ジュンがシンジのまねをしてるときなんかがすごく。

それでそのとき渡しとてもいいたかったことがあったんだ。

あの～シンジ、ここにいるよ？本人の前でいっていいの！？

っていいたかったんだけど、私はすごく、すごく、これでもかっ！てぐらい抑えたの。

まぁ、そんなこんなで、夜、延々と続いたんだ。

私はみんなにお休みって言って、自分の部屋に入った。

そしてベットに横になって考えながら寝たんだ。

明日のバトル勝ちたいなって。

第十一話　ルミルとジュンのバトル

ルミルたちは翌朝にバトルをするべく、昨日と同じ場所（もりのひろば）で行うことを決め、その場所に向かう。

ルミルはもう歩けるほどにまで回復し元気よく歩いていた。

「じゃ、早速はじめるか。サトル、審判頼むぜ。」

「あぁ。任せとけっ。」

「お願いします。」

私も言った。

そして、ジュンとのバトルの幕があけた。

「精霊を同時に出せよ。分かってると思うが、一対一だぞ。」

「分かってるって。」

「はい。」

サトルの声にジュンと私の返事が響く。

「じゃぁ、はじめっ！」

「リュク、出番よっ。」

「ペルン、ＧＯ！ＧＯ！」

サトルの呼びかけに私とジュンが同時に精霊を出す。

ペルンか・・。水属性だから、私には有利ね。

内心喜ぶ私。

「俺からいかせてもらうぜ。ペルン、ベールドーガン！」

ジュンの言葉にペルンは答え、リュクに向かって攻撃してくる。

「リュク、ウッドドレインで受け止めて！」

私の言葉にリュクが応じる。

リュクは自分の腕から草や木を瞬時に発動させ動かし、ペルンの攻撃を受け止め、ペルンの身動きを取れなくする。

「何！？ペルン！？」

ジュンはペルンの身動き取れない状態に混乱してる。

「リュク、そのままリーフドレインっ。」

私はそのままリュクに指示を仰ぐ。

リュクは指示通り技を発動させた。

「ぐわぁっ」

ペルンのうめき声が聞こえる。

無理もない。
リーフドレインは相手の体力を奪う技。
そう簡単に動けないはず。

「ペルン！・・オーロラヒュージョンだ！！」

ジュンの声が響いた後、ペルンの体は青く輝きを放ち、リーフドレインから脱出した。

「え？」

私は思わず声に出していた。

ありえない・・いやありえるからこんな状態が起きているんだけど・・。
でも・・！！？

「ペルン！そのまま上に跳んで、フウスイソーラー！！」

ジュンの声にペルンは従い、大きな風を私たちに振りかざした。

爆風が私とリュクを襲う。

風はリュクと相性が悪いっ！！

そう思った矢先に私はまた後方に吹っ飛ばされる。

木に打ち付けられるっ！？

どんっ。

背中に大きな衝撃が襲った。
が、木に打ち付けられた痛みではなかった。

「ルミルっ！」

「リュ、リュク！？・・ありがとう。」

リュクが私を草で衝撃を抑えてくれたんだ。
リュクにもつらいはずなのに。

絶対勝つ。

私はそう強く思った。
強く思ったそのとき、その思いに私は飲み込まれたような感覚に襲われた。

「・・リュク。ソーラーレーザー用意。・・それと、幻覚とプラスして、リーフソウル。」

私はリュクに命じた。

私がいった言葉なのに、なぜかいつもと違う。
自分が言っているはずなのにどうしてこんな客観視してるんだろう？

心の中に私は閉じ込められている感覚が体中にまとわりつく。
意識はあるのに、意識がないようにに思える。

リュクはソーラーレーザーの用意とともにペルンへ攻撃を繰り返す。

「ペルン、よけてよけてよけまくれッ。」

ジュンはそうやってペルンに叫ぶが、ペルンは幻覚に惑わされ、攻撃をわずかだが受ける。

「あぁっ!!ペルン!」

ジュンは叫ぶ。

私には遠くで聞こえる気がしてならない。

ペルンは攻撃をまともに受けてすっ転ぶ。

「リュク、今。ソーラーレーザー発射。」

私は言った。

自分で考えて指示しているのに自分が言っていないように感じ思えるのはなぜ?

リュクは私の指示に従いペルンめがけて打った。

光でこげるような音を立てペルンは倒れる。

「ペ、ペルン!!」

ジュンは悲痛な叫びを上げる。

その声に私は今、意識を取り戻したかのような感覚に襲われた。

「ペルン、戦闘不能とみなし、よってルミルの勝利とする。」

サトルが凛とした声で言う。

その声で私はようやく勝ったと自覚をした。

「リュク、ありがとう。ゆっくり休んで。」

「？・・・あ、あぁ・・・」

私の声にリュクは首を傾げたが、おとなしくリングに戻る。

私も自分がおかしいと思う。

あんなに勝ちたいと思っていたのに・・ようやくかってそれが果たせたのに、ちっともうれしくない。

何か心に、もやもやとしたものが粘りついているかのよう。

これで勝ってもうれしくない。

勝ったっていう感じがまるでしない。

あのときの自分は何だったの？

「ペルン、サンキュな。・・・ルミル、お前すごいな。俺に勝ちやがった。ん？ルミル？」

私はジュンに話しかけられた。

「え?あ、ううん。す、すごくないよ。相性が良かっただけ。」

私は唐突のことに多少反応が遅れた。
考え事をしてたからかもしれない。

「どうした?」

サトルが聞いてくる。

「え?別になんでもないよ。ただ、勝ったことがなんか信じられなくて・・」

私は心の奥底でジュンに勝ったことが信じられずにいた。

「信じろよっ。俺に勝ったんだぜ?この・お・れ・に。
相性なんて関係ないさ。ルミルの的確な指示が良かったのさ。
後、俺の対処法が悪かっただけ。」

「的確な指示・・」

ジュンの声に私は呟いた。

あのときの私は私じゃない。

そういいきれる。

うまく表現できないけど、あのときの私は意識があるのに誰かに操られているような感じだった。
誰かにそそのかされているみたいに。

誰かにってのは言葉のあやだけど。

「ルミル？」

「あ、ごめん。ちょっと考え事してた。」

ジュンが不思議そうに聞いてくるから正直に言った。

私、今どんな表情してたのかな？

ジュンだけでなくサトルやシンジも不思議そうに私に視線を向けている。

「あ、ところで、ルミル。背中は大丈夫か？
リュクが助けてくれたみたいで木には当たらなかったけど。」

「うん。大丈夫。普通に歩けるしなんともないよ。」

サトルが心配そうに聞いてくるから微笑みながら私は言った。

「良かった。」

「あんときはひやひやしたぜ。俺のせいで怪我したら、後味悪いからさ。でもまぁよかったぜ。」

「・・？・・・・・。」

サトルは安堵し、ジュンもほっとしたように言い、シンジはなにやら難しい顔をしていた。

「ほんとに。また怪我なんてしたらそれこそ困るね。あははは。」

私は思わず笑った。

そしてサトルもジュンもつられたように笑い出した。

シンジは笑わなかったけど。

散々笑った後、私たちは依頼屋においてきた荷物をとりにいった。

依頼屋で私たちは別れの挨拶をした。

「じゃぁ、ルミルもシンジもまた会おうぜ。また会ってバトルしようぜっ？」

「うん。また会ったら絶対しようね、ジュン。サトルもまたやろうね。」

「あぁ。あのバトルは本当に楽しかった。今度もいいバトルにしようぜ。

シンジも次もバトルしようぜ？」

「次に会うときにならないと分からん。が、いつか、な。」

別れのときはシンジも口を開いた。

でも口調は冷たかったけど。

そして私とシンジから二人は去っていった。

二人が去っていった後シンジは依頼屋の中にある地図を見て、

「次は『幻夢(げんむ)の森』へ向かう。」

と、言った。

「うん。でも何で?」

私は聞いた。

「その先は獣の姿をかたどった精霊が住んでいる場所がある。そこが目的だ。」

「ふーん。今から出発?」

「あぁ。・・いくぞ。」

「うん。」

私は、言って早々に歩き出すシンジを追って歩き出した。

歩いても痛みを感じない背中を私はなでた。

あの時、自分がおかしいと思ったのはこの背中にある文様のせいだったかもしれない。

このことがいつシンジにばれてしまうだろうか?

私は歩きながら、いつばれるか　と不安に思いはじめたのだった。

第十二話　夢

ルミルとシンジは幻夢（げんむ）の森を歩いていた。
普通の森となんら変わらない風景。

一体何で　幻夢　ってついたのか？
ルミルは不思議に思って仕方がなかった。

シンジは平然と森の中をつき進む。
私はシンジの後姿を見て歩いている。

どうにもシンジと隣で歩こうなんて気がしない。

だから私はいつもシンジの後ろを歩いている。
シンジもそのことにどうこう言わないし。

まぁ、そんなことはさておいて、私たちはひたすら森の中を進んだの。

日が暮れるまで私とシンジは歩き続けた。

日が暮れる頃には私は呼吸を乱していた。
シンジは呼吸一つ乱さず平然としている。

シンジは私の様子をあきれ半分で眺めながらこういった。

「・・・今日はここで野宿する。・・・まだまだだな。」

と。

まだまだだな　その言葉が私にはすごく耳に残っていた。
シンジにとって私は足手まとい。
私は今まで以上にそのことを自覚させられた。
そして夜、私たちは大きな大木の根元に寝袋を敷いて寝た。
歩き疲れていた私はすぐ眠りについた。
これから見る悪夢のことを知らずに。

夢の中の私はシンジとともに歩いていた。
風景からして幻夢の森だと分かった。

歩いていたシンジがいきなり止まったので夢の中の私はシンジにぶつかった。
シンジはそのことに何も言わず、周囲の気配を伺っている。
夢の中の私も周囲の気配を伺っているときだった。

ガサガサ、ガサガサ、バサ、バサバサバサバサッ！

突然何か大勢出てきた。
数え切れないくらいの多さだった。
それは人の軍勢。
黒い衣に身をまとい、私たちに殺気を向けている。

そいつらを目にしたシンジが

「二手に分かれる。・・にげろっ！」

と私にささやいた。

ささやくと同時に私たちは左右に走って逃げ出した。

夢の中の私が走った距離が一キロも満たないところで後ろを向いた。

だが、後ろには誰もいない。

夢の中の私の周囲には人の気配なんかなかった。

狙いはシンジ！？

あんなに大勢を相手にシンジは・・・！？

シンジが危ないっ！！

夢の中の私は必死にシンジの気配を探りもと来た道を走る。

そして夢の中の私は見た。

シンジが捉えられている姿を。

私はここで目が覚めた。

何！？今の夢・・！？

私はとっさにシンジを見た。

シンジは寝袋に顔をうずめ眠っているようだった。

寝顔が見れないことが悲しい。

そんなことはさておき、私は寝袋から抜け出して少し離れた場所にリュクを呼び出した。

「どうしたんだ?こんな夜更けに。ん?顔色悪いぞ?」

「ちょっと、夢を見ちゃって・・。この森は幻夢の森でしょ?何かリュクなら知ってると思って。」

「幻夢の森で見た夢か。それは正夢になるかもしれない。」

「え?」

「この森には多少なりとも夢の力が宿っているからそうなってもおかしくないってこと。
それに幻の力も。その力は強大だ。俺にはわかる。だから、気をつけろよ。」

「う、うん。わかった。後一つ聞きたいの。いい?」

「なんだ?」

「私、ジュンとのバトルのときおかしかったでしょ?そのことが気になって・・。」

「あぁ。自分で気づいていたんだな。いつもと違ってたぞ。
それと、ルミルに触れたとき翼の文様が脳裏によぎったんだが、もしかして、天寿の民俗か？」

「私の母がそうだったよ。その力を譲り受けただけ。まぁその末裔になるのかな？
やっぱりそれが少しあふれたからああなったと思ってる？」

「あぁ。憶測でしかないけどな。たぶんそうだろ。
今のお前ならコントロールが可能かもしれないぞ。
少し体に異変が起きるかもしれないが。」

「そうだね。夢のためにもそこは何とかするよ。ごめんねこんな時間に。」

「いいって。何かあったらすぐ呼べよ。力になるからな。」

「ありがとう。お休み。」

私はリュクをリングに戻した。

あの夢が正夢に・・。それは絶対にいや。
なんとしてでも阻止しないとっ。

私はこの後ウィーミアを呼び、翼の文様に封印されている力を解き放ってもらった。

そして私は

絶対にシンジを守るッ！

と、心に誓ったのだった。

第十三話　襲撃

翌朝、私とシンジは森の中を進むため歩き出した。
私は今朝のことを思い出していた。

「ねぇ、シンジ。昨日、夢、見た？」

「・・・みていない。」

私は夢のことが気がかりでついシンジに聞いてしまったのだった。
シンジは、見るわけないだろ？　と、言いたげな顔をしていたから、

「ううん。なんでもない、なんでもない。」

と、あわてて取り消した。

この会話をしたことをいまさらになって後悔し始めたのだ。

まぁ、そんなことはおいといて、
今日、その夢が正夢になるかもしれないのだから、私はいつも以上に周囲の気配を探っていた。

私が周囲の気配に何か異様なものを感じたとき、不意にシンジが足を止めた。
私は後、数センチ前に言っていたら危うくシンジにぶつかるところだった。

夢では私、シンジにぶつかったんだけど・・。

私がシンジに言おうとしたとき、

ガサ、ガサガサ、バサ、バサバサバサッ

と、森が揺れ、突然大勢のものが私たちの目の前に現れた。

大勢来た奴らは黒い衣を身にまとい私たちに殺気を向けていた。

「二手に分かれる。・・にげろっ！」

シンジが夢と同じ台詞（セリフ）をはく。

私はシンジと真逆のほうへ走る。

少し走って私は後ろを振り向いた。

案の定、私には誰もついてこない。

狙いはシンジなんだ。

私はシンジのいるほうへ走った。

そして私は見た、シンジが相手に捕らえられているところを。

夢と同じ。夢の私はこの後どうしてた？

答えは簡単。助けるのよ、シンジを。

シンジは相手から逃れようと抵抗している。

私には相手もシンジも気づいていない。

シンジはそいつに何か嗅がされたみたいで、抵抗力を失ったようだ。

私は強く念じた。

天寿の力よ！私に力を貸して！！

心の中で唱えた。

私の体は天寿の力により変わった。

私はすばやい動きで相手との間合いをなくし、
相手にとび蹴りをしてシンジを相手からもぎとった。

私は背中に翼を生やし、翼を大きく広げ、シンジを抱えて飛んだ。

シンジはうっすら目を開けたようだった。
そして私の姿を見て目の色が豹変する。

驚くのは当たり前。

私の姿は人の姿をかたどってはいても
背中にある翼や瞳の色、腕に刻まれている数々の文様が、人ではないものをあらわしているのだから。

シンジはすっと目を閉じた。

おそらく意識を失ったんだろう。
何を嗅がされたのかは知らないけど、動きを封じるためのものだと判断がつく。

グサッ！

突然、鈍い痛みが翼から感じた。

私は片方の翼を見た。

見ると、翼には一条の矢が突き刺さっていた。

油断していた。

相手はこのシンジを襲う襲撃者。

甘く見すぎていた。

次々と私めがけて矢が飛んでくる。

私は片方のつバサをいたわって、矢から逃れた。

シンジをかばいながらのせいか、体のあちこちに小さい傷がついてしまった。

だが、どれも致命傷ではない。どれも、切り傷程度のものだった。

そして、私は気を失ったシンジを抱えて森の中にある洞窟の中に逃げ込んだ。

私はシンジをその場で寝かせ、背中にある翼から矢を抜いた。

私は周囲の気配を探った。

私のいるところから遠いところに大勢の殺気があった。

距離的にはもう心配はないと判断し、私は元の姿に戻った。

戻ったとたんに、今まで感じなかった疲労と傷の痛みが全身に広がる。

だが、翼だけはしまうことができなかった。

その原因は自分でも分かっていた。

翼に傷を負ってしまったからだ。

翼に負った傷は致命傷になりうるものだったが、自然治癒でもどうにかなりそうなものだった。（時間はかかるが。）

私はシンジのリュックがないことに今気づいた。

だから私はリュクを呼び、探して持ってくるように頼んだ。

リュクなら、たとえ相手に見つかったとしても幻覚で相手を撒くことができるからだ。

私は自分の寝袋を出しそれにシンジを寝かせた。

シンジの呼吸は意外にも浅く早いものだった。

熱が出るかも・・。

私はそう思った。

思わず、シンジの額に手を伸ばす。

シンジの額に私の手が触れる。

まだ熱くない。

でも、油断はできない。

私は時間をかけて重い体を引きずってタオルを水で湿らせた。

私はそのタオルをシンジの額に当てた。

ちょうどそのとき、リュクが戻ってきた。

「奴らには気づかれなかったぜ。これだろ？シンジのリュックは。」

「よかった・・ありがとう・・リュク。」

「俺はあんまりシンジは好かないけどな。

でも、あんたがシンジのための何かしたいって思うのなら力を貸すぜ。」

「ありがとう・・そのときにまた呼ぶね。」

「あぁ。でも、やっぱり天寿の力を解放したんだな。使ったんだろ？顔色悪いぜ？」

「うん・・使わないとあの時どうなっていたか分からなかったし・・」

「そうだな。ところでその翼、どうすんだ？」

「あ、あぁ、これね。傷が癒えるまでこのままにするつもり。」

「シンジにばれるぞ？」

「もうばれてると思うよ・・さっき助けた時点でね。」

「そんときシンジはそんなに意識ははっきりしてなかっただろ？今ならごまかせるんじゃないのか？」

「シンジは簡単にごまかせれる相手じゃないよ・・・それに正直はなすつもりだよ。」

「何で？」

「いつばれるかと思って・・シンジといるのには疲れるし・・・もう疑われるような行為をしてるところはいくつか見られたし・・」

「それだけじゃないだろ？」

「うん。シンジに隠し事したくない。それが一番の理由かな・・」

「そうか。あ、俺もう戻るぞ。あんたの顔色がどんどん悪くなってるし。ちゃんと休めよ。」

「・・・ありがとう・・リュク・・」

私はそういってリュクをリングに戻した。

天寿の力、お母さんにもらった、天にも悪にもなりうる強大な力。それを知ったシンジはどういう反応をするだろうか？

シンジのするだろう反応を恐れて私は迷った。

この力を明かすか否か。

迷いながらも私はシンジの隣でうつぶせになって眠りについたのであった。

第十四話　二度目の襲撃。

ルミルはシンジのうなされている声に目を開けた。
暗くてよく見えない。
私は火を灯した。
シンジの表情が炎によって映し出される。
シンジの顔色は悪く、汗を流していた。
私はまだ視界のぼやけた目をこすり、シンジに近づく。
シンジの汗を拭いてあげようとタオルを持った手を伸ばした。
タオルがシンジに触れたときシンジはパチっと目を開けた。
「あっ！？・・シンジ起こしちゃったね。まだ寝ていたほうがいいよ。
そうだ、タオル変えてあげるから少し待って・・・！？」
私は最後まで言葉がいえなかった。
シンジが急に起き上がり私の手をつかんだからだった。
シンジの顔色は悪い。
シンジの手も熱かった。
熱と戦っているんだ。

「シンジ・・！？」

私が戸惑うように声を上げた。

シンジは熱のせいで意識がはっきりしていないようだった。

でも、うつろな目で私をまっすぐに見つめてくる。

シンジの熱にうかされた表情は私を戸惑わせた。

「・・・いくな・・」

シンジが小さな苦しそうな声で私に言った気がする。

シンジ！？

「う、うん。どこにも行かないよ。」

私は言った。

シンジは私を見つめた後、苦しそうに顔をゆがめた。

シンジは倒れこんだ。

「シンジ！？」

私はシンジのつかむ手と反対の手でシンジの背中を支えた。

シンジの体から力が抜ける。

私はシンジを寝かせた。

ばれちゃったかな・・？・・・この翼・・

私の翼は傷を負っているせいでいまだにしまえない。

私はシンジがまだつかむ私の手を私は軽く握り返した。

怖い・・シンジにどう思われるかが・・怖くてたまらない・・。

私はウィーミアを呼んだ。

「ウィーミア、こんな夜明けにごめんね。水の入った物を近くに持ってきてくれる？」

「はい。」

ウィーミアは私に従った。

「ありがとう。ねぇ、あなたは私の翼の傷を癒すことができる？」

「はい。多分。やっぱり隠すのね？その力を。」

「うん。だからお願いできる？」

「えぇ。でももうばれてしまっているのかもって思ってるんでしょう？」

「何とかごまかすよ。」

「ごまかせないかもって思っているでしょう？」

「すぐに私の心を読むんだからっ。いいから治してよねッ」

「はいはい。」

ウィーミアは笑って私の翼に癒しの魔法をかけた。

私は傷のぐあいが見れるわけではないが翼の傷がいえるのは感じることができた。

そして私は翼をしまうことができた。

私は壁に背中をもたれかけて眠りにつけるようになった。

シンジはまだ寝ていて、熱もあるようだからしばらく寝ているだろう。

私は壁によさりかかって一眠りした。

私は朝の日差しを受けて目を覚ました。

鳥のさえずりが聞こえる。

私はあくびをしてシンジに近づいた。

シンジの寝顔からはシンジの性格など全く予想がつかないほど無防備な寝顔だった。

顔色はさっきよりも良くなっている。

もう大丈夫かな。

と、思ったとき、シンジはうっすら目を開けた。

シンジはむくっと起き上がった。

「あ、まだ起きちゃだめだってッ。寝てなくちゃッ。」

私はそういったが、シンジは言うことを聞こうとしない。

「・・・。」

シンジは何か考え事をしているようだった。

ばれちゃったかな?私さっき、翼、生えてたし・・。

「シンジ?」

私は聞いた。

「・・・・・」

シンジは私を見つめた。

やっぱり疑ってる?

「シンジ、体のほう大丈夫?」

「・・・悪かったな。」

「え?」

シンジから思わぬ言葉が出てきて思わず聞き返す。

「・・・お前が・・俺を・・・」

「？・・助けるのは当たり前だって。」

シンジはなんか急に言い出そうとするからその言葉をさえぎって私は言う。

「それより体のほうはなんともない？」

私は話をそらすようにいう。

「・・・俺よりお前のほうが・・・」

シンジは自分より私の方を心配してくれているようだった。

「私？・・・平気だって。・・・シンジは少し動ける？せかしちゃって悪いけど、追ってが来そうなんだ。」

「あぁ。」

シンジはそういって立ち上がろうとした。
が、めまいがしたのか体のバランスが崩れる。
私はとっさにシンジの体を支えた。

「ごめん。せかしすぎちゃった。
あ、いいこと思いついた。私はシンジを抱えて飛んでいってあげる。」

「は?」

「よし、そうしよう。じゃぁ、ちょっと待っててね。支度しちゃうから。」

「・・・?」

シンジは私が勝手に事を運ぶから、それについていけてないようだ。

私が支度を終えてシンジがリュックを背負うと私は言った。

「じゃぁいっくよー^^」

「・・?」

シンジは何がなにやら分からないようだ。

私はそれをいいことにシンジの腕を肩にかけて飛んだ。

「!?」

シンジはただ驚いているばかり。

「このまま、精霊のところいっちゃうね。」

私はそういって空を飛んでいた。

風景は一面青空。

ななめ下を見れば精霊の居場所がすぐ分かる。

私が少し高度を下げたときだった、一条の矢が私めがけてきたのは。
私はそれを何とかよけた。
「見つかっちゃったね。」
私はそういってスピードを上げた。
私めがけてたくさんの矢が飛んでくる。
そして、一条の矢がシンジに向かって飛んできた。
私はシンジをかばった。
そして背中に矢が勢いよく刺さった。
「くっ！」
思わず声が漏れる。
今の私は普通の人間。
力を使った状態ではないから傷の痛みはすごく感じる。
「おいっ！！」
シンジが驚愕の声を上げた。
「だい・・じょう・・ぶ・・」
何とか声を出したが、痛みで顔が歪んだ。

「・・俺を下ろせ。」

「下ろしたら・・・敵の思う壺だって。だからこのまま向かうっ。」

「っ・・！」

シンジは苦しそうに顔をゆがめた。

シンジはきっと自分が無力だと思っているんだろう。

「私は平気だって。」

私が力を振り絞って言った。

私は背中に矢が刺さってから徐々にスピードが落ちていった。

天寿の力さえ、使えたらッ！

だが今はシンジに意識がある。

使えない。

そう思ったときだった、私たちに雷のような電気が降り注いだのは。

私たちはまともに電気を浴びる。

私たちは悲鳴を上げた。

でも何とか飛んでいる。

シンジはたまらず気を失った。

私は何とか持ちこたえ、天寿の力を解放した。

私の目の色は茶色から銀に。そして腕には天寿の文様が刻まれる。

体に力がみなぎってきた。

私はシンジを抱えなおしてウィーミアを呼び出す。

「ウィーミア、追っ手に爆風を。私たちから遠いところに吹き飛ばして。」

「はいっ。」

ウィーミアはありったけの力で爆風を呼び起こし、追っ手たちにそれをぶちまけた。

追っては私たちから遠いところに吹き飛ばされた。

私はウィーミアをリングに戻し、近くの茂みに隠れた。

私は背中に刺さったままの矢を抜いた。

一時の危機は去ったが、シンジは電気のダメージを負っている。

私はシンジを再び抱えて能力だけで浮き、天寿の力を解放したまま精霊の居場所に向けて跳躍した。

天寿の力があれば、短時間で長い距離を移動できる。

しばらく追っ手はこないだろう。

だから追われる心配はないが、さてこの後どうしようか？

天寿の力の変身をといたら私は力尽きて倒れるだろう。
だが、天寿の力を使ったまま精霊たちの目の前に現れたら
私が天寿の力の持ち主だとばれてしまう。

私は仕方なく後者を選んだ。

以前（いじゅつし）のときみたいにばれたら記憶を消してしまえばいいのだから。

あの魔法は魔力は関係ない。自分の意思で何とかできる。

私は移動するスピードを上げ、急いだ。

そして、森を抜けた。

目の前には草原が広がり、たくさんの家や建物が連なっていた。

私は依頼屋という場所を探し当てその中に入った。

中に入った私にみんなの視線が向けられた。

「おい、あいつ天寿の持ち主じゃないか？はじめてみたぜッ」

「あぁ、そんでもって怪我してんじゃないか、何かあったんだろうな。」

私を見たものがひそひそささやいているのが聞こえる。

私が入ってきたことで依頼屋の空気が変わったみたいだ。
私はかまわず宿屋の受付に金を置き、
「一部屋でいいから、かしてくださいっ。」
といった。
受付の精霊はここのオーナーらしかった。
何でそんなことが分かるかというと、それは服装と手の甲にある精霊の文様のおかげだった。
手の甲にある文様は、本来獣の姿をしている精霊の証。
この依頼屋のいるもの全てが獣の精霊だった。
人一人いない。私たちを除いて。
「あんた、天寿の力の持ち主かい!?珍しいね。
一体何があったんだい?怪我してるじゃないかぁ!?」
「私より、シンジのほうがッ。すぐに治療しないとッ。」
「あぁ。そっちの連れもだね。
おーいあんたたちこの子の連れを部屋まで運んであげな。治療も忘れんじゃないよ。」
『分かりやしたっ!』

オーナーの声に数人の精霊がシンジを部屋に運ぼうと私のほうへ向かってきた。

「あ、あのっ、私が・・・」

私が断ろうとしたときその声をさえぎって、

「そんな心配せんでいいって。
ほらっ、あんたもけが人だろ?治療してやるからこっちおいでッ。」

オーナーが言い、私を引っ張って店の奥へと連れ込む。

オーナーに呼ばれた人はシンジを部屋のほうへ連れて行った。

シンジのことを心配しながらも私はオーナーのほうについていく。

そのとき、依頼屋で私の姿を見た精霊に魔法をかけたのは言うまでもなかった。

第十五話　襲撃者の正体

「なぜ、あなた方はそんなに親切にしてくれるんですか？」

ルミルは聞いた。

オーナーは私の背中の傷を治療しながら

「困っている奴がいたら助けられずにはいられないからさ。それよりなんだってこんな深い傷を負っているんだい？」

と、私の質問に簡単に答え、聞いてくる。

「幻夢の森を歩いていたら黒い衣を着た人たちに襲われて・・」

私は言葉を濁した。

「黒い衣？そいつぁ、山賊ならぬ森賊（しんぞく）だねぇ。そいつらに襲われてこの程度なら奇跡に等しいねぇ。」

「森賊？」

きいたことない。

シンジはそいつらを知っていたんだろうか？

「そうさ。そいつらは人じゃぁない、精魔なんだ。」

「え？精魔？」

思わぬ正体を聞いて拍子抜けな声を出す。

「そうさぁ。精魔が姿を変えた奴らのことさ。
あの森は別名　幻魔(げんま)の森　とも呼ばれていてね、あいつらは幻魔そのものなんだよ。」

「幻魔・・。」

思わず呟いた。

「そうさね、幻の魔物、それが森賊さ。まぁ、とにかくこの程度でよかったね。
たいていの奴はあそこであいつらに捕らえられるからね。
捕まった奴はうちらが何とか助けに行くがね。」

「え?助けに?どうしてそこまで・・」

「元は、あの森は、我らの獣の森だったからね。
今はあいつらにとられたが、時間をかけて取り戻そうと思ってんのさ。
まぁ、そのついでのようなもんさ。あいつらもとられたとあっちゃ本気でかかってくるがね。」

「え、そしたら犠牲者が出るんじゃ・・・・?」

「犠牲者?そんなものはでないさ。我ら一族をなめてもらっては困る。」

「じゃぁ、さっきなんで・・」

私は最後言葉を飲み込んだ。

だって私に、この傷ですむのは奇跡に等しいっていったから聞こうと思った。
でもそれは私たち人間にとってのことなんじゃないのか・・・。

「あ～あれは、あんたたち人間にとってのことさね。
苦労しただろ？ここまで来るのに。」

「は、はい。」

やっぱり。

「鍛錬を積んだ精霊にとっちゃまだあれはレベルが低いさね。」

「そうですか。」

だから、ウィーミアの風であんな簡単に吹き飛んだんだ。

オーナーは私の背中に包帯を巻きつけ、その紐をぎゅっと縛ると

「これでもう大丈夫さね。
治療呪文はかけたし塗り薬も塗ったし、これでたいていのことは自由にできるさね。」

と、言った。

「あ、ありがとうございました。
あ、あのやっぱりもう一部屋借り手もいいですか？お金は払うので。」

「それ言おうと思ったんだよ。
あんた、お金余分においていっただろ?だからそれでちょうど二部屋分さ。」

「そういえば、そんな気が・・・ありがとうございます。」

私がお礼を言って立ち上がった。

「どうしたんだい?」

私が急にもじもじし始めたからそう聞いたのかもしれない。

「あ、あの、天寿の力のことは、その、他言しないでください。
シンジにも、その、言っていないんです。」

「あぁ、分かってるさね、そんなこと。
いいから、そのシンジとやらのところにいってあげなさいな。
４２号室だよ。それともう一部屋ね、４３号室も使っていいからね。」

「あ、ありがとうございますっ。」

私は再びお礼を言って４２号室に行った。

私がそのドアを開けようとしたら、精霊が何人か出てきた。

「あぁ、君はあの人の連れだね。治療は終わったけど、まだ意識が戻ってないよ。
少ししたら目が覚めると思うよ。」

精霊の一人がシンジを指差して言った。

「あ、ありがとうございます。」

私はお礼を言った。

「いいえ。また何かあったらいってね。」

その精霊は微笑んで他の何人かを連れて行った。

私は念のためその精霊たちにも魔法をかけておく。

こんなに用心深くたびたびしてるのはこの力はとても強大だからだ。

悪用されたらたまったもんじゃない。

あのオーナーにも念のためかけ魔法をかけておいた。

疑っているわけじゃない。

いつ何が起こるかわからないからやっているだけ。

シンジにもいつか言わなければならないんだな。

私は不安だった。

シンジにばれたらシンジは私をどう見るだろう?

私をどう扱うだろう?

怖くてたまらなかった。

そう思いながらも、私は４２号室の中に入った。

第十六話　回復

シンジはベットに寝かされていた。
掛け布団がずれてて手だけが見える。

私はベットに近づいた。
そして両膝を突いてシンジの手を軽く握る。

私は変身を解いた。

私はシンジの手に軽く触れながら頭をベットのふちに置くような形になった。

疲れた。
だるい。

天寿の力をあまりにも長く使っていたからだろうか？

私はすっと目を閉じた。

疲れているせいか眠るまでそんなにかからなかった。

私はなぜか目が覚めた。

ふと顔を上げるとシンジと視線が合った。

私はあわててシンジの手を放し

「わ、私まで寝むっちゃった。シ、シンジ、からだのぐあいはどう？」

と、あわてていった。

「・・・俺より・・お前のほうが・・・」

シンジが私をじっと見据える。

「だ、大丈夫だって。シンジの方がダメージが大きかったんだよ？」

「・・・・」

突然シンジは起き上がろうとした。
私はあわてて立ち上がり、

「だ、だめだよっ。まだ寝てないと・・・・・っ・・」

シンジを押さえつけようとしたが、急にめまいがして言葉が続かなかった。

私は何とかベットのふちに片手を置き、自分の体を支えた。
もう片方の手は目に軽く当てる。

視界が歪んで見えるから、それをまともに見ると体がふらつくからだ。

「・・・おいっ。」

シンジが言った。

「大丈夫だって・・少し・・めまいが・・しただけ・・それより・・シンジは寝てなきゃ。」

私は必死に表情に出ないよう抑えていたつもりだった。
だが、声は正直だった。

「俺より、お前のほうが・・・・っ・・」

シンジのほうはまだ伝記のダメージが残っているようで頭を反射的に片方の手で抱えた。

視界の隅でそれを見た私は

「ほら・・だから、おねがい・・。わたしもすこしねるから・・」

といって、再び両膝を突きベットのふちに背中を向けた。

すっと目を閉じる。

めまいも治まり、私は再び眠りについた。

シンジは上半身が起き上がった状態で眠ったようだ。

鳥のさえずりで二人は目が覚めた。
朝になってしまったようだ。

私は目をこすって立ち上がる。

めまいもしないからもう体調に異常はないようだ。

「シンジ、動ける？」

「あ、あぁ。」

シンジも体調が回復したようだった。

二人は朝食を食べるため宿屋の受付の隣にある食堂のほうに向かった。

依頼屋は三つの店で成り立っている。

宿屋、食堂、依頼情報の掲示、受付。

この三つ。

メインは依頼。

依頼内容とその報酬、その難易度、依頼主などなど。

さまざまなものが管理されており、依頼を受ける人が集まる場所。

私とシンジは朝食を済ませた後、その依頼情報が掲示されている物を見に行った。

シンジは依頼内容が書かれている羊皮紙を一枚取った。

シンジはその羊皮紙と今いる大陸全体が分かる地図を、照らし合わせて見ている。

私たちのいる大陸はリューナトルードである。

言い忘れてたけど、そもそもこの世界は二つの大陸がある。

一つは今私がいる大陸。南の大陸といわれる暖かい大陸、リューナトルード。

もう一つは北の大陸といわれていて年中寒くてオーロラが見える大陸、ローラトゥールド。

そんでもって今いるのは、リューナトルードの隅の方にある獣の里なんだ。

たくさんの里や街があるから覚え切れなくてとっても大変。

私はシンジが見ている羊皮紙を目を細めて見入った。

難易度　B

依頼主・・・フロン

依頼内容　精魔退治

精獣の泉　周辺に精魔の群れが住み着いて困っています。
精魔の位は中級の中ぐらいです。
群れ自体はそれほど大きくありません。

成功報酬　獣の宝珠　賞金　￥５０００

と書かれていた。

「見つけた。」

私が羊皮紙を読み終えると同時にシンジが呟く。

「え？」

「獣の里から東に向かって一キロも離れていない。」

「今から向かうの？体のほうは本当に大丈夫？」

私は依頼よりそっちのほうが心配だった。

「あぁ。」

シンジは呟き、依頼の受付に行った。

「この依頼を受けたいのですが。」

シンジが受付の精霊に言う。

シンジが敬語を・・！？

びっくり！！

「この依頼を受けるのかい？分かったよ。早速連絡するからあんたたちはもう向かってもいいよ。」

精霊は私たちに向かって言った。

シンジはそれを聞くなり依頼屋を出た。

私はその精霊にペコッと頭を下げ、急いでシンジの後を追った。

依頼を受けることに慣れているんだろうなぁ～

私はシンジを追いかけながらそう思った。

第十七話　精獣の泉

私たちは精獣の泉に到着した。

精獣の泉というのだろうからすごくきれいな泉かなぁと思ったのだけど・・・

その予想は悲しくも外れてしまった。

泉がぽつんとあって離れているところに泉を囲むように林がある。

泉の水はきれいだがなんか普通じゃない気がした。

私はシンジに本当にここかと聞こうとしたとき、

「あなた方が依頼を受けてくださった方たちですか？」

と、遠くのほうで声がした。

私たちは声がしたほうに振り返った。

そこにいたのは人の姿をした獣の精霊と

私たちに怯えているかのようにその精霊の背中に隠れている幼い精霊がいた。

「はい。そうですけど・・・。」

私は言った。

シンジが答えそうもなかったし。

「そうですか。とりあえず私の家まで来て下さいませんか？事情を説明したいのです。こちらについてきてください。」

人の姿を精霊は早口で私たちに言ってすたすた歩いていってしまうから私たちも急いで後を追った。

その精霊の隣を歩く幼い精霊が時たま私たちのいる後ろを振り向く。でも、それは一瞬のことですぐ前を向いてしまう。

泉から少し離れたところにある家が私たちに声をかけた精霊の住処（いえ）だと分かった。

家につき、私たちを家の中に通してくれた。

そして四人（人じゃないけど精霊も）がテーブルに座る。お茶を出してはくれたがそれには、私もシンジも一切手をつけていない。

「自己紹介が遅れました。依頼主のフロンと申します。」

「私はルミルって言います。」

「俺は、シンジといいます。」

フロンさんに続き、私とシンジが言う。

やっぱりシンジが敬語を使うの慣れないな。

「あぁ、こっちの子はフィオネといって、僕はそのフィオネの保護者なんです。

フィオネは人見知りでなおかつ人の言葉がしゃべれないからちょっと大変なんですけど。
え～と、じゃぁ、本題に入りますね。
依頼のことなんですけど、依頼届けを出してから、あなた方が受けるまで相当時間が過ぎてしまってちょっと精魔の群れに異変が起きてしまったんです。」

「異変？」

フロンの言葉に私は首をかしげた。

「はい。行動パターンって言うんですかね。ちょっと変わってしまって、今や僕もなかなか予測できなくて、ただ、精魔たちが昼に泉に来ることだけは分かってはいるんですが。」

「昼に？」

またもや私は問う。
シンジも眉をぴくっと動かした。

「はい。そこが不思議なんですよ。毎日毎日泉に来ては水浴びや、もぐっているんです。
そのせいで泉は汚れてしまいました。あなた方も見たでしょう？精魔が来る前の頃は光が当たるとそれはもうきれいに輝いて清く美しかったのですが、今は精魔の邪気で汚れてしまって・・」

「そうなんですか。」

「あ、ほら。今、精魔たちが来ているでしょう？窓からご覧下さい。」

フロンがそういって窓のカーテンを開けた。

私たちはそっと窓からのぞいた。

すると、ぞろぞろ大勢の精魔たちが泉に入り、水浴びやもぐってはいる。

なんとも嫌な景色だった。

精魔ってのは階級と種類によって姿かたち、強さが違うんだけど、今泉にいる奴らは小さい子供ぐらいの背丈をしている。

背丈はまだかわいらしいが、精魔の顔なんか見ると吐き気がしてくるほど気持ち悪い顔をしてた。

鬼のような角が生えて、口元には吸血鬼のような牙が2本。

体は黒に染まっていて、ごつごつとしたよろいのような肌。

もう見ただけで気持ちが悪い。

今見ているのはそんな奴ら。

「どうする？シンジ。」

私は聞いた。

今出て行くのか様子を探るか。

その判断が私にはできない。

「まだ様子を見る。今日は策を練って明日にあいつらを殺る。」

「分かった。」

シンジの言葉に私は頷いた。

「でしたら、今日は私の家にお泊まりください。フィオネも喜びますし。」

フロンが言った。

フィオネは・・・喜んでいない気がする。

どうにも怯えているようにしか私には見えない。

「シンジ、どうする?」

私の言葉など無視し、シンジは

「お言葉に甘えます。」

とフロンに向かって言った。

フロンに言う前に私になんか言ってよぉ~。シンジのばかっ。

私は心の中で言った。

「フィオネも、その、精魔退治に参加させてはもらえないでしょうか?

難易度はBと書きましたが、それ以上な気がいたしますし。
少しは役に立つと思います。ほらっ、フィオネっ。」

フロンさんがフィオネをせかした。

え??たしかフィオネってしゃべれないんじゃぁ・・・?

フィオネはフロンに押され私たちの前まで来て急に頭をペコット下げた。
そして・・

（よろしく・・お願いします・・）

と、頭の中に聞こえた。

「え?」

と、思わず聞き返しちゃった。

シンジも驚きを隠せないでいる。

「言い忘れていました。フィオネは実際にこうやって声に出せないけど、
多少ならこうやってテレパシーができるんですよ。」

フロンが思い出したように言う。

テ、テレパシー〜〜!!?

私は心の中で叫んだ。

第十八話　精魔の群れ

私とシンジはいまだに信じることができずにいた。

テレパシーはとても貴重な力で、それこそ天寿の力に勝る劣らずというほど稀な能力の一つ。

それをこの目の前で、いや、実際に聞けるとは！！

驚きと感動が混じった感情が溢れだす。

テレパシーという稀な力を持ったフィオネは何属性なんだろうか？

そういえば、シンジの能力も見ていないな。

人間も精霊も自分特有の波動を持っていて
その波動に合った能力が必ず一つはあると、書物を読んで知った。

私はお母さんから譲り受けた天寿の力と空を統べる風の力。

シンジの能力はいまだに見たことがない。

あぁ～知りたい。

それはとにかく私とシンジとフィオネは精魔の群れを観察し、
いつ、どこで、何を、するか、を見極めて策を練った。

最初、フィオネは私たちに多少怯えていて口数が少なかったが
時間がたつに連れて私たちと打ち解けあった。

シンジはフィオネ対する言い草は徐々に敬語ではなくなった。
少し暴言的な発言もあったりはしたがそこは私が何とか治めて策を練ったのだった。

そして翌朝。

私とシンジとフィオネは近くの茂みに隠れ精魔が来るのを待った。
そして私とフィオネはシンジの合図で策を実行したのだった。

泉に集まってのんきに遊ぶ精魔にシンジはアーウィルで奇襲をかけた。
シンジに続いて私はウィーミアを呼び出し攻撃をする。
フィオネは本来の姿、幼いが小さい狼の姿に戻り精魔に向かって数十本の雷の矢を飛ばす。

私たちの奇襲に精魔立ちは混乱した。
数は圧倒的に多い精魔だが、不意打ちには弱いらしい。

私たちは着々と精魔を倒していった。

奇襲は大成功のように思われた。
だが、しかし、思わぬ出来事で私たちの策は見事に崩れ去ってしまった。

奇襲にあわて精魔たちの連携のバランスは崩れ去り、
元には戻るまいと思われるほどの戦い方だったため、私たちは油断していた。

アンバランスな精魔たちの連携はもう一つの精魔の群れが来たことによって
崩れ去った精魔の群れのバランスが立ち直ってしまったのだった。
優勢だった私たちは一気に不利なほうへ回ってしまった。
昨日、来なかった別の群れが押し寄せ、もともといた精魔の群れに助力したのだった。
思わぬ加勢に今度は私たちがあわてた。
徐々に私たちは泉のほうに押され、周りを囲まれてしまった。
「アーウィル！ウォレイトだ！」
シンジがアーウィルに向かって防御を指示する。
私たちは防戦一方だった。
こんな数を相手にするのはさすがにきつかった。
二つの群れが合わさって三人を相手になんて卑怯よっ！！
そう叫びたかった。
だが、一匹ずつしとめるほか私たちに選択肢はなかった。
シンジもあせっている。
そのせいか、周りが見えていない。

私はふとシンジのほうに目を向けた。

視界の隅に入ったのはシンジの後ろから、2匹の精魔が攻撃を出そうとする瞬間!!

シンジはそれに気づいていない!!

「シンジっ!危ないっ!!」

私は精魔の攻撃がシンジに当たる前に私はシンジを突き飛ばした。
代わりに私がその攻撃を受ける。

くっ!!いたっ!

激痛が私を襲う。

受けたのは私の右足のひざから足首まで。
その部分はズボンが灰と化して、やけどしたかのように腫れている。
なおかつそこに風の刃が大きな傷を作った。
傷口はぱっくり開いて紅(あか)い血が滴る。

「シンジっ、だい、じょう、ぶ・・?」

痛みにこらえてるせいか声が途切れる。

「あぁ・・・っ!!?」

シンジは私を見て言葉を失うほど驚いた顔をしていた。

私は右足をかばって立ち上がる。

「お前っ！・・その足っ・・！」

シンジが私に言った。いや、言おうとしてるの間違いかもしれない。

「大丈夫だって。直撃は避けたから。ほら、精魔たちが襲ってくるよ？」

私は言った。

そして私は思った。

私がシンジをかばったことで怪我を負い、シンジにそれが負担になるのなら、

私は平気な顔をして精魔を倒さなければ、と。

シンジにはいつものように冷静にものを判断してほしい。

私の気持ちを察したか、シンジは苦しそうに顔を歪め、精魔の方に向き直った。

「アーウィル！ウォーズシャドウ！！」

シンジは叫ぶ。

精魔たちは一致団結して巨大な竜巻を作り、アーウィルの大技とぶつけさせる。

ゴォーーーゴォゥオーーーグゥォゥォーーー

鼓膜が破れそうなそうな不協和音を立て大技同士がぶつかり合う。
ぶつかリ合ったそのとき、大きな爆風が私たちのほうへ押し寄せる。
幸いシンジの方には運良く吹き飛ばされるほどの爆風は来なかったが、
私の方には押し寄せてきた。
私は爆風をよけれるほど、動ける状態にいない。
結果、爆風をまともに受けて泉に
ボッチャーン
と音を立てて落っこちる。
足の傷に泉の水がしみた。
しみたという程度どころの問題ではなかったが。
単純に言うと、張り裂けるような激痛に襲われたってこと。
プハッ
泉に落ちた後すぐに水面に顔を出し息を吸おうとした。
だが、
ザプッ
息を吸う前に誰かに足を引っ張られて泉の中に引き戻された。
誰かというのは分かってると思うけど精魔のことだよ。

泉の奥深くに精魔がぐいぐい引っ張っていく。

く、苦しいっ！い、息がっ！！

泉は意外にも深く精魔は奥へ奥へと連れて行こうとする。
奥へ引っ張られるほど息が苦しくなっていく。

幸い、つかまれた足は左足だった。

何とか逃げ出そうと足を振り回し、もがく。
だが、精魔はつかんだ足を放そうとしない。
余計に強くつかんでくる。

い、痛いっ。それに、く、苦しいっ

それでも諦めず抵抗を続けると、泉の水面から

バッシャーン

と音を立ててきれいなフォームで入ってきた人物がいた。

それはシンジだった。

シンジは勢いよく私のいるところまで泳いできて
私の足を引っ張る精魔に蹴りを食らわし、私を精魔から引き離した後
私の手をつかんで水面に向かって泳ぐ。

水面まっしぐらで泳ぐシンジと私に精魔が襲撃をかけてきた。

水中戦は人間には不利である。

シンジは何とか攻撃をよけていたが一匹の精魔が繰り出した爪はよけれず、左腕に大きな傷を負う。
その精魔がまたもや攻撃しようとしたところを間一髪、私が風の力を使い撃破した。

そういった水中戦をして私たちは泉の水面に顔を出すことができた。

「げほっ、げほっ。シンジっ、ごめん。いま・・」

私は泉の水にむせながら風の呪文を唱える。
呪文が唱え終わり、術を発動させた。

私たちは浮いて地面へと着地する。

地面に着地した私たちに向かって精魔は攻撃を仕掛けてくる。

「ウィーミア・・！」

「アーウィル・・・！」

私とシンジがそれぞれ精霊に指示しようとしたとき、フィオネに異変が起きた。

第十九話　フィオネの異変

今までフィオネは体が小さいけれどたくさんの精魔を相手にしていた。
当然傷を多少ながらも負ってはいるようだった。
だが、今までの様子を遥かに超えた違和感と迫力をかもし出している。

「ワオォーン」

フィオネが突然雄たけびをする。
すると、徐々にフィオネの体が大きくなっていった。
やがて小さかった幼い狼の姿から立派な成獣の狼の姿となった。
もう幼いなんて呼べない立派な姿となったフィオネは再び雄たけびをした。

「ワオォーン」

フィオネの雄たけびとともに雲行きが怪しくなり、

ゴロゴロゴロ、ゴロゴロゴロ、・・・ダーンダーンダーン・・・

と、音を立てて、精魔全てに雷が直撃した！

精魔は一瞬で全て消し去られてしまったのだった。フィオネによっ

て。

フィオネは全ての精魔を消し去って尚雄たけびを続けた。

雷がゴロゴロと鳴り響き地面にいくつも到雷する。

「フィ、フィオネっ。もう終わったからっ。もう、やめてっ」

私は叫んだ。

それでもフィオネは雄たけびをし続け雷を起こしている。

「・・・暴走してる・・？」

私は呟いた。

大きな力を持つものは時に制御しきれなくなるとその力に飲み込まれ暴走するだろう。

力を扱う器が小さいほどその力はきっかけがいかなる場合でも暴走するであろう。

お父さんが昔言っていた。

大きな力は正しいほうに使えば幸せを呼ぶがもし、扱い方を間違えたら、制御しきれなくなったら、その力は災いを呼ぶだろう。

と。

「ウィーミア、癒しの旋律を奏でてっ。」

私は言った。

少しでもフィオネに自我が残っているのなら暴走を止めることができる。

ウィーミアは私の言葉に従い風を操って癒しの旋律を奏でた。

その旋律が奏で出すとフィオネの雄たけびがやんだ。

フィオネはその旋律を聞き入っているようだった。

そしてフィオネは元の幼い狼の姿に戻った。

フィオネは戻った後、すぐに地面に横たわるような形で眠ってしまった。

私は右足をかばいながらフィオネに駆け寄りそっとフィオネを抱いた。

「フロンさんのところへ戻ろう。」

「あぁ。」

私の言葉にシンジが頷く。

戻ろうと歩き出したとき、

「みなさーん、無事ですかぁ？って傷だらけじゃないですかぁ？早く治療しないとっ。
急いで家に行きますよっ」

と、フロンが走って近寄ってきた。

フロンは私からフィオネを預かるといって、フロンはフィオネを抱いた。

そして私たちはそれぞれ自分に負った傷をいたわりながらフロンの家に向かった。

フロンの家に上がった私たちはまずフィオネを優先してもらった。

力が暴走したフィオネには体にかかった負担が大きいだろうと思ったゆえの判断だった。

フロンがフィオネに治療をし始めたと同時に私は

「シンジ、腕の傷、見せて。手当てするから。」

と、シンジに向かっていった。

私の言葉にシンジは素直に聞いてはくれなかった。

代わりに私の足の傷をじっと見てくる。

「私は大丈夫だって・・だから見せてよッ。」

私はそういいながらシンジの腕を強引に引っ張る。

「・・・っ・・」

シンジが少し顔をゆがめた。

「シンジが素直に聞かないからだよッ。・・・ごめんね・・」

私は最後にすごく小さい声で謝った。

聞こえたかどうかは知らないけど。

私はシンジの傷口を診る。

傷口はぱっくり開いて血が止まらない。

「少し・・痛いかもしれないけど、呪文かけるね・・」

私はそういって治療呪文を唱え始めた。

「っ！」

シンジが小さくうめく。

シンジの負った傷はだんだん良くなる。

だが、私が思ったより治りが遅い。

どうしてこんなに・・治りが・・・遅いの・・？

私は自然治癒でも何とかなるかなってところで呪文を唱えるのをやめた。

私は傷口にガーゼを貼って包帯を丁寧に巻きつける。

「呪文を・・唱えても・・治りが遅く・・感じたから・・少し完治には時間がかかるかも・・」

最後に包帯の紐をぎゅっと縛った。

「これで・・もう・・だい・・じょう・・ぶ・・」

私はシンジに言った。

さっきからめまいがして視界がぼやける。
それにつれ声もかすれていく。
意識が・・朦朧と・・してくる。

私はたまらず横になるような形で倒れた。

「おいっ。」

シンジの声が聞こえた。

気を失ったわけじゃない。
でも、意識があんまりはっきりしていない。

歪んだ視界の中、シンジの姿が見える。

シンジの声を聞いてかフロンが駆けつけてきた。

「ル、ルミルさんッ。大丈夫ですか?すぐに、仰向けになれますか?」

「は、はい・・ごめんなさい・・体が・・思うように・・いか・・

な・・・く・・て・・」

フロンの声に何とか答え仰向けになって少し上半身を起こす。

「そんなことは気にしてませんよ。
今手当てするんで、少し痛いかもしれないですからちょっと我慢して下さいね。」

フロンはそういってなにやら呪文を唱えだした。

チラッとフィオネのほうを見ると寝ていることが分かった。

「それって・・治癒・・活性化・・の・・」

私が声を振り絞って言う。

「はい。治癒活性化の呪文です。よくご存知ですね。
シンジさんの傷を手当てしたのもルミルさんですよね?
見るだけでも分かりますよ。慣れているんですね。」

「・・小さいころから・・医術を・・・身内に・・叩き込まれて・・・それでですかね・・」

「あはは。そうですか。
私はこの術と丸暗記で使える治療魔法しか知りませんのでたいした手当てができないのですが。」

「・・それだけでも・・・十分です。・・・それに・・・」

私の声をさえぎって

「もう、話すな。黙っておとなしくしてろ。無理するな。」

と、シンジが叱咤する。

「そうですよ。無理をなさらないで下さい。顔色が悪いですし、寝られたほうがいいですよ。」

フロンも言う。

シンジの馬鹿っ。

自分は私が言ってもすぐに見せなかったくせに。

「無理なんかしてないです・・・・・・うぅ」

なんか鈍い痛みが襲ってきた。

シンジが私をにらみつけるような視線で見つめる。

「やっぱり少しこの術は痛いですよね。」

フロンはそういって私の傷口に冷たいタオルで拭いた。

し、しみるっ！

顔をゆがめて上半身を起こしていた手に力をを入れると、

すっと手と背中にシンジの手が触れて、無理やり寝かされた。

「っ・・・・・・なっ！」

私は驚きのまなざしでシンジを見上げる。

「・・・。」

シンジは何も言わずに私を見つめる。

何も言わずに見つめられるだけってのはさすがに反論しがたいんだけど・・・。

「・・・。」

「・・・。」

無言の状態が私とシンジの間に続く。

それを破ったのは、

「治るのが遅いと思ったらぬれているからなんですね。泉の水をかぶりましたか？」

というフロンの声。

コクッとシンジと私が頷く。

「やっぱりですか。あなた方、髪までぬれて・・
泉の水は精魔の邪気が染み渡ってしまいましたから、水にぬれれば治りが遅いのは仕方ないですね。」

と、フロンが悲しそうに言う。

するとフロンが

「はい。これで手当て完了です。今日はゆっくり休んでくださいね。」

といって、あたしの足に巻かれた包帯の紐を結び終える。

「ありがとうございます。」

私はフロンに言った。

私はその夜、用意された布団で眠った。

少し離れた隣にはシンジがいたけど。

疲れていたせいか、私はすぐに寝てしまった。

第二十話　旅の仲間

翌日、その日の昼に一匹たりとも精魔は現れなかった。
それを知ってフロンさんが泉にきれいな輝きを放つ透き通った石を入れた。
するとその石は泉の置く不覚まで入ったはずなのに輝きを放っていた。
そして泉の水もそれに共鳴するかのように輝きを放った。
「この輝きが戻ったのならば元通りですね。
シンジさんルミルさんには感謝しても足りないくらいです。」
フロンは言った。
「いえ。そんなたいそうなことは私はしてませんよ。」
私は言う。
「・・・。」
シンジは何も言わない。
そしてフロンから成功報酬の獣の宝玉と￥５０００の賞金を受け取った。
フロンはシンジだけでなく私にも獣の宝玉をくれた。

使い道が分からない・・

私は心の中で呟いた。

私たちは傷が癒えるまで待とうとしなかった。
シンジは私を気にはかけたが私は大丈夫だと言い切った。
そのときの会話を今でも覚えている。

「お前の足の傷、見せろ。」

「だ・か・らぁ、大丈夫だって言ってるでしょぉ?」

「早く見せろ。」

「シンジが早くここを出たいんでしょ?私に聞くほど急いでるんなら私は一緒に行けるわよ。」

「・・・歩けないとどうにもならない。」

「歩けるってばぁ。何でそんなに確認したがるのぉ?」

「・・・・。」

「本当に歩けるから、ね?自分のことは自分が一番分かるものなのよ。」

「・・・無理するなよ。」

「しないよ。」

ある意味口げんか的な言い合いだった。

でも正直言うとまだ完治はしていないし、大丈夫って言うほどの状態でもなかった。

でも私は言い切った。大丈夫だって、と。

シンジが旅を急ぐ理由も分かる。

でもシンジは私がかばい傷を負ったことで頭を悩ませている。

私はシンジの負担にはなりたくなかった。

この傷が後からになってシンジを傷つけることがあっても。

今だけは。今だけはシンジの負担にはなりたくなかった。

口では本心を何も言わないシンジだけど

本当はすごく心に負担をかけていることが私には感じられた。

それは私のせい。

シンジは一人で問題を抱えている。

私はシンジの負担になりたいんじゃない、

シンジの手助けがしたいんだ。

たとえ、自分が苦しい思いをしてもシンジの負担にだけはなりたくない。

シンジが無理するなと言ったけど無理するに決まってる。

そもそも約束した覚えはない。

しないよ　といっただけで。

私はシンジのためなら自分を犠牲にしたっていい。

犠牲になってもいいぐらいシンジにはいろいろ迷惑をかけている。

だからこそ、大丈夫だと言い切った。

その話はそこまでにして、

今日、フロンたちと別れるとき、シンジがフィオネに驚くことを言ったんだ。

「フィオネ、俺と来るか？」

シンジが、あのシンジがだよぉ！！

天と地がひっくり返ってもおかしくない言葉だったんだよ。

「俺と来い。強くなれる。」

シンジが自分から言うなんて・・！！

初めてだーー！！

フィオネもすごく驚いてた。

フロンは全く驚いてはいなかったけど。
多分聞いてたんだと思う。昨日に。

フィオネは最初にフロンを見たけど決心したようでシンジを受け入れた。

そしてシンジとフィオネは契約を交わしたの。

旅の仲間が増えたのはうれしいんだけど・・

私は長い間、シンジの言葉にびっくり仰天してしばらく言葉が出なかった。

そしてシンジと私は次の街に向かった。

シンジの目的はその街にある大会に出ることだったの。
私もその大会は楽しみだった。
その街の文化はとても発展していて私はそっちのほうが楽しみなんだけどね。

でもこのとき知らなかった。
シンジが今まで精霊に対してどんな接し方をしてきたのかを。

第二十一話　新キャラ、現る

シンジと私の向かった街の名は　七色の街
精霊ではなく人間が行き交う街の一つ。
その街は催し物が他の街と比べて多く、商業や文化も発展している
大きな町であった。
シンジと私はその街を歩いていた。
商業が発展しているせいか、歩く道の両側にいくつもの露店が並んでいる。
シンジが向かうのはこれから行われる大会の受付場所。
私は参加するつもりじゃなかったんだけど・・・
朝方、シンジに強制的に参加するよう言われた。
そのときの会話が今もはっきりと思い出される。

「あの街で開催される大会に俺も出るからお前も出ろよ。」
シンジが街を指差して言う。
「え?何で??」
「バトルのいい練習場になるだろ。」

「え～。今回は観戦するだけにしようと思っていたんだけどなぁ。」

「お前の傷も完治しただろ？」

「なっ、何でいまさらその話がそこに来るわけ？？」

シンジの言葉に私はびびった。

足の傷・・まだ完治はしてないんだけど・・心配してほしくないし・

でも参加ってちょっと早すぎるんじゃないの？？

「この大会は精霊使いもバトルゾーンにいるからだ。動けないと不利だろ？」

「え～、じゃぁ、シンジは傷が癒えたからいい練習場になるから私に参加しろと？」

「そうだ。まさかまだ癒えていないから参加はしないとか言うわけじゃないだろうな？」

げっ、さっきの言葉は逆効果だった。

「い、言うわけないじゃん。そんなこと。でも、今回の大会見るだけじゃだめなの？」

「だめだ。まさかびびっているんじゃないだろうな？」

あ、もしかしてシンジ脅迫してない？

「びびってるわけじゃないけど・・・思うんだけど、それ、一種の脅迫？」

「脅迫？・・確かにそう思っても仕方がないが、なぜそんなに参加したがらない？」

「だって、私、初心者だし。見て勉強になればそれでいいかと。」

「甘いな。そんなことを言っているといつまでたっても初心者のままだぞ。」

「分かったよ。参加すればいいんでしょ。参加すれば。シンジが何でそんなに参加させたがるかわかんないよ。」

「大会に参加すれば分かる。」

結局、私が折れて大会に参加することになってしまったわけだが、シンジは私に参加させる真の理由を教えてくれない。

その理由は一切なぞのまま。

まさかシンジが足の傷やびびってるがどうだとか脅迫してくるとは思っても見なかった。

そんないきさつがあって私とシンジは大会に参加するべく向かったのだった。

そして大会の受付場所に行く。

受付場所では大勢の精霊使いらしき人たちが並んでいる。
私たちもその場に並ぶ。

「さぁ、勇気ある精霊の使い手たちよ、この七色の街で行われる七色大会に集うのだ。
精霊使いによる、精霊使いのための、この七色大会が、今、開催する!!
なお、優勝した勇猛果敢な使い手には、なんと!世にも珍しい七色の宝玉が授与される!!
さぁ、勇気ある使い手たちよ、この大会に集うのだっ!!」

私たち、精霊使いの答申に火をつけるような熱狂した声にシンジ以外の精霊使いたちは

おぉっ!!

と、歓声をあげる。

いや、私は歓声はあげなかったよ。
ただ、テンションが高くなっただけで。

何とか私たちは受付でエントリーした。

エントリーをし終わったところでちょうど知り合いとばったり出くわす。

「お、シンジとルミルじゃねえか、久しぶりだなっ。」

「シンジとルミルも大会に出るのか?楽しみになってきたな。」

以前、知り合った、ジュンとサトルだった。
二人はそう言って私たちに近づいてくる。
「あ、ジュンにサトル！久しぶりだね。」
私は言った。
本当に久しぶり。
あの街以来だなっ。
「・・・・。」
シンジは何も言わず二人を見る。
「この大会、この俺と当たるまで負けるんじゃないぞ、シンジもルミルも。」
「シンジたちと当たるのを楽しみに待ってるんだから、それまで負けないでくれよ？」
ジュンとサトルの言葉に私が負けないよって言おうとしたとき
「ふふふ。それはどうでしょう？無理かもしれませんよ？」
と、後ろから声がした。
振り向くとそこにはめがねをかけた少年が一人いた。
「誰？」

と、私が聞くと、

「申し送れました。お初にお目にかかります。僕はコウヘイといいます。あなたの名前は・・？」

コウヘイと名乗った。

「私？ルミルって言うの。よろしくね。・・・・！？」

私が名乗った直後、すぐにコウヘイはすぐに私に近寄ってきた。

その速さに私は仰天した。

「ルミルさんというんですね。ふむふむ。」

「？」

コウヘイの意味ありげな言い方にちょっと私はたじろいだ。

「なんだ、コウヘイか。驚かせるなよ。お前の意味ありげな声は不気味だ。」

ジュンがさもいやそうに言う。

「コウヘイも出るのかよ。簡単には勝ち進めそうもないな。」

サトルが言う。

「ふふふ。当たり前です。簡単に勝てるなんて思わないほうが身の

ためですよ。では僕はこれで。」

コウヘイがめがねに手をかけて言う。

そして私たちに背を向け立ち去ろうとする。

「じゃ、じゃぁ、コウヘイ、大会でね・・」

「えぇ。大会で。では皆さん、大会で会いましょう。ふふふふふ。」

すごく不気味な声を響かせてコウヘイは去っていった。

私、コウヘイみたいなタイプの人苦手だなぁ。

心の中で私はひそかにそう思った。

「じゃ、じゃぁ、俺たちもこの辺で。」

ジュンが切り出して言う。

「うん。じゃぁ、二人とも大会でね。」

「あぁ。」

「楽しみにしてるぜ。」

私とシンジは二人を見送った。

シンジは結局何も言わなかったけど。

どんな大会になるだろうか？

と、思いながら二人を見送ったのであった。

第二十二話　七色大会

大会当日、私とシンジは大会会場へと向かった。
会場の中はいくつかのホールに別れていた。
その中の一番広いと思われるホールへと急ぐ。
そのホールには既に大勢の大会参加者が集まっていた。
私とシンジもその中へ加わった。

「よく集まってくれた、参加者の諸君たち。
今から早速バトルをはじめてほしいところだが、
参加者の人数が予想をはるかに超えていたので少々予定を変更させてもらった。
諸君たち、自分の番号をよく覚えてろよ。
いまから、五つのホールに分かれて試合を行うんだ。
そのためのくじを諸君たちには引いてもらうからね。」

「じゃぁ、番号が早い順に並んで～。それでは、レディースタート！！」

主催者の声に参加者たちがぞろぞろくじのほうへ向かう。
私とシンジも向かった。
そしてくじを引いた。
くじには番号がかかれていなかった。

色は、カラーで私は　青　だった。

「さぁ、引き終わったかな？
今から説明するからしっかり聞いてくれよ。
まずくじの色の方からだ。
くじの色は、五つのホールへ分かれてもらう際、そのホールの場所を決めるための色だ。
第一ホールは、赤、第二ホールは、青、第三ホールは、黄、第四ホールは、緑、第五ホールは、紫。
引いたくじの色のホールへ集まるんだよ。
そこで詳しい説明をするから、では解散。」

主催者が言った。

「シンジは何色だった？」

「紫」

「第五ホールだね。私、青なの。だから第二ホール。また後でおちあおうね。」

「あぁ」

私とシンジはそれぞれ、くじの色のホールへと向かった。

私は第二ホールへ行った。

そのホールには私と同じ青のくじを引いた参加者たちが・・・。

「お、ルミルじゃん。」

その声に私は振り向いた。

「あ、ジュンっ。ジュンも青のくじ引いたんだ。」

私は微笑みながら言った。

「あぁ。サトルはたしか赤だったな。」

「そうなんだ。シンジはね、紫だったんだよ。」

「そうか。あいつは何色なんだろうな・・。」

「あいつ?」

「そう、あいつ。前、会ったろ。コウヘイだよ。コウヘイっ」

「あぁ、コウヘイのことね・・・」

私はコウヘイという言葉を呟いたとき背中にぞっとするような寒気が襲ってきた。

「僕のこと何か言いましたか?」

「あっ、うわさをすればっ、コウヘイじゃんか。」

ジュンの言うとおり私の後ろからひょいっと顔を出したコウヘイが言った。

「コ、コウヘイっ！」

私は思わず叫んだ。

「うわさ・・してたんですか？いけませんね・・・ふふふふふ。」

コウヘイが意味ありげな声を出した。

「コウヘイも・・青だったんだ。」

「そうですよ。試合が楽しみですね。」

「俺は楽しみじゃない。」

「同じく。」

ジュンに同意する私。

「え、そうなんですか？残念ですね。僕は楽しみで仕方がないのですが。」

私、コウヘイ苦手だよ～～

「第二ホールにお集まりの皆さん、僕がこのホールの司会者、審判を勤めさせていただきます。
ではご説明します。
今から皆さんにはくじをまた引いてもらいます。
そのくじの番号でこちらが対戦表をお作りします。
尚、今いる参加者の３０％に絞らせていただきますゆえ、ご承知ください」

司会者の人が言う。

３０％、そんなに少なくしちゃうのね。
でも、ここにいる３０％って言っても結構な人数になるわね。

「ではくじを引いてください。対戦表は午後になれば出ているかと思います。
自分の番でなければ他のホールの対戦を見に行くのも言いかと思います。
では解散して下さい。」

私とジュンとコウヘイはくじを引いた。

どうか二人には当たらないで・・

そう願いながら引くのであった。

第二十三話　予選試合前

私はくじを引いた。
くじの番号を大会のスタッフに見せて場所をジュンがいるの場所に向かう。

「ルミル、何番だった？」

「私は一番。ジュンは何番？」

ジュンが聞いてきた。
私は素直に答えた。

ジュンやコウヘイは何番だろう？
不安を抱えながら聞いてみる。

「俺は３０。コウヘイはどうだったんだ？」

ジュンの番号を聞き　大丈夫かも　とほっとした。
でもっコウヘイは・・・

コウヘイはくじを引き終わったのか私とジュンのいる場所に来る。

「１８番ですが。」

コウヘイの言葉に少し安堵する私。

コウヘイみたいなタイプとやりあうのはちょっとね・・・

「そっか。私たちはやりあわなくてすみそうだね。」

私がそういったとき、なぜか二人は不満そうに、

「え～。俺、早くやりたかったんだけどな。お前らとのバトル。」

「せっかく同じホールのくじを引いたのになんか残念です。お手合わせできるかと思いましたが・・」

と、二人は残念だという感じで言う。

私は、あわてて、

「こ、このホールはまだ予選でしょ？だ、だったら、もっと盛り上がる本選でやったほうがわくわくすると思わない？？」

言いつくろった。

「まぁ、それもそうだな。楽しみは後に取っとけって奴か。でも、待ちきれねえぜっ。」

「予選に取れるデータは取りたかったのですが、まぁいいでしょう。ふふふふふ」

二人はそれでもなんか不満そう。

「ところで、そろそろ昼食食べに行かない？もう十二時回ってるし。シンジたちとも合流したいからさ、ね？」

私が話題を変えて二人に言う。

「いいぜ。」

「えぇ。僕もご一緒できるんですか?」

「コウヘイもいいよ。じゃぁ、シンジに連絡取るね。」

私はそういってリュックから通信機を取り出す。

通信機は旅に出る前におばあちゃんに渡されたものの一つだった。

使うのは初めてなんだけど・・・

私はぎこちない手でシンジの持っている通信機のアドレスを入力する。

ピ、ピッ、・・ピピッ

入力音が小さく鳴り響く。

プルッ・・・プルルルル、プルルルル

やがてシンジの通信機につながった。

「もしもし」

シンジの声が聞こえた。

「あ、シンジ?私ルミルだけど・・」

「何だ?」

「もうそっちは終わった?私のほうは終わったんだけど・・」

「あぁ。」

「じゃあさ、合流しない?今、私のとこにジュンとコウヘイもいるけど・・」

「どこに?」

シンジは聞いてきた。

おそらく合流は許してくれたと思う。

「じゃぁ、大会参加者が集まる休憩所でいいかな?そろそろ昼食時だし。」

「あぁ。」

「じゃぁ、休憩所でね。」

私はそういって会話を切った。

「じゃぁ、行こう?」

私は二人に向かっていった。

「あぁ、いこうぜ。」

「えぇ。いきましょう。」

二人は頷いた。

私たちはその言葉を合図に休憩所に向かった。

そのとき私はふとサトルのことを思い出して

「ねぇ、ジュン。サトルはいいの?」

と、聞いた。

「あ、サトルのことか?気にしなくていいさ。あいつのことだからそこに行ってるはずさ。」

と、ジュンは驚いた風もなく言う。

「ならいいけど。」

私はほっとした。

もし、ジュンがサトルのこと忘れてたら・・・

と思うとはらはらするからね。

ジュンならやりそう。

そう思っちゃう私はいけないのかな?

とにかくそんな会話もしながら休憩所に向かったのだった。
休憩所にはすでにシンジがいた。
サトルとシンジが話をしているのが見える。

「おーい、サトルー、シンジー。」

ジュンが叫ぶ。

サトルとシンジが振り向いた。

私たちはサトルたちのほうへ向かう。

「合流できたな。どうだった？サトルとシンジは。」

ジュンが言う。

私も知りたい。

好奇心をむき出しにして私はシンジたちのほうを見る。

「まぁまぁかな？まだ対戦相手が分からないと確かなことはいえないけど。」

「対戦相手が誰であろうと勝つさ。」

サトルが前者、シンジが後者。

サトルはともかく、シンジはいつもよりなんか挑戦的な言い方だっ

た。

バトル前はいつもこうなのかな？　シンジって・・・

私はそう思った。

その後、立ち話もなんだから昼食をとりながら会話を続けた。

といってもほとんどがジュンが会話の中心だったけど。

とにかく、四人で話して四人で昼食をとったのだった。

第二十四話　予選試合開始。

昼食を食べ終わった頃、ようやく対戦表が出た。

休憩所にある大きなテレビに五つのホールで開催される予選試合対戦表が全て映し出されている。

私たち四人はその対戦表を見た。

一回戦目の順番は・・というと・・・

早い順で

ルミル《わたし》、ジュン、シンジ、コウヘイ、サトル。

の順番。

ホールが違うシンジは私と対戦時間がかぶっていた。

サトルは私たちの対戦試合にはかぶっていない。

だから、シンジは私以外の対戦なら見れて、サトルは私たちの対戦を見ることができるのだ。

私は本戦までコウヘイやジュンにあたらないことを対戦表で確認しほっとした。

「あーシンジと対戦時間かぶっちゃったなー。残念。見たかったのに。」

私は言った。

実を言うとシンジに私の試合を見られないことに安堵していた。

足はまだ完治していない。

走れるし、そんなに動かなければばれないほどの回復はしたが。

「・・・・」

私の言葉にシンジは何も言わない。

代わりにジュンが

「大丈夫だって。俺が見といてやるからさ、な?」

と、いってくれたけど、

「そうだね。でも私に言う前にジュンはバトルでしょ?」

と、言い返した。

だって本当のことだし。

「あ、忘れてた。」

「でもいいよ。後で聞けるなら。」

「ばっちり見といてやるぜっ。」

ジュンの拍子抜けた声に私は笑顔を向けていった。

ジュンも笑って言ってくれた。

「・・勝手にしろ・・」

シンジがそっぽを向いていった。

「ふふふふふ。」

「あはは。」

私とジュンの会話とシンジの言葉にコウヘイとサトルが笑った。

「まぁ、みんなお互いに頑張ろうね。」

私は言った。

「負けたら罰金だぜ?」

「応援してるからな。」

「頑張ってください。僕とあたるまで・・くふふふふ。」

「・・・。」

私に誰が何を言ったかは言うまでもない。

シンジとコウヘイは間違いなく分かるでしょう・・?

「うん。じゃぁ、バイバイっ。」

私はみんなに背を向けて私の予選試合一回戦を行う第二ホールに向

かった。

シンジは第五ホールへと向かっただろう。

予選試合は見れないが次からは見られるはずだ。

ぜったいそのときはみのがさないっ！

それより試合に集中っ。

すーはー

大きく深呼吸。

すってーはいてー。

とりあえず落ち着いて向かう。

ホールの地下道向かう私の先にはスタッフが一人。

「一回戦目の方ですね。こちらへどうぞ。」

スタッフの案内に従って歩く。

もう、出す精霊は決まっている。

それは試合が始まるまでのお楽しみだけど。

スタッフが指し示したのはバトルゾーンへの行くためのエレベーターみたいなもの。

きっとこの上にあるのがバトルゾーンなんだと思う。

「こちらでお待ちください。」

そういって私を促す。

「は、はいっ。」

少し緊張して言葉が突っかかる。

緊張するな・・落ち着けー、落ち着けー。

自分を落ち着かせながら待った。

「さぁ、七色大会予選試合第二ホールで行われる一回戦目が今始まるよー!!
さてー・・・・」

上から聞こえる声をさえぎってエレベーターが動きだす。

ウイ～ン・・・ガシャン。

暗かった視界がぱっとまぶしくなった。

そのまぶしさに目が慣れると観客席が私のいるバトルゾーンを囲むような形になっている。

予選のせいか、人は満客ってほどではないが、大勢なのは分かりきっていた。

「さてー左にいるのはーフォレストシティ出身のルミルさん!!」

司会者・・実況者が大きく張り上げて私の名を言う。

そう、今まで言わなかったけど、私はフォレストシティ出身なの。
フォレストシティは森の街とも呼ばれているの。
まぁ・・そのままなんだけど・・・

ウイーン・・・ガシャン

「さてー対する右にいるのはーこの街レインボーシティ出身のユンさん!!」

私の対戦者が出てきた。

七色の街と書いてレインボーシティと読むの。
七色の街、字のごとくそのまま読んでもいいのだけど。
とにかく、街には二つの名があるの。
正式にはシティがついたほうでは大会では使用されるのだけど。

そんなことはおいといて・・・

「では、改めまして、第二ホール予選試合第一次予選一回戦目をはじめますっ!

レディースタートッ!!

」

審判が声を張り上げて言う。

「ウィーミア、おねがい。ステージ、オン!」

私は声を張り上げて精霊ウイーミアを呼び出したのだった。

第二十五話　ルミルｖｓユン

「ウィーミア、おねがい。ステージ、オン！」
「フレイズ、出番よ。」

私と対戦者のユンの声がバトルゾーンに響く。

このバトルのルールはシングルバトルの一対一。
精霊使いも戦いに参加。
精霊が戦闘不能になるか、精霊使いがバトルゾーンから外に出るかで勝敗が分かれる。

私のパートナーであるウィーミアは風と音をつかさどる精霊。
一方、ユンの出した精霊は見るからに氷と炎をつかさどる獣。

相性からいえば、私のほうが有利。

私は身構えた。

もう戦いは始まっている。

「フレイズ、アイスラガー！！」

ユンが指示する。

「ユン選手、先制攻撃をしかけにいきましたっ！
相性はルミル選手の方が有利、これからどうなるでしょうかっ！」

実況者の声が聞こえる。

うざいな、その声。

分かってるよ、有利なことも、先制攻撃されたことも。
問題はそこじゃない、技のほう。

アイスラガー、それは氷のかぎ爪。

そんなもの食らうなんてできない。

ユンは私ではなくウィーミアを狙っているようだ。

私はフレイズを狙う振りしてユンを狙う。

「ウィーミア、風の刃に音を交差させてっ。」

私は言う。

風の刃とアイスラガーはぶつかり互いに干渉しあって消えた。

だが、音のほうは消えずにユンとフレイズを襲う。

音の効果、それは集中力を落とすこと。冷静さを失わせるための音。

それを聞いたものは徐々に失って行き、やがて大きなミスをする。

「くっ！フレイズ、ファイヤブースター！！」

ユンは指示するがフレイズには聞こえていない。

「ウィーミア、修導刃竜巻！」

サトルとのバトルのときに暴走した竜巻を起こさせた。
あれはたくさんの小さな竜巻が干渉しあってできたものだが、今のは違う。

小さな竜巻で作らせるわけじゃない。

ウィーミアのつかさどる風を操って巻き起こす大きな竜巻、それが修導刃竜巻。

その竜巻はフレイズに襲い掛かり、フレイズはされるがままに竜巻に飲み込まれる。

竜巻の騒音によって実況者の声は聞こえない。
さっきの音と竜巻は実況者のうざい声を黙らすためでもあった。

竜巻でフレイズがもがく。

が、そう簡単には抜けられない。

そう仕組んでるし。

私はその隙を狙ってユンめがけて走り出す。

私は以前に身内から護身術としていろいろ教えてもらった。
だから運動は得意。

ユンは私が近づいていることに気がついた。

私はかまわず、大きくジャンプして蹴りにかかる。
反応が一瞬遅れたユンだったが、私の蹴りを両手で受け止めた。
バトルゾーン外まであと少しのところで止められた。

「ちっ」

私は舌打ちして後ろにジャンプして退く。
着地のとき、わずかに右足に痛みが走る。
少し体がよろめいた。
ユンの運動神経をなめていた。
反応が多少遅れてもすぐに対応するとは・・・なかなかできないことなのに。
仕方ない、手荒な方法だけどあれをやるか。

「ウィーミア、竜巻をあいつらもろとも吹っ飛ばして。
（私も風で援護するから。）
」

（　）の言葉は心の中で語りかけたもの。
私はそう語りかけ、呪文を唱えた。

「今！！」

私が天寿の力を少し使った疾風の呪文と竜巻がユンに襲い掛かる。

フレイズももがいているが抜け出せないまま。

ユンも逃げようと飛びのくが後ろはバトルゾーン外。
横に逃げようとするが竜巻に飲み込まれた。

あの竜巻は抜け出せないだけで害は全くない。

そうなるよう命じた。
でも、フレイズには危害を与えている。
そうでもないと簡単に抜け出されてしまう。

竜巻はあっという間にバトルゾーン外へ。

竜巻はバトルゾーン外に出た後ユンとフレイズを落とした。
そして音と共にに消えてゆく。

「ユ、ユン選手、バトルゾーン外に！よってルミル選手の勝利！！」

わぁー！！！！！！

審判者＝実況者のとどろかせた声の後に大きな歓声が響く。

何とか一回戦目は勝利に収めた。

ふー。

ほっと息を吐いて、

「ウィーミア、ありがとう。ゆっくり休んで。」

と、言ってウィーミアをリングに戻す。

「バトル楽しかったですよ。また呼んでくださいね。」

最後にウィーミアはそういって帰っていった。

ユンのほうもフレイズをリングに戻していた。

この後、私とユンは共に握手を交わした。

「いいバトルでした。ありがとう、ユンさん。」

私がそういったら、

「さん付けはやめてよ、私も呼び捨てにしたいし。」

と、言ってきたから、

「はい。」

といった。

「あなたの・・ルミルの蹴りすごかったわ。」

「あはは。思いっきりけったつもりが止められちゃったあれですか？」

「そうよ。後ちょっとでも遅かったら私、バトルゾーン外に吹き飛ばされていたわ。」

「私、蹴りには自信があったのに。まさか止められるとは思わなかったです。」

「ははっ。甘いわね。この街の住人は運動神経は皆いいほうだわよ？私なんて真ん中ぐらいだわ。それに比べたらルミルは・・・ぷぷ」

「ユン、ひどいっ。でも、あそこで思い知らされました。ありがとう。」

「いいって。でも次は負けないわ。」

「こちらこそ。」

私たちは共に笑いあって会話を終えた。

次があるっていいなぁ。

そんな風に思いながらユンと分かれた。

分かれてから観客席に向かおうとしたら、ジュンがやってきた。

「あっ、ルミルじゃん。俺も負けていられねえぜっ」

「ジュンっ。頑張ってねっ」

「言われなくても勝って見せるさ。」

私は頑張ってといったけどなぜかジュンは勝つと言い切った。

頑張る＝勝つ　なのかなぁ？

不思議に思いながらもジュンを見送った。

あっ、今思い出したけど、シンジの方はどうなのかな？

勝ったよね。きっと。

そう思って私は観客席に訪れた。

ジュンのバトルを見ていればどこかにシンジもいるはずだから。

ジュンのバトルもすごく盛り上がっていた。

私はジュンのバトルを見ながらシンジの通信機にメールを送った。

『私の方は勝ったよ。シンジの方はどうだった？』

こんな短いメールだけどすぐ見てくれるかな？

少し不安に思いながらも送信した。

「いっけー、カルガン！！アッパーラッシュ！！」

「ルーゾラ、ボルト！」

前者がジュン。

そして後者がジュンの対戦者。

ジュンが出した精霊は力をつかさどる精霊。

はっきり言うと、格闘系の精霊って言うのかな？

力にもいろいろあるからね。

ジュンの対戦者の精霊は雷をつかさどる精霊。

技が激突しあってはらはらさせる部分もあった。

目が離せないいいバトルである。

そんな風にしばらくジュンのバトルに夢中になっていると、私の通信機に着信音が鳴った。

シンジからだった。

『勝った。一勝したぐらいで付け上がるなよ。』

わぁー、一言多いよ、シンジ。

なんとなくむかついた私は

『付け上がってなんかいないよ。私がそんな単純だと思ってるの？』

と、送り返してやった。

送り返してしばらくしないうちに、

『あぁ。単純だと思ってる。』

と帰ってきた。

うわっ、ひどい、シンジ。

ちょっと悲しくなった私は、

『シンジ、ひどい。そんな直球に言わなくたって・・・。』

と、送り返した。

どう返すかな?シンジは・・・。やさしかったりするかな?

『甘いな。自分にもっと厳しくしろ。』

と、私の期待を大いに裏切った。

裏切られた私は開き直ることにした。

『厳しすぎ・・でも分かったよ。シンジがそういうのなら。
でも、これが私だよ?そんな単純じゃぁないけど。』

と、送り返した。

シンジこれを見てどう思うのかな?

そう思いながら私はジュンのバトルを観戦していたのであった。

第二十六話　伝説

『じきにこいつの試合が終わる。じゃあな。』

『じゃあコウヘイのバトル一緒に見よ?』

『断る』

『分かった。じゃあまたね。』

『あぁ。』

シンジとのメールのやり取り。
冷たい言葉を平気で送り返すシンジ。

シンジ・・私のことを何だと思ってるのかな?
傷つくよ?私でも・・・

そう思いながら私は通信機をしまう。

次はコウヘイのバトル。

じっくり見てコウヘイのバトルスタイルを見ないとっ。

気持ちを切り替えた私。

同じホールでやるからたいていの観客は移動しない。
私もその一人だけど。

ジュンのバトルはジュンの勝利に終わった。
しばらくしないうちにコウヘイとその対戦相手も出てきた。

「では、はじめてください！レディースタート！！」

審判の声がホールに響いた後、コウヘイとその対戦相手は

「シルビィ、出番です。」

「ユーム、光と共に在れ。」

と、言って精霊を呼び出す。

「！？」

私は一瞬目がおかしいかと思った。

観客もコウヘイも驚きを隠せないでいた。

伝説の・・精霊！？

コウヘイの対戦相手の名はミヨ。
黒い衣を身にまとい、フードをかぶっていて容姿が見えない。

謎多き相手ミヨはなんと伝説に記される精霊ユームを呼び出したのだった。

伝説に記されている精霊は精霊使いなら誰でも知っている。
おそらく普通の人ですらも。

それほど有名な精霊なのだ。
ユームはその中の一体。
ユームを記す伝説は私もよく知っているものだった。

ユーム　夢・無　をつかさどる偉大なる存在（せいれい）
その姿　漆黒の闇に包まれし　金色なる光の姿
人々の心　悪しき力に飲み込まれしとき　姿現す
人々の光となって　悪しき力を飲み込まんとする
悪しき力　金色なる光に勝つ術（すべ）なし
悪しき力　光に飲み込まれ　悪しき力消え去りしとき
人々は嘆き喜び　偉大なる救世主（せいれい）をユームと名づける
闇は無に変え　無は夢に変える

ユームの伝承は多くの人たちに伝えられたと聞く。
そして、これは私の母・・天寿の民から聞いたことだが、
ユームのつかさどる　夢・無　を操る民がいると・・。
ユームの姿を見るのは今が初めてだった。

ミヨが・・・　夢・無　を操る民・・。

信じられない。

今目の前で・・見ていることが・・

天寿の力を使える民がいれば、他の力を使える民がいてもおかしくない。

そうだと分かっているのに、今見ていることが信じられない。

だって・・その力を・・人に見せてはいけない・・と固く誓わされたのだから。

だから力を使うたびに見られた部分だけ記憶を消し去ってきたのに。

この人は・・民の力を堂々とこの場で・・使っている。

民は・・自分の力を人には見せてはいけないという掟があるのに・・。

それとも・・これは民の力ではないといっているの？

そうだとしたら、民の力にはどんな力だろうか？

そう思いながら私は見ていた。

そして今、バトルが始まった。

第二十七話　コウヘイｖｓミヨ

「ほぉ、これは伝説とうたわれる精霊ではないですか、驚きですね。じゃあ、僕から行きますよ。」

「・・・・」

コウヘイの言葉は遠くにいる私には本来聞こえるはずはない。
だが私には聞こえる。

究極の聴覚

天寿の力は飛ぶための力ではない。

天は全てを見下ろすもの。

だから地上にいるものを見下ろしコピーすることは可能。
私は聴覚を母から学んだ。

母はもともと天寿の民。
母はその力を私に継承できる器の持ち主か試した。

その試練が聴覚も含んでいた。

聞こえる。

「シルビィ、神速です！」

コウヘイはシルビィに命じる。

シルビィという精霊がつかさどるのは　鏡　。
何もかも見たもの全てを自分のものにしてしまう。
いわばコピー能力を主とする精霊。

「ユーム、空気と同化し、姿を消せ。」

「なにっ!?」

シルビィの神速・・神のごとく早い攻撃技はいともたやすくかわしてしまった。

「ユーム、姿現し、光の矢を。」

ユームはミヨに従って姿を現しシルビィに向かって光の矢を放つ。

「シルビィ、コピーです!!」

コウヘイは叫んでユームと同じ光の矢を出した。

そして両方と技は激突し、消滅する。

「コピー・・か。なら・・・」

ミヨの呟く声にはなぜか余裕があった。

だが、その声を聞いたのはおそらく私だけ。

コピーされたのに驚かなかったのは

シルビィがコピー能力を持っていると知っていただけじゃないみたいだ。

「どうです？攻撃技はもう通用しませんよ？」

コウヘイが問う。

「・・・通用する。」

ミヨが小さく言う。

「そういうならあなたから攻撃してみてはどうですか？」

「ユーム、日差しの数と同じ光の矢を。」

ミヨが命じる。

数で勝負？

不思議に思った。

でもそれだけじゃない気が・・・

「シルビィ、全てコピーを」

ユームが出現させた光のや全てを真似てシルビィがコピーする。

そして煙を立てて衝突。

精霊に体は無傷。

そして同じようなことを何回も二人は続けた。

ミヨが命じてコウヘイがそれをコピーさせる。

「何回も同じことをして意味があるんですか？」

コウヘイが問う。

コウヘイは分かってない。

ミヨの狙いがっ。

きっとミヨはコウヘイの精霊にコピーさせて体力を失わせることが狙いだ。

私は思う。

「意味？気づいてから聞いたら？自分の精霊の体調ぐらい気を配ってあげてね？」

ミヨは不敵の笑みをフードの下でしながら言った。と私は思った。

だってコウヘイは気づいていないから。

「くっ！」

コウヘイはいま気づいたようにうなる。

「ユーム、催眠を。」

「シ、シルビィ！コピーっ！！」

ミヨの命じた声にユームはすぐさま反応する。
しかしコウヘイの声にシルビィは一瞬反応が遅れた。

ユームはその一瞬の隙を逃さずシルビィに催眠をかける。
でもその催眠は眠らすものじゃなかった。

顔を伏せてシルビィはゆらりと動く。

「シルビィ、神速・・・」

コウヘイではなくミヨが命じる。

「シルビィ！！いくなっ！！！」

コウヘイが叫ぶ。

だが、シルビィはコウヘイではなくミヨの命令を聞いた。

「！？」

私の仮説が外れたッ！？

このことをするために！？ミヨ・・・なんて人なの・・・・

シルビィは一直線にユームに向かって攻撃しようと動く。

「シルビィー！！」

「ユーム、風の力を借りて吹き飛ばして」

ユームはコウヘイもろともシルビィを吹っ飛ばした。

ぶわぁー！！！！！ストン

大きな風音を吹かせたからシルビィもコウヘイも無事ではすまないと誰もが思ったかもしれない。

だが、シルビィもコウヘイもバトルゾーン外に吹き飛ばされただけで何もなかった。

ただ、ストン　と落ちただけだった。

シルビィも何があったか覚えてないらしくきょろきょろしている。

コウヘイはさっきの風で吹き飛ばされしりもちをついたまま動かない。

ただ目を見開いているだけ。

しばらく観客もバトルゾーンも沈黙に陥った。

それがいやになったか、

「審判。」

と、ミヨが審判に向かって言う。

「あ、すみません。コウヘイ選手がバトルゾーン外に。よってミヨ選手の勝利。」

審判があわてて言う。

一つ間があいて歓声が沸き起こる。

ミヨは審判にペコット頭を下げてユームと共にその場を立ち去った。

私はその光景をじっと見詰めるばかりで動けなった。

ミヨの狙いはシルビィにあったのは分かっていた。
狙いが体力消費ではなく集中力のほうだったとは・・・

そう、ミヨの狙いはそこにあった。

集中力がなくなれば、催眠がかけやすい。
そして催眠が、より相手に深くかけられ、持続し、強まる。

催眠が深く入ったから、
シルビィは契約者のコウヘイではなく催眠を命じたミヨの命令を聞いてしまったのだ。

そのことがようやく理解できたが、それだけじゃない気がした。
もっと他にもミヨに・・・力があるんじゃないかと。

ずーと考え込んでいたとき、リュックから着信音が鳴った。

「ん?」

それはシンジからのメールだった。

『なにただずんでいる。次、あいつのバトルだぞ。見ないのか?』

え?もしかしてシンジのほうから私が見えてるってこと??

私は観客席全体を見渡した。

あ、シンジ。こっち、見てる。

私とシンジの目があった。

そしたら、シンジはくるりと背を向け、第一ホールの方へと行ってしまった。

あ、やばい。サトルの試合(バトル)見に行かないと。

『見るよ。ありがと、シンジ。私も行くよ。』

私はメールを返信して第一ホールへと向かったのだった。

ミヨ・・・油断ならない精霊使いね・・・。

もしかしたら当たるかもしれない。

そう、どこかで予感しながら行ったのだった。

第二十八話　本戦への決意

私がつく頃にはサトルのバトルはもう始まっていた。
といっても始まったばかりなんだけど。
サトルはすごい。
見ていて分かる。
一度意外なことが起こるとパニックってはしゃぎまくりの気合であいて打ち負かすジュンほど、
はしゃいではいないがバトルを楽しんでいるサトル。
冷静で効率主義のシンジとはまた違う冷静さが感じられるサトル。
ジュンやシンジにはないサトルだけの良さがあることをバトルで今知った。
ジュンとコウヘイ、今、サトルのも見ていて思う。
みんなすごく強いと。もちろんシンジも強い。
コウヘイを打ち負かしたミヨという謎の子もすごいと思う。
優勝するにはみんなに勝たないといけない。
勝てるのだろうか・・？こんな私が・・・
不安もある。でも、

強くなりたい。

その思いが不安を消し去ってくれる。

今、自分の力全てを出して全力で戦おう。

そう前向きに考えられる。

そのためには戦う相手を知らなければならない。

私は懸命にサトルのバトルスタイルを見た。

・　・　・

バトルはサトルの圧勝に終わった。

そして全てのホールの予選一回戦が終わった。

それから、

私を含めてシンジもサトルもジュンもコウヘイに勝ったミヨも二回戦、三回戦・・・と勝ち進めた。

そして、明日、予選試合最後の試合が始まろうとしていた。

明日の対戦表が、今、発表される。

休憩所で私、シンジ、ジュン、サトル、コウヘイが息を詰めて対戦表の結果を見る。

そしてっ！

その結果はっ！

なんと、ルミルＶＳミヨ・・・シンジＶＳ・・・・・・・・・・・・・・・

私と、ミヨがッ！！

私はすごく驚いた。

シンジ以外が私を見て驚いている。

コウヘイが

「僕の分まで頑張ってください。応援してますから！」

と、言った。

「うん。全力尽くして頑張るよ。本戦に絶対勝ち残って見せるよ。」

と、やる気十分で言った。

誰が相手だろうと絶対に勝ってみせるっ！！

「お互い頑張ろうぜ。」

「お互い、絶対本戦に勝ち残ろうぜ！」

サトルとジュンが言う。

「うん。お互い勝ち残ろうね。絶対にッ！！」

私の言う。

そして、その夜、明日のため、部屋でウィーミアと打ち合わせしてたら、シンジが入ってきた。

部屋に今まで来なかったのはきっと明日に備えての調整をしてたんだと思う。

「まだ、起きてたのか。」

シンジが呟く。

「うん。ちょっと打ち合わせ。」

私が言うと、

「そろそろ戻ります。」

ウィーミアが私に言う。

「うん。お休み。また明日、予定通りにね。」

「はい。」

私の声にウィーミアは頷き、戻っていく。
ウィーミアはシンジが苦手なようだ。
まあこんな性格してるからかもね。
「明日、勝てよ。」
シンジは言う。
「うん。絶対に。シンジもね。」
「あぁ。」
「でも残念。シンジのバトル、また見れないや。」
私は悲しく笑う。
でも、内心ほっとしている。
もしかしたら、あれを使うかもしれないからだ。勝つために・・天寿の力を。
シンジのバトル、一回戦目も見れなかった。
そして、今回も私と重なっている。
最初と最後。
これは偶然?それとも必然?

「本戦で見れる。だから、勝ち残れよ。」

「分かってるって。じゃあ私寝るね。明日は体力使いそうだから。」

思わず、最後に言ってしまった。

シンジはそのことに眉をひそめたが私は無視して寝た。

明日、何が何でも絶対勝つ!!

この世に天寿の力より勝るものなんてないのだから、絶対勝てる。

私は心の中で勝利宣言して眠った。

第二十九話　ルミルｖｓミヨ

今、私はバトルゾーンにいる。
そして、ミヨもその場にいる。

「では、始めてください！」

審判の声がとどろく。

「ウィーミア、ステージ、オン！」

「ユーム、光と闇と共に。」

二人は同時に精霊を出す。

コウヘイのときと違う言葉。

光と闇

これが　バトルの鍵　になるかもしれない。

私は心の中にとどめておく。

私は相手に先に攻撃してほしかった。

だから、私は身構える。
ウィーミアも周囲に風を纏っている。

ウィーミアとは心の中で会話ができる。

だがそれを悟られてはいけない。

「私から攻撃されたいようね。」

ミヨは言う。

「・・・不思議な人。」

そう呟く声が聞こえた。

聞こえたけれどとりあえず黙る。

「ユーム、光の矢。」

ミヨが命じる。

「ウィーミア、風で粉砕させて。」

（無理ならよけて。）

私は言う。

光の矢はウィーミアめがけて打たれる。

私は眼中にないのかしら。

ウィーミアは風で粉砕させた。

どうやらよけるまでもなかったようだ。

「ウィーミア、竜巻」

次は攻撃を命じた。

ウィーミアは竜巻を作る。

「発射！」

そして、打たせる。

ゴォォオ！！！

竜巻が大きくうねる。

「ユーム、光と闇の壁を。」

ユームは壁を作ったらしい。

だが、

ピキッ・・・ピキピキッパリッン！！

壁は破られた。

そう思われたそのとき、ウィーミアにめがけて光と闇が融合した光線が三つ来る。

「ウィーミア！！」

これは予想してなかった。

まさか、あんな体勢で攻撃してこようとはッ！！

このままじゃ、私が負ける。

どんっ

私はウィーミアをかばって、右腕と左足に傷を負う。

ウィーミアには何も傷はない。

「ぐっ！」

うめき声が私からもれる。

結構痛いな。

なぜか冷静な私は心のうちでそう思った。

「なんでかばったりなんてっ！」

「・・勝ちたいからよ。あなたじゃ、やられてた・・」

（攻撃行くわよ。）

「くっ」

（はい！絶対勝ちます！！）

私の姿を見て、ミヨの目は大きく見開かれる。

「ウィーミア・・音と風の刃・・ユームに向かって。」

（そのうちに私はミヨの顔を拝む。）

服が破れたが、替えなんていくらでもある。

傷もひどいが動けないほどではない。

音と風の刃がユームに襲いかかる。

反応を一瞬遅らせたミヨは対応しきれない。

「ユーム、光の矢で向かい打って。」

命じるのが少し遅かった故にか、ユームは攻撃を少し食らう。

そのすきにっ

「ウィーミア・・風の縄で束縛してッ」

私は命じる。

攻撃を食らってまともに動けないユームを風が縛る。

グ、ググゥィ

これはユームのうめき声なのか・・

私はこのとき、天寿の力を少し解放した。

眼の色が光の加減で変わるぐらいしか体に変化はないが。

私の体は急激に軽くなった。

傷はひどく深くて血が滴り落ちているが天寿の力のせいで痛みは今のところない。

私はミヨめがけて走る。

ミヨは私に気づき、よけようとするが私のほうが早い。

私は、左手で持っている、風の棒でミヨのフードを背中のほうへと押しやった。

そしてミヨの顔が見れた。

「!?」

私もミヨも驚いている。

だって、私と同じ顔なんだもの。

髪の色も私が通常のときの瞳の色も全てが。

ミヨはたぶん、違うことに驚いている。

フードを脱がせたことなんかより、光加減で変わる瞳の色のほうを。

私はミヨから退いた。

「・・驚いた、私と同じかおだなんて。」

私は言った。

「・・・！？」

ミヨも驚いている。

だが、明らかに私が傷ついたときからおかしい。

「ユーム、催眠。」

でも、おかしくなかったかな？

「ウィーミア！！」

私は叫ぶ。

先に言っとく、これはお芝居。

ユームは苦しくもがれながらも、ウィーミアに催眠をかけた。

ウィーミアは風の縄をゆるくする。

これも芝居。

「ウィーミア、風の刃よ。」

ミヨが言う。

ユームに向かってウィーミアが風の刃を出す。

（その、まま、従って。ウィーミア。私はあなたに心で命じるわ。）

私は言う。

「ウィーミア！！いってはだめ。」

（この声に耳を貸さないで。）

私は叫ぶ。

ミヨが油断したときがチャンス。

「そう、そのまま、竜巻よ。」

ミヨが言う。

（だめ、竜巻はいけない。ウィーミア、風で姿を消して。）

（はい、ルミル。わかりましたわ。）

私の声に、ウィーミアはこたえる。

だから、ミヨに命じられてもウィーミアは動かなかった。

「はやく、なにやっているの？竜巻よ？」

ミヨの困惑した声に私は

「無駄よ。ウィーミア。」

と、言って合図する。

ウィーミアは瞬時に姿を消した。

「なっ嘘よ。だってしっかり催眠にかかったはず！！なのにっ」

ミヨは私を見て反論する。

「えぇ。かかっていたよ。でも、その催眠には弱点があるでしょ？普通の人にはできない弱点が。」

私は言う。

そう。

催眠には弱点があった。

それは、心の声。

声に出した響きは催眠にかけられた人には通用しない。通用するのは心の声だけ。

「まさかっ、あなたっ！？」

「そう、そのまさかよ。こんな重傷を負わされるとは思ってもなかったけど。」

私はそういった。

「何であんなものを・・受けて立ち上がって・・いるの？」

「簡単よ・・勝ちたいからよ。」

「ち・・がう・・そんなんじゃない。そんな重傷でなんで・・」

「・・あなたも・・気づいてたと思ったけど。かんちがい・・かしら？」

「やっぱり、あなたはっ！？」

「そうよ。」

「知られたからにはもう、あなたとのバトルはおわりね。」

私はそういって、指をパチンと鳴らした。

するとユームの背後にウィーミアが現れ、ユームを縛る。

「ウィーミア、チェックメイトに音波をきかせてあげて・・地獄の旋律を・・・」

私は言う。

ウィーミアは頷き、ユームの耳に直接聞かせた。

旋律の一音聞いただけでユームは即、瀕死状態を現す文様　を見せた。

ミヨは驚きのあまり呆然と突っ立ていた。

「！！ユーム先頭不能。よって、ルミル選手の勝利！！」

審判の声が響く。

私はミヨの耳元で

「私の力のことは誰にも秘密よ・・私の周囲にいる人はみんな知らないから・・」

と、そういって、私はミヨに握手を求めた。

ミヨが私の手を軽く握り返すと私は

「次はあなたと全力でこの力を使って倒したいな・・だからミヨももっと、冷静に、ね？」

と、言った。

私の言葉にミヨは言葉を失ったらしい。

「じゃあバイバイ・・私の唯一の民のお仲間さん。」

私はそういって、ウィーミアを戻し、場取るゾーンに上がる前の場所まで戻った。

私は傷の応急処置をして、トイレに行って、替えに着替えた。

そして、傷の痛み止めを飲む。

トイレから出た後早速、シンジ以外の知り合い全員が駆けつけてきた。

「おいっ、怪我大丈夫なのかッ！？」

「そんなんで、でられるのかよっ」

「早く医者に見せなければっ！！」

三人が同時に声を張り上げる。

あ、まずい。

この状況を考えてなかった。

私は顔が引きつるのを感じた。でも・・

私は必死に　みんなにシンジには言わないで　と頼んだ。

それは許してくれたが、医者には見せろといってきた。

そこは大丈夫だといっても信用してくれないから強行手段を選んだ。

はっきり言おう、私はみんない暗示をかけたのだ。

ルミルの怪我はひどくない。

本戦には出れる。

医者に見せるほどではない。

という風な暗示を。

それから三人はおとなしくなった。

私もほっと息をつく。

このとき私は気づかなかった、ミヨが私と三人の会話を見ていたことを。

第三十話　償い

私は今自分のバトルが終わったからいったん休憩所まで行った。
コウヘイたちには私の次にあるサトルのバトルを見に行ってもらった。
これも暗示で行かせた。
そのせいか、多少眼が痛い。
私は休憩所で一休みしていたとき突然
「あなた、暗示をかけれるの？」
と、聞かれた。
「ミ、ミヨっ！」
思わず振り返り少し声を上げてしまう。
そこにはフードをかぶったミヨがいた。
「み、見てたの？」
「えぇ、見てた。それより、怪我大丈夫？」
「平気よ。」

「平気じゃないよ、その傷は。ユームの攻撃技だもの。
ユームの攻撃は治りが遅いし、薬によっては副作用も・・
ごめんね。私のせい・・。何か私にできることない？」

「ミヨにっ？そんな自分を責めなくてもいいよ。あれは勝手に自分
があたりに行った奴だし。
でないと、ミヨに勝てなかったと思うから。だからいいよ。」

「嫌よ。私が負わせた傷だもの。何かあなたの・・ルミルの手伝い
がしたいの。
私に償わさせて。」

「罪じゃないんだから、いいよ、別に。」

私は言った。

そこまで自分を責めなくてもいいよ。

そう思う。

「私には罪だわ。人に怪我させるなんて恐ろしいことをしてしまっ
た。
お願い、手伝わさせて。」

私は諦めてもらいたかった。
でも、ミヨの気が払えないなら仕方ない。

これを機に私も甘えてみることにした。

「本当にいいの？だったらお願いしたいことがあるの。

私に傷がないように見せる幻覚をシンジといるときだけでいいからかけてほしいの。」

「そんなことでいいの??」

「そんなことって言われても。これは結構私にとっては大きいことなんだけど・・。」

「わかった。じゃあ早速やるわ。」

ミヨはそう言って呪文を私の左足と右腕にかける。

「ありがとう、ミヨ。私たち、友達だよ?」

「友達・・・こんな私でいいの?」

「いいよ。もちろん。だから、名前で呼んでね。呼び捨てでいいから。私もそうしてるし。」

「ありがとう、ルミル。」

ミヨは笑う。

「ねぇ、どうしてそんなにシンジという人に隠そうとするの?」

ミヨが聞く。

「それはね、一番心配させたくない相手だからだよ。ただでさえ足手まといな存在だから、ね。」

「そう・・それで・・」

「ジュンたちは協力してくれそうにないの。ミヨは協力してくれる？」

「もちろん。償いと友達といってくれたルミルのためなら。」

「ありがとう。」

私は微笑んだ。

「ミヨとは似た者同士かもね。顔以外にも。」

「そうね。」

私とミヨは自分たちで言ってお互い笑った。

「ねぇ、驚いたんだけど、ユームとは自分の民の力と関係あるの？」

「そうね。ユームは一番最初のパートナーだから。
私の民は　闇一族　と言われていて
先祖代々　無・夢　の属性を持つ精霊をパートナーにしているの。
だから私もそう。闇一族は人から遠ざかり山奥で暮らしていたんだけど・・・」

「嫌になった？」

「そう。あたりよ、ルミル。
だって、山奥でひっそり暮らすって、性に合わないんだもの。」

「そうだよね、私も家の中では飽き足らず雨の中よく庭に出てたよ。」

こうして、サトルのバトル中ずっと私たちは話していた。

本当に顔も性格も似てるんだなと思った。

第三十一話　本戦はタッグバトル！？

サトルのバトルはミヨとの会話で見れなかったが、どうやら勝ったらしい。

同じくしてシンジもジュンも勝ち残る。

そして本戦会場に私は向かう。

ミヨは会場の観客席にいるといっていた。

会場では予選を勝ち抜いた精霊使いがたくさんいる。

もちろん私も含まれて入るけれど・・

一体何やるんだろう？

私は不安を胸に抱いていた。

参加者があまりにも多くて少し大会基準を変更したという情報が入ったからだった。

私の右腕と左足は重症の中の重症。

右足の傷はなんとか完治したものの、やはり歩くとき微妙な痛みを感じる。

それもあって、不安を抱きながら

最初にホールをくじで決めたときの大きなホールに行った私だった。

会場でシンジたちの姿を見た。

ジュンとサトルにはまだ暗示はかかっているみたいだ。

それに安心し、

「ここにいたんだね」

と、そう言って、シンジたちのとこへ歩いて駆け寄る。

ジュンたちは何か浮かない顔をしていた。

〔言ってないよね？〕

視線で私が問いかける。

〔言っていないが本当にいいのか？〕

ジュンたちはそう視線で送り返して問う。

〔いいよ。〕

視線で強く送り返す。

「ねぇ、シンジ。今から何決めると思う？」

私はシンジに視線を向けて聞く。

「すぐに分かる。」

シンジはいつもと同じように言葉を返す。

これなら気づかれていない。

私は安心し、これから始まるであろう司会者の言葉に耳を傾ける。

そして、それは始まった。

「予選を勝ち抜いた皆さん！大会はここからが本番です。
ここからは　シングルの勝ち抜き戦　でいこうと思っていたのですが
参加者があまりにも多くて変更いたしました。
それは　タッグバトル　です！！」

『タッグバトル！？』

参加者は皆、司会者の声に驚く。

だが、驚いていない奴がいた。
明らかに何の感情も見て取れない人が一人。
それは　シンジ　だ。

シンジはまるでこうなることを予想していたかのようだ。

「今からタッグのペアとなる相手をくじで選んでもらいます。
そしてそれで勝ち抜き戦を行いたいと思います。
ですから優勝したワンペアには二つの七色の宝玉が送られます。
では今からくじ引きを行いますので用意してください。それではどうぞっ！」

司会者は言葉を続ける。

そうか、
タッグなら今の人数を半分に絞ることができてバトルの数を半減することができる。

それが狙いか。

私はそう思ってくじを引きに行く。

そして、参加者全てが引き終わった。

私の番号は４番。

さてだーれかな?

「何番だった?」

私はみんなに聞いてみる。

「俺は９番。」

「俺はラッキーセブンの7だぜっ。」

「・・４だ。」

三人が言う。
上から順番に　サトル、ジュン、シンジ。

・・・えぇー〜〜!?

ま・・・まっまっまさかっ！いやちがうよっ。シンジと一緒のはずがない。
そうだよっ！ききまちがえっ！！
私はすご～くすご～く焦った。いや、パニクった。
「え・・・・シンジ、もう一回言って？」
「・・？・・４だが・・？」
シンジは私の声に不思議に思うらしく最後に？（クエッションマーク）をつけた。
「聞き間違えじゃないんだ。」
私はシンジの番号を聞いて思わず呟く。
「？」
シンジには理解不能みたいだった。
「なぁなぁ、ルミルは何番だったんだ？」
はやくおしえろよっってジュンが私をせかす。
「驚かないでほしいんだけどね・・私・・私も４番だったの。」
私は戸惑いはしたものの、なんとか言った。
「わぁおっ、シンジと一緒じゃんかっ！！すげえな、こんな偶然もあるんだな？」

「たくさんの参加者がいる中、ペアになるなんてそうそうないことだな・・？」

ジュンもサトルも驚いている。

私はシンジのほうを見る。

「・・・・」

シンジは驚いているようには見えなかった。

まるで、

ペアになることが前々から分かってたというようにしか解釈の仕様がない表情だった。

シンジは・・このことがあるかもしれないから無理やり私を誘ったのかな？

自信過剰かな？この考え。

私は驚きと不安を抱きながら自分の番号とシンジを見つめる。

「・・・よ・・よろしくね・・？シンジ・・」

一応ペアになったから挨拶をした。

「あぁ。」

平然に言葉を返すシンジ。

これじゃあ、いつシンジにばれるか分からないや・・

でも・・なんとかなるよね・・？

うん、ぜったいなるなる！絶対大丈夫。なんとかなるよっ！！

自分に言い聞かせて落ち着きを取り戻す私。

そして、くじで決められたペアが公表された。

私はシンジと。

ジュンは暁という名前の人。

・・あかつき？・・・暁・・・・知っている名前の気がするけど思い出せない。

それはそれとして、

サトルはマリアという名前の女性・・・ってマリアっ！？

なんと二人連続知り合いだった。

暁って人もたぶん知り合い。

マリアは確実に知り合いだっ。

とても女王気取りのお嬢様。

それがマリアの性格を指し示すのにぴったりな表現。

「私・・サトルのペア相手知ってる。

ジュンのほうはたぶん面識があると思うんだけど思い出せない。」

私は公表された名前を見て言う。

そして、名前だけでなく写真まで公表された。

「やっぱり、二人とも知ってるよ・・」

思わず呟く。

「本当か?」

「えっ?まじ!?すげぇ」

「うん。」

私は頷く。

「ジュンのペアの暁はたぶんジュンと気が合うと思う。昔と変わっていなければの話だけど。」

「え?まじっ!?ならうれしいやっ。じゃあ早速、そいつと会ってくる。じゃあまたな。」

私の言葉にジュンは早速走り出して行ってしまった。

「サトルのほうはーーーーー」

私が言おうとしたとき

「あら、こんなところにあなたがいるなんておもわなかったわ。」

と、後ろから突然声がした。

振り向くとそこにいたのは

「マ、マリアっ！！」

私は振り向くと同時に声を上げた。

そう、そこにはサトルのペアこと、マリアがいたのだった。

髪は腰まであって、

フリルやりぼんがついている服・・服装全てがロリータファッションだった。

「久しいわね、ルミル。」

マリアが近づいてくる。

「えぇ。本当に久しぶりね、マリア。」

私もそれには答える。

「あら、そちらのお二方は誰かしら？

一人は私（わたくし）のペアだとお分かりになったけれど・・」

私の後ろにいる二人のことを私の口からマリアは聞きたがっているようだった。

・・私に説明しろって・・？困るよ、そんなの。

それになんか、シンジを見る目がハートになってるんだけど・・？

そう思いながら私は説明した。

説明し終わった後、マリアは二人に挨拶して私だけ連れ出された。

第三十二話　恋敵宣言!?

私はマリアにシンジたちとは少し離れた場所に連れて行かれた。
引っ張られる腕が多少痛い。

「ちょっと痛いから放してよ。」

「あらごめんなさい。あなた怪我してらっしゃるの?」

「してないよ。マリアのつかむ力が強かったのよ。」

「あら、それはわるかったわね」

一応話してもらい用件を聞く。

「ねぇねぇ、聞いていないわよ、
なんであなたなんかにあんな格好(かっこ)いい人がいるのよ?」

「え、格好いいぃ?シンジがぁ?」

マリアの言葉に私は拍子抜けな声を出した。

・・シンジ・・そんなに格好いい方かな?
・・・ただクールで無口でドライな性格なだけだと思うんだけど・・
?

「あなた、わからないの?あのシンジ様の魅力が。」

「魅力ぅ?あのクールで無口なところを言ってるの??」

私は思わず聞いてしまう。

「そうよ、すてきだわ~。シンジ様のツンとしたところが~たまんないのよ。」

マリアはシンジ（自分の理想のシンジ）を思い浮かべているような口調で言う。

シンジ様って・・・

私はマリアから二、三歩退く。

すっごく、今のマリアから引いた。

シンジはツンツンしすぎてると思うけど・・?

心の中で不思議に思いながら

「で、シンジがどうしたの?」

と、聞いた。

「私が聞きたいのはあなたとシンジ様の関係を聞きたいの。」

「関係?関係、ねぇ。かんがえたこともなかったなぁ。」

「あなた、考えたことなかったの?」

「だって、私、おばあちゃんの言いつけでシンジと旅してるわけだからあんまり気にしたことなかったよ。」

「・・信じられないわ。あんな格好いい人と傍にいて何も気にしていられないなんて。」

マリアの顔までもが信じられないといっている。

「あなた、シンジ様のこと、どう思ってるの?」

「どうって・・たとえば?」

「好きか嫌いか、よ。」

「嫌いだったら旅してないし。」

「じゃあ、好きとみとめてもいいわけね?」

マリアの言葉にはなにやら怒気がこもっていた。

こわっ!

いきなり、なにっ?その目つき・・なんか嫌な予感・・

私はその迫力に飲み込まれて

「・・嫌いじゃないのはたしかだけど・・?」

と、言ってしまった。

「じゃあ、あなたはこれから私の恋敵よ!!」

「えぇー〜!?」

マリアのいきなりの宣言に心底驚く私。

恋敵って・・・私、シンジに好かれてるかどうかもわからないのにい〜!?

心の中で叫ぶ私。

「そうと決まったらアピール開始ね。
大会終わったら二人で告(こく)るわよ。それまでアピールタイムね。」

・・告るぅー〜!?
むりだよぉー〜。第一そんなにすきじゃないよぉー〜

「えぇ〜!?告るって・・むりむりぃ〜第一、私はそんなに好きじゃないよぉ。」

私は思い切って首を横に振る。

「じゃあ、あなたの負けね?」

まけ・・?

マリアの唐突な言葉に軽く首をかしげる。

「最初から無理なんていっていたら負けなんて当たり前でしょう?」

マリアの言葉に私はうなる。

うぅーこんな奴には負けたくないという私のプライドがー～
あ～でも、そうすると告らなきゃいけないしぃーあぁー＾＾
どうしよぉー～

私は悩みに悩んで結局

「分かった。受けてたってやろうじゃない。
でも、いっとくけど、シンジ落とすのは大変だと思うよ。
傷つけられるかも、よ？」

と、言ってしまい、後に忠告してあげる。

私はなんだかんだいって勝負事には弱いのだった。

「大丈夫、私は強いわ。じゃあ決まりね、よろしくね、恋敵さん。
アピールタイムは大会が終わるまで。
あなたにはハンデがあるから私がいるときは譲ること、いい？」

「いいよ。きっとシンジは・・・・・ううん、なんでもない。それ
でいいのね。」

私は言いかけた言葉を飲み込み、頷いた。

ほんとは

きっとシンジは告白するときには名前覚えていないよ。

と、言おうとしてたんだ。
だってシンジのことだからありえそうで・・。

言葉に出すとマリアがかわいそうだからやめといた。

「えぇ。じゃあ今から用意はじめ～。」

マリアはうれしそうに、そして、目を燃やしながらシンジたちのいるほうへ向かった。

私はマリアとは逆にため息をつくばかりなのだが・・・。

「少し長話してしまってごめんなさい。では、サトルさん、行きましょうか。」

「あぁ。じゃあ、またね、ルミルにシンジ。」

「うん、またね。」

マリアの言葉にサトルが答え、私たちと別れた。

・・シンジじゃなくてサトルの方が向いていると思うんだけどなぁ～

私は不意にそう思った。

「・・なにかあったか？」

「え？」

二人を見送る私に突然それもシンジから問いかけてきた。

驚きのあまり聞き返してしまった。

シンジから・・どうして・・？
まさか・・聞かれた？あの話・・

「ため息。」

「え？」

思わずまた聞き返してしまう。

「ため息・・さっきからしている・・」

シンジが私を探るような視線で見つめてくる。

「あ、ため息のこと？・・それは・・ううんなんでもない。
ただ、これから大変だなって思って・・きっとシンジも・・」

私は素直に大変だと言う。
そしてシンジもおそらくそうだろうと思って口にした。

「俺も？」

シンジは眉をひそめて私を見る。

「うん。それは後々になればきっと分かるよ。
じゃあ私たちもいこう？遅くなると対戦相手攻略できないよ？」

私はシンジを促す。

「？・・あぁ。」

シンジは私の言葉に不思議に思ったのか怪訝な表情だったがやがて頷いた。

そして私たちはホールから宿のほうへと戻り、
対戦相手の予選記録を調べてた。

私とシンジの対戦相手は・・面識のない二人組みだった。

一人は予選で緑属性の精霊を使っている。
もう一人は雷と地の属性の精霊を。

シンジは対策を練る気がないらしく、そのまま、精霊の調整をしにいってしまったが・・

私は誰を出すかは決めた。
シンジとはきっとかぶらない。
かぶっても私があいての腕輪を奪って壊せばいい。

だから、

「やばかったら、私がとっておきの秘策をやるからだいじょうぶだよ。」

と、言っとくだけ言っといた。

「秘策だと?」

「ウィーミアの地獄の旋律。もしくは私が出向いて相手の腕輪壊すから。」

「・・・・」

私の言葉にシンジは目を見開いた。

「大丈夫だって。ピンチのときだけだし。」

「・・・ふんっ。勝手にしろ。」

「うん。勝手にする。」

シンジは私から視線をはずしてそう言った。

私は真顔で勝手にすると答えた。

第三十二話　恋敵宣言!?（後書き）

たまにはこういうのもいいかなと思って書いてみました。
感想や助言お待ちしています。

第三十三話　これがタッグバトル

翌日、シンジと私はホールへ向かった。
四番とはいえすぐに始まるからだ。
そして始まる。
「では、はじめてください！！」
審判の声がホールに響く。
ルールは簡単。
相手チームの精霊二体を瀕死状態にするか、相手が持つ腕輪を壊すか。
ただそれだけ。
「リュク、ステージ、オン！！」
「フィオネ、バトルスタンバイ！！」
緑属性のリュクに雷属性のフィオネをこちらは出す。
相手は二人の名・・
一人はギル。金髪の男で背が高く体もたくましいとは思う。
もう一人はフォン。髪は銀髪で背が低い男の子？

「ガルー、お前に決めたぜッ！」

「シズル・・行っておいで。」

ギルが出したのは地属性の精霊。
フォンが出したのは緑属性の精霊。

相性的には互角。
少しこっちが不利。
だから精霊使いの技量が確かめられる。

先攻は相手がしてきた。

（リュク幻覚の切りうっすらでいいから出しといて。後で効果が出るように。）

私は一応先に命じとく。

「ガルー、噴火だっ！！」

「シズル、ガルーのサポート。」

相手は二匹に命じた。

噴火かぁ。リュクにはヤバイな。

「リュク、避けてルーフリーフ！！」

「フィオネ、雷光矢！」

私はリュクに命じる。
シンジも命じた。

噴火はまさしくそのとおりで、フィールドから吹き上げてきた。
溶岩の塊がリュクたちを襲う。

シズルのサポートのせいか溶岩の塊は意外と大きい。
リュクはそれを全て避けてガルーにルーフリーフを放つ。
葉の刃が輪になって同時に襲い掛かるという技だ。
葉の刃がガルーに向かって放たれる。

「シズル、ガード」

ヒュゥウウ！！・・ジュワッ

フォンが叫び私の命じた技は見事に消し去られる。

だが、シンジが命じた雷光矢が直撃する。

精霊たちの姿は煙で見えなくなった。

煙が晴れた。

二体の精霊は無傷だった。

「っー！！リュク、幻葉風木雅（げんはふうもくが）！！」

私は命じる。

リュクに命じた霧は濃くなり、フィールドから大きな大木が出現した。

そして、枝と共に二体に襲い掛かる。

「がるー！！」

「シズル！！」

二体の精霊はリュクの技によってつかまった。

二体は必死に抵抗するが身動き取れず。

「フィオネ、雷光激刃！！」

グーウルウル”” ビリッ” ビリリィ”” ・・ダーン！！！

二体の隙だらけなところにシンジの命じた大技が炸裂する。

その間にギルが私たちのほうへ走ってきた。

「リュクっ！」

私はリュクに合図を送り幻惑の霧をかけてもらう。

「呪の理（ことわり）をもって汝を惑わせ。」

私はシンジが自分の隣にいること確認して両手で印を結ぶ。
そしてシンジと私を囲む結界ができた。

シンジはその光景に驚いている。

ガルーは私たちを見失ったように辺りを見回す。

私たちは・・すぐ傍にいるのに・・ふふふ。

「・・シンジはここにいてよ?私はちょっと行ってくる。」

私はそう言って結界の外から出た。

ガルーは私の姿を見つけた。

そして私に飛びかかってくる。

「リュクッ」

私はリュクに呼びかける。

すると、

シュルルルルゥ”!!

リュクの幻覚が作りだした大木の幹に二人は捕まり、高く吊り上げられた。

何で二人だって?

それは私の背後にもう一人のフォンがいたからだよ。
まんまとかかってくれたみたい。
このときに霧は少し薄くなった。
私は幻覚にはまった二人から腕輪をはずして
パキッ
っと壊した。
それと同時に霧は消え、幻覚も消えた。
だから二人は落っこちた。
ドスン
そんな音がホールに響く。
私が作った結界もそこでようやく消えた。
リュクの技でつかまりフィオネの大技を使ってもあの精霊たちは瀕死状態にはならなかった。
「ギル選手、フォン選手、共に腕輪を失いました！
よってルミル選手、シンジ選手ペアの勝利です！！」
審判が勝敗を言い渡した。

「とりあえず、一勝したね。」

私はシンジに言う。

「・・・」

シンジは何も言わない。

「ねぇ、黙ってないで何とか言ってよ?」

「・・あの結界、どこで覚えた?」

おいっ、勝負じゃなくてそっちかよっ!!

私は心の中で突っ込み

「どこって・・ミヨからだけど?」

私は素直に答える。

しゃべってる間に教わったのだった。

幻術ができる精霊といるなら使うと便利だということを。

「そいつ、だれ?」

「私が最後に予選で戦った相手だけど・・知らない?伝説の精霊ユームの使い手なんだけど。」

私が言った。

その言葉にシンジは眉をひそめる。

シンジは戦い終わった後、ジュンたちの反応がおかしかった時のことが頭によぎったのだった。

「聞いた気がする、あいつらに。」

シンジは言った。

「ミヨのこと？」

私がそう聞くと

「・・・。あぁ。」

シンジはすぐには答えず、一拍おいて頷いた。

え、何！？何で一拍間（ま）を開けるわけ！？

私は内心の動揺を抑えながら

「じゃあ、いこっか。」

私はバトル場から離れた。

シンジも私の後ろを歩く。

そして、ホールから出た後、すぐに悟たちのペアに遭遇した。

あちゃー。

私は内心がっくりした。
まさかここで遭遇するとはねぇ。
後で泣くのはマリアなのに。

「あら、シンジ様たちじゃあないですか。
私、とても応援していたんですよ。
いいバトルでしたわね？」

マリアが私に向けてではなくシンジに向けて上目遣いで見上げて言う。

マリア・・こういうの得意だよなぁ。

心底関心する私。

到底自分にはできない。

「・・・」

シンジは何も言わない。

シンジの視線にあるのはサトルだけ。

だから私も

「サトル、頑張ってね。ついでにマリアも。」

私はサトルに言った。

ついでに　をつけて一応マリアにも。

「ついでとは何よっ。ついでとはっ！
あなたたちとバトルするまで負けませんことよ？」

マリアは顔を真っ赤にしてこっちに言ってくる。

「私も負けないよ？絶対、マリアたちにも負けないんだから。」

私も言い返す。

「私たちを甘く見ては困りますわ。ねぇ、サトル様？」

「えっ、あぁ、そうだね。」

マリアに話を振られて困り果てた顔をして頷くサトル。

わぁお、サトルまで様付けだぁ。
やっぱ好みなんだ。

私は内心驚く。

だから、マリアにこっそりと耳打ちで

「あれ？サトルまで様付け？？シンジだけじゃないんだぁ？？狙ってるのは？
二股じゃない？？」

と、からかった。

「ふ、二股とは言いすぎよ。だってマリア、サトル様も魅力的だと

思うんですもの。
シンジ様の方が魅力的だけど。」

マリアはうっとり口調で私に言い返す。

「じゃあ、頑張ってアピールしたら？
さっき無視されてたけど？？」

私は余裕の笑みを浮かべてささやく。

「今は無視されても必ず振り向かせて見せるわ。」

マリアが燃えたような目をして言う。

「ねぇ、シンジ様たちも見に来てくださいね？
私たちのバトルを。」

「・・・・」

マリアの言葉にシンジは無視した。

「ふふふ。いいよ。私は見に行ってあげる。
一応応援してるよ。」

私がいやみっぽそうに言う。

「応援されなくても絶対勝つわ。
それより、昼食をご一緒にどうです？」

マリアはシンジのほうに視線を向ける。

「・・・」

シンジは相変わらず無視を決め込んでいる。

表情も相変わらず冷たい

「シンジ、どうするの？シンジが行くなら私も行くけど？」

私が聞いてみると、

「・・どちらでもかまわない。」

と、シンジは言う。

どちらでもって・・

結局どうでも良いんだよね。

マリアがなんか嫉妬の目になっている。

あぁ、怖い。

「じゃあ、私、行くよ。シンジは来るでしょ？」

一応私から押してみる。

「・・・・」

くるでしょ？といわれシンジは少し悩んでいるようだ。

「いいだろ？食事ぐらい。一緒にしようぜ？」

サトルがフォローしてくれた。

「・・あぁ。」

シンジはさとるのフォローあってかなんとか承諾してくれた。

マリア・・こりゃあ難問だよ。

シンジを振り向かせるってすごくすごく難しい気がしてきた。

内心そう思いながら私たちは食堂に行った。

行く途中、

「よかったね?サトルがフォローしてくれて?まあせいぜい頑張ってよ?」

と、私が必ずマリアをからかったことはいうまでもない。

第三十四話　昼食はアピール勝負の時間？

私たち一行は食堂に行った。

食堂はバイキング方式で自由に食べ物を選べれるんだ。

それこそまさにアピールにはうってつけの場所！

と、燃える一人の女性が一行に混ざっている。

それはいわずと知れたマリアだ。

一応私たちは座る席を選び、自分の荷物をそこに置いた。

それを言うなら・・・

サトル　マリア

―　―

私　シンジ

である。―は向かい合わせってことだよ。

そのことにマリアはとてもうれしそうだけど

シンジの隣が私のせいかマリアは私に嫉妬の執念を燃やしてきた。

そしてバイキングの始まり～

私たちはトレイをもって自由に取りに行った。
そのとき私はマリアとシンジの様子をじっくり観察した。

まず、シンジが皿に乗っけたのは餃子。

なぜ餃子なのかは気になるけどとりあえず今は聞かないことに。

「あら、シンジ様は餃子をお選びになるの？私もそれにするわ。」

マリアがシンジの動作を見て言葉に出す。

「・・・」

シンジは露骨に嫌な顔をしてその場から離れた。

「？」

マリアは不思議そうな顔をして餃子を盛りつけ始める。

私はシンジの方へ駆け寄った。

「シンジさ、マリアが同じやつを乗っけたことが嫌だった？」

私はそう聞いてみる。

シンジは私のほうを少し驚いたように視線を向ける。

ほんとにすこしだけど。

「・・・」

シンジは何も言わない。
だが、表情は確実に　嫌だ　と言っている。

「私が助けてあげようか？」

私がそう聞くとまた少し驚いた顔をした。

「別に。」

シンジはそう言ったが表情は　そうしてくれると助かる　みたいなことを言っている。

「シンジがそういうなら助けてあげるよ。」

私はシンジにそう言った。

「？」

シンジは自分では断ったつもりだったらしく多少私の言葉に驚いていた。

「ふふっ」

私は多少笑みを表にだしながらマリアの方へ駆け寄った。

「マリア、シンジはね　誰かと同じ　ってのは嫌いなんだよ？」

私はそう助言した。

「まぁ！それ本当？　だったら餃子はやめるわ。
私、実は脂っこいものは苦手なんですの。
恩に着るわ。」

マリアはそう言って餃子をやめた。
そして　どれにしようかしら～　と呟きながら選び始める。
だったら、最初から餃子はやめにすればよかったのに・・・
と突っ込むのは心の中だけにした。
私がそのあとにシンジの方へ行くと

「何を言ったんだ？」

と、聞いてきた。

「それは・・秘密。大丈夫、後から教えてあげるから。」

私はそう言って自分も選び始めた。

私たちはそれぞれ自分の食べたいものを選んで席に着く。
みんなの昼食のメニューは・・
私はフレンチトーストとハムサラダ。

向かい合わせのサトルはハンバーガー。
サトルの隣のマリアはスパゲッティとサラダ。
シンジは餃子とチャーハン。
でした。
なんかみんなのイメージが崩れた気がするメニューだけどそれは気にしない方向で。
会話でアピールとマリアは思ったのか、
「シンジ様って餃子がお好きなんですの？」
と、シンジに聞く。
「・・・。別に。」
シンジはそっけない言葉をマリアに返す。
「私も餃子好きだよ。チャーハンとぴったりだよね？」
私が会話に割り込んで言う。
だってこのままだと沈黙が訪れそうなんだもん。
シンジは私の方を向いてほんの少し眉をひそめた。
「あぁ。」

シンジは私にそう言って食事を再開した。
マリアは会話に割り込んだ私に嫉妬でもしたのか
「わ、私も餃子好きなんですのよ。」
と、言い出した。
私はくすくすと小さく笑い
「さっき、脂っこいものは苦手って言ってなかった?」
と、私が突っ込みを入れる。
ギクっとしたのかマリアは青ざめる。
「わ、私、そんなこといいましたっけ?お、おほほほほ、勘違いじゃございませんこと?」
マリアは冷や汗を流しながら私に言う。
「勘違いじゃないよ、さっき、聞いたし。
それにもし勘違いって言うのなら何で言葉をかんだりするのかな?」
私は怪しいとばかりにマリアを責める。
「そ、それは・・」
マリアはみるみる青ざめていった。

くすっ。面白い。

私はくすくすと笑う。

「シンジがさ、こうやってみんなと一緒に食べるの珍しいよな？」

サトルが突然割り込んできた。

「何が言いたい？」

シンジはサトルに鋭い視線を放って聞き返す。

「別に。
ただ一度だけ以前俺がシンジを誘ったけど断られたから不思議だな、と思っただけだけど？」

サトルは挑発するように言葉を投げかける。

私はその光景を　シンジとサトルの間に火花が散っている　ようにしか見えなかった。

シンジ・・以前は断ったんだ。
今回も断ったかもしれないけど・・

私はそう思った。

そのあと、なんか不穏な空気が流れたまま昼食が終わってしまった。

第三十五話　失望　精霊の意思　（前編）

私とシンジは昼食のあとマリアたちのバトルを見た。

当然、言うだけのことはあってマリアたちの勝利に終わった。

その翌日、私とシンジもバトルがある。

夜、私たちは精霊の調整をしていた。

そのとき偶然シンジの声を近くに聞いたから思わず近寄ると思わぬものを見てしまった。

「俺を失望させるな。」

シンジは私のよく知っている精霊フィオネにきつく言っている瞬間だったのだ。

シンジは鋭い目でフィオネを睨む。

「・・・」

フィオネはしゅんとしてしまってうつむいたまま何も言わない。

「分かったら戻れ。」

シンジはそう言ってリングにフィオネを戻した。

シンジって・・こんなに冷たい人なんだ・・・

フィオネが・・かわいそう

私は一部始終を見ただけでフィオネがかわいそうだと思ってしまった。

私はシンジにばれないようにその場から離れる。

・・シンジ・・今までシンジはどんな風に精霊と接してきたの？

そんな疑問が頭の中をよぎる。

部屋に戻ったらしばらくするとシンジが入ってくる。

「・・・・」

私は思わずシンジを見つめてしまう。

どうして・・あんなにきつい言い方をするの？

そう聞きたくなってしまう。

「・・・。」

シンジは私のほうをみて何か物いいたげ顔をしていたがすぐに視線をそらした。

私はそのまま布団にもぐりこむ。

「シンジ・・お休み」

そう言って私は目を閉じる。

・・シンジ・・・一体どうしてそんな風に言うの？

そんな疑問を私は翌日のバトル寸前まで引きずっていた。

そしてバトルが始まる。

相手は

ノバ・・遠距離攻撃を得意とするらしい。

ルサー・・理解判断がずば抜けているらしい。

そんな相手とのバトル。

とりあえず、今は気持ちを入れ替える！！

「ウィーミア、ステージ、オン！」

「フィオネ、バトルスタンバイ！」

「ヤート、お前の出番だ！」

「行きなさい、シュール！」

四人は同時に精霊を出す。

ヤートは自然属性。

緑属性とは違う物を操るんだ。

シュールは風属性。
ウィーミアと同じ風を操るんだ。

こちらは不利とは言わないがあまり有利でないことは確かだ。

でもそんなことより私はシンジのほうが気になった。

また・・フィオネを出すの・・？

心の中で呟いた。

「フィオネ、ライトニングレーザー。」

シンジはフィオネに命じる。

えっ、いきなり大技ッ！？

私はびっくりした。

フィオネは指示のとおりに相手に打ち出す。

不規則に曲がったりしてレーザーは相手を打ち抜く。

シュザー・・・グサッ

両者の精霊に直撃する。

が、その後、煙が目の前を舞って相手が見えなくなる。

その煙でお互い姿が見えない。

それがチャンスと相手は思ったのだろう。

煙からさまざまな光線のようなものが私たちを襲う。

私は急いで結界を張った。

「フィオネ、ガードだ。」

シンジも命ずるがフィオネは命令を受けた瞬間、光線に当たってしまう。

そしてそれに驚いて反応が遅れたせいか、シンジの左腕を一つの光線がかする。

シュッ！！

そんな音がしたと思う。

「っ！！」

シンジが腕を押さえ体がふらついた。

「シンジっ！」

私はシンジに駆け寄って体を支えガードを強めた。

（ウィーミア、音でできるだけ光線を粉砕させて。風で光線の軌道

をずらして！！）

私は心の中で叫びながらもシンジの腕を治療する。

「治るのが遅い・・」

私が治療しながら呟くと

「そうだろうな？俺のスペシャルなヤートとのコンボだもんな。」

と、声は他から聞こえた。

それはノバだ。

やけに筋肉質だからなんかむかついた。

シンジに怪我を負わせやがって！！

何倍にしてでも返してやるっ！！

「うざいっ」

私は相手を睨む。

それだけで相手の周囲には大木もやすやす切れる風の刃が舞い、相手を襲う。

シュッ！！シュシュシュッ！！

これは私の怒りで放出される魔力がウィーミアの風とヒュージョンしたものだ。

私は天寿の力を借りてシンジの傷を完治させた。

「っ！！痛いな、この刃はっ。・・だが、それ以外にも驚いたな。まさか、あんたが・・」

「それ以上言うなっ！！いろいろほざきやがって！！」

ノバがその先の言葉を言う前に私は怒鳴りつけた。

これは私が怒りで自分に眠る人格の一つを呼び起こしてしまったからだ。

第三十六話　失望　精霊の意思　（後編）

「！・・性格が逆転したな？・・あの力せいか？それともそいつのせいか？」

ノバがいう。

シンジが私を見ている視線が怖い。

私は自分を落ち着かせる。

冷静になれ、私。
落ち着くんだ。
勝つのは私たちなんだから。

私は落ち着いたまなざしで

「・・あなた、知っているんだ？
だったら思い知らせてあげる。」
（ウィーミア、竜巻を起こして！いつもの倍ぐらい。）

私はそう言ってウィーミアに合図を送る。

ウォオォオオオ”””

竜巻がウィーミアの周囲に出来上がり敵に向かって放たれる。

敵はその中へ飲み込まれる・・はずだった。

相手はフィオネを盾にしてきたのだ！

「っ！？」

私は声にならない叫びを上げ、ウィーミアは竜巻を途中でやめる。

ウ”グググゥ

フィオネが必死にもがいているが、抜け出せないでいる。

フィオネを捕らえたのはシュール。

「フィオネ、雷光貫腕射！」

シンジはそう命じる。

ウグッ・・・フィィイイ”’

しかし、フィオネはシュールを見ると震えて技を出せないでいた。

最後に聞こえたのはきっとフィオネの悲鳴と言っても過言ではない。

「ちっ」

シンジの舌打ちが聞こえた。

シンジっ。

やばい・・このままじゃ・・

あ、そうだ。この手で行こう。

まだ痛み止めの効果は聞いている。

無茶をするがこれしかない。

私は心の中で呟くと同時に走り出した。

シュールに向かって一直線に走る。

シュールは身構えた。

私はこのときシュールの視界から消えていた。

ヒュッ

姿を消した瞬間に聞こえたのはきっとこの音だけだろう。

シュールが戸惑い、ルサーが

「何っ！」

と、声を上げる。

私はシュールの後ろに姿を現した。

「！！」

相手は驚いて反応が一瞬遅れた。

そこにできた隙を狙いシュールからフィオネをもぎ取る。

そしてシンジの元まで帰る。

「！・・・。」

シンジは驚きのあまり声が出ないみたい。

「ウィーミア、業火の旋律!!」

私はシンジとフィオネを囲む結界を作りウィーミアに命じる。

（はいっ）

ウィーミアは私に応え、旋律を奏で始めた。

やがて・・・

ブォオゥウ”ブオォウゥ”

と、音を立てて旋律で具現化された地獄の業火が精霊たちを襲う。

「あ”ぁぁぁあ”ぁぁ”」

「う”ぅぅ”ぁぁぁあああぁぁ”」

精霊たちが悲鳴を上げる。

そして、

「ウィーミア、地獄と業火の二重奏を!!」

（思い知らせてやって!!）

と、私は頼む。

（はいっ。）

ウィーミアは心で応え、地獄の旋律と業火の旋律の二重奏を奏で始めた。

私はフィオネを降ろして結界を強める。

そのとき、右腕が急に痛み出した。

「っ・・・」

私は声に出すことをこらえる。

やばい・・痛み止めの効果が・・

内心ピンチに陥った私は

（頑張って）

とウィーミアを応援する。

ウィーミアは頷き音を強める。

「あぁ”ぁぁあぁぁ”」

「・・・う”ぁぁっぁぁぁぁぁ”」

ノバとルサーの二人は悲鳴を上げた。

旋律が中盤にやってきた頃、ヤートとシュールの二体の精霊は瀕死状態に陥った。

「・・・ルミル選手・・シンジ選手・・ペアの・勝利・・で・・す・・」

審判が辛そうに言った。

少し間をおいて

わぁぁっぁぁぁっぁぁ

と、歓声が起こった。

私は

「ありがとう、ごめんね、地獄の二重奏を弾いてもらって・・」

と、謝りながらウィーミアに近づく。

右腕がしびれるように痛い。
左足の感覚がなくなってきている。

そう思いながら。

「いいえ。楽しかったですよ。また呼んでくださいね?」

と、ウィーミアはやや疲れた表情をして言う。

「うん。ゆっくり休んでね。」

私はそう答えてリングにウィーミアを戻し、痛み止めを口の中に放り込む。

シンジのほうもフィオネを戻したようだった。

「シンジ・・行こう？」

「・・あぁ」

私はシンジに問いかけ、ホールから出た。

シンジはその後、休憩所で明日の対戦者を見てからどこかへ行ってしまった。

私はその後、部屋に戻り、傷の治療をする。

その後、シンジのことが気になって探しに行くとシンジのほうから現れた。

「・・やる。」

シンジが私の姿を見てそういいながら私に何かを投げてきた。

それはフィオネのリングだった。

「シ・・・シンジっ！？・・どういうこと！？フィオネのでしょ？」

私は思わず部屋に戻ろうとしたシンジに向かって叫ぶ。

シンジは私に背を向けながら

「そいつは俺の望む強さを発揮しない。」

と、言う。

え!?

シンジ!??どういうことっ!??・・ってまさかっ!?

「えっ!?シンジ・・それって・・フィオネと契約を切ったってこと!?」

私が恐る恐る聞いてみると

「そうだ。
そいつには失望させられた。」

と、平然に言う。

「失望されたからって契約を打ち切るなんて・・
フロンさんの意思もフィオネの意思もシンジはどうでもいいって思ってるのッ!?」

私は悲しくなって言い返す。

「・・・俺には関係ない。
俺はあいつが暴走したときの強さがほしいと思っただけさ。」

「それで・・無理そうだから見捨てたの?」

「あぁ、そうだ。」

私の問いに当たり前のようにシンジが肯定する。

「そう・・」

私はそう呟きながらフィオネを呼び出す。

「ひっくっ・・・ひっくっ・・」

呼び出したフィオネは泣いていた。

フィオネ・・シンジといたかったんだね・・・

「フィオネ・・私と契約しよう。ね?いいでしょ?
私はあなたを意志を尊重するから。
一緒に強くなろう?」

(・・私・・・強くない)

私の声にフィオネは泣いたまま頭の中で言う。

フィオネ・・今までシンジにそんなことを・・・

「シンジにいわれたの?
私はシンジとは・・違うから・・
私はあなたの秘めた力がほしいんじゃないの。
あなたの今もっている可能性がほしいの。
だから、ね?」

私は自分で言いながら悲しい笑顔をフィオネに向けた。

フィオネは目を見開いている。

おそらく私が目に涙をためているからだろう。

（あなた・・人じゃないの？だから・・そんなに悲しい顔を・・）

「フィオネには分かるんだね。
私はフィオネと同じよ。
大丈夫。
あなたの暴走は私が止めれるから。
私はきっともう一人の自分が解放するから大丈夫。」

私はそう言ってフィオネの涙をぬぐってあげた。

そう・・私は・・フィオネと同じ。
私の母さんは　天寿の民　と　精霊　の子孫。

だから私は・・フィオネと同じ。

（私と同じ・・）

「そうよ。
シンジは見抜いていなかったけどフィオネなら・・
私といればあなたも自分の意思で動かせる。
同じ存在（なかま）がいればフィオネも大丈夫だよ。
だからね？」

私はそう言ってフィオネのリングをフィオネのほうに向ける。

（存在（なかま）・・うん。契約・・する。）

フィオネはやっとのことで頷いて私と契約をした。

それを見ていたシンジは私をじっと見つめる。

「ありがとう、いつも一緒だからね？」

（うんっ）

私はフィオネに微笑みリングに戻した。

「・・シンジの望むものにフィオネはならなかったようだけど
たぶん手放すのをシンジはきっと・・後悔すると思うよ。
まぁ、それはシンジがフィオネの全てが理解できたときだろうけど。
」

そして私の力のことも・・と心の中で呟きながら私は言った。

「理解？」

いまさら何を・・といいたげな表情をしながらシンジは私を見る。

「そう。でも・・もっとあとになるけれどね・・・じゃあ、戻ろうか？」

私はそういいながら部屋に戻ろうとする。

だが・・

ガシッ

っと腕をつかまれた。

「っ・・シンジ？」

つかまれたときの力が強くて私はうめいた。

腕も右腕だから痛いのだけど。

「お前・・・いや、いい・・」

シンジは私に何か言いかけたがやがて腕を放してくれた。

そんな時、来たのはマリアだった。

「あら、こんなところにいたのね。」

マリアがそう言って近づいてくる。

「・・・。」

「あ、マリア。

偶然だね？こんなとこで会うなんて・・それとも意図的なものかな？」

私はそういいながらマリアを見る。

「偶然よっ。それより、シンジ様のお怪我大丈夫ですの？」

「・・・。」

マリアはシンジに問いかけたつもりみたいだ。

あぁ～そうか、アピールね。

「それは私が　治した　よ。ばっちり完治させたんだから。平気でしょ？シンジ。」

私が聞いてみる。

「なんともない」

シンジは突然のマリアの乱入が嫌だったのかそっけなく応える。

「そうですの・・・それはよかったですわ。ところで・・私たちのバトル見ましたか？」

「・・・」

「みたよ。遠くからだけど。」

シンジが何も言わないから私が仕方なく答えた。

「そう。すごかったでしょう？」

「・・・・」

シンジはマリアがシンジの方を向いていっているのに何も言わない。

私もここは黙ってみてみた。

「・・・・」

「・・・・」

二人に沈黙が訪れた。

「・・・・」

「・・・。」

シンジが何も言わないからなのかマリアは
しゅんとしてしまった。

しおれた花のような表情でマリアは私に助けを求めた。

そんな顔で見つめられると・・こまるなぁ～

「ん～と、マリアは言いたいのはそれだけだったの？」

私はそう聞くと

「いいえ。それだけじゃないわ。
近くに面白い館（やかた）があるのですわ。
今日の夜にどうかと思いましたの。」

「・・どうかってなにが？」

私は背中にどうも嫌な予感がしてそれを抑えながら聞いた。

「決まってますわ。肝試しですのよ。肝試し。
それにそこにはうわさがありますの夜にはゴースト属性の精霊が出るって話を。
ですから今日にどうかって・・・ルミル？どうしたんですの？」

マリアが私に聞いてみた。

私はついに体の震えが抑えられなくなってガタガタ震えていた。
それと顔も真っ青だと思う。

「う、うん。平気だよ。シンジは誘い受ける？」

私はシンジに聞いた。

シンジは私を見て眉をひそめたが

「？・・あぁ」

と頷いた。

ほんとは断ってほしかったけどそれは叶わないだろう。
なんたって世にも珍しいゴースト属性なんだからね。

私は

「・・だってさ？サトルもいくの？マリア。」

と聞いた。

「えぇ。もちろんですわ。では今日の夜、八時にホールの出入り口で会いましょうね。」

マリアはそう言って去って行った。

聞くんじゃなかった・・

私はあとになって後悔した。

私・・幽霊とかお化けとか火の玉とかにがてなんだよぉ〜〜っ

怖くて・・恐くて・・・・・たまんないのよぉぉ〜〜っ

「〜〜じゃあ・・もどろうぅ」

私はシンジの返事を待たずに震える体を腕で押さえて部屋に戻ろうとした。

戻る途中に、

「怖いのか?」

と、いきなり後ろから聞かれた。

頷いちゃだめっ

「別に・・」

と、応える。

「・・・」

シンジはその後黙ってしまったが私も何も言わなかった。

私はすたすた部屋まで歩いて戻った。

第三十六話　失望　精霊の意思　（後編）（後書き）

忙しくなるので更新は遅くなるかもしれません。
ご了承ください。

第三十七話　肝試し

とうとう私にとって最悪な時間となってしまった。

私とシンジはマリアの言った待ち合わせに向かった。

夜道は怖い。

歩きながらそう思うのであった。

待ち合わせ場所には二人がすでに待っていた。

「・・お待たせ。」

私がそう言って二人に笑いかける。

「シンジも来たのか。」

とサトルは呟いた。

「・・・」

シンジは黙ったままだ。

「そろいましたわね。では行きましょうか」

マリアがそう言って館へと向かいだした。

私はマリアの隣に並んで歩き出す。

後ろにはシンジたちが並んで歩いた。

大丈夫、大丈夫。怖くない。・・平気、平気。

心の中で呟きながらマリアに小さな声で話しかける。

「マリア・・本当に肝試しやるの？」

私は戸惑いながら聞いてみた。

「当たり前ですわ。これもアピールですもの。
ですからペアはくじで決めますわ。
だから協力して頂戴。」

マリアが言う。

「なんで私がマリアの無駄なアピールを手伝わなければならないの？」

私が無駄を強調して言うと

「無駄とは失礼ね。
それはいいから協力して頂戴。
あなた、術士　でしょう？
以前、そういったわよね？」

マリアが脅迫するように言う。

術士・・その言葉に私はうっと押し黙った。

確かに初対面で名乗るときに言ったし術を見せたことがあるけど・・・
術であって普通の術じゃないんだけどな・・・

私は内心考え込んだ。

私は天寿の力以外にもたくさんの術が使える。

癒しの呪文もその中に含まれているし、
記憶を一部忘れさせることも、その中の一つだ。

だが、私の術は　魔術（ふつうのじゅつ）　ではない。

まして魔法でもない。

魔術師でもないし、昔は精霊使いでもなかった。

だから私は術士としてマリアに会ったのだ。

「言ったよ。分かったよ、協力する。
それで一体何をどう協力するの？」

私はため息したい気持ちに駆られた。

「くじは棒の色で決めますの。
だから私とシンジ様が同じ色になるよう仕組んでいただきたいの。
あなたの術なら簡単なことでしょう？」

マリアはそう言った。

「はぁー。わかったよ。
やるけど、無駄だと思うけどね。」
私はため息混じりに後のほうは呟く。
「・・・ここですわ。」
マリアがそう言って立ち止まった。
「ここが・・」
私も立ち止まって館を見上げる。
それはとても大きく暗闇にとても似合う不気味な館だった。
「じゃあくじ引きしましょう?」
マリアがシンジたちに向かって言い放つ。
「くじ引き?」
「?」
サトルが何で?っていう感じで聞き返す。
シンジも　その必要がどこにある?　って顔してる。
「せっかくの肝試しですもの。
楽しまなければ損でしょう?
ですから男女ペアで時間をおいて行こうと思いますの。

入り口は二つありますし中も広くていいと思いますから。
ですからペアはくじで決めましょう?」

マリアが楽しそうに説明する。

「それはそれで面白そうだな。」

「・・・」

さとるはどこか楽しげに言うが
シンジは心底嫌そうに無言状態である。

暗闇だから表情はよく分からないけど。

「私もくじはしてもいいよ。
どうせなら楽しみながらやったほうがいいし。
じゃあ、誰から引くの?」

私もそう言ってみんなを促す。

シンジに私が怖がりなとこを見せないならちょうどいいや。

私は内心ほっとしていた。

今も暗くて小さな明かりしかないから怖いのだけど。

マリアがくじ引きの箱を取り出した。

私は　天寿の眼力の力　を解放させる。

私の目には棒の色が全て把握できた。

マリアが

「じゃあ、発案者の私から引きますわ。」

と、言って棒を一本引いた。

色は赤だった。

「色が同じ人同士がペアね。
じゃあ、次は私が。」

私はそう言って青の棒を引いた。

私が引き終わったのを見届けた後マリアはサトルの方へ箱を持っていった。

私は眼力を使って残っている二本の棒を青に染めた。

「じゃあ・・俺が。・・・・青だな。」

サトルは引いた。
青の棒を。

「これで決まりですわ。
ルミルはサトル様と、私はシンジ様と。」

マリアがうれしそうに言う。

シンジが嫌そうな顔をしていたことに気づかぬ振りをしながら私は

「・・・ペアはサトルか・・。よろしくね？」

と、すこし引きつった笑みを浮かべてサトルに言う。

なぜなら・・シンジの異様な視線が妙に痛かったからだ。

「あぁ、よろしくな、ルミル。」

サトルは私に満面な笑みを見せてくれた。

だが私には心底ほっとしたかのような笑みに見えて仕方がなかった。

「ではあそこの扉から行ってくださいな。

館は二階もあるようですからそちらも回って戻ってきてくだされば

よろしいですわ。

私たちはあなた方が戻ってきた後にいきますからどうぞ、いってらっしゃい。」

マリアがすごく満面な笑顔で私とサトルに言った。

マリア・・すごくうれしそう・・いや、うれしいんだよね。

そしてシンジは・・すごく嫌そう・・仕組んでごめんね・・シンジ。

私は内心シンジに謝りながらサトルと館に入った。

ギィイ”’”

扉の音が鳴る。

ひぃいいいい

それだけで思わず声が出そうだった。

私は明かりを持つサトルに寄り添う。

そして私たちは館の奥へと進んだ。

歩くたびに

キィイ・・・キィイ・・キィ

と、鳴る。

そして床がへこむ。

私はそれだけでなぜか気分が悪くなった。

「ルミル・・大丈夫か?」

サトルが自分の腕をルミルがつかみ震えていることを気遣いながら聞いてくる。

「・・平気だよ。・・ただ、ちょっと、肝試しは苦手で・・」

私は小さい声で答える。

「そうか・・マリアは強引だからな・・」

サトルはなぜか愚痴るような言い方で私に呟いた。

強引・・たしかにそうかもしれない・・・

思わずそれに頷いてしまった。

「ルミルもそう思ったんだな。」

サトルが私に安心したような笑顔を向けた。

その後もサトルと歩き続けた。

一階の奥まで来たんじゃないかというところで
唐突に背後に何かの気配を二つ感じた。

「っ・・・」

背中にぞっと寒気が襲ってきた。

あ”ぁ”〜〜”” この気配はぁ””

私はその場に立ちすくんでしまった。

「ルミル？・・・！？」

サトルは私の異変に気づき私に視線を向けた後、サトルは目を見開いた。

私の背後にいる者は私とサトルの周りに人魂をちらつかせた。

・・・いっ・・いやぁ”ぁあああぁ”” ぁあっぁ”” ーーー

私は頭を手で抱えてその場に座り込む。

サトルは私の背後にいる者を驚異の目で凝視して動かない。いや、動けない。

そしてその私の背後にいる者は私の背中に触れた。

とたん、背中に悪寒が走り、全身が恐怖と畏怖とで震え上がった。
そして瞳からは大粒の涙があふれる。

いっ”いやぁっ”” こわっいぃぃ””

「いっ”” いやぁ” ぁああ”” ぁぁぁ”” ”!!!!!」

私は思わず目をつぶって悲鳴を上げた。

その声にサトルは我に返った。

「ルミルッ!?」

サトルは私を呼ぶが私はそれどころではない。
というよりその声は私に届いていない。

いやっ”” 来ないでこないでこないでぇ” ぇぇ”” ”!!

私の頭と心にあるのは拒絶だけだった。

サトルは私の乱心に大いに驚いていた。
目を見開いて私を見る。

そして私に触れようとする。

だが、サトルは私に触れられなかった。

ビュウゥ”” ドカッ・・ガシャーン！！・・・・ボスン！！

そんな音が回りに響いた。

サトルは私の背後にいる者に吹き飛ばされ、
背後にいるものは床をぶち壊した。

サトルはその衝撃を受けたが意識と視界はまだはっきりしていた。

「・・くくくくっ。面白い奴だ。少しこいつを借りてくぞ。」

サトルの耳にはそんな言葉が響いた。

「っ！？」

サトルは驚きが隠せず見事に動揺していた。

ルミルの背後にいた者はなんと、ゴースト属性の精霊二体だったのだ。

その精霊たちが自分の周りを人魂で囲み、ルミルを乱した。

今もルミルは頭を抱えて震えて涙を流している。

そしてあろうことかそのルミルに面白半分で背中に触れたのだ。

きっと、ルミルの恐怖は頂点に達しただろう。

だから悲鳴を上げたんだ。

それが今までの過程だ。

だが、今はなんなんだ?

俺は吹き飛ばされ挙句の果てにルミルを借りると精霊が言い張る。

どういうことだ!?

サトルは混乱していた。

「しばらくそこでおとなしくしているんだな。」

一体の精霊が言い放った。

その精霊が次の瞬間ルミルに触れた。

「いっ”いやぁ”ーーーーーぁ”!!!!!」

ルミルはまたもや叫んだ。

いやいやいやいやぁっ”!!!!!!

だめッ怖い。嫌だッ。これだけはっこれだけはぁ””

私は・・私の体と心が精霊を拒絶していた。

だが、それもむなしく失敗に終わった。

精霊は歓声を上げて私を担ぎ上げたのだ！！

やだやだやだやだっ！！！

私はばたばたと暴れるがそれも精霊を喜ばせるだけに終わってしまった。

そして精霊は私を担いで床に穴を開けた場所に飛び込んだのだった。

すごいスピードで落下している。

落下の早さに私は気を失った。

第三十八話　ゴースト属性は変わり者

私が意識を取り戻した場所は地下の空洞だった。

ぼんやりと視界に映るのは

空洞の中の景色と私の周りをうようよとうろつく人魂だけ・・って

人魂ッ！？

「っ！？」

私は驚きのあまり上半身を起こして後ずさりすると

コツン

と、何かに当たった。

思わず顔を上げると

「・・くくくくっ」

と、口に手を当てて笑っている精霊がいた。

「！？」

私は思わず、精霊のほうに体を向かせて体を後方へ引きずって距離を置こうとした。

コツン

すると、またぶつかった音がした。

顔を上げると、さっきぶつかった精霊とは違う精霊が

「くすくすっ」

と、笑っていた。

「!?」

私は怖くなってまた離れる。

人魂が視界にちらついて私は視界を手で覆う。

視界が真っ暗になると、周囲から声が聞こえた。

「くくくくっ。面白い奴。さっきはあんなに怖がっていたのに。変な奴。」

「くすくすっ。気づかないって変。おかしいっ・・ぷぷっ」

そんな声が聞こえる。

だれ?だれなの?一体・・・ここはどこ??

それより・・人魂っ・・こわいっ”"

私は混乱していた。

「くすっ。この子、人魂怖がってるよ?」

「くくっ。あぁ、そうだな。面白いからこのままで・・・
いや、もっと怖がらせちゃおうか?悲鳴が聞きたい。
乱された心が聞きたい。・・くくくくくっ」

その声を聞いて私は恐怖に陥った。

そのとき、

ヒュウールルルルゥ・・・ストン。

と、音がした。

それは私の隣に立つ。

そして、

「おいっ、しっかりしろ。」

と、頭上から声が降りかかる。

その声は・・シンジっ!!

私は目を開けた。

視界に入ったのはシンジと人魂。

私は怖くなってまた目を閉じた。

「おいっ!目を開けろ。」

また頭上から声が降りかかった。

・・そういわれても・・開けられない・・怖いよぉ・・・

「っ・・開けたくない・・」

私は目を閉じたままシンジに小さく言う。

シンジがいなければ今頃泣いていてまた心が乱れていただろう。

人魂を見ると
恐怖で頭が混乱してわけがわからなくなってどうしようもなくて・・
ただ、心が不安と恐怖で満ちていって・・・それで・・

「なぜだ?」

シンジの声が頭上から降りかかる。

「・・・」

私はその声に答えられない。

「おいっ聞いているのか?」

シンジの不安そうな声が降りかかる。

「・・・・」

私は無言で手で視界を覆いつくす。

たとえ・・シンジがいてもこの恐怖は止められない・・

そう予感しているからこそ、何も言わない。

怖いって知られたくないのもあるけど。

「おいっ！」

シンジは私の腕をつかみ頭から引き剥がした。

「っ・・・」

私とシンジの目があった。

私は不安と恐怖が宿る瞳で見つめる。

シンジはそんな私をじっと見つめる。

でも私の視界に映るのはシンジだけじゃない。

人魂もだ。

私は人魂に恐怖して目をぎゅっと閉じる。

体は震えるばかりだった。

「お前・・・・」

シンジが何かを言いかけた。

「くくっ。面白い心境だな。・・

・・さて、それはそれとしてあんたはどうしてここへ来た？」

一体の精霊がシンジに話しかけた。

いまだに人魂がうろついているからルミルは心に暗示をかけた。

怖くない怖くない。大丈夫、大丈夫。

そうやって恐怖を薄くさせる。

そして目を開けた。

だが、そのとき視界に映った人魂が

一瞬ニヤッと笑ったように見えて恐怖して目をそらした。

「・・・お前らを探しに来た。」

シンジは精霊二体をにらみつけて言う。

「くすっ。その子を取り返しに・・じゃなくて？」

シンジの言葉にもう一方の精霊が茶化すように言った。

「・・ぇ？」

私は思わず声を漏らす。

シンジが・・私を？

「・・・。」

シンジは何も言わない。

「俺たちはな、そいつの感情が面白いんだ。
面白すぎて飽きない。今までに来た奴の中で一番楽しめる。
俺はユウライだ。」

「私は・・ユーラルよ。
ユウライの言うとおり、本当に飽きないの。
その子もあなたも。
でも、その子といた子は面白くなかったしすぐ飽きたけど。」

二体の精霊が名乗る。

飽きない？面白い？
私とシンジの感情が？

怖いよぉ・・

自分の周りの人魂が自分をあざ笑うようにニヤット笑うのを見て私は震えた。

「・・・」

シンジは黙ったままユウライたちを見据えている。

ユウライたちは手のひらに人魂を凝縮させた。

私はそのときにやっと二体の精霊を視界にはっきりと映し出すことができた。

だが、それも一瞬のことだった。

手のひらに凝縮させた人魂を私にぶつけるように投げたからだった。

「っ・・ぃやっ」

ニヤッと笑う大きな人魂を見て頭も体も心も震え上がって目をぎゅっと閉じた。

私は頭を抱え込んだ。

オマエ・・コワイノカ?・・ダッタラモットコワガレ。ヒヒヒヒヒッ。

キョウフ・・シロ。フルエロォ・・ミダレロォ・・

そんな声が頭に聞こえてくる。

怖い・・やめて・・やめてぇ・・私はッ・・何もしてない・誰か助けてぇ・・

「ぃや・・・ぃや・・」

私は震えながらも首を左右に振った。

それでも、声は続いた。

私はとうとう涙を流した。

あふれる涙を止められない。
そんな私をシンジは目を見開いて見つめる。
「くくくくくっ。」
「くすくすっ」
ユウライとユーラルが私を笑う。
シンジは笑い出したユウライたちをにらむ。
「そんなにらむな。
これが俺らの生きがいなんだ。
俺はお前らが気に入った。欲しい・・お前らが。」
「あなた、表面上クールだけど感情的にもなるのね。
楽しいわ。飽きないし。
私もあなたたちが気に入った。欲しい。あなたたちの全てが。」
ユウライとユーラルがそう言って人魂を消し去った。
それでも私は
人魂が発した声が頭にこびりついてはなれず涙を流す。
「!」
シンジはユウライたちが言っていることが半ば理解できない。
「俺と契約しろ、そこの女。」

ユウライが私を指して言う。

私はひっくひっくとしゃっくりをあげながら

「っ・・・わたし？」

私は涙が頬を伝うのを感じながら聞いてみる。

「そうだ。
お前は飽きない。
契約しろ。」

ユウライが私に近づいて言う。

私は無防備な状態のまま見上げることしかできなかった。

契約？
あなたとするの？
私を混乱させたあなたと？
私は暗闇に怯え、現象ともいいえる人魂に怯え、それだけで私はもろく壊れてしまうほど弱いのに・・それでも、あなたは契約を求めるの？

私は心の中で問う。

「そうだ。
お前は他の人間とは違う。
同じ感情でも意味が違う。
お前は俺を楽しませる。

俺と契約しろ。」

ユウライは言う。

「そこの人、私とも契約してくれるかしら?」

ユーラルがシンジに突然言い放つ。

シンジは黙ったままユーラルを見据える。

「あなたは他とは違う思考がある。
面白い。
自分の中で抱く感情の理由が分からないあなたを見るのが。
私と契約してくれるかしら?」

ユーラルは言葉を続ける。

シンジと私、二体の精霊に契約を求められた。

シンジは頷いた。

「よかったわ。あなたの名前、教えてくれるかしら?」

「シンジだ。」

シンジはそっけなく言う。

「そう。じゃあ、契約をはじめるわ。」

ユーラルはシンジにそう言った。

そしてシンジとユーラルは契約した。

そしてシンジはその後、私に近寄り、私の涙をぬぐってくれた。

「・・・」

シンジは何も言わないが心配してくれているんだと分かる。

私もユウライに向かって頷いた。

「お前、名は？」

「・・ルミル」

私は聞かれて名を言い渡す。

「そうか。じゃあ、契約を始める。」

ユウライはそう言った。

そして契約をした。

ユウライのリングが渡される。

ユーラルと色違いだった。

性別が違うだけだからかもしれないがそれだけじゃない気がしてきた。

私はその後、立ち上がった。

「・・シンジは・・なんで来てくれたの?」

私はシンジを上目遣いで聞いてみる。

「さあな」

シンジは目をそらして言う。

そのとき、ふいにユーラルが言っていた言葉が頭をよぎった。

「・・自分の抱く感情の理由が分からない・・かぁ。」

「!!」

私が思わず呟くとシンジは目を見開いた。

「ううん。なんでもない。とにかくきてくれてありがとう。じゃあ帰ろう?私が瞬間移動してあげる。」

私はそう言ってシンジの手を握る。

「!あぁ・・」

シンジが頷くと私はサトルの気配を探って瞬間移動した。

スッ・・シュパーン

サトルはいきなり現れた私たちに飛びのいた。

「サトル！！大丈夫？」

私は急いでサトルに駆け寄って癒しの呪文をかける。

「っ・・・ルミル・・お前、大丈夫なのか？」

サトルが心配そうに聞いてきた。

「・・・。私は平気だよ？
あの後、いろいろあって精霊と契約できたし。」

私がそう呟いた後、

「平気じゃなかったくせによく言う・・」

と、後ろから呟く声が聞こえた。

「シンジっ！！」

私は目を見開いてシンジに向かって叫んでしまった。

シンジはその後何も言わなくなったがサトルは目を見開いていた。

「そういえば・・シンジあのあと、急いで駆けつけてきたよなぁ。」

「え？」

「オマエ・・」

サトルの声に私は聞き返し、シンジが怒りに満ちた声を出す。

「え?サトルどういうこと?」

私が聞き返すと

「・・・。シンジが妙に焦って駆けつけてきたってこと。
シンジ・・・そんな睨み付けんなよ。」

サトルは妙にを強調させて言った。

サトルの言動でシンジがものすごくサトルをにらんでいることが分かった。

「へぇ。そうなんだ。っていうかサトル、もう大丈夫?
傷は今完治したけど。」

「あぁ。サンキュな。」

サトルが立ち上がった。

シンジはいまだにサトルをにらみつけていた。

私はシンジのほうに目を向けるとシンジと視線が合った。

「・・・」

「・・・」

本当なのって聞きたかった。

でもさっきみたいに正直には答えてくれないだろう。

私は笑って

「じゃあ、帰ろう？マリアがたぶん外で待ってる。一人じゃ怖いって言ってたぶん待ってるから、きっと。」

と、言った。

「自分も怖いくせによく言う」

と、シンジが呟くのが聞こえた。

シンジ・・昔からこんな奴だったっけ？

私はそんな疑問が頭に浮かんだ。

「・・シンジ！」

私はシンジに叫んで歩き出した。

暗闇だが明かりがあるから・・シンジもいるから今は怖くない。

そして館の外にはふくれっつらのマリアがいた。

「シンジ様、勝手に行ってしまわれてさびしかったですわ！」

マリアは頬を膨らませて言う。

「だったら、自分も来ればよかったんじゃない？」

私がそう言うと

「一人でなんて無理ですわ。
私けなげな少女だもの。」

と、マリアは自分で言う。

どこがけなげだ、どこがっ

そういってやりたい。

だがそれよりももっといいことがある。

「けなげな少女がよく肝試しなんて誘ったわよねぇ？」

私がそう言うと

「うっ・・それは・・」

と、言葉を濁す。

私はさらに

「しかも暗闇を堂々と歩いてさぁ？」

と言い募る。

「う、うるさいわね！さ、早く帰りましょ。」

マリアは顔を真っ赤にして叫びすたすた歩いていってしまう。

私たちもそのあとに続いた。

第三十九話　過去と現在

肝試しを行った翌日、自分を呼ぶ声で目が覚めた。

「おい・・・おいっ・・・おいっ！」

おいの連続攻撃。

私にはルミルって名前があるんだからッ

そういってやりたい。

さすがにうっとうしくなってうっすら目を開けた。

ぼやけた視界に映るのはシンジの心配そうな顔だ。

「ん・・・」

私はここで少し意識をはっきりさせた。

「おい・・しっかりしろ。今日試合だぞ。」

シンジが私に顔を近づけて言う。

大丈夫かってきかないんだ・・・

私は内心残念がって肩を落とした。

私は上半身を起き上がらせた。

「お前・・うなされていた。」

シンジが私に呟いた。

「うなされていた?
私悪夢でも・・見ていたのかな・・?」

自分でも不思議に思った。

夢を見た記憶なんてこれっぽっちもないんだけどなぁ

そう思いながらベットから降りた。

「・・試合・・何時からだっけ?」

私はシンジに聞いた。

「午後からだ。」

シンジはあきれたように言う。

「私・・いつまで寝てたの?」

シンジが起こしたんだから結構寝てたんだよねぇ

そう思いながら聞くと

「十時まで。」

と、一言で答える。

「え”」

私はその言葉であちゃーと思った。

時計を見ればもうそんな時間である。

「・・シンジは朝食食べた?」

私は内心ヤバイと思いながら聞いてみた。

「まだだ。」

シンジは私から目をそらして言う。

あぁ~”シンジにとんでもなく心配されてたんだぁ~。

私は奈落のそこに落とされた気分に陥った。

「ごめんね、私のせいだね・・・。じゃあ食べに行こ?」

私は謝りながら聞いた。

「あぁ」

シンジが頷いた。

まるでそれを待っているかのように。

そのとき、シンジの指にはめている一つのリングから

「くすっ」

と笑い声がした。

「！」

シンジはそのリングをにらんだ。

そのリングはユーラルのものだった。

昨日契約を交わした変わり者の精霊だ。

「今・・ユーラルが笑った？」

私は思わず聞いてみた。

「チッ・・。さあな」

シンジは小さくした打ちした。

なぜ舌打ちを！？

聞きたかったけどそれは聞いちゃいけないような・・気がしてならなかった。

ユウライのリングからも

「クククククッ」

という笑い声が・・・。

私は

ユウライっ！何がおかしいの？
いいから黙っててよ！

と、心の中で命じた。

そうすれば届くと思ったから。

・・・お前、気づかないんだ。

リングの中からユウライが話しかけてきたけど私は無視を決め込んだ。

「今・・。いや、いい。」

シンジが何か言いかけたがやめたみたい。

察してくれたかな？
いろんな意味で。

「じゃあ、行こう」

私はそう言ってシンジの手を引いて食堂に向かった。

十時にもかかわらず人はたくさんいた。

私もシンジもそれぞれ注文して席に着き、食べた。

「・・・」

「・・・」

会話のない食事の風景。

会話がないのは相手に話す気がないからだ。

私もシンジとは話すこともないからただ黙々と食べているんだけど・・。

「おぉ！シンジとルミルじゃんかっ！」

そんな声が私たちの席にこだました。

「！」

「ジュン！それと暁っ！！」

シンジは唐突のジュンの登場に驚いた。

私はジュンよりも暁に驚いた。

暁はジュンのペアだ。

相手の写真を見て知り間と確定したけど大会で会うのは初めてだった。

「よぉ、ルミル。」

暁が私に近づいてくる。

私は朝食を食べ終わり席を立って私も向かい合わせになった。

「久しぶりだね、暁。覚えていてくれたんだ。」

私がそう言うと

「誰が忘れるかよ、自分と小さいころがちでやりあった相手を。」

と、笑って言葉を返す暁。

シンジはジュンとなにやらしゃべりだした。

「あはは。私の圧勝だったもんね
ずいぶんあの頃は悔しがってたけど・・もしかして・・今もそう？
？」

私がにやりと笑って暁に言葉を返すと

「ば、バカかっ。
俺はガキの頃のことを今まで引きずるほど器が小さい奴に見えるか
？」

と、暁は現在(いま)は違うぞ、現在(いま)はっ。と付け足して言う。

「あはは。私には見えるけどな。
だってあの時は絶対見返してやるっていつもそんな捨て台詞を吐い

てたし。」

私は遠い記憶を呼び覚まして言う。

「それは過去(むかし)の話だぞ?
昔はそうとうルミルに敵対心持っていたから当然だろ。
ルミルは女子の上に年下だから余計に悔しいと思って当然の歳だったろ?」

暁が当然当然と言い張る。

私はなぜか背中に妙な視線を感じた。

シンジ・・だ!!

私は心の中で言い当てた。

しかもシンジの視線は怖くて痛いものへと変わった。

「・・それもそうかも・・。」

私はそう考える振りをしてシンジのほうを見やる。

「だろ?あ、そうそう、ルミルといた奴は誰だ?」

と、暁が聞いてきた。

私は少しほっとして

「暁、紹介するね、シンジよ。私の従兄妹にあたるの。

シンジ、こっちは暁。私の昔の・・知り合いなの。」

と、紹介した。

私の昔のけんか相手だったなんていえない・・

私は内心冷や汗をかいた。

暁は

「へぇ、よろしくな、シンジ。俺は暁だ。」

と、言って握手を求めた。

シンジは・・

「・・。シンジだ。」

と言って握手を返す。

シンジ、今、何を思ってるの？

ジュンと何をしゃべっていたの？

私は好奇心で心がいっぱいになった。

だって話してる最中だったんだもん、シンジが痛い視線を放ったのは・・。

「午後のバトルはシンジたちとのバトルだぜ？

お互い手加減はなしだぜ？」

ジュンが言ってきた。

「もちろん！
絶対勝つのは私たちだからね？」

私は挑発的な宣言をする。

「全力で受けてたってやるぜ。」

暁は握りこぶしをして言った。

「いいバトルにしような。じゃあホールで。」

暁がそう言って私たちの元を去った。

「うん。ホールでね～」

私は左腕で手を振った。

まだ傷は重症中の重症だ。

痛み止めを飲んでいなければ走ることもましてや歩くことさえできない。

「・・・」

「・・・」

シンジと私の間に沈黙がなぜか訪れた。

お互いにどうすればいいか悩んでいるかのようだ。

聞きたいことをそのまま聞いていいのか？
それとも黙っておくべきか？

そんな悩みが襲っているかのような静けさだ。

私は

シンジ・・ジュンと何を話してたんだろう？
ジュンが何か言ったのかなぁ？
だからあんな視線を・・・。

と考えていた。

シンジは

こいつ・・暁（あいつ）を紹介するとき、一瞬戸惑ったな・・
何か隠してるのか？
それがジュン（あいつ）の言ってた話と関係があるのか？

と、考えていた。

そんなこと、私はまだこのとき一切知らなかったんだけどね。

「とりあえず行こうか、シンジ。」

私はそう言ってホールのほうへシンジを促して歩く。

「あぁ。」

シンジは頷いて歩いた。

そのときだった。

リュックから音が鳴ったのは。

「ん？」

私はリュックの中から通信機を取り出した。

これが鳴っていたんだ。

そう思って通信機を作動させると、メールが届いていた。

「？」

シンジは私を怪訝な顔で見つめた。

「シンジ、ちょっと待ってね、メールが来たみたい。」

私はそう言ってメールを見た。

相手はミヨだった。

『ルミル、怪我大丈夫？

今日もホールで試合あるんでしょう？

無理しないでよ。治るのが余計に遅くなるからね？

この前の試合だって無茶したくせに。

でも応援してるから頑張って勝ってね。

ｂｙミヨ』

ミヨのメールを見て私はうなった。

「？・・だれからだ？」

シンジが私の様子を見てたずねる。

「ミヨからだよ。・・バトル頑張ってって言うメールだった。」

私はそういいながらメールを打ち返して返信した。
そして通信機をリュックに入れといた。

「・・・」

「待たせてごめんね？じゃあ行こう。」

私はシンジにそう言って歩き出した。

そして午後。
ついに暁たちとバトルが始まった。

「リュク、ステージ、オン！！」

「ユーラル、バトルスタンバイ！！」

「ボルセウス、お前の出番だ！！」

「ペルン、ＧＯ，ＧＯ！！」

私、シンジ、暁、ジュンの順番で精霊を呼び出した。

今日はやけにシンジが燃えているなぁと私は思った。

早速、ユーラル、使ってるし。

私は内心そう思って身構えた。

第三十九話　過去と現在（後書き）

暁とサトルのキャラがちょっとかぶってしまいました。
かぶってしまってすいません。
次回は迫力あるバトルの話を書こうと思います。
感想、評価、お待ちしています。

第四十話　リュクとユーラルのコンボ？

私はリュクを出したあと、相手を観察し始めた。

ジュンの出したペルンは毎回毎回見ているからいいとして
問題は暁のほう。

暁の出した精霊ボルセウスは、格闘系の属性に値する。

ペルンは水、ボルセウスは格闘。

私はいいコンビだと思った。

ジュンと暁は割と相性がいいといえる、
だからタッグバトルらしいコンビ技が炸裂させてくる可能性はある。

リュクは緑・・いわば自然、ユーラルはゴースト。

リュクはそれだけでなく幻覚も操れるから相性はいいといえるだろう。

「おい、リュクに霧を出させろ。」

シンジが私に向かっていった。

バトルで始めてシンジから指示を受けたことに驚きながら
そのことをうれしく思って頷いた。

「リュク、霧と同時に自然解放！！」

私はリュクに命じた。

「ユーラル、霧に身を潜ませろ。」

シンジも命じた。

バトルフィールドは霧に囲まれ、草木が多い茂った。

先手必勝、これなら相手もなかなか手出しができない。

「何!?こうなったら、ペルン・・冷凍ウォルーガ!!」

ジュンが勢いよく叫んだ。

ペルンから発射されたものはリュクの多い茂らせた草木をいっせいに凍りつかせる。

「ボルセウスッ、リュクを殺(や)れ!」

暁が命じた。

リュクに向かってボルセウスが飛び掛る。

「リュク、自然解放増加!ボルセウスを捕まえて!!」

リュクに私は命じるがリュクの増加させた草木が間に合わない。

「いまだ、ユーラル、幻魔!!」

シンジが叫んだ。

すると、ボルセウスの背後にユーラルが突如現れ、幻魔をかけた。

幻魔は文字通り　幻の悪魔　だが、霧に現れたそれは本物となる。

要するに　有幻覚　と言う奴だ。

幻覚だけど、そこに存在する幻覚のこと。

ユーラルの呼び出した幻魔はボルセウスを束縛した。

そこにペルンが入り邪魔をしようとしたが、

「リュク、ペルンよ!!」

と、私が命じて阻止した。

「くそっ」

ジュンが舌打ちする。

ヒュッ

すると、突如、暁がボルセウスを助けようと走ってきた。

「!」

「!」

私たちは驚いた。

私は驚くと同時に走り出していた。

あのときみたいに手合わせをしてみたい。

それはそんな想いからの行動かもしれなかった。

ヒュッ！

私は暁に蹴りをかました。

暁はそれを避けて駆け出そうとする。

ドス

だが、私は暁の足を引っ掛けてバランスを崩させた。

そして私は暁の腕を暁の背中に回し、拘束した。

「また私の勝ちだね。」

私がそういうと、

「くそッ、また負けたか。

だが、まだ終わっていない！！」

暁は悔しそうに言う。

「お前は俺には勝てない」

悔しそうな暁にシンジの冷たい声が届いた。

「シンジ、今！！」

私は叫んだ。

リュクがペルンを押さえ、暁は私が。ボルセウスはユーラルに。

ジュンはその場に立ち竦んでいる。

今がチャンスだ。

「リュク！」

「ユーラル！」

『幻緑夢食い葬光覇（そうこうは）！！』

私とシンジは同時に叫んだ。

リュクとユーラルは互いに手をかざしあい漆黒色の大きな輪をいくつも作り上げた。

そして、ペルン、ボルセウス、ジュン、暁、を拘束する。

そのとき私はとっさに暁から離れた。

「う”ああ”ぁぁあ”ぁああ”！！！！」

そんな声がバトルゾーンに響き渡る。

なんて残酷な響きだろう。

きっと、今、相手は幻覚に惑わされ苦しめられているんだ。

それを私とシンジは平気でやったんだけど・・。

ただ、驚くことが一つあった。

なぜシンジとやろうとしていることが同じだったんだろうかと・・

そしてその叫びはいつまでも続かなかった。

そうそうに暁とジュンが意識を失いそれに伴って精霊たちは瀕死状態になった。

そう、これが私とシンジの初めてのコンボ技が決まったバトルだったのかもしれない。

これにて私とシンジの圧勝で？バトルはいったん幕を下ろしたのだった。

その後、ジュンたちが医務室に連れて行かれた。

私もそのときに傷が急激に痛み出した。

シンジにはばれないようにミヨに会いに行き手当てを施した。

その際に魔力と体力が半減した。

それを見てシンジは何か言いたげだったが、結局何も言わなかった。

その日の夜、私はすぐに眠りに落ち爆睡したことと、
ジュンたちが　手加減しないにも限度がある　と言っていたことを
記しておく。

第四十話　リュクとユーラルのコンボ？（後書き）

ようやく四十話を突破しました。
これからも頑張りますので感想、評価等お待ちしています。

第四十一話　休息

「おい・・おいっ・・」

あれ・・？

誰かの声がする・・

んーみゅ・・眠い・・寝かせて・・

「んー・・・」

私は眠気に耐えられず寝返りを打つ。

「おい・・オマエ・・何時だと思ってる・・」

低く静かに響く声。

んにゃ・・？

シンジ・・？かな？？・・でも私は眠いので寝かせてもらう。

「んー」

私はうなって布団にもぐりこむ。

「おい・・」

シンジの声はいつになく怖い。

だが・・私はそれ以上に眠い。

「・・強硬手段だ」

シンジが冷たく言い放ち、毛布を私から剥ぎ取った。

んみゅ？

とられた・・でぇもぉねむいのぉ・・・お休み・・・

私は毛布を剥ぎ取られて尚、目を閉じすやすや眠りに入っていった。

そんな私をじーとがんみしてくるシンジです。

「おい・・」

シンジは静かに私に問います。

なにやらシンジの怒り？は頂点に君臨した模様。

すごく危ない気がしてきた・・

そんな予感を頭でしていると唐突にふわりと体が浮いた。

「ん！？」

私はそのことに思いきり目を開けた。

「いつまで寝てるんだ？」

シンジが私を凝視して静かにたずねる。
その静けさが妙に怖い私です。
だけど、睡魔には負ける私です。
「眠くなくなるまで・・じゃ、だめ?」
私は恐る恐る上目遣いで聞いてみる。
「それは許さない。俺がいることを忘れるな。」
シンジがにらむように私を見つめる。
私はその視線で目がさえた。
私はこくこく頷いた。
「・・・おろしてくれる?」
私はたずねる。
さっきから抱き上げられた状態で話していたのだった。
シンジの手が私の背中と足にあった。
俗に言うお姫様抱っこって言う奴なの・・
朝起こすとき、
こんなことするのはバカップルぐらいだと思ってた私は変ですか?

そう尋ねたい気分でもあった。

「お前・・意外に軽いな。」

シンジはそう呟いて降ろしてくれた。

「・・。私そんな食べるほうじゃないからかな?
それで今何時?」

私はとりあえず聞いてみた。

まだ眠くて仕方がないけど。

「十時半を過ぎたころだ。
外に食べ行くぞ」

シンジはそう言って部屋から出て行った。

出る際に早く支度しろ。と言い残して。

あ、そういえば、今日はパジャマだった。

そう思って身支度を早々に済ませて部屋を出た。

「・・いくぞ。」

シンジはそう言って歩き出した。

「ねぇ、シンジ、まだ眠いんだけど、帰ってきたら寝てもいい?」

私はシンジの隣を歩いて聞いてみた。

シンジが私のほうを向いて

「お前・・まだ寝る気か？」

と、真顔で聞いてきた。

「うん・・？」

私は頷いた。

そんなにおかしいことかな？

術士には当然あることなんだけど。

「オマエ・・今日はやめとけ。」

シンジがそう言って前を向いて歩き出した。

「んー眠いんだけどなぁ～」

私はまだ眠い目をこすりながら言う。

そんな会話をして宿から出た。

街は朝からにぎやかでわいわいしていた。

そして、近くに手ごろな店を発見してそこに入った。

「いらっしゃいませ～。お二人様ですね、さぁ～こちらへどうぞ～」

定員さんが私たちを見てにこやかに笑って案内する。

私にはその笑顔にはなにやら裏がありそうな気がした。

なんだろう？

この違和感。

他の定員さんもひそひそ何か話していた。

その中に

「・・ひそひそ・・この二人以前来た二人と同様カップルかしら・・ふふふ」

とか、

「そうね・・・ここはよく来るものラブラブなカップルが・・ひそひそ」

と。

私はドキッとした。

カップル？？

まさか私たちが・・そんなんじゃないのにぃ！？

シンジはお店の様子など一切気にしていないみたいだった。

シンジにも定員さんたちのひそひそ話は聞こえてるはずなのに。

私はそう思いながら案内された席に着いた。

第四十二話　迷子の子・・母はどこ？

私とシンジはテーブルに向かい合わせに並んで座った。
手元にはメニューが載っているファイルがある。

「んー、どれにしようかな？」

私はぺらぺらめくりながら呟いた。
朝から洋食でスパゲッティとかサンドイッチ？
それとも、和食で普通のセット？

んーパン食にしようかな～
それプラスにパフェかな？

「私、この、サンドイッチセットと食後にパフェ頼むけどいい？」

「あぁ。俺は・・これ。」

私の言葉にシンジは頷き、自分の注文を指し示す。
それは・・チャーハンセットだった。

わぁー、そんなに好きなんだ～餃子系がぁ～

ふーむ、意外。

私はそう思いながらも定員さんを呼んだ。

シンジが言ってくれそうにないので自分で頼む。

「えーと、このサンドイッチセットと食後にパフェとチャーハンセットで
お願いします。」

「ふふふぅ。はい、かしこまりました。ふふふぅ」

定員さんがそう言って小さく笑った。

定員さん・・なんか笑ってる・・？

「？」

「？？」

どこがおかしいんだ？

「あのぉ～？定員さん？？何故笑っているんですか？？」

思わず聞いてみる。

「ふふっ。・・あ、いや、あの、すいません。
この店に来る方たちはほとんどカップルばかりなんで
その人たちの言動がどうも　ツボ　にはまるようでして・・すいません。ふふっ」

定員さんはいまだに笑いながら答えた。

カップル??・・・!!

私の頭には?と!がよぎりまくっていた。

シンジはそれがどうしたと言うような顔をしている。

シンジはそのカップルの相手が私でもいいの??

そう聞きたくなるのを抑えて、でもそれは止まらなくて

「カップル、ですか・・。
うーん、そういう関係かなぁ私たち・・?」

私はシンジに聞いてみた。

「・・・」

シンジは何も言わない。

きくな、と言う表情をしている。

だが、シンジの表情は肯定、否定の両方を指し示せるような曖昧な表情だ。

どっちって受け取ればいいのかな??

私は・・・肯定の方がうれしいなぁ・・・

「まぁ、とにかく、注文よろしくお願いします。」

私は話をそらして定員さんに頼んだ。

「？・・・はい、かしこまりました。・・？？」

定員さんはそう言って厨房へかけていった。

シンジは・・カップルとかそういうの言われるの平気なんだなぁ。

私は心の中で呟きながら窓から景色を見た。

「・・・」

「んー、ねむい・・・」

私は窓から入り込む日差しに少しうとうとしかけていた。

「・・また寝る気か？」

シンジの言葉に一瞬はっとした。

「寝たいんだけど・・やっぱりだめだよねぇ」

そう言って目をこすって意識をしっかり保った。

しばらくすると料理は運ばれてきた。

パクパク、もぐもぐ・・・おいっしぃ～～

私はサンドイッチをほおばりながら心の中で言う。

シンジも早速食事に手をつけるが表情はさっきと変わらない。
だが、微妙に変化している。
だが、それがどういうことを示しているかはよくわからない。

やがて食べ終わり、パフェがやってきた。
私はスプーンで一口ほおばった。

「ん～、おいしい～～」

「・・・」

私は思わず口にした。
シンジは何も言わない。

「おいしー＾このパフェ。
シンジは甘いもの平気？」

私は聞いてみた。

一種の好奇心って奴だ。

「・・嫌いじゃない」

シンジはそう言って視線を私からはずした。

嫌いじゃない・・かぁ。
じゃあ・・好きってこと??

「じゃあ・・あげるよ。
甘くてすごくおいしいから。
ほら、・・はい、あーん」

私はパフェからクリームとアイスをすくいとってシンジに向けた。

「・・・」

シンジは何も言わずに目を見開いてこちらを見る。

そんな目で見られたら今こうやっている勇気が・・・

私は内心動揺しながら

「ほらっ早く、溶けちゃうよ。」

私はシンジの口に近づけた。

「~~~」

シンジは戸惑いながらもそれを食べてくれた。

上手い具合にシンジの口の中にパフェのかけらは入り込んでいった。

「どう?おいしー?」

私が聞くと

「・・・。・・きらいじゃない」

シンジが目線をそらしてそう言うのだった。

私はそのあとスプーンでパフェをほおばった。

やがてパフェも食べ終わり支払いを済ませて店を出た。

そのあと、街をシンジと一緒に見てまわった。

人がにぎわい大きな通路でも脇に並ぶ露店が人を呼び寄せ狭くしていた。

そんな中、私は一人の男の子にぶつかってしまった。

どん!

私はすぐにバランスを崩れた男の子を両腕で抱き寄せた。

もし、抱き寄せなかったら

この男の子は人ごみにさらわれてしまったかもしれなかったからだ。

よかった・・。

私はそのことに安堵した。

「君、大丈夫?ごめんね?
私の不注意で・・。」

私はそう言って男の子から手を離そうとしたら

ぎゅぅう

と、男の子は私の服をつかんだ。

そのとき、私はこの男の子から何かを感じた。

「!・・どうしたの?」

私は男の子にささやいてみた。

「・・迷子になったの。
お母さんどこかにいなくなっちゃった。
ひっく・・ひっく・・・」

男の子は俯きながら小さく答えた。

「どうした?」

シンジが私に怪訝な顔をして問う。

「・・この子・・迷子になっちゃったみたいなの。
私、探してあげようと思うんだけど・・シンジはどうする?
先に帰ってもいいけど?」

私はシンジに向かって言った。

この子・・迷子という理由だけじゃない気がするんだよね・・
何かあるかもしれないし・・こういう子、ほっとけない・・

「仕方ない、付き合ってやる」

シンジがあきれながら答えた。

「付き合ってくれるの？」

私は目を見開いて再びきいてみた。

「何度も言わせるな。」

シンジがそっけなく言葉を返した。

やさしい・・

素直に私はそう思った。

普段、見知らぬ人に礼儀を払うが親しみは一切込めないシンジが
私に優しくしてくれるのも不思議とばかりに思っていたが
これほど優しいものだとは思ってもみなかった。

「ありがとう。」

私はシンジに笑いかけた。

「・・・」

シンジは私から視線をそらし、男の子に向けた。

「お姉ちゃんたちが探してあげるよ、君のお母さん。
君、名前は？」

私は男の子の視線に合うようにしゃがんで聞いてみた。

「僕、リュウっていうの。
本当に・・探してくれるの？」

男の子・・リュウは私を怯えた不安な目で見つめてきた。
その目からは孤独と言うだけの感情じゃないことを私は感じた。

「うん。本当だよ。」

私はにっこりリュウに笑いかけた。

シンジはそんな私とリュウを怪訝な顔して見つめていたのであった。

「じゃあ、そうだなぁ・・リュウ君がお母さんとはぐれた場所はどこかな？」

私は立ち上がって聞いてみた。

「僕、分からないの・・。・・・いつの間にかはぐれてて・・
でも、僕、行った場所・・覚えてる。
・・おねえちゃん、名前は？」

リュウ君はそう言って私を見上げた。

「私は、ルミルって言うの。
じゃあ、どこへ行ったのか、指差してみて？」

私は微笑んで聞き返した。

「ルミルおねえちゃん・・。・・・ルミル、って呼んでいい？」

リュウは私の問いより名前を先に聞き返してきた。

「！」

シンジはリュウ君を食い入るように見つめた。

「！・・うん・・？・・いいよ。
じゃあ、リュウ君、指差してみて？」

私はシンジの視線に気づきながらも聞いてみた。

なんでシンジはその異様な視線を私やリュウ君に向けるの？？

リュウ君が私の名を言ったから・・？
まさかね・・・

「あっち。」

リュウ君は笑顔で私とシンジが来た真逆の方向を指差した。

果たして無事にリュウ君を母親の元へ送り返せるのか！？

第四十三話　特殊な・・秘めたる力

私は早速リュウ君の手を引いて歩き出した。

シンジもその後ろをついていく。

「あっ、あそこ、僕あそこに行ったの。」

リュウ君がとある建物を指差して言った。

え?ここ・・お化け屋敷??

私は

「本当にここなの??」

と、とりあえず聞いてみた。

「うん。」

リュウ君は頷いた。

まさか・・ね・・

でも、どうせ聞くんだったら入っていかないとだめだよね・・・

リュウ君のため・・リュウ君のため・・これはリュウ君の・・・

私は自分に言い聞かせた。

「じゃあ、ただで聞くのも失礼だし、入っちゃおうか？」

私はリュウ君とシンジに聞いた。

「いいの？」

「・・・」

リュウ君は顔を輝かせて聞いてきた。
シンジは眉をひそめて私を見つめた。

「うん。それに入りたいんでしょ？リュウ君。」

私は聞き返した。

リュウ君の手からはそんな感情が流れてきている気がしたからだ。

リュウ君は俯いて

「ルミル、が・・入ってくれるのなら僕、入りたい」

と、言った。

「じゃあ、入ろう。」

私はリュウ君に微笑んで言った。

「シンジもいいでしょ？」

「お前がいいならそれでいい。」

シンジは私から目をそらして言った。

シンジ・・私は正直言うとお化け屋敷は行きたくなかった。
でも仕方ないよね・・リュウ君のためだよね・・

あぁ”〜、それでもいきたくないどうしよぉ〜〜

「じゃあ、決定。行こうか。」

私は内心の焦りを押さえながら言った。

そしてお化け屋敷に入っていった。

「三名様ですね・・ではどうぞ。」

受付の人はにこやかにそう言って私たちを案内した。

そして・・中に入ったのだ。

私にとっては地獄のお化け屋敷へと。

私はリュウ君と手をつないでゆっくり歩く。

リュウ君はどこか楽しげだった。

シンジは私の隣で歩いている。

いつも後ろだったのにどうして??

私は動揺しまくりだった。

薄暗い道を歩く私は震えていた。

薄暗い道の脇には奇妙なお面や、赤く染めた服など・・それに頭蓋骨も・・

はっきり言ってここは地獄だ。

恐怖の館だ。

うぅ”～～。

偽りのものだと分かっていても怖いもんは怖いもんだった。

「きゃぁ～～!!!!」

そんな叫びが唐突にこだました。

私はその声を聞いて震え上がった。

シンジはぴくっと耳を傾けただけで、

リュウ君はわぁーと小さく呟いただけだった。

私たちはじわじわその叫びがしたほうへと近づいていた。

驚かせる場所が分かってるんだから怖くない怖くない。

自分に言い聞かせた。

それでも無理な気がすることは気づかない振りをする。

そしてその場所に到達する前に
どたどたどたッ！
そんな足音が背後に聞こえた。
「ひぃっ」
私はとっさに背後を振り向いたがだれもいない。
そして前を向いた瞬間、
「うぅ”ら”ぁぁ～め”ぇしぃ”あぁ～”」
と、変な奇妙な仮面をつけた人に脅かされた。
思わず、
「き”ゃぁ”～～～～＾！！！！！！！」
と悲鳴を上げてシンジに抱きついてしまった。
シンジは脅した人をじろっとにらんだ気がした。
リュウ君が私の手をぎゅっと握ったことも手を通して分かった気がした。
私たちを脅した人はすぐさまいた場所に戻っていった。

「あ、ああ、あ・・ご、ごめんね、シンジ。場所は分かってたんだけど・・・」

「・・・。別に。」

私は慌ててシンジから離れた。

私は立ち直ろうと

「リュウ君は・・大丈夫だった?」

と、聞いた。

「う、うん・・。でも怖かった。」

リュウ君の顔は言葉とは裏腹だった。

楽しかった。

そんな感情のような気がした。

「そう・・じゃぁいこうか。」

私はそう言って歩き出した。

シンジの・・別に。ってどういう意味だったんだろう?

その疑問が落ち着いた今の私が考えた疑問だった。

やがて・・お化け屋敷は終了した。

受付の人に私は

「あのぉすみません。この男の子の・・リュウ君の母親を知りませんか？
迷子になっちゃったみたいなんです。」

と、たずねた。

「今、リュウ君って言ったかい？
だったら、ついさっき来たよ。
今度はそっちのほうを探すって。」

受付の人は目を見開いて言った。

「ありがとうございます。」

私はそうお礼して受付の人が言ったほうへ行った。

もちろんリュウ君の手を引いて。

「リュウ君、お母さんはこっちのほうへ行ったって。
すれ違いにならなければ会えるよ」

「うん」

私の言葉にリュウ君は頷いた。

どこかさびしげに見えたのは気のせいだろうか？

心の中でそう思いながらもリュウ君に微笑んで歩いた。
そして方角を頼りに行き着いた先はなんとゲーセンだった。
ゲーセン・・それはゲームセンターの略である。
まぁ、それはだれでもわかるよな・・・
「ゲーセンかぁ。えーと、ひとまず、中に入ろう。」
私は戸惑いながらもそう言って中に入った。
中にはたくさんのゲームが・・。
リュウ君はそれを見て目が輝きだした。
やりたいのだろうなぁ。
心の中で私は呟いた。
「じゃあ、何やる?」
「え、いいの?
だったら・・あれがやりたい!
僕、前からやりたかったの!!」
リュウ君はもぐらたたきを指差して言った。
「モグラたたきかぁ。
じゃあ、私と一緒にやろう。」

「ルミルと！？
うん！僕やる！」

リュウ君は目をきらきら輝かせて笑顔で頷いた。

母親なんかよりそっちのほうがまるで良いみたいに。

うーん、この子の母親・・
私の母と同じような性格の持ち主だったらどうしよう。

私は悩んだが、すぐさまもぐらたたきまで歩いていった。

「じゃあ、リュウ君、私が先に手本を見せてあげる。
じゃあっいっくよぉ～」

私はそう言ってハンマーを握った。

そしてスタートの合図が出た。

テイ、テイ、テイ、テイ・・・・・・っっっっと。

出てきたモグラを瞬時にたたき始めた。

シュパパパーン！！

モグラは穴の中へ帰っていく。

そしてフィニッシュの合図が出た。

まいりました。
その言葉が画像に映った。
「どう?分かった?
面白いよ、ほら、リュウ君。」
「ルミル、すごい。
僕も、やるぞー」
リュウ君はやる気満々でハンマーを受け取るとたたき始めた。
「えい、えい、・・これでどうだっ」
リュウ君はもぐらたたきに夢中になっている。
「シンジ・・あの子どう思う?」
私はリュウ君の幼い子供とはいえない動きを見ながら問う。
「特別な・・特殊な何かをあいつは持っている。」
シンジはリュウ君を見つめて答える。
「だよねぇ。あの子・・不思議な子だよ。
普通、あのぐらいの年の子なら
母親がいなければさびしがってなくと思うけど、
あの子、涙を見せない。
さびしいとは感じても泣くほどじゃないってかんじがする。
ふしぎだよねぇ。

それにあの速さ、普通じゃない。
あの子には何らかの力がある。」

私は呟いた。

やがてリュウ君はもぐらたたきを終えた。

「ルミルっ、僕すごく楽しかった。
次あれやりたい。」

リュウ君が次に指差したのは画像に映し出されたものを見ながら操るカヌーのようなものだった。

「うん、やろう。」

私はリュウ君に微笑んでカヌーへと向かった。

そして、カヌーにリュウ君と一緒に乗り込む。

「じゃあ、説明するよ・・・」

私はリュウ君に説明してあげた。

リュウ君は目を輝かせてうんうん頷いている。

「じゃあ、コイン入れるよ。」

私がコインを入れたとたん、画像にスタートの文字が映し出された。

「じゃあ、こぐよぉー」

私はそう言って横にあるものでこぎ始めた。

リュウ君も真似してこぐ。

画像に映し出された風景はジャングルの中だった。

「右、・・次は左・・そう・・かたむけてぇ・・・」

私はリュウ君に呟きながらカヌーを順調に進めませた。

リュウ君はとっても機嫌がよかった・・そう、そのときは。

ジャングルの中から景色が変わった。

それは滝!!

カヌーが思い通りに動かなくなった。

いろいろなところに画像のカヌーはぶつかった。

そして転落。

ゲームオーバー

その文字が深く映し出された。

「あーぁ、惜しかったねぇ、ゴールまであと少しだったのに。」

私はそう呟いてカヌーから降りようとした。

だが、リュウ君に服をつかまれ降りられない。

「リュウ君？」

「僕・・ゴールしたい。だめ？ルミル？」

リュウ君は上目遣いで聞いてきた。

「いいよ、リュウ君の気が済むまでやってあげる」

私はそう言って頷いた。

「ルミル、ありがとう。」

リュウ君はそう言って笑った。

そして私がコインを入れ、また再会させた。

だが、また同じ場所でゲームオーバー。

それが悔しくてもう一度・・もう一度と何度も繰り返した。

そのつど、リュウ君にその悔しさ・・苛立ちが募っていった。

そして・・

「もうコイン一枚しかないからこれで最後ね。

これで、ゴールできなくても・・・あきらめないとね・・・」

私はそう言ってリュウ君をなだめるようにしながらコインを入れた。
そして再び再開された。
そして何回もゲームオーバーになった場所に到達した。
そしてそこでまたカヌーのバランスが崩れた。
このとき、リュウ君の苛立ちは頂点に達した。
そう、そのときだった、
画像が映し出される機会が急にビリビリッと電気を帯びたのは。
ビリリッ!!!バリビキッ・・ドッカーン!!!!!!!
私はその異変を目にした直後、私とリュウ君は爆発に飲み込まれた。
私はその爆風に吹き飛ばされた。
吹き飛ばされた私はシンジにキャッチされた。
「おいっ!!」
シンジが私を抱き起こした。
「ん・・。!?シンジ!
リュウくんはっ・・・・・・・・!!??」
私は一瞬気を失っていたらしい。
そして目の前にある状況に言葉を飲み込んだ。

「リュウ君ッ！！」

私は叫んだ。

機械がおかしくなって爆発を起こしたと思った。

今の現状さえ見なければ誰もがそう思うはずだ。

だが、今の爆発はそうではなかった。

リュウ君が爆発の中心となって機会が壊れ、私は吹き飛ばされたのだ。

今もリュウ君は暴走していた。

リュウ君を中心に渦が巻き起こり電気を帯びていた。

「あいつ・・人間じゃないのか？」

シンジが信じられないと言う風な表情をしていた。

シンジ・・そんなこと言わないであげて。

かわいそう。

あの子は人間だよ。正真正銘の人間の子供。

リュウ君が人間じゃないと言うなら私はどうなるの？

私は心の中でシンジに聞いていた。

届かないことを知りながら。

「あの子は人間だよ。
ただ、内に秘めた大きな力が一時的な感情で外に出てしまっているだけ。」

私は立ち上がりながら言った。

そして、渦の中心に一歩前に出た。

「おいっ、どうする気だ?」

「あの子の暴走を止める。
私以外にたぶん止められる人はいない。
あの子をとめることができたら、
人間じゃないと言われたあの子以上に私は人間じゃないかもしれないね。」

私はシンジの言葉に力なく笑った。

第四十四話　稀な力・・・導かれる未来

私はシンジに力なく笑った後
自分に防御の術をかけながら渦へと近づいた。

渦の中心で浮かび上がって力を放出させるリュウ君がいる。

このままじゃ・・リュウ君が・・ウィーミア、力を貸して。

私はウィーミアのリングにささやいた。

すると、ウィーミアが現れた。

「お呼びですか？」

「うん。お願い力を貸して、ウィーミア。」

「はい。」

私の言葉にウィーミアは頷いた。

「ウィーミア、鎮まりの旋律」

私はウィーミアに命じた。

そして私はリュウ君の目の前まで近づいていった。

風を操り、天寿の力を使って。

ウィーミアの旋律は渦の力を薄れさせていったが大きな効力は発揮されていない。

それはリュウ君が暴走しているからだ。

心が何もかも拒絶しているからだ。

私は渦の中に思い切って入った。

ズウォオオオ！！

耳元で渦の巻く音が鳴る。

私は頭の中で、

「リュウ君、聞こえる？
ルミルだよ。
私はリュウ君の気持ちが分かる。
だから、リュウ君、怒りを静めて。
力を制御して。」

と、リュウ君に伝えた。

リュウ君を私は抱きしめた。

私の体には圧迫感があった。

とてつもなく大きい力が私までをも飲み込もうとしているのが分かる。

でも・・私は天寿の力の継承者。

「・・ルミルなの？
・・ルミル、僕どうなったの？
僕自分で力を止められないよっ。
どうしたらいい？どうしたらっぼくはっ・・・」

リュウ君の叫びが私の頭に響いてくる。

リュウ君は混乱していた。

「リュウ君、落ち着いて？
落ち着いて、私の精霊が奏でる旋律を聴いて。
きっと、リュウ君の力は鎮まるから、ね？
大丈夫。
リュウ君は遊びたかっただけなんでしょう？
こんな力を持って、親に蔑まされて・・
何も相手にされなくて・・理解してもらえなくて・・
だから他とは違う私を見つけて頼ってくれたのでしょう？」

私は落ち着いた物腰でゆっくりと伝えた。

「うん。
僕、ルミルなら分かってくれるって思ってた。
ルミルは僕を裏切らなかった。
ありがとう。
僕聞くよ。
・・・すごくきれいな曲・・聞いていて気持ちいい・・」

リュウ君は頷いて旋律に聞き入っていた。

そして私はリュウ君の渦を私は風と天寿の力を使って消し去った。
そしてリュウ君を抱えて、地に降り立つ。
「リュウ君、大丈夫？」
私は聞いてみた。
「うん。
ルミルは・・分かってたんだね。
お母さんと離れたのは口実でほんとは遊びたかっただけなんだって。
」
リュウ君は言った。
なんとなくそうだろうなと感づいていた。
幼い男の子にしては割と落ち着いてたし口調こそ子供らしかったけどどこかしら賢いなぁと思ったから。
「うーん、なんとなくね。
私もリュウ君と同じ目にあったから分かっただけだよ。
リュウ君、目指すなら、術士と精霊使いが良いんじゃないかな？」
私はリュウ君に勧めてみた。
「おいっ、何があったんだ？」
リュウ君が何かを言おうとしたとき、シンジが割って入ってきた。

「さっき言ったでしょ、暴走を止めるって。
その文字通り止めただけ。
リュウ君は何も悪くないよ。」

私はそうシンジに告げた。

「・・そうか」

シンジはほっとしたかのように呟いた。

よほど心配してたのかもしれない。

私はそう思った。

そしてゲーセンの周りはなにやら騒がしくなった。

「あ、リュウ君、さっき言った術士のことね、
いまから、術士が使う術の一つを見せてあげるよ。」

「ほんと?」

「もちろん。」

リュウ君の言葉に私は頷いて呪文を唱えだした。

範囲が広いからその分、詠唱は長い。

私は詠唱し終わってそれを解き放った。

光がゲーセン全体を包んだ。

ゲーセンに沸き起こった野次馬ともども今、リュウ君が起こした渦の記憶全てを消し去り爆発事故という記憶を植えつけた。

そしてゲーセンから光は失った。

私はウィーミアをリングに戻した。

「いまのはね、記憶を自由自在に操る術なの。
リュウ君の能力はきっと、自分のものにできるよ。」

私の言葉に

「ルミルはすごいや。
僕も頑張るよ。」

と、リュウ君は笑顔で頷いた。

「リュウー!!」

すると、どこからか私たちのところに一人の女性が叫び、この場に来た。

「おかあさん・・」

リュウ君の顔が一気に曇った。

「リュウ!どこに行ってたのよ。まったく心配させないで頂戴。
あなたがいないとこっちだって迷惑なんだから」

その女性はリュウ君の母親だった。

わぁー昔の母親とそっくり。嫌だーこんな人。

私は心の中でドン引きした。

「リュウ君の母親ですね？
リュウ君は不思議な力をお持ちのようです。
そして今起こったこの事故もリュウ君の巻き起こしたものです。
ですが、これはあなたのせいでもあるんです。」

私は淡々と母親に告げた。

この際だ、はっきり言ってあげよう。
自分が母にいえなかった分と、リュウ君の未来のためにも。

「なんですって!?私のせいといいましたか??」

リュウ君の母親は私とキッと睨んだ

「はい、いいました。
リュウ君はまだ幼いです。
幼い子が冷たくあしらわれるとどう思いになられるかご存知ですか?
幼い子は純粋なんです。
いわれた言葉を直球に受け取ってしまいます。
だから、迷惑と言われれば、悲しみますし、辛い思いもするんです。
」

私はまっすぐ、母親を見つめて言った。

「あなたは何が言いたいの？」

母親は私に問う。

「私がいいたいのはそのせいだといっているんですよ。
幼い子が悲しい思いや辛い思いは幼い子はどこにしまうと思っていますか？
幼い子は我慢なんてできません。
ですが、リュウ君は年に似合わない理解力があります。
だからその思いを心にためてしまうんです。
その結果、このような大惨事になってしまったのです。
少しはリュウ君のことに気配ってください。」

私はリュウ君の母親を責めた。

「なぜ、あなたにそんなことを言われなければならないの？
確かにあなたもリュウと同じような力を持っているようだけれど。」

母親は不思議そうに聞く。

「私もリュウ君と同じような心境に立たされました。
私の母親は私を好んでいないと思います。
もっとも、私もそんな母親を好むことなんてなかったけれど。
でも、あることがきっかけでそういう関係は断ち切れて
一応、もうこういうことで辛い目にはあわなかったけれど。」

私は息せき切って話を続けた。

「私は自分以外でそういうことが起こるのが嫌いなんです。

子供は親からの影響をとても受けるんです。
親に子供は導かれているんですよ。
あなたはもし、
このまま、リュウ君に辛い思いをさせ続けてうらまれたらどうしますか？」

私は聞いた。

これが、この人が一番悩むものだと思ったから。

「そ、それは・・」

母親は押し黙った。

「リュウ君が人間が持つ不思議で稀な力をあなたは忌み嫌っていますよね。
だから八つ当たりしているんでしょう？
そんな風に八つ当たりされたら、リュウ君だってあなたを恨みますよ？
恨まれたらどうなると思います？
あなた、リュウ君のその力によって殺されかねませんよ？」

「！！」

私の言葉に目を見開く母親。

それはシンジやリュウ君も同じだった。

「それで殺されたら文句なんていえませんよねぇ？
そしたらその後どうなると思います？

その力で世界中混乱しますよ？
そしたら全部あなたのせいになっちゃいますよ。
今の事件ですむ問題じゃありません。
まぁ、今のは最も悪い未来への導かれた過程でしたけど。」

「・・・」

母親は押し黙った。

「ですから、さっき言ったように子供は親に導かれているんです。
だからその導かれた未来がいい未来であってほしいんです。
道を誤ったらそれでこそ、ごめんなさい、ですむ問題じゃないです。
だから、子供にもっと愛情を注いでください。
子供に正しい道を歩かせてください。」

そこまで話した後、私は一拍おいて話し出した。

「それと、不思議な力は受け継がれるものです。
自分の両親、
もしくは祖父母にその力がなかったら先祖の家系にあったと思います。
こういう力は数多くの人が
使用していますから気味悪がらなくてもいいと思います。
それにあったものにもなれると思いますし。
私のお勧めは術士に精霊使いがいいと思います。」

私はなんとか、ここまで話し終えた。

「術士？精霊使い？」

母親は一気にしゃべった私にぽかんとしていて鸚鵡返しに聞いてきた。

「はい。
リュウ君に合ったものだと思います。」

私は言った。

とたん、私はめまいがして体がふらついた。

シンジは一瞬、はっとしてその体を支えてくれた。

どうやら興奮してたくさんしゃべったから体が限界なことに気づかなかった。

「おいっ」

シンジは私に問いかけた。

「大丈夫。
とにかく、そういうことなんで。
リュウ君、母親にひどいことされても私のこと思い出してね？」

私はシンジに向かって言い、リュウ君に聞いた。

リュウ君の母にすごい今ひどいこと言った気がするが
今までのリュウ君の仕打ちや私が受けた仕打ちとは程遠いだろう。

「うん。
僕、ぜったい、術士と精霊使いになる。

ぜったいわすれない」

リュウ君は私の服をつかんで言った。

「うん、ありがとう。
そういうことで、
リュウ君の母親さん、子供は親に導かれていることを忘れないでください。
もし、リュウ君が道を誤っても私はもう助けれないかもしれませんから。
今からなら間に合いますよ。
じゃあ、またどこかで。
リュウ君、じゃあ、またどこか出会おうね。」

私はシンジの手を振り解いて立ち上がった。

「うん、ルミル、またね。」

リュウ君がバイバイって手を振った。

「シンジ・・もう大丈夫だって。」

私はシンジに呟きながらもその場を去っていった。

「・・お前、無茶をしすぎだ。
明日、サトル(あいつ)とのバトルがあることを忘れてるのか?」

シンジは私に淡々と言う。

「忘れてないよ。

だから、これから寝るんだよ。
そういうことなんで今から瞬間移動しますっ」

「お、おいっ」

私はむっと言い返してシンジを無理やりつかんで瞬間移動した。

シュッ・・・スパーン

瞬時に部屋へと到着したとたん、私の視界は歪んだ。

そして体が床に崩れ落ちた。

シンジも無理やりだったためかめまいがしたのか
私を支えてはくれなかった。

普段なら受け止めてくれるはずなのに。

私はそこで意識が薄れていき始めた。

シンジははっとして私を抱き起こした。

「お、おいっ、しっかりしろっ」

シンジの焦った?心配そうな?・・声が聞こえた。

私はシンジの焦った表情を最後に視界は途絶え、意識を失った。

意識を取り戻したのは夜、シンジはもう寝る準備をしていた。

「オマエ・・今起きたのか。」

シンジがうんざりしたような口調で聞いてきた。

「ん・・。また寝るよ。
疲れてるし・・眠いから。
シンジ、今日はいろいろありがとね・・
おやすみ・・・」

私は布団にもぐって寝た。

第四十四話　稀な力・・・導かれる未来（後書き）

今回、ちょっとルミルさん怖いです。
特にリュウ君の母親を責めているシーンが。
でも普段優しいルミルさんなので大目に見てあげてください。
優しい人ほど怒ると怖いってよく言いますからね。

感想、評価、助言などお待ちしていま～す。

第四十五話　刃、誘惑、幻覚・・バトル

「ん・・・」

私は突然目を覚まして起きた。

上半身を起こし、部屋を見渡す。

まだシンジは寝ていた。

寝顔はあいにく見れなかったが。

私は時計を見た。

６時・・か。

ずいぶん早く起きたなぁー

私はベットから降りてバトルの準備をし始めた。

その前に髪をとかしたりして身だしなみを整えたが・・。

ちょうど7時になるところでシンジが起きた。

「・・・。早いな。」

シンジはベットから降りて私に呟いた。

「あ、シンジ、起きたんだ。おはよう。」

私はシンジに笑いかけた。

魔力も体力もほぼ完全に回復している。

体調も絶好調とまでいかなくても割りといいほうである。

怪我を除けば。

「あぁ」

シンジは早速、身支度を整えだした。

そして、8時になったころ、朝食をとりに食堂へ向かった。

「術士・・なのか？」

向かう途中、珍しくシンジから話しかけてきた。

「あ、そういえば、シンジには言ってなかったね。

そうだよ、私術士なの。

今まで使ってきた能力を制御するためにといろいろ学ばされて・・

それでなったんだよ。」

私はシンジに説明した。

能力を制御もあったけど学ばされたのはそれだけじゃなかった。

自分の身は自分で守る

それが目的でいろいろ学ばされた。

剣技に弓、護身術として体を動かすことをいろいろ。

魔術も学んだが私には向かない。

というかただ単に体が拒絶するだけの話なんだけど。

「・・・」

シンジは何も言わない。

私もそれ以上しゃべることなく食堂へと向かった。

食堂では特に何もなかった。

知り合いに合うことも食べることで支障が起きたことも何一つなかった。

時間は刻々と過ぎていった。

そしてバトルが始まった。

「ユーライ、ステージ、オン！」

「レル、バトルスタンバイ！」

「ムルマ、出番ですわ！」

「ジグル、お前に決めた！」

四人同時に精霊を呼び出した。

私はゴースト属性のユーライを。

シンジは刃属性のレルを。

マリアは夢属性のムルマを。

サトルは雷影属性のジグルを。

属性はさまざまで相性で言えば、互角だろう。

マリア・・バトルもアピールに入れるわけ？

私はマリアにそう聞きたかった。

マリアはたぶん、シンジに気を引かせたいのだと思う、
夢属性のムルマを使って。

文字通り夢を司る精霊だから、
たぶんシンジかレルに技を吹っかけてくるだろう。

でもたぶん大丈夫、シンジはそんなにやわじゃないから。

「ジグル、ボルト！！」

サトルの声がバトルの始まりの合図だった。

ビリ〜〜！！

小さい雷の光線が襲い掛かってきた。

「ユーライ、よけて」

「刃で返せ。」

私とシンジの声が重なる。

ユーライの方へ来た雷はあっさり避けることが可能だった。

だが、レルのほうはユーライのほうへ来た雷よりも数が多く威力が大きい。

しかし、レルの刃でそれはむなしく消えた。

それで終わったかと思うと、ユーライの避けた雷がまた襲い掛かってきた。

ミサイル式？

「ユーライ、ゴッドソウル！！」

私はユーライに命じた。

ユーライは襲い掛かってきた雷を自らが作り出した泡に入るよう仕向けた。

ビリリ・・・チャポポポン

「ユーライ、そのまま、投げつけて」

私はそのまま、命じた。

ユーライは、精霊二体に向かってそれを投げつけた。

ヒュゥー

「ムルマ、こんなもの、消し去りなさい！」

マリアが唐突に叫んだ。

ムルマは左腕で迷わずそれをなぎ払った。

ズサッー

それは一瞬にして消え去った。

「どうです？私のムルマちゃんはすごいでしょう？」

マリアは言った。

それ私に言ってるの？

それともシンジ？

「レル、ジグルにソードレイル！！」

シンジはそれを無視し、命じた。

ウ”ィン

レルは右腕を刃と化し、攻撃しに行った。

「そうわさせませんわよ、シンジ様っ。
ムルマ、お誘い！！」

マリアがそれを割って入るようにムルマに命じた。

「ユーライ、ゴッドセーブス！」

そこに私が命じた。

レルの行く手を阻むように
立ちふさがったムルマに対してそこに割って入ったユーライ。

ムルマの出した技をユーライは受けた。

その隙にレルはジグルに向かって切り刻みにいった。

（ユーライ、聞こえる！？）

心の中で語りかける私。

（くくっ。聞こえるぜ。こいつ、面白い技を出すぜ。
思わずはまりそうだったが。）

聞こえたのはのんきに笑うユーライ。

「ユーライ、誘い返し!!」

私は思い切って叫んだ。

シンジもそのことに目を見開くが
シンジもそれどころではないことを悟っている。

「レル、風炎だ!サトルをやれ!」

シンジは冷静に指示を飛ばす。

ユーライはムルマに暗示をかけるように手をかざした。

ホワン・・

ムルマの瞳に宿るものが消えた。

どこかを呆然と見るようなうつろな目をしたのだ。

「なんですって!ムルマッ、しっかりして頂戴!!」

マリアが悲痛な叫びを上げた。

もっと・・叫んで、マリア。
くすっ。私にえらそうに言うマリアが悲痛な叫びを・・。
聞いてるともっと嫌がらせをやりたくなっちゃう。

私は心の高ぶりを解放した。

「シンジ、サトルのほうは任せたよ。」

「！・・あぁ」

シンジの声を聞いて私はマリアのほうへ走り出した。

マリアをサトルを打ち負かしたい！

その思いが私の力量を上げた。

洞察力、理解力、身体能力・・・それらが魔力、体力を代償に活性化した。

活性化された力は私の体を輝かせた。

「！！」

マリアが私に気づいた。

でも遅い。

私の振り上げた蹴りがわずかにマリアの脚を直撃しマリアを転ばせた。

ガ”ガッ！！・・グイッ！！

「マリア、私はあなたに負けない」

私は蹴った瞬間マリアに聞こえるように言った。

「っ！？」

マリアは大きく目を見開いて私を見ていた。

マリアが転んで地面につく前に私は風でマリアを吹き飛ばした。

一方その頃、

レルは炎の刃でジグルを圧倒し風でサトルをなぎ払った。

ブォウ”ゥウ”・・・ビュウウゥウ！！！！

サトルはたいした抵抗もできずに吹き飛ばされた。

二人は立ち上がった。

「レル、風雷波！！」

「ユーライ、幻覚！！」

シンジと私の声が同時につむぎだされた。

その二つに二人は襲われた。

ビリッシュシュッ！！ブゥウォゥ”” ！！

ウ”ォン！！

雷はわざとサトルたちの隣を過ぎ去り、

風で二人は幻覚のせいか抵抗なくバトルゾーン外まで吹き飛ばされた。

「勝者、ルミル選手、シンジ選手ペアです！！」

審判者が声を張り上げて下した。

これで、マリアたちとの試合が終わった。

きっと今もマリアたちは苦しんでいると思う。

幻覚が予想以上にひどいものだと分かっていたから。

ユーライが生み出した幻覚はリングを通して伝わってきた。

おそらくレルの攻撃がなくとも
サトルたちを負かすことなんて楽勝だったかもしれない。

それほどまでにひどいものだった。

私がそう望んだのだから仕方がないけど。

だから私は気絶したマリアが医務室に連れて行かれると同時にひざを突いた。

サトルはすごいと思う。

リングを共有している私でも幻覚の影響が流れ込んでくるのに
気を失ってすらいない。

視界には気にもたれて顔をゆがめるサトルと私に近づくシンジの姿。

サトルはそのまま、スタッフに連れて行かれた。

意識はあったがやはり体はそうもいかなかったらしい。

「おいっ」

耳元でシンジの声が聞こえた。

私は幻覚の影響で視界がかすんでいた。

それと吐き気もあった。

「くくくっ。お前が望んだんだろう。
それで今苦しむなんてお前、自業自得だぞ。くくっ」

ユーライが私の傍で呟く。

「ユーライは・・
私に影響することを躊躇っていなかったからちょうどよかったんだよ・・」

私は吐き気がするのどを押さえながら呟いた。

「くくっ。どこまでも自分を犠牲にする奴だな、お前は。
自分をいたわれよ、少しは。じゃあな」

ユーライは最後にくくッと笑ってからリングに戻った。

「・・・」

シンジは黙ったまま私を見下ろしていた。

やばいな・・
体力も魔力も残ってないや・・
これじゃあ、しばらく動けない・・

私はそう考えながらのどを押さえ、
視界がかすむ中ひざをついて体を支えていた。

「お前・・動けないのか？」

「・・・」

シンジの心配そうな問いに私は何も言えない。

「お前から何も感じない」

シンジはそう言った。

何も感じないと言うことは
魔力と力の源が感じられないってことを言っているんだと思う。

シンジは・・気配や相手の力量を観察できるんだよねぇ・・

「・・・」

私はとりあえず何も言わなかった。

と言うよりいえないのかな。

言いたくても声に出す力がなくなっていた。

長いようですごく短かったバトルだったが、
魔力と体力を代償にした力の反動がそうさせているのだろう。

ううっ

吐き気がして気持ちが悪かった。

視界もよりいっそうかすんで見えた。

そのときだった、ふわりと体が浮いたのは。

「・・・・」

「！」

私は声に出せず、
目を見開いてぼんやりと映るシンジを見上げることしかできなかった。

シンジは私を抱き上げたのだった。

「またお前は無茶をした。
お前、見えていないだろ・・」

シンジが私をにらむように見て言う。

「・・・」

私はなんて言っていいか分からなかった。

ただ、正直言うことだけはしたくなかった。

「・・」

シンジは何も言わず、バトルゾーンから出た。

私はシンジに抱き上げられていることが申し訳なくて瞬間移動したくなった。

「しゅ・・ん・・か・・ん・・い・・ど・・・う・・」

やっとのことで声を絞り出した私。

シンジは目を見開いて私を見た。

瞬間移動!!

私は心の中で呟いて瞬間移動した。

シュパーン

ついたのは部屋の中。

シンジはぐったりしている私をにらんだ。

なぜした?

言葉に出されたわけじゃないけどそういわれた気がした。

シンジの唇がゆっくり動いた。

「お・・・ぇ・・・・・ぃ・・・・・ぅ・・・・・・・・・?」

でも私にはさっぱり聞き取れなかった。

あーやばい・・・耳までおかしくなった。

仕方ないから私はシンジの心を読み取ろうとした。

「お前・・今、どうやってした?」

シンジはさっきそういいたかったことだけ分かった。

どうやら私は・・お前の　お、え　と今の　い　とどうしての　う
しか聞き取れていなかったようだ。

第四十五話　刃、誘惑、幻覚・・バトル（後書き）

せっかくのバトルが短くなってしまいましたが、
何かといい案が浮かばず・・・申し訳ありません。
次回はもっと頑張りますのでよろしくお願いします。

第四十六話　診察　1

私は気を失った。
気を失う前にいろいろシンジが言ってきたようだけどそれすら聞こえかった。

シンジは気を失ったルミルをベットに寝かした。

「・・・」

シンジはルミルをじっと見つめて考える。

こいつから魔力を感じられない。
だが、瞬間移動をした。
瞬間移動するには魔力が必要なはずだ・・かなりの量を。

眉をひそめてルミルの寝顔を見るシンジに突如、音が聞こえた。

トントン

ドアをノックする音だ。

「？」

シンジはいぶかしげに眉をひそめドアを開けた。

ガチャ

そこにいたのは　フードをかぶった奴　だった。

シンジはそれがミヨだとは気づいていない。

それとルミルにそっくりの顔をしていることも。

「・・・」

シンジはフードをかぶった奴を見据えるように見つめる。

背丈はルミル(あいつ)と同じぐらい。

俺より背が少し小さいだけだ。

「シンジさん・・ですよね・・？」

フードをかぶった奴はシンジと目を合わせず、顔を隠してたずねる。

シンジはいぶかしげに頷いた。

・・・・。

「あの・・ルミルが心配でたずねてきたんですけど、ルミルは・・どうですか？」

フードをかぶった奴はあいつを本当に心配しているようだ。

・・・。

「気絶した」

シンジは呟くように答えた。

事実をありのままに言っただけのことだ。

「！・・・そうですか・・。原因は？」

フードをかぶった奴が聞く。

視線を合わそうとせず、聞いてくる。

だが、声からして心配なことは伝わってくる。

「瞬間移動」

シンジは手短に言う。

「・・瞬間移動・・ですか？？
おかしいですね、魔力はバトル終了ちょっと前から感じられなかったのに。」

フードをかぶった奴はシンジと同じようなことを言う。

「私・・魔道なら少し心得がありますし、ルミルを診させてもらっても良いですか？」

フードをかぶった奴はシンジに進言する。

あいつを診る・・・
ちょうどいい機会だな。
「・・。」
シンジは頷いた。
そしてフードをかぶった奴を部屋へ招き入れる。
「あ、ありがとうございます。おじゃまします。」
フードをかぶった奴は部屋に入れてうれしそうな雰囲気を漂わしたが、
あいつを見た瞬間、その雰囲気は消え去り緊迫した空気が流れ始めた。
フードをかぶった奴はベットの傍まで行き、あいつの額に手を当てた。
「・・魔力が完全にありませんね。
それと・・意識も・・昏睡状態に陥っています。」
フードをかぶった奴は心配そうに呟いた。
「!」
昏睡状態・・だと?
シンジは眉をひそめた。

第四十六話　診察　1（後書き）

ミヨ登場しました。
シンジはまだ気づいていませんね。
まぁ、名前を知らないのと覚えてもいないからでしょうか＾＾
少し短めに書いてみました。

第四十七話　診察２

シンジは眉をひそめ、ルミルを見入る。

そして冷静に考える。

・・昏睡状態か・・だからこいつは何も反応がなかったのか。

俺の声さえ何も・・・

それよりも・・明日のバトルまでにこいつ意識を取り戻すのか？

ルミルの体の心配より明日のことを心配するシンジであった。

「昏睡状態がこのまま続くと、明日のバトルには間に合わない。

それに起きたとしても・・」

フードをかぶった奴は言う。

こいつが起きてたって入れさえすれば、バトルのほうは何とかなるだろう。

足手まといにさえならなければ。

シンジは考えた。

フードをかぶった奴はルミルの腹の部分に手をかざし、手に魔力を集中させた。

そしてルミルの腹の部分が光に包まれる。

わずかな量だがルミルの魔力が回復した。
その代わりフードをかぶった奴の魔力が減退する。
微量の魔力がルミルの体に注ぎ込まれる。

「ん・・・」

次第にルミル(こいつ)が意識を取り戻した。

「・・・」

「ルミル・・」

フードをかぶった奴は驚いた目でこいつを凝視する。
実際に見たわけではないが雰囲気からは感じ取れる。

「・・・」

こいつはゆっくりとまぶたを開けた。
虚ろな眼をしていた。
そのことにフードをかぶった奴はなぜか安堵していた。

「まだ、完全に意識は取り戻していないようだね。
この状態で完全に意識を取り戻していたらすごいことだけど。」

フードをかぶった奴はそう言った。

こいつに魔力を微量ながらも注ぎ込んだはずだが息一つ乱していない。

シンジは不思議に思った。

ルミル（こいつ）は唇をゆっくり動かした。

「ミ・・ィ・・ヨ・・ォ・・・？」

そんな声がこいつの口から漏れたのが聞こえた。

「？」

ミヨ？

確かそんな名前を以前に聞いたな・・

シンジは遠い目をして思う。

「ルミル・・」

フードをかぶった奴はルミルを凝視して呟く。

「まだ寝てないとだめだよ、ルミル。
目を閉じて。そして意識を沈めて。」

フードをかぶった奴はこいつに優しく笑う。

そしてフードをかぶった奴はこいつの目元に手をかざして何かを唱えはじめる。

「汝に癒しを・・そして安らかな祈りを・・・・そして眠りを・・魔力を回復に導き・・・汝の回復を我は祈る・・・・」

その言葉はまるで歌のように唱えられた。

ルミル(こいつ)はゆっくりまぶたを閉じ、再び眠った。

こいつから寝息が聞こえ始めるとフードをかぶった奴は立ち上がった。

「明日の朝には目を覚ますと思います。
じゃあ、私はこれで失礼します。」

フードをかぶった奴はシンジにペコっとお辞儀してドアのほうへ向かった。

「お前、こいつの何だ?」

シンジはフードをかぶった奴に聞く。

フードをかぶった奴は振り向かず、

「・・友達だとルミルは言ってくれました。
私にとっては・・友達になる資格なんてないと思いますが。
私にとってルミルは・・大切な　仲間(そんざい)　で、
償いの対象　です。」

と、言って去っていった。

シンジは眉をひそめた。

資格がない？
償いの対象？
どういう意味だ？

シンジはそう聞きたかったがもうこの場にはフードをかぶった奴はいない。

シンジはルミル(こいつ)を見た。

魔力がわずかだが取り戻したこいつは多少顔色がよくなった。

こいつに・・こいつに聞いてみれば今の謎が・・解ける。

シンジはなぜかそう思った。

しかもそれにはなぜか確信があった。

その話は次回になるであろう。

第四十七話　診察２（後書き）

今回も少し短いです。
ミヨの名前を聞いたことは覚えてるのに何故気づかないんだと言う方もいるかもしれません＾＾
ミヨの方もシンジに眉をひそませるような謎の言葉を残すのもどうかしてますよねー＾＾
後でルミルが・・・それは次回のお楽しみです。
感想をお待ちしてまーす。

第四十八話　体の源は魔力

ルミルにはシンジとミヨの言葉が耳に届いていた。

そう。それなりに意識はあったのだ。

昏睡状態・・その言葉を聴いてルミルは思ったのだ。

あぁ、そうか。この状態を言うんだ。

この、聞こえているのに返事ができず目を開けたくても見えないこの状態を。

ルミルは声でミヨが来たことを悟っていた。

すぐに起き上がってミヨに挨拶をしたかった。

だが、心がそう思っていても体がついてきてくれない。

魔力がないこの体はいくら精神面ガ強くても動かない。

目を開けることすら、言葉を出すことすらできないのだ。

魔力がなくても意識さえはっきりしていれば気力でカバーができるが気絶すれば体はもう動かない。

体に魔力を取り戻さない限り。

体は魔力と自我（意識）で成り立っている。

片方だけだとかなり不安定だが強い意志があればそれなりに頑張れる。

だが、両方を失えば、もう動くことはできないだろう。

意識だけでもそれなりに限度があるから。

だからかな、

魔力が少しでも体に注がれて多少なりとも意識を浮き上がらせることができたのは。

昏睡状態っていうのはもともと、

意識が心の底に沈んでいることを言っているのも同然なんだ。

魔力が体に宿り、意識が浮上し、声も降り注ぐような感覚もそれにつれ薄れていく。

私はミヨの名を呼んだ。

が、ミヨによって意識は薄れていった。

今度は心の底に沈むのではなくて意識が完全に眠りに落ちる方だったけど。

そして私は目覚めた。

いや、誰かさんの異様な視線で目覚めさせられたとでも言うべきか。

じー・・・

私を・・私しか見据えていない瞳で私だけを見る視線は私を起こすのにはちょうどよかった。

「ん・・・」

私はぼんやりとした意識の中、身を起こした。

視線だけで起きるとは思ってもみなかったシンジが目を見開いたことが私には分かった。

「オマエ・・」

シンジは私を見据えて怒るような?心配しているような?声を出した。

「シンジ?・・ん・・おはよう」

私は首をかしげ笑いかけた。

声はなんかゆったりとした感じの物言いだった。

シンジは私に近づいてきた。

私はベットから降りた。

クラッ

視界が歪んだ。

体はふらつき、前へ倒れる。

シンジは私を支えた。

私の頭がシンジの肩に乗っかる。

私はシンジの肩に顔を埋めて

「・・昨日、ミヨ来たよね?」

と、問いかける。

シンジはコクンと頷く。

あいつがお前の言う奴なら

と付け加えた。

「お前、昏睡状態じゃなかったのか?」

シンジが私に問いかける。

昏睡状態・・・。

シンジはまだなったことがないんだろうなぁ。

「昏睡状態だったよ。
まぁ、昏睡状態って言っても意識が底に沈んでいただけの話だけどね。」

私は苦笑して答える。

「・・・」

シンジは眉をひそめた。

それがなぜか私には手に取るように分かった。

「あ・・私、もう大丈夫だから。」

私はそう言ってシンジを軽く押しやって離れた。

「・・・」

シンジは私をじっと見つめた。

お前が大丈夫って言って大丈夫だったためしがない

そう心の中で言っているんだろうか?

私は考える。

「平気、平気。ミヨのおかげで魔力は回復したし。」

私は気楽にへなへなと笑って見せる。

昨日、サトルたちと戦って勝った。

次は準決勝だ。

と言うか、今日準決勝試合があるんだけれどね。

「じゃあ、食べにいこ?」

私はシンジに誘う。

シンジから私を誘うことなんてないに等しいのだから。クールだし。

というか、シンジがいつも私の言葉を待っているのかもと勘違いしそうにもなるが。

「あぁ」

シンジは頷く。

そして朝食。

いつもと変わらない静かな風景。

以下省略。

そして試合が始まる。

と、その前に一つシンジに問われた。

「あの時、どうやって瞬間移動した？」

そんな言葉だ。

あちゃー。

やっぱり聞いてくるんだね。

「何でだと思う？」

私は質問返しした。

「・・・」

シンジは私の質問に答えない。

代わりに・・

「お前を診た奴とお前はどういう関係だ？
あいつはお前を償いの対象と言っていた。」

と、聞いてきた。

げっ

私はピンチに陥った。

「償いの対象？ミヨがそんなことを？？
まじめな人だなぁ。

あの子そんなに、そのことに負い目があるんだ。
そうだねぇ、償いの対象って言うのは大げさだし、私はミヨを友達（なかま）だとしか思ってないよ？」

私は答えをはぐらかすように言った。

「そういうこともあいつは言っていた。」

シンジはしれッとした感じで言う。

「んー、シンジはそんなに気になるの？」

私はシンジを困らせるように聞いてみる。

「～～」

シンジは返答に困っているようだった。

私から視線をそらして何か考え込んでいるようだ。

素直にいえないってとこが案外シンジの弱点だったりして・・？

私は少しはにかんだ。

「・・・」

シンジは私をじっと見つめる。

「んー、いずれ、話してあげるよ。話す時期は今じゃない気がするし。」

私はそう答える。

いや、話す時期じゃないって言うより私が話したくないだけなんだけど。

「・・・」

シンジは何も言わない。

「・・。シンジ、そろそろホール行こう?」

私は話をそらして聞く。

「あぁ」

シンジは諦めたのか頷いた。

そして私たちの試合は始まったのだった。

第四十八話　体の源は魔力（後書き）

これから、更新が不規則になり、その上、一話一話、話が短くなるかもしれませんのでそこはすみません。

第四十九話　準決勝・・タッグになっていない試合

私とシンジはバトルフィールドにいる。

相手は両方とも精霊に頼りっぱなしの類(たぐい)の人たち。

一人はめがねをかけた内気な少年、リク。

もう一人は金髪の無口な少年、ロド。

中肉中背ってとこだね、二人とも。

そしてバトルが始まった。

「レルガ、いってくださぃ・・・」

「ロルガ・・いけ」

相手は精霊を出した。

レルガが炎属性。

ロルガが水属性。

性格とまるで違う相性の精霊を出す二人。

パートナーの精霊ではないことがよく分かる。

「フィオネ、ステージオン！」

「アーウィル、バトルスタンバイ」

私たちのほうは相手の相性に有利な二体の精霊を出した。

先攻はあっちから。

「・・こんなときによくこんな奴を出そう何て考える・・理解できない」

シンジは私に呟いた。

たぶん私が回復し切れていない状態で準決勝試合

だからだと思う。

こんな奴っていうのはフィオネのことだとすぐ分かる嫌味な発言だ。

シンジにしてはらしくない発言？かなぁ。

いや、そうでもないかな？

「　相性が良いから　って言う理由だと
シンジは考えるんじゃないかなぁって私は思ったけど、
勘違い　だった？」

私は聞き返した。

「・・・」

シンジは何も言い返してこなかった。

言い返せなかったのか、それとも
素直に自分が思ったことを口に出せなかったからなのか、
それは私には分かりかねなかった。

「レルガ、フレアバーストっですっっ」

「ロルガ、フリーズシェスト」

相手は攻撃を仕掛けてきた。

ブウォウォォ・・・カチカチカチッ・・・ヒュー！！！

炎の塊が氷に包まれ私たちのほうへ向かってきた。

「フィオネ、サンダーデスト！！」

私は飛んできた氷を打ち砕くよう命じる。

パッキーン！！

氷が打ち砕かれ、炎だけがこちらを襲いにかかってくる。

「アーウィル、スイリュウだ」

シンジが命じた。

ブゥウォウォオウ・・・・バシャァァァ・・・シュウゥゥルルルゥゥゥゥルゥ

アーウィルの水が竜のように炎を包み、消し去った。

「フィオネ、サンデラ・・」

「アーウィル、ブラッドスイザン！！」

私の声をさえぎるようにシンジが命じる。

いや、完全にさえぎったのだ。

アーウィルの技は漆黒の闇に包まれ水しぶきがこちらにかかる。

ズザー！！・・・シュパシュパッ

そして漆黒の闇に包まれた水の正体は滝をかたどった水の塊だった。

それが相手にと降りかかる。

水属性の精霊はなんともないが炎属性は痛手を受けた。

今ならロルガに当てられるかも。

そう思ってフィオネに命じようと声を出す。

「フィオネ、サンデラル・・・」

「アーウィル、フローズザオレル！」

出したはずだが、途中でまたもや声をさえぎられる。

意図的なものだ！！

シンジは私にやらせない気だ。

二回も声をさえぎられ確信を持った私。

水属性のロルガに氷の刃が激突する。

ズドーン！！

大きな音を立てて相手に当たったはずだ。

ホワン

だが、煙から姿を現す。

相手のほうも防御していたから無傷であった。

「ちっ」

シンジが舌打ちした。

「フィオネ、サンデラルダロ・・・・」

「アーウィル、雨酸急行射（ウサンキュウコウシャ）！！」

私の声をさえぎってまたもやアーウィルに指示を飛ばすシンジ。

ズシャー！！

相手に雨が勢いよく降り注いだ。

「ウアアァァッァァアアァァ」

「つっ！！」

レルガの悲鳴が聞こえた。

ロルガはうめいた。

「うぅ」

「っ～～」

相手は今の状況に何もできず歯を食いしばっている。

私もシンジに何もやらせてはもらっていない。

言葉で言われてはいないものの
何度も何度も声をさえぎられてはしたくてもできないものだ。

シンジはこのまま二人を負けへと追い詰めていた。

私はフィオネに指示をしようとするたびに声をさえぎられた。

・・こうなったら、私、フィオネに心の中で命じてやるっ

私はついに我慢できなくなって心に決めたのだった。

第四十九話　準決勝・・タッグになっていない試合（後書き）

今回は時間があったので書かせてもらいました。
感想お待ちしています。

第五十話　反抗　異次元のハンター

（フィオネ、サンデラルダロレドナ）

心の声で私は命じる。

（！・・・うん）

フィオネの心の声は弱々しいがしっかり頷いてくれた。

グルルルルゥ・・・ズッダーン！！

フィオネは私の言葉に従い技を繰り出した。

二体の精霊にそれが直撃した。

「！？」

シンジは目を見開いてその光景に見入る。

それもいたってゴク単純なリアクション。

私はその反応に納得する。

私は言葉を声に出していない。

心の声で命じたのだから。

二体の精霊は体に電気を帯びさせ苦痛で顔を歪ませる。

相手の二人は

「！！？」

「！！？」

シンジ以上の驚きを見せている。

（フィオネ、とどめにレオスラッシュ！）

私は心の声で言う。

（うん）

フィオネはうれしそうに頷く。

ウールルルゥ・・・スシャー

フィオネは本来の姿を取り戻し、

「アウォーン」

と、雄叫びを上げ雷を瞬時に発動させる。

シュシュッ

雷の刃が槍のように鋭くしゅりけんのように早い。

「レルガ、ファイヤ・・・」

えーと、あっちで誰かが叫んだのが聞こえた。

もう立ち直った??

さっきまでやられっぱなしだったのにどうして??

そう聞きたかった。

いや、今はそんなことを考えてる場合じゃない。

ビリッ・・・ボォウワ・・・・シュゥウゥウゥ

雷の刃は炎に包まれ消し去られた。

そしてその炎がフィオネと私に向かって襲い掛かってくる。

しかたない。

もったいないけど魔力を使おう。

そう心に決めた。

風の精、お願い、私を守って・・

「風よ、我の呼びかけに答えて!!」

私は叫んだ。

ホワンホワン・・・

私の魔力の大半は宙に浮き、風の精に助力を要請した。

〔分かりました。風に愛されし、あなたの頼みとあらば〕

風の精は私の魔力を通して私に伝えた。

ありがとう。

私は礼を言う。

やばい・・時間がない。

「ウィンディーフワフォルド！」

私は叫び、迫り来る炎に手をかざす。

フワーン・・・ズザーーーーー

フィオネの周りと私の周り、

そして有り余った炎がシンジに来ないように風の結界を張り巡らせ、

襲ってきた炎を結界は包み込んだ。

そしてその炎は赤から青へと変わった。

ブウゥオウ・・・シュシャー

青い炎はレルガの方へと戻された。

「グエっ」

「クゥウ」

レルガとロルガはその炎に見舞われた。

そして同時に瀕死状態に陥った。

「・・・」

「・・・」

私たちのほうも相手のほうも呆然とそれを見るばかり。

風の精さん、ありがとう。

私は再び、風の精に礼を言った。

「いえいえ、どういたしまして。
ウィーミアを呼び寄せることができたあなたの頼みならいつでもいいわ。
ただ、呪文を唱えないとあなたの体が持たないわよ。
今のあなたは魔力が交流手段になってるから。
その間に攻撃されたらおしまいよ？」

風の精にお説教を食らった私。

あはは。それもそうだね。

ご忠告ありがとう。

でもそれだと、あなたの声が聞けないよ。

私はにっこり笑って言い返す。

〔それもそうね、でも体には気をつけて。
でないと、いつ、そのお隣にいる方が激怒するか分かりませんよ。
では、そろそろ・・またよんでくださいね〕

うん、そうするよ。またね

私は苦笑しながら風の精に言った。

すると風の精の声は聞こえなくなった。

私の魔力があっちに持っていかれたからだろう。

「勝者、ルミルシンジペアです!!」

審判が勝敗を下した。

その声に私もシンジも相手のほうも我に帰った。

「シンジ・・帰ろ?」

私はシンジに笑いかける。

「・・」

シンジは何か言いたげだった。

だが、やれやれといった風に頷いてくれた。

そして私たちはホールから出た。

しばらく歩いた。

廊下を突き進んで自分たちの部屋が見えたときだった、異変が起きたのは。

視界がグニャっと歪み、周りが何かに囲まれる。

変な空間に閉じ込められたみたいだ。

そして私を閉じ込めた空間は異次元吸い込まれていった。

シンジはそのとき、私のいた空間をまじまじと見つめていた。

シンジには空間に閉じ込められた私が見えてはいなかった。

見えたのは　誰もいない廊下。

ルミルがその場にいたはずの廊下。

忽然と何の前触れもなくルミルは消えたのだ。

「!?」

シンジはその場に立ち竦んでしまった。

ルミルは異次元に連れて行かれ、辺りを見回した。

どうやら、私を狙って誰かが仕掛けた罠のようだった。

そして私の目の前に誰かが現れた。

「あなたは・・だれ?」

私は聞いてみた。

「あんたが、天寿の力を持つ者　なのか？」

そいつに逆に質問された。

そこに現れた人は・・黒髪で黒い瞳を持つ黒い衣を羽織った青年だった。

この人の言葉・・妙に違和感を感じる。

「そうだと思ってあなたは私をこの維持現に無理やり連れてきたんでしょう？」

私は言い返した。

青年は眉をひそめ、

「・・気の強い女・・」

と、呟いた。

言葉自体に違和感はない、だが、その口調が妙に違和感を覚えさせる。

そんなことより、

きっと私に聞こえぬよう呟いたとは思うけど

私はなんたって地獄耳。

「気が強いかぁ。昔よく言われたなぁ。」

私は相手に聞こえるように大きな声で呟く。

「！」

青年は目を見開く。

「それはそれとして、あなたは誰？」

私は話を元に戻して聞く。

「俺はハンターだ。
ほしいものは全て狩る。」

誰？と聞いたのにその答えに全く関係のない言葉が飛び交う。

「あなた自分を偽ってる。」

私は呟くように言った。

さっきから妙にこの人に違和感を感じる。

「偽る・・確かに偽っているな。」

青年はそっけなく言い放つ。

よし、こうなったらこの人の心の中覗いちゃえ。

そう思って、青年の目を見つめた。

闇を宿らせるその瞳から何が分かるだろう？
そんな疑問をはせて、心を覗いた。

（こいつ、やはり天寿の力を宿らせている。
だが、魔力が異常だ。
なぜだ？今も減退して・・！？）

青年は驚いて私を見る。

このひとよくわかったなぁ、私のこと。

私は妙に納得して、心を覗くのをやめた。

「あなたは私に何の用？？」

私は聞く。

「！！・・・俺はハンターだといったはずだ。」

青年は私を凝視して言う。

この人・・私の怪我に気づいた。

ハンター・・・そんな人が何故私を狙う？

私は考える。

ハンターは世に珍しいものを集める職業だ。

狩る仕事もその類に入ってはいるが・・・。

私は戸惑う。

これからどうすればいい??

この人の目的は明らかじゃない。

かといってここでにらみ合いしてる場合でもない。

シンジをあっちに置き去りになってる。

だからここで時間をつぶせない。

やはり、きついがあの手でいこう。

私はここから脱出することを決めた。

「私はあなたに用はない。
だからここから出てくよ?」

私はそういって呪文を唱え始めた。

唱え始めたのは空間を破壊する呪文。

「!?やめろっ!!その呪文はこの空間には効かないっ
下手するとお前は・・・・」

青年は私の呪文内容を理解し声を荒げる。

ビリビリィッ！！

「くぅっ！！」

体に電気が走った。

呪文が中断される。

イッ・・イタイ・・

私は自分自身を抱きしめながら思う。

青年は苦しむ私を見下ろしている。

「くぅっ。・・効かないわけじゃない・・。」

私は痛みに耐えかねながらも言った。

そして私は呪文を再び、再会させる。

「やめろ、無駄だ、そう簡単にはこの空間は壊れない」

青年は静かに言う。

くぅっ！

また電気が体を突き抜けた。

さっきよりも痛みが強まった。

ビリビリビリッ

体に電気が帯びる。

その苦しみに何とか耐え、詠唱を続ける。

やばい・・魔力が足りない・・

次、中断させたらもう・・・

私は非常にやばい状況の中必死に呪文を唱えていた。

しばらくすると空間にひびが入った。

ピキッ

「何!?」

青年は驚きの声を上げた。

「そうはさせるか。」

青年は次の瞬間そう言って呪文を唱え始めた。

中和の呪文だ。

このままじゃ私の呪文の効果は薄れていく。

そうすると脱出は不可能だ。

シンジ・・・。

こんなやばい状況の中でシンジの姿が頭をよぎる。

考えちゃいけないのに、呼んじゃいけないのに。

こんなときに考えたら集中力が途切れてしまう。

こんなときに呼んでしまったら私は弱くなってしまう。

なのにどうして抑えられない。

シンジ・・・シンジ・・・

でも・・そうやってシンジを考えられるから力が湧き出るのかもしれない。

絶対シンジの元に帰ってやる！！

そんな思いが私の心を満たした。

私は呪文の詠唱を強化する。

ビリリッ！！！

体に電気が走り、体中が苦痛に襲われる。

くぅ”ぅう

苦しいけど辛いけど必死に呪文をつむぎだす。

ピキッ・・ピキキキ・・

空間がわれ始めた。

「くそっ。なんて力だっ」

青年は怒りを込めていった。

私は呪文を必死でつむぎだす。

そして・・

パッキーン!!!

空間が割れた。

やったっ・・・

よろこぶのもつかのまま、

その瞬間、青年のこぶしがみぞおちに入った。

「グッ」

お腹に激しい苦痛が襲ってきた。

私の体は空間の壊れたほうへ倒れていった。

青年はにやりと笑って私の腰に手を回そうとしたが、

シュッ！！！

何かの矢にそれを阻まれ私はそのまま空間から落っこちた。

どさっ！！

私はさっきいた廊下に落っこちた。

落っこちた私は廊下でばたっと倒れる。

「おいっ！！」

シンジが私に駆け寄った。

シンジが私の腰に手を回し首を支えて抱き起こした。

途端、お腹に激しい痛みが襲った。

「うぅっ！」

私はお腹を手で押さえた。

「おいっ！！何があった！？」

シンジは叫ぶ。

シンジ・・・。

私は痛みで目が潤み視界がかすんだ。

ぼやけた視界の中シンジの姿が目に映る。

「おいっ！」

シンジの動揺はいまだにおさまらない。

シンジは激しく動揺していた。

私はお腹を押さえ、

「・・・だいじょうぶ・・だから・・」

と、言いながら立ち上がった。

体はまだ電気が帯びていて、立ち上がるのもやっとだった。

シンジも立ち上がる。

私は痛みに耐えながらも部屋のドアノブに手を伸ばした。

シンジは私のしようとすること察してドアノブを回しドアを開けた。

ガチャリ

私とシンジは部屋の中へ入った。

その後すぐに扉は閉められる。

そのドアにもたれかかって私は座り込み、お腹を押さえてうずくまる。

「うぅっ」

「おいっっ！」

シンジは声を荒げひざを突いた。

シンジの手が私の背に触れた。

ビリッ

シンジはとっさに手を離す。

シンジは目を見開いて私を見る。

ビリリ・・・

私は腹痛と体に帯びている電気に苦しめられていた。

それがシンジにも伝わったんだと思う。

シンジは・・あの時、あの青年に矢を放った。

私を助けてくれたんだと思う。

何がなんだか分からないまま。

「おいっ！しっかりしろっ！！」

シンジは私を無理やり抱き起こした。

「くぅっ！」

私はその衝撃でうめく。

シ・・ン・・・ジ・・・・。

私は狭くなった視界でシンジを見上げる。

そうでもしないと意識が遠くなりそうだったからだ。

「おいっ！！」

シンジは声を荒げて私の体を揺さぶる。

「・・だいじょうぶ・・だから・・・シンジ・・れいせいに・・」

私は必死に言葉をつむぎだす。

「・・っ！？・・冷静でいられるかっ、バカがっ」

シンジは目を見開いて言い放つ。

バカ・・確かにそうかもしれない。
私は妙に納得した。
こんな状況で冷静でいられないよね・・・誰でも。
そんなに心配してくれてるんだ。
「っ・・・。もうだいぶ痛みは・・引いたから・・・・・っ」
私は立ち上がろうとしたがシンジが放さないからバランスを崩した。
前へと私の体が倒れこむ。
それをシンジがまたもや支えた。
「お前はほんとにバカだな。
バカとしか言いようがない。」
シンジは半分あきれたように言う。
「ん・・？」
私は首をかしげる。
「お前、その自覚すらないのか・・？
自覚しろ。それと無茶するな」
シンジはあきれ返りながらも静かに怒りを込めた声で言う。

やっぱり・・そう思ってたんだ。

あぁ、これからシンジから隠し通すのむりだなぁ。はぁ。

と、私は半ばため息をついた。

第五十話　反抗　異次元のハンター（後書き）

五十話を突破しました。
今回は少し長めに書いてみました。
少しどころではないかもしれないけれど・・。

第五十一話　理由と酔い

私はシンジと昼食を食べ、その後部屋に戻った。

体がだるくてたまらなかった。

じーーーーー。

シンジはずっと私を見ている。

だるさを表情に出すわけにはいかなかった。

シンジにはいつばれてもおかしくないんだけど。

怪我の治療するにも精霊呼び出したりしないといけないし・・。

んー、どうしたものか・・・。

私がそう考えていると、

「あのときのフィオネは独自の判断だったのか？」

と、シンジから質問された。

シンジは壁によさりかかって私を見つめる。

「んー、あれは独自で判断したものじゃないよ。」

私はシンジにそっけなく言った。

「お前が命じたんだな？」

シンジは私に痛い視線を送る。

「そうだよ。

そう聞くってことは意図的に声を張り上げていたんだね？」

私はシンジの目をまっすぐ見て聞き返す。

「・・・」

シンジは黙ってしまった。

「否定はしないんだ？

じゃあ、どうして邪魔ばかりしたの？」

私はシンジに問い詰めるような口調で聞いた。

「・・・・」

シンジは黙ったまま私を見る。

シンジっていつも自分の都合が悪いときは黙っちゃうんだから。

私はもうちょっと問い詰めてやろうかなと思った。

「ねぇ、理由があったからでしょ？？」

私は問い詰める。

「・・・。」

シンジは何も　言わない　。いや、言えない　の間違いかもしれない。

「私に言えない理由だったの？
じゃあ、私がそれを当ててあげる。」

私はそう言ってシンジに近づいた。

近づいた私に視線を向けるシンジ。

そして私はシンジの額に自分の額をコツンと当てた。

「！」

シンジは何も抵抗はしなかった。
驚いてはいたけれど。

私は目を閉じて意識を集中させた。

〔シンジは私に魔力を使わせたくなかったの？？
使わせたくなかったら邪魔してた？
何も私にしてほしくなかった？
自分のせいで私に何かあるのが嫌だった？
私がいつも無茶ばっかりしてたから？
無茶した後が困るから？
それとも　足手まとい　だから？
それとも・・私がいなくても勝てる相手だったから？

それとも・・私の・・存在自体が・・・・」

私はシンジの頭の中にささやき続けた。

だが、最後までささやき続けられなかった。

シンジがとっさに額を離し、私から目をそらして

「もういい。・・もうそれ以上・・・・・・・」

シンジは辛そうな声で言う。

「シンジ・・・」

私はそんなシンジを見つめていた。

もういいってどういうこと?

シンジは私の何を聞いてそんな風になったの?

どの言葉がシンジを傷つけたの?

「・・・」

「・・・・・」

私とシンジの間に沈黙が訪れた。

しばらくして・・・

「お前・・・廊下から忽然と消えたが何があった?」

と、聞いてきた。

シンジは私から目をそらしたまま聞いてきた。

私はシンジの額に自分の額を再び当てた。

〔あの時、私は空間に閉じ込められた。
そして異次元に連れて行かれた。
不意打ちで何も抵抗ができなかった。
私だけを狙ったものだったと思う。
シンジは連れて行かれなかったから。

そこで見たのは・・人一人だけ。
黒髪に黒い瞳を持ち黒い衣を羽織っていた。
私より背が高い青年だった。
そのとき、誰?って聞いたんだけど・・、
名前までは教えてくれなかった。
ただ、ハンターだって言ってた。

その後、空間を破ろうと呪文唱えて・・
なかなか空間が破れなくて・・体に電気が走って・・
でも何とか空間を破ることができて・・
その後、そのひとにみぞおち食らわされて・・
あの人のこぶしはかなり痛かったよ。
激痛だった。
その後、矢が邪魔して私は戻ってこれたの。
ありがとね、シンジ。」

私は頭の中でささやいた。

「お前が空間を壊さなければ、俺の矢など届きはしなかった。」

シンジは目をそらしたまま、そっけなく言う。

私は額を放した。

「・・ハア・・ハァ」

いつの間にか息が上がっていた。

「おいっ・・お前、今ので・・・・。

・・・あのときフィオネに命じたのはこれと同じ方法だったのか？」

シンジは私を見て言う。

私は肩で息をしながら

「原理は・・・同じ・・だと思うよ。

だけどそれなんかより、魔力を使うほうが・・きつかったよ。

・・私たちの無事と・・勝利・・その二つがあるから、使ったことに・・

・・・こうかい・・・はしてないよ・・・」

と、言った。

そのあと、ガクッとひざをついた。

「おいっ」

左足がしびれだした。
右腕も力が入らなくなった。
薬の効果が薄くなってきたんだと思う。
やばい・・早くシンジがいないとこで薬飲まなきゃ。
「・・だいじょうぶ。・・息切れ起こしてるだけだし。
私、ミヨと約束あるから少し行ってくるね？」
私は立ち上がった。
少しふらつくがたいしたことはなかった。
「その状態でいけるのか？」
「へいき・・へいき。たいしたことないよ。
じゃあ、夕食のときに戻るよ。」
シンジは心配そうに聞いてきたが私は首を振って部屋から出た。
そして休憩所まで行こうと、足を引きずって歩く。
私はゆっくり歩いていた。
そして曲がり角もゆっくりと曲がった。だが・・・・
曲がり角のところで誰かとぶつかった。

ドン

私はふらついてしりもちをつく。

「あ、ごめんなさい・・ってルミルじゃないの！！」

相手は怒鳴る。

「ミヨ！？」

私も声を上げた。

まさか、言い訳に使ったミヨと出くわすとは思っても見なかった。

「ミヨ、声もうちょっと抑えて。」

私は言う。

「ルミル？」

ミヨは怪訝そうに私を見る。

「あのね・・実は言い訳にミヨを使ってたから・・」

そう私が言うと私の部屋のほうからガチャリと音が聞こえた。

「やば、シンジが・・」

「ルミル・・・。

じゃあ、瞬間移動で逃げよっか」

ミヨはそう言って私の腕をつかんで瞬間移動した。

シュパッ

ついたのはどこかの部屋だった。

「ここって・・・」

私が呟くと

「ここは、私が取った部屋。
じゃあ、治療しましょう？
その怪我・・シンジって人にばれそうになったところ逃げてきたんでしょう？」

と、ミヨが悲しく笑う。

「うん。薬の効き目が切れかけて。
ごめんね、シンジが言ってたよ。
私に魔力を少し分けてくれたんでしょう？
ありがとね。」

私はミヨに笑いかける。

「お礼を言われるほどのことじゃないよ。
私は償いをしてるんだから。」

ミヨは言う。

「償いって・・それもやめてよ。
仲間でしょ？
だからさ、償いとか言うのやめてよ。
今助けてもらったのは感謝してるんだから」
私は　ね？　とミヨに聞き返す。
「ありがとう。ルミル」
ミヨは微笑んだ。
「何かあったらすぐ助けを求めるからさ、そのときはお願いね？」
「もちろん。」
ミヨは私のその言葉でようやく心から笑ってくれたみたいだった。
「早速治療手伝ってくれる？」
「もちろん、喜んで」
そう言ってパーカーのすそをまくし立てて包帯を取った。
右腕の傷はぱっくりと開いていて出血が止まらない。
青く腫れて以前より悪化していた。
ウィーミアとミヨの力を借りて治療する。
そしてガーゼを張って新しい包帯を巻く。

次は左足。

右足と同じように悪化していた。

だから同じように治療して痛みを抑える。

ガーゼを張って包帯を巻く。

そのあと、ミヨに新しい痛み止めをもらう。

「ほんとに危ないときに飲んでね？
すぐに効くから。」

ミヨはそう言った。

「うん、わかった。ありがとうミヨ。
悪いけど、買い物にさ、付き合ってくれる？
処置用にたくさんほしいからさ、いろいろと。」

「うん。もちろん」

私の言葉にミヨは頷く。

私はウィーミアを戻してミヨとお買い物。

近くのショップに買いに行った。

そしてその後、夕食の前にミヨとわかれて部屋に戻る。

「ただいまぁ」

そう言って部屋に入ろうとしたけどドアが重くてなかなか入れない。

「ん？・・・！！」

何事かと思って覗くとシンジがそこで寝ていた。

ドアの隙間からなにやら眠りを誘う香りがした。

私は呪文を唱え、香りをかき消した。

そして少し開いたドアから体をよじらせて中に入る。

そして私はシンジの寝顔をまじまじと見つめた。

無防備って感じの寝顔じゃないな・・・

改めてそう思った。

警戒してる・・・

眠っているんだろうけど張り詰めた空気がそう言っている気がした。

私はシンジの体をよいしょとかついでソファまで頑張って移動した。

重くはない。

ただ、体の脱力感が少し重く感じさせるだけ。

ソファに横たわらせた。

ソファは広いからシンジが横たわってもまだ有り余った。

熟睡・・いつもしてないのかなぁ？

そう思いながら私がシンジの顔を覗き込んだとき、

シンジの目がゆっくり開かれた。

まだ寝ぼけているようだった。

「・・・・」

シンジは上半身を起き上がらせ、私を見つめた。

いつもの視線と違う。

そんな気がした私はおかしいのだろうか。

私はいつもの雰囲気を出さないシンジをまじまじと見つめた。

すると突然シンジが私の背に腕を回し、抱きしめてきた。

「！？」

とっさのことで抵抗できずうろたえることしか私はできなかった。

どさっ

そのままシンジは私と一緒にソファに寝転がる。
シンジは私を抱きしめながら横たわる格好となった。
「シンジ・・？」
私は戸惑った。
「・・どこにもいくな・・・」
シンジの口からそんな声が漏れた。
「ぇ・・・・？」
シンジ？？
どうしたの一体・・？
「どこにもいくな・・」
シンジは再び言う。
もしかして・・酔ってる？
私はさっきの香りのことを思い出した。
あの香りには眠りの効果以外にもそれに酔わせる副作用もあった気がした。
もしかしたらその副作用が回ってるのかもしれない。

この普段ならありえない言動が酔っている以外で行われるはずがない。

私はそう確信した。

シンジは普段無口で冷たくてたまに出る言葉は嫌味に近い。

そんな人が　どこにも行くな　なんてて言うはずがないのだ。

「お前は・・いつも無理をする。
無理して笑うお前の表情は笑っているようには見えない。」

シンジは私に言い放つ。

「・・・・」

シンジ・・・。

私は黙ってシンジの言葉を待った。

「お前は・・何故そんなに無理をする?
お前、他の奴らにはそんなところは一切見せないくせに。
何故なんだ?
俺は・・・・・・・・・・」

シンジは私に言い募る。

シンジ・・・。
それが本当にシンジの本心ならいいのに。

これは酔っているからなんよ、ルミル。
ルミル、勘違いするな、これは酔ってるせいだ。

私は必死で自分に言い聞かせる。

「シンジ・・・。
シンジに心配してほしくない。
だから、無理してるんだよ？」

言っても意味がないことだけど思わず私は言ってしまう。

「お前・・そんな理由で隠し事するのか？
お前はいつも俺から遠ざかろうとする。」

シンジは私を見つめて言った。

見つめる瞳がいつもと違う。

今の瞳は優しさが宿っている。

いつも見せないものを・・宿らせている。

「遠ざかろうとなんてしていないよ。
私はシンジにもっと歩み寄りたい。
そう思ってる。」

私は見つめ返して言う。

これは本心だ。

いつものシンジにいえないこと。

シンジに知られてどう思われるのかが怖い私の本心。

「ありえない。
お前は俺を気にかけているようで怯えている。
どこかで俺を避けている。」

シンジはそう言った。

ギク・・

たしかにそうだ。

シンジが心配でシンジをかばって無理をしていた。

でも、シンジに心配されたくないから平気を装って隠してた。

シンジにばれたら後がどうなるかが怖くて・・・。

「シンジは・・・シンジは私をどう思ってるの?」

私は話を変えようと聞いてみる。

一番答えが怖い質問でもあった。

だが、同時に一番聞きたい答えが眠る質問でもあった。

「どこにもいくな。
俺から遠ざかろうとするな。
隠し事をするな。
無理をするな。
その行為全てが俺を狂わせる。
お前はバカだ。
俺のしてほしくない行為をいつも平気でするんだからな。」

シンジが私を見つめて言う。

シンジ・・・そこまで言われたら
私・・・シンジが酔っていること忘れそうだよ。

「シンジ・・・」

私が呟いたそのとき、シンジが頭を抱えた。

「っ・・・」

シンジは小さくうめいた。

「シンジ・・・シンジは酔っているんだよ。
だから思ってもいないことを・・。
シンジ・・・眠って。
そうすれば痛みはすぐに治まるよ・・
今、水持ってくるから・・」

私はシンジから体を離して言う。
そしてシンジに背を向けて行こうとしたとき左腕をつかまれた。
「シンジっ」
私は驚いて振り向いた。
「どこにも行くな。
今は・・今だけは・・・」
シンジは苦痛で顔をゆがめて言った。
そんな顔で言われたら私・・つけあがっちゃうよ・・・
シンジに・・とてもおろかな期待を抱きそうだよ・・・
私は振り返ってシンジを抱きしめてソファに横たわらせた。
「わかった・・・わかったから・・
・・もう・・寝て?」
私は言った。
今の・・今の私はどんな表情で言ったんだろう?
悲しい表情?
辛い表情?
その両方?

私はシンジに力なく微笑んだ。

シンジはその後、すぐに目を閉じて眠った。

私はただ、シンジの傍でたたずんでいた。

あの言葉がシンジの本心ならどれほどうれしいのだろう?

でも、今のシンジは酔っていた。

それは事実。

あの言葉が本心ではないはずだ。

その証拠を私には確かめられない。

確かめたくない。

怖い。

もし今のが偽りだったら・・うわべだけの言葉だったら・・・。

偽りと言うほどまでにいかなくても

シンジが私に何の関心も持っていないのは私には悲しすぎるから。

だから私は確かめたりしない。

後々の旅が困るから。

どうやってシンジと接したら良いのか・・と困ってしまう。

今の段階ならまだ笑って接することができる。

少しずつ歩み寄ることができる。

だから・・このままでいいんだ。

シンジはこの後、目を覚ました。

「シンジ・・・大丈夫?」

私は体を起こしたシンジに向かって言う。

「あぁ・・・だが・・頭痛がする。」

シンジはそう言って頭をさする。

そのしぐさがいつものシンジに戻っていたことを私は悟った。

「今、水もってくるね?」

私はそう言って水をもってこようとシンジに背を向けた。

そのとき、腕をとっさにつかまれた。

「ど、どうしたの?シンジ・・」

私は振り向いて聞いてみた。

内心の動揺を悟られないように。

今、私の心臓はバクバクだった。

呼吸困難になりそうなくらい。

「・・・。・・水はいらない。」

シンジは私から目をそらして言う。

まるで何で自分が引き止めたのかが分かっていないようなそんな感じで。

「ほ、ほんとに大丈夫?

部屋に戻ってきたらシンジ、眠ってて・・・

変な香りがしたからびっくりしたんだけど・・・」

私は気になったことを言った。

第五十一話　理由と酔い（後書き）

今回のシンジはちょっと雰囲気違いますよね。
違うように書いたんだから当たり前なんですが・・・
ご感想お待ちしてます。

第五十二話　疲労抱えて決勝戦

「・・・わからない」

シンジは短く答えた。

それは本心から出たものだと思う。

「そっか・・・。
じゃあ、狙われたとかはないってことだよね。
私じゃあるまいし、狙われるわけないね。
じゃあ、あの香りは偶然のだったのかもしれない。
窓が開いてるからもしかしたらそこから来たのかも。」

私は窓を示して言う。

「・・・・」

シンジは何も言わない。

「・・・・」

この空気非常にやばい気がした。

「シンジ・・、動ける?
動けたら夕食食べに行こ?」

私は戸惑いながらも聞いた。

「あぁ」

シンジは頷いて立ち上がった。

顔色がいまいちだが足取りはしっかりしていた。

「ゆっくり歩いていこうね？」

「・・・・」

私はそう呼びかけて部屋の扉を開ける。

すると、廊下から奇妙な香りが漂ってきた。

「うっ」

思わず来た吐き気に私はうめき、扉を閉める。

一瞬開けた扉の隙間から入ってきた香りは部屋に充満した。

「っ・・・」

シンジは小さくうめきひざを突いた。

「ぅ・・・・、ルーリラ、ルーリラ」

私は呼びかけの言葉をつむぎだしながら人差し指を立てて渦を描いた。

すると・・・

ヒュゥルルルゥ

風があっという間に香りを消し去った。

「うぅ・・・」

私もたまらずひざをつく。

シンジは頭を手で押さえる。

私は口元に手を当てる。

もしかしたら・・・これも意図的な何かがあるかもしれない。

私はそう予感した。

吐き気を何とかこらえてシンジのところへ駆け寄った。

「シンジ・・・。

ごめん、気づかなかった。

廊下に・・・他の香りがくるとは思っても見なかった。

今・・癒すから・・・・。」

私は片手をシンジの額に、そしてもう片方はシンジの胸元に手をかざす。

はぁっ!!

私は気を手のひらに集中させシンジを光で包んだ。

私の吐き気はひどくなり、シンジの頭痛は癒される。

シンジを光で包み込みながら

「少しは呼吸も・・・らくに・・・なるから・・・
ずつう・・も・・・・すこしは・・・・・・ましに・・・なると・・
・おもう」

と、途切れ途切れに言う。

あの奇妙な香りは疲労を呼び起こすものの香り。

偶然なわけがない。

「うぐっ」

私は急激に来た吐き気に思わず口元を押さえた。

呪文も中断される。

「っ・・・。おい」

シンジが私を見て言う。

「・・・」

「うっ・・・・・・な・・に??」

私は吐き気を抑えながらようやく声をつむぎだす。

「無理をするな。」

シンジは私を見つめ、一言言った。

「シンジだって・・・。無理してる。」

私は言った。

「・・・・」

シンジは黙りこくる。

「今日、この部屋から出ないほうが良いかもしれない。
夕食は・・そうだなぁ・・・リュックに詰めてあるもので何とかなると思うから。
明日に備えて・・今日は早く寝たほうがいい。」

私はそういって窓のほうへ向かい、窓を閉めた。

「あぁ」

シンジは頷いた。

私はリュックからごそごそといろいろ取り出した。

リュックの中で通信機が鳴っていたことに私は気づいた。

私は通信機を手にとって耳元に当てた。

「もしもし」

そう言って相手のほうを伺う。

「あ、ルミル？よかった、出てくれて。」

相手はミヨだった。

「ミヨ？どうしたの？突然。」

私は聞いてみる。

「ルミルは気づいた？
廊下に奇妙な香りがしたのを。」

「うん、してた。
ついさっき、それにちょっとやられたの」

「え？ほんとに？
だとしたらもうあれは吸わないほうが良い。
吸うと障害が起きる。」

「やっぱり？
さっきちょこっとだけ障害がね。
あれは何の仕業だと思う？」

「たぶん意図的なものよ。
きっと、おそらくは。
でも、あれは薬品の香り。
薬品を扱う　薬師　がいるのかもしれない」

「薬師かぁ。
だったら、魔薬師じゃない？
だってあれは明らかに有害だもん」

「そうね・・そうかもしれない。
でも払うことはできるから。
じゃあ、私はこの辺で。
これを知らせたかっただけだから。」

「うん、ありがと」

「いえいえ＾＾
じゃあ、また。
明日頑張ってね？」

「うん、じゃあバイバイ」

ポチ

通信機を切って私はシンジの方に向き直った。

「やっぱり・・あれ、意図的なものらしいよ。」

そう呟いた。

「・・・」

シンジは黙ったまま私を見据える。

「まぁそれはともかく早く夕食食べて寝ようね？」

私はわざと明るく言った。

シンジの表情見るとちょっと空気が重いから。

この後、夕食食べて風呂を交互に入ってそれで寝た。

そして朝。

今日はいつもよりだるい朝を迎えた。

それはシンジも同じだったらしい。

「今日さあ、なんかだるいよね？」

「あぁ」

シンジは私の言葉に頷いた。

シンジも感じているらしい。

シンジは酔いのせいもあったからかもしれないが。

このあと、部屋を出た。

廊下からは奇妙な香りはしなかった。

だから朝食を食べに行って、少し時間を置いてホールへ向かった。

うーん、時間がたつにつれだるさが増すのは気のせいだろうか？

「・・・だるい」

シンジが歩きながら小さく呟いた。

まるで私の心を察したかのように。

「やっぱりシンジもそう思うんだ・・・。
でも試合だし、そうもいってられないよねー」

私は呟くように言った。

それからバトルフィールドまで歩いていった。

そして決勝戦が始まる。

相手二人はなぜか白い白衣を着ている。

白衣？

もしかして・・・・

私の頭に嫌な予感が駆け巡った。

私は頭の中で決勝戦相手を調べたときのプロフィールを見た。

一人は男。

ダテメガネをかけた不気味なオーラを放つ人。

名は、サイト。

見るからに文学とか物理とか化学とかを極めてるような人。

そして、もう一人は、女。

髪を結い上げポニーテールにして、白い白衣を着た人。

まるで医術師？と間違えられそうな人。

名は、エルー。

そんなものを見てすぐに頭をよぎったのは昨日の香り。

もしかしたらこの人たちの仕業かも。

そんな推測が出てきてしまう。

頭でそんな推測をしていると、

「あなたたち、お疲れのようですね？」

と、向かい側から声をかけられた。

「それは、あなたたちのほうが理解してるんじゃないんですか？」

私は挑発するように聞く。

「ほほう。私たちを疑いますか？」

「疑うも何も。白衣姿を見れば誰だってねぇ。」

私はもったいぶった口調で言う。

この言葉には二つの意味が込められていた。

それは　香りをしかけたのはあんたたちだとお見通しなんだよ　って意味と

　白衣なんぞ着てたら誰だって医術関係がかかわっていると相場を踏むでしょう？

という二つの意味。

香りを仕掛けたのがあいつらなら前者のように解釈するであろう。
香りを仕掛けた奴じゃないならおそらくは後者のほうで解釈するだろう。
疲れた様子が理解できるのは香りを仕掛けた奴か医者関係しかいないだろうから。
「ほう、あなたにはお見通しでしたか。」
サイトは言った。
「お見通しと言うより、あくまで憶測で言っていたけどね」
私は挑発するように言う。
「憶測なんかで人を疑うんじゃないよ、」
エルーが割り込んでいった。
「あれ?白衣姿見たら誰でも疑いそうなもんだけどなぁ。ポケットには薬品はいってるし。」
私は白衣のポケットを指差して言った。
「なに!?
この距離でお前は・・・。
いいだろう。その度胸気に入った。
うちらの実験材料にしてやるよ」

エルーがにらみながら言った。

「実験材料？
おー、怖い怖い。
それは勝ってからいう言葉じゃなぁい？」

「その挑発受けてたった。
いいだろうやってやろうじゃない。」

エルーは言った。

そのとき、

「では、両者、はじめ！！」

と、審判が言った。

そして体のだるさと戦いながら精霊を呼び出した。

「ウィーミア、ステージ、オン！」

「アーウィル、バトルスタンバイ」

「レドム、実験開始！」

「エスーフィア、やっちゃいなっ」

四人は精霊を出した。

サイトが出したのは雷属性の精霊。

エルーが出したのは念力属性の精霊。

念力はその字のごとく、ものを念で・・・気の力で自由自在に操れる力。

そういう属性もある。

はっきりいうと相性が悪い。

アーウィルは水属性。

ウィーミアは風と音。

雷と水はちょっと相性が悪い。

しかも念力と音は互角だ。

んー危ないなぁ。

まぁ、なんとかなるなる。

私は前向きに考えた。

そしてバトルに集中する。

「レドム、あっちにサンダーをやってください」

「エスーフィア、念力でやっちゃいなっ」

二人は叫ぶ。

「アーウィル、避けろ。」

「ウィーミア、音で粉砕、それと、念力封じ!!」

こっちも叫ぶ。

ダダーン!!

雷が地に降り立つ。アーウィルのいた場所に。

ズズズッ・・・グシャ・・ボトボトボト

念力で動かされた岩石は音で粉砕された。

「レドム、金縛り!」

「エスーフィア、援護!!」

レドムによって私たちは瞬時に空気に縛られた。

「くぅっ」

「ちっ」

私はうめき、シンジは舌打ちする。

「ウィーミア、・・っ・・・・竜巻!!」

私は苦痛に耐え、何とか命じる。

この金縛り、天寿の力があればどうってことはない。

だが、それだとちょっと後からの反動が苦しい。

これは長期戦になりそうだから。

ゴゴゴッゴ！！！！

竜巻が起こる。

「アーウィル、・・・っ！・・」

シンジは苦しくて命じることができない。

「レドム、雷だ。」

「エスーフィア、竜巻を消しちまえ」

二人は命じる。

このままじゃ、やばいな・・・

「ウィーミア、竜巻をもっと作って。
それと・・っ・・・波動刃！！」

私は思い切り叫ぶ。

ゴゴゴゴゴっー！！・・・・スシャッシュシャシャシャシャーーーー

ウィーミアは竜巻を作り出し、それをエスーフィアが消していく。

ダダン!!・・ダダン!!ダダッー!!

レドムの雷をアーウィルはことごとく避けていく。

だが、多少腕をかすった。

「っ・・・アーウィル、フローズだ!!」

シンジは苦痛で顔を歪ませ命じる。

アーウィルは雷をガシッと素手でつかんだ。

ビリビリリッ・・・

そんな音が聞こえた。

金色(こんじき)色の雷はやがて青色に変わっていく。

「レドム、金縛り強化。」

サイトが命じる。

ぐぐっ

金縛りのせいで痛みが体を突き抜ける。

「う”” ぁ”っ”」

シンジがたまらず悲鳴を上げる。

シンジはひざをがくっとついた。

シンジの体から魔力が吸い取られているように見える。

シンジは歯をくいしばって立ち上がろうとする。

シンジ・・やめて。
もう、そんなに無理しないで。
おねがい・・・
私よりひどい目にあってるあなたを見たくない・・・

どんなに願ってもそれは口に出してはいけなかった。

そしたら、シンジの今の行為は無駄になってしまうから。

シンジのためなら・・・シンジを救うためなら・・・
天寿の力を解放する!!

「ウィーミア、蛇旋律!それと、竜巻で香りを封鎖!!」

私はそう言って天寿の力を解放させた。

ギギィ・・ぎぎぃ

金縛りの力が私に抵抗している音が聞こえる。

私は腕に力を込めて

はぁっ！！！

と、気を放った。

ブチッ！！！！

金縛りの縄が切れた。

そして私は自由になると、シンジに手をかざし、

「解き放て！！」

と、声を張り上げる。

ブチッ

金縛りが溶けた。

シンジはガクッとひざを突く。

「なに！？」

サイトが驚愕した声を上げる。

シュールルルゥ

ウィーミアの蛇旋律はレドムを拘束した。

そしてひそかに放っていたエスーフィアの香りも消し去った。

「くそっ、ばれてたか！！！」

エルーが叱咤した。

「アーウィル・・・うぅっ！」

シンジは立ち上がろうとしながら
アーウィルに命じようとするがうめきで中断される。

「シンジ、むりしないで」

私は言う。

だが、

「俺を甘く見るな」

の、一言を言い返された。

「・・・・・」

私は何もいえなかった。

「ッ・・・アーウィル、ラガルスラーシャ！！」

シンジは苦痛で顔をゆがめながらも命じた。

「エスーフィア、レドナクラスト！！」

エルーは立ち直り命じた。

アーウィルの持つ青い雷の刃に青い輝きが生まれた。
破壊力と鋭さが含まれた武器にそれは変化した。

エスーフィアの尻尾が増えた。
そしてその尻尾は強大な威力を誇る武器と化した。

念の威力でそれはさらに増した。

その二つの武器が炸裂し合った。

互いが互いを攻撃しあう姿。

キン！！・・・キン！！・・・・キギィ！・・・・

刃物が交わう音。

それが幾度か重なったとき、アーウィルに隙ができた。

グサッ

そこをすかさず、エスーフィアが突き刺した。

グイ

アーウィルはそれを手に持った。

「ラドレフローズボルト！！！」

シンジがそこで声を張り上げた。

次の瞬間、アーウィルからエスーフィアに何かが伝わった。

「グワァッァァァ！！！！！！」

突如エスーフィアの悲鳴が鳴り響いた。

青い光がエスーフィアを飲み込んだ。

それがエスーフィアを苦しませる元だろう。

「ウィーミア、レドムに、地獄暴風蓮焼（じごくぼうふうれんしょう）！！」

私はそれを呆然と見ているサイトたちに当てるよう命じた。

ズドウグルルルゥ！！！！！

音、風、炎、それら全てが狂った技。

これを受ければ、もう動けまい。

「レドム、ルドラレルゴ！！」

レドムの出した技は狂った技に飲み込まれた。

そして

ドッカーン！！！

第五十二話　疲労抱えて決勝戦（後書き）

今回長いです。
戦闘は終盤ですが次回に続きます。

第五十三話　技爆発続き

私は爆風で吹き飛ばされる前にシンジをかばった。

ズドッ

背中に大きな衝撃が当たる。

それは大木。

フイールドにある大きな大木に私は打ちつけられたのだった。

ずるッと、打ち付けられた場所から落ちる。

「オマエ・・！？」

シンジは驚きの声を上げる。

「っ・・・・」

私はうめきながらシンジを支えて立ち上がる。

いくら天寿の力を使ってたとはいえ、

重傷な怪我が二つあるから体はぼろぼろだった。

フィールドは煙に撒かれてた。

相手はどうだろう？

そう思ったときだった、突如、矢が襲い掛かってきたのは。

「！」

シンジは目を見開いていた。

私はシンジをグイッと引っ張って避ける。

「まだだったみたい・・・。
ウィーミア・・・ーーーーーーー！？」

ドカーン！！

私の声をさえぎって、避けたはずの矢が爆発した。

爆発に私は巻き込まれた。

シンジは間一髪で無事だけど。

「くぅっ！」

背中に激痛が走る。

私は地面に倒れる。

すると次は地面が盛り上がった。

やばい！！

本能がそう叫び、シンジを突き飛ばして、自分も転がりながら避け

た。

ドカドッカーン！！！

「つぅ！！」

苦痛に顔をゆがめた。

私は何とか立ち上がって、シンジに駆け寄る。

シンジは天寿の力を使っている私と違って無防備だ。

こんなときに怪我でもしたら・・ただじゃすまされない。

すると、次は雷が落ちてきた。

ズダーン！！

私はシンジをグイッと引っ張る。

だが、腕がかすった。

「っ！！」

「シンジッ！！」

私はシンジを引き寄せてシンジをかばうように覆いかぶさる。

（ウィーミア、アーウィル、防御しながら攻撃して。判断は任せるから）

心の声で二体の精霊に話しかける。

（はいッ）

（主のことよろしくお願いします。）

二体は答える。

（全力を尽くすから）

私も答えて、バリアを張った。

体中のあちこちが痛い・・いや、激痛が走る。

だが、我慢しなければならない。

「シンジ、傷見せて！」

私はシンジの腕を見た。

「っ！！」

シンジは苦痛で顔をゆがめる。

私はシンジの傷を見た。

「毒！？」

私は思わず傷を凝視した。

毒が入り込んでる・・・
ヤバイ・・猛毒だ。

「シンジ、痛み以外に何か感じる!?」

「くぅ”っ”!!」

シンジは辛そうに顔をゆがめる。

私の問いかけに答えられない。

毒を抜くしか方法はない。
シンジを助けるためにはもう・・・それしかない!!

「・・・。シンジ、ごめん」

私はシンジの傷口に唇を当てた。

「っ・・!?」

シンジは苦痛に顔をゆがめながらも私を凝視する。

私はシンジの傷口から毒を吸い込む。

「・・・。っ・・げほっ」

毒が口の中に入り込む。
それを地面にはき捨てた。

それを何度も繰り返す。

だが、シンジの容態は悪化していく一方だった。

「くっ！・・・ハァ・・ッ・・・ハァ」

肩で息をして、うめく。

「シンジ・・・。
もう少し苦痛に耐えて。」

私はそう言って次は手で腕の傷を包み込む。

「はぁっ！！！！」

私は気を手のひらに集中させ、魔力を開花させた。

そして、流し込む。

「毒よ、体の中から消し去れ！！」

私の言葉の呼びかけで腕の傷から光が漏れた。

光は傷口から体内にもぐりこみ毒を消滅しに向かう。

「く”っく”っぅぅぅぅ”””！！」

シンジが悲鳴に近いうめき声を出す。

毒が消滅したと思う頃にはシンジは私に体を預けていた。

ぐったり状態で体が火照っている。

「シンジ、もうちょっと・・でいいから頑張って。治療するから」

私は気力を振り絞って言った。

シンジは小さく頷いた。

私は腕の傷口に手をかざし、天寿の力を込めた。

「天の力よ、わが身に宿りし力もて汝の傷を癒せ。」

私は呼びかけの言葉を唱える。

そこから、白い光があふれ出した。

出血は止まり、傷口もふさがっていく。

完治までもうちょっと・・・のところで私は魔力を失いかけた。

毒は消滅しているはずなのに治りが遅いということがあったせいかもしれない。

私はバリアの外を見た。

まだ乱闘は続いていた。

私はゆっくり気配を探る。

二人は重傷を負いながらも命じてることに気がつく。
今は完全にフィールドはあっちの作り出した世界になっていて
こっちからは見えない。
「ウィーミア、ゼロガフォーラドル！！」
私は叫ぶ。
すると、遠くで爆発音が聞こえた。
ドカ、ドカン、・・・カチカチッ・・パキン・・パリン
バリアを張っているせいでもあって音は多少封じられる。
だが、私の声は聞こえてるはず。
「っ・・・」
シンジはまだうめいている。
私がシンジを気にかけていたとき、バリアにレーザーが当たった。
パッリン！！
バリアは壊され、またもやシンジの腕をかすって通り過ぎる。
その後に、爆発され、爆風が襲う。

「シンジッ！」

せっかく治したのにッ

このままじゃ、シンジがッ

舌打ちしたい以上の気持ちに駆られた。

私は傷口を見た。

さっき以上の重症だ。

「つ”ぅ”！！！！」

シンジはうめく。

やばい、これも毒入りだ。

「シンジ！！」

私は傷口から毒を吸い出しにかかった。

「げほっ・・げほっ」

何回もやる。

だが、私のほうにも限界があった。

絶対あいつら許さない、絶対に。

私の心は怒りに満ちた。
天寿の力を半分以上出さないと、やばい。
目の色だけじゃ、足りない。
こうなったら、髪も・・・・
「毒よ、消滅せよ!!」
私は叫び、シンジの傷口に手を当てる。
青い光があふれ出し、毒を消滅させた。
だが、
「っ!・・・ハァッ!っう”っ!」
シンジは悲痛なうめき声を上げる。
体は燃えるように熱くシンジを苦しめている。
「シンジ・・目を閉じて。
私を見ないで。
今、治してあげるから」
私はシンジを背後から抱きしめ、傷口に両手をかざし、白い光を放つ。
そのとき、私の髪のひとふさが銀に染まる。

ホワーン

傷口はふさがった。

だが、完治はしていない。

シンジはもう体力の限界だ。

「っぅ”っ！・・・アーウィル・・・」

シンジが小さく呟いた。

シンジ・・・。

敵をとってあげるから。

アーウィルとウィーミアの手であいつらを。

私は怒りで満ちた心を解放した。

（あいつら、許さない。

アーウィル、ウィーミア、

ありったけの力を出して、あいつらの急所を私のあげる武器で倒して。）

怒っているはずなのに頭は割りと冷静だ。

私は体から二つの光を放った。

一つは　怒りの光

一つは　勝ちたいという執念の光

そして、ウィーミアたちはそれを手にとって、相手に襲い掛かった。

キン！ドカ・・バカーン！！・・・ズシ、グサ・・・ゴゴゴゴゴッ！！！

いろいろな音が聞こえる。

シンジはかすかに目を開ける。

「シンジ・・後で完治させるから、その傷は。
だから少し待っててね、あいつらを倒すから。」

私は静かに言った。

ウィーミアたちの乱闘がそこにはあった。

そして私の放った光は相手にとって脅威となり、抵抗は無駄なあがきとなった。

そして、ウィーミアたちはあいつらの腕輪を粉砕させた。

シーン

静まり返るホール。

その中に

「しょ、勝者、ルミル、シンジペア！！！」

と、声が響いた。

その一拍おいた後に

わあああぁあああぁぁぁぁ！！！！！！！

と、歓声が送られた。

私は勝ったことに安堵してウィーミアを戻した。

「ウィーミア、ありがとう。私のために。シンジのために。体を傷つけてまで。」

「大丈夫です。ほんとにあなたが無事でよかった。後でよんでくださいね。」

「もちろん、部屋に帰ったらすぐに呼ぶよ」

そんな会話を残して。

「アーウィル、ありがとう。」

私はアーウィルに向き直る。

「お礼を言うのはこちらのほうです。
主を助けてくださりありがとうございます。」

「まだ油断できないの。
でも全力は尽くすよ。
ほんとにありがと。」

アーウィルは最後に微笑んでリングに戻っていった。

そういえば、明日だよね、表彰式は。

私は不意にそう思って、シンジを抱えて、瞬間移動した。

シュパーン

部屋に一瞬で到着した。

私はソファにシンジをもたれかかせて傷の具合を見た。

シンジは虚ろな眼をして苦しんでいた。

やはり体力的に限界がある。

「シンジ、完治させるから。
だから少し頑張って。」

私はそう言いながら目を潤ませる。

シンジ・・・私がもっと強ければ・・・
油断さえしなければ・・

怪我せずにすんだのに・・
もっと早く天寿の力を使っていれば・・・

私は後悔していた。

そして同時に傷が重症で痛々しくて、シンジを見ているだけでも泣けてきた。

私はシンジの傷口に涙の雫を落とした。

「っ・・」

シンジが顔を歪ませる。

「だいじょうぶだから・・」

私はそういいながら変化の呪文と癒しの呪文を同時に唱えた。

雫を癒しに変えて傷を治す。

それを何度も繰り返す。

シンジのことを思いながらすることは
私の限界をはるかに超えていた。

魔力も体も全てが限界を超えていた。

普通なら意識だってなくてもおかしくない。

しばらく呪文を唱えて、シンジの傷は完治させた。

シンジも肩で息をしなくなった。
だが、体は火照っていて熱い。
毒はなくなったはずなのに。
苦痛で
激痛で
耐えかねて
うめいて
体力の限界で
それなのに
なぜ、あなたは私をそんな目で見るの？
虚ろな眼をして、
熱に浮かされて、
意識だってはっきりしないのに
どうして？
私はシンジを呆然と見ることしかできなかった。

「シンジ・・・。
もう終わったから。
勝ったから。
もう、寝よう？」

私は言った。

いや、ただ言っただけじゃない。

私は今、必死で声が震えないように言ったんだ。

今・・泣いているから。

「・・・・」

シンジは何も言わずに私を見つめる。

私もシンジをじっと見つめる。

どれくらいそうしていただろう。

私は気づいたら、寝ていた。

ソファのふちに頭をおいて、シンジの手を握って。

気づいたときにはもう夜だった。

立ち上がろうとすると体に痛みが走った。

「っ・・・」

そういえば・・自分の治療は一切やらなかったんだっけ。

今思い出したかのように自分の体を見やる。

だが、右腕と左足以外どこにも重症はない。

打撲とかはいろいろしてたけど。

私は治療にウィーミアを呼び出し、手伝ってもらった。

そのとき、髪はしばらくしないと戻らない　って言われた。

それもそうだろう。

ひとふさとはいえ髪は青色ではなくなってしまっているんだから。

私はそれが終えた後、シンジをベットに寝かせて自分も寝た。

疲れたなと脱力感を残して。

第五十三話　技爆発続き（後書き）

長くなりました。
二話にあたってのバトルとなりました。
バトルの成り行きが書いている私にもめちゃくちゃでした。
感想、評価お待ちしてます。

第五十四話　表彰式　ｏｒ　ミヨの発案

「オマエ・・俺をあれだけ庇っておいて傷がないと言い張るか？」

翌朝、シンジにそういわれた。

そのときのシンジはマジに怖かった。

今、私はすごくピンチです。

「傷がないなんて一言も言ってないよ。
何度も言ってるよ？打撲とかだけですんでるって」

私は後ずさりしながら言う。

シンジはもうすっかり体力は回復している。

怪我も完治してるし、もうシンジのほうは完璧だった。

「あれは打撲だけではすまないはずだ。
見せろ」

シンジは私に近づき、右腕をつかむ。

「っ・・・」

右腕は元から重症であったから余計に痛みが体に走った。

「ほらみろ。つかんだだけでこの有様だ。

傷を見せろ。」

シンジは静かに言った。

そしてパーカーのすそをまくろうとした。

「ちょ、ちょっとっ待っ・・・!?」

「!?」

私はシンジがすそをまくろうとしたのを防いだ拍子にスポンとカツラが取れた。

あちゃー

内心そう思った。

私の髪は今、青　ではなく　銀　だから。

それが理由。

「オマエ・・その髪・・・!!」

シンジは私の髪を凝視した。

「あ・・・。これは・・・その・・なんていうんだろうね、説明しにくいけど・・。
これね、私が怪我してないのはねこのおかげでもあるんだよ」

私は曖昧な答えを言う。

「どういうことだ?」

「んと・・・。
髪の色素を魔力に変えた・・・ってことかな。」

私は首をかしげて言ってみせた。

ほんとは違うけど・・・

「魔力であれはどうにかなるものだったのか?」

シンジは疑り深い視線で聞いてきた。

私がそれにどう答えようかと悩んでたそのとき、救いの神は来た。

コンコン

それはノックの音。

私はパァっと顔を輝かせ、シンジは何故か舌打ちをする。

ラッキーヘ・・ヘ

「だ、だれかな??」

私は内心の喜びを抑えながら呟く。

「はぁーい」

私はノックされた扉まで歩いてその扉を開いた。

ガチャリ

「あ、ミヨっ！！」

私は顔をさっき以上輝かせた。

「ルミルっ。・・・・・」

ミヨもはじめは喜んでくれたみたいだ・・・でも・・。

「あの・・シンジさんが・・なぜか機嫌悪そうに見えてるのは気のせい？」

ミヨは私から少し離れた後ろにいるシンジを怪訝そうに見る。

私は振り向いた。

確かにすごくすごく機嫌が悪いかもしれない。

シンジがこめかみのところへんにお怒りマークをつけている。

表情は曖昧だが。

「もしかしてお取り込み中だった？」

ミヨが申し訳なさそうに言う。

「ううん、ぜんぜん」

私は首を横に振る。

「なら良いけど・・。
あ、もうそろそろ表彰式始まるよ、二人とも急いだほうが良いかも」

ミヨが明るく言った。

「うん、ありがとう、ミヨ。
じゃあ、それ終わったら話そう?」

「もちろん。待ってるから。
それと優勝おめでとう。」

「ありがとう。
あの時頑張ったかいがあったよ。
じゃあ、そろそろ、・・シンジ、行こう?」

「・・・。あぁ」

私はシンジに声をかけた。

シンジは妙に痛い視線を私に向けて頷いた。

あぁー、神様ありがとう。
ミヨ、恩に着るよ。

私はすごくすごくミヨと神様に感謝した。

そして私とシンジは表彰式に出た。

パーンパーンパパーーンパーン。パカパカパンパンパーーン

パカパカパンパンパーーーンパーン　パンパンパーンパパーーン

表彰の音楽が鳴り響く。

その中で

「えー、今年度、七色シティに行われた（なんとか）回目七色大会において最優秀賞という大変いい成績を残しましたので、その栄誉をたたえ、ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーこの七色の宝玉を授与する。」

と、いうとても長い言葉を聞いた。

ーーーはとても長すぎて耳に入らなかった言葉である。（省略した部分）

そして、七色の宝玉を受け取った。

それは絶大な光を放つ宝玉だった。

受け取り後、早々に表彰式は終わった。

もっとあの言葉が短かったらよかったのに・・。

そう思うほどだった。

その後、シンジを部屋においてミヨと二人で話した。
傷の具合も見せた。
「こんな重症でよく動けたね・・・。
せめて一日は安静にしてないと・・
このままだと腕と足が使い物にならなくなっちゃう・・。」
ミヨは口元に手を当てていった。
「えっ、それは困るッ。どうしよっどうしよっ!!」
私は慌てた。
それはヤバイ。
そんなことがあったら・・シンジが怖い。腕の心配より。
「一つ方法があるにはある。」
ミヨは言った。
覚悟があるような瞳で私を見ながら。
「え・・もしかして・・」
それを私は予感した。
「私がルミルの代わりになってしばらくルミルを休ませる。
・・・それしかないよ。」

ミヨは言った。

ズドーン

私の予感は的中した。

まさに私の予想通りの言葉だった。

ミヨなら・・自分をどこまでも追い詰めるミヨならいいかねないと思った。

「ミヨ!?・・いいの?ミヨは・・あのシンジとだよ!?」

私は聞いた。

ミヨにそんな代役は任せられないと思った。

シンジは鋭い。

私を見ていないようでいてしっかり見ている。

そんな人にばれやしないだろうか?

「元はと言えば私の責任だから。」

ミヨは言う。

ミヨ・・・。

ミヨの自分を責める気持ちは私にとっても見ていて辛い。
このとんでもない発案を見事実行し、こなせれば、ミヨの自責の念はなくなるだろうか？
私は怪我のためではなくミヨのために頷いた。
「わかった。じゃあ、約束して、ミヨ。
もし実行してそれが成功したら
もう、私に怪我をさせたことで悩まないことを。」
私はミヨをまっすぐ見つめた。
ミヨは戸惑いながらも頷いた。
「これで交渉成立ね。」
私は微笑む。
「ありがとう、ルミル。」
ミヨは頷いた。
「じゃあ、そのことだけど、その策は出発間際ではじめてもらえる？
その前にマリアのことがあってさ・・。」
私は苦笑しながら言う。
そういえば今の今までマリアのことをすっかり忘れていたのだ。

「もちろん」

ミヨは笑って頷いてくれた。

「シンジは手ごわいからさ・・・ヒソヒソ・・・」

「え、いいの?・・うんうん・・それで?・・・」

「んで、もし・・・ばれたら・・・・・ヒソヒソ」

「時間稼ぎは・・最低で一日。最高で三日だよ?」

「わかった・・・シンジさんは・・手ごわいんでしょ?」

「うん。てごわいよ・・それと・・さん付け禁止」

「分かった・・直すよ。それに・・・ひそひそ」

「おぉ、できる?だいじょうぶ?」

「だいじょうぶ。ルミルとは、顔もそっくりだし、だったら・・・ひそひそ」

「うん・・信じるよ。何かあったらすぐに飛んでくから」

「うん、そのときは。」

「んじゃ、そういうことで、がんばろう」

「おー」

最後にミヨと会話して二人は笑いあった。

私がミヨと話したことはそのときになったら分かるだろう。

話を変えて、その後、私はマリアに会った。

そして告る状況を設定し、先攻はマリアとなった。

そしてついにその時間となった。

ホールの裏側にシンジをつれて私は行った。

私がシンジにせがんで頼んだのだ。

そして・・夕日が西に沈みかける頃、マリアは告白した。

「私、シンジ様のことが好きです!!」

と。

「・・・・」

シンジは目を見開く。

次の瞬間、シンジは・・言った。

第五十四話　表彰式　ｏｒ　ミヨの発案（後書き）

いいところで今回は終わりにさせていただきました。
次回をお楽しみに。

よければ評価、感想ください。

第五十五話　ルミルの不戦勝？

「お前・・だれ？」

ガクッ！！

私はその言葉を聴いてまともにこけた。

シンジ・・・。

ほんとにおぼえてなかったの・・！？

以前私はマリアに言おうとした。

マリアのこと忘れてるかも　と。

でも、マリアのためにそれは言わないでおくことにしていた。

マリアがシンジにアピールするたびに

いくらなんでも覚えているんじゃないかと思うようになったからだ。

でも・・まさか・・これほどまでとは・・・・。

「っーー！？」

マリアは真っ青な顔でシンジを凝視し、目を潤ませてどこかへ走り去っていった。

「・・・・」

シンジはその後姿をただ無言で見ているだけ。

「・・かわいそうに・・・」

私は思わず呟いた。

はっきりいって、私はマリアのすることに嫉妬なんて一切しなかった。

マリアって逆上すると怖いからただ見守るだけであった。

でも・・今回ばかりは見守ると言う方法はあまりにも薄情に思えてきた。

「ほんとにシンジ知らないの?」

私は思わず聞いてみる。

「名前は知らない。」

シンジはむすっとした表情で言う。

「覚えていなかったんだ・・。

シンジはあの子に一切興味関心はなかったの?」

私はシンジの傍によって聞いてみた。

「俺が何故、興味関心(そんなもの)を持たなければならない?」

シンジは逆に質問してきた。

そんなものって・・・・。シンジ・・・恋愛には程遠いタイプだな。

・・それと・・・女心わかってない・・・。
私も・・そういうのには疎いけど・・・。

「んとさ、シンジは不思議に思わなかった?
やたらとあの子が話しかけてくること。」

私はその質問に質問を返してみた。

「そんなもの、気にとめたりはしない」

シンジはそっけなく言う。

アピール(そんなもの)って・・・。
かわいそう・・・。
じゃあ、私はどうなんだろう。

「そっか・・・。
じゃあ、私は?」

「?」

私の唐突な発言に眉をひそめるシンジ。

「私には興味関心(そういうもの)があった?」

私は具体的に聞いてみる。

「・・・・」

シンジは黙る。

もしかして迷ってる?

「・・ないわけじゃない」

シンジは間をおいて答えた。

「ぇ・・・?」

い、今、ないわけじゃないっていった?

聞き間違いじゃない??

私は戸惑った。

「ほ、ほんとに?」

「俺に二度言わせるつもりか。」

私の戸惑いにシンジはいらついた口調で言う。

「・・よかった・・」

私はひとりでに呟く。

なぜかそのことに私は安心した。

それは・・なんで?

自分でも不思議に思う。

「えとね・・・、告白(これ)が終わったら
シンジに種明かししようと思ったんだけど・・・聞きたい？」

私は話題をそらせて聞く。

マリアは告ったけど名前忘(ふられた)れられてたから私の不戦勝みたいだから
聞いた。

「きにならないわけじゃない」

シンジはサクッと言い放つ。

それは・・つまり・・

気になる＝聞きたい

と、解釈していいのかな？

「えーと、どこからはなそうかなー。
じゃあ、始めから話そうか。」

私はそういって過去の出来事を思い出す。

「えとさ、サトルのペアの相手がマリア(あのこ)だったでしょ。
私、もともと知り合いでさ、
シンジたち(あのとき)と初対面、私呼ばれたでしょ？マリアに。」

私はシンジに確認の意味で聞いてみる。

「あぁ」

シンジは頷いた。

「あの時さ、私となんでシンジが一緒にいるのかって聞かれたんだよ。
それでさ、いろいろ話がひねくれちゃって、結局、私さ、恋敵にされたんだよ。
初対面の頃からシンジに思いを寄せてたんだよ。マリアは。」

恋多き女ってのはマリアを指すんだよと私は思いながら言う。

「・・・・」

シンジは黙ったまま私の話に耳を傾ける。

「それでそれからというもの、
昼食やら幽霊屋敷とやらいろいろ協力させられたわけ。」

私はやれやれといった風に話す。

「幽霊屋敷(あのとき)のペアはお前の仕業だったのか？」

シンジは私に聞いた。

「・・・！」

私は一瞬驚きすぎて言葉が出なかった。
それはシンジがあまりにも真剣な顔つきで聞くからかもしれない。
「あ、くじ(あれ)も協力させられてたから・・・。
シンジには・・やっぱりペア(あれ)がマリアはいやだった?」
私は戸惑い驚きながらも聞く。
「・・・・」
シンジは何も言わない。
私はそれを　肯定　と解釈した。
「じゃあ、私とだったらよかったの?」
私は気になって聞いた。
「・・・・」
これまたシンジは何も言わない。
次はどう解釈していいか、わからなかった。
「マリアみたいな性格はシンジはやっぱり向かなかったみたいだね。
マリアにも忠告したのになぁ。」
私は最後独り言のように呟いた。

「・・アピール(あれ)を手伝っていてお前はどうも思わなかったのか？」

シンジは私を探るようなまなざしで聞いてきた。

さっきと同じような真剣な顔つき・・・・。

私はゴクッとつばを飲み込んだ。

「・・どうも思わなかっただけじゃないよ。

ただ・・・、恋敵にされて、

同じような条件で今回のような場を告白するチャンスをつくられたからさ、

私もちょっと戸惑ったんだけど・・・。

まぁ、でも、言う必要もなくなったみたいだから、今はいいかと思って。」

私は夕焼けを見ながら言う。

そうそう、不戦勝なんだし・・。

「言う必要がない？」

シンジは眉をひそめて言う。

「・・。

だって、マリア、今のショックで私のことなんか気にしないだろうから。

それに、あんな、あちこちで魅了されるマリアに負けたわけじゃないし。」

私は言い訳を言うような口調で答える。

「・・・」

俺のどこを?

シンジはたぶんそんなことを聞きたいんだろうなと、今の無言で解釈した。

「シンジの性格自体がよかったんじゃない?外見も・・・まぁ、格好良い・・方だし・・・・」

言葉が最後のほうになるにつれ小さくなっていった。

「まぁ、これで大体の謎は解けたでしょ?」

私は早くこの話題を終わらせたくて言った。

「・・あぁ」

シンジは頷いた。

「じゃあ、そろそろ、部屋に戻ろうか。」

私はそう言って部屋に向かって歩き出した。

シンジも歩き出して、部屋に向かった。

第五十五話　ルミルの不戦勝？（後書き）

マリアのおかげでこの話がかけました。
いや、この話が書きたくてマリアを出したともいえますが。
もう少し、シンジとルミルの仲を進展させようかとも悩んでいます。
この話が読者の皆さんに合うようでしたら感想を下さるとうれしいです。
次回はミヨの発案大公開です。
楽しみに待っていただけたら幸いです。

第五十六話　発案実行・・大丈夫??

そしてマリアが告白した翌日、七色シティをたつことにした。

リュックを背負って私とシンジは宿を出る。

その直前に私はミヨと会った。

「あ、ミヨだ。
ねぇ、シンジ、ちょっと話してきてもいい?」

「・・あぁ」

私は聞き、しんじは頷いた。

よし、第一関門突破だ。

心の中で呟き、ミヨに向かって走った。

ミヨは宿の二階に向かって歩いていった。

私もそれを追いかけていく。

そしてシンジから私たちが見えないところでおちあった。

「どう?怪しまれてない?」

ミヨは聞く。

「大丈夫。それより早く、幻覚でコピーしなきゃ。」

私はミヨをせかした。

「わかってる。今、やるから」

そう言ってミヨは呪文を唱えだす。

するとミヨは服装まで私と同じになった。

髪から足まで全てが全て同じになった。

「これでどう？」

ミヨが聞く。

「うん、ばっちり。
じゃあ、記憶を共有するから額をこっちに向けて？」

「うん」

私とミヨは額をコツンと合わせた。

ピピッーーーーー

頭の中がつながった感覚がした。

「よし、これでばっちり。
あとは、私は安静にベットで寝てるから
頑張って。

今ので私の言動パターン分かったでしょ？」

「うん、もちろん。
後はそれをどう怪しまれずにシンジに接するか、だね」

「そうそう、よく分かってるじゃん。
じゃあ、頑張ってーファイト！！」

「うん、だからそっちも休んでよ？」

「もちろん。
ミヨの犠牲はむだにしないから」

「犠牲って大げさすぎ。」

「おおげさじゃないよ。
じゃあ、時間稼ぎ頑張って。」

「もちろん」

「じゃあね」

「ん、またね」

私とミヨはそうして別れた。

ミヨはできるだけうれしそうに装って

「シンジ、お待たせ。
ちょっと、長くしゃべりすぎちゃった。」

「・・。おそい」

ミヨがそう言うとシンジは間をおいて呟いた。

「ごめん、ごめん。
じゃあ、出発しよ？」

「・・あぁ」

ミヨがせかすとシンジは頷いた。

そして二人は宿を出て、町を出た。

私は

大丈夫・・かなぁ？

と、今頃になって心配した。

ミヨとシンジの会話が頭に聞こえる。

シンジの反応は何故か薄い。

怪しまれてるかも。

そう思っちゃうのは何故か。

「せめて二日は頑張ってもらいたいなぁ」

私はそう呟いてベットに寝転がる。

私の傷は動いているせいでふさがらずにいる。

だから二日も魔力をかけて回復させれば軽症までは回復するだろう。

いくら、ユームの技といっても。

私はふと作戦内容を思い出した。

ミヨは私になりきってシンジと接することができるか

・・それが一番困難なものだと言えた。

いくら、髪や服装が同じでも人には自分特有の癖や言動がある。

それもまねしないとシンジに怪しまれる。

普段身近にいる人がそういう細かいところを気にしないはずがない。

いくら興味関心がなくたって目に入るはずだ。

そういうところを記憶を共有することによって怪しまれることを防げるはずだった。

そして口調も同じにすれば大概のことでばれるはずがない。

それでも私は不安だった。

ばれるかばれないかと言う不安と
しばらくシンジにあえない寂しさが混ざった不安を感じてた。

するとまたもや会話が聞こえた。

「ねぇ、シンジ、どこに向かってるの？」

「・・・レドムの里」

「へぇ、あの遺跡がある里に行くんだぁ。
じゃあ、あのジャングルを通るね。」

「あぁ」

その会話を聞いて悲しくなる。

ミヨの言葉はまるで私が言っているみたいだった。

だから余計に合えない寂しさがこみ上げてくる。

でも・・・そんなことおもってられない。

思えば余計休めない。

精神面と体力面の回復が今回の目的。

怪我を治すのが最大の目的。

だから私は怪我の治療を何よりも最優先しなければならない。

だから私は考えるのをやめた。

そして私は意識をミヨたちから遠ざけた。

そして回復のため眠りについた。

第五十六話　発案実行・・大丈夫??（後書き）

次回はミヨ視点で書きたいと思います。
誤字脱字などあったら報告願います。

第五十七話　宝玉を狙う者たち

ミヨとシンジはジャングルの中に入った。

道なき道を突き進み、歩いていく。

シンジが先頭でミヨが後ろ。

草木をかきわけ歩み進める。

肌には草がかすりくすぐったい。

・・まだ半日しかたっていないけど・・・怪しまれてないかな?

ミヨは既に不安になっていた。

シンジの背中を見つめ、ミヨは思う。

シンジがルミルをどれだけ思っているのかは分からないけど

そうたたないうちに私はルミルじゃないとばれてしまうんじゃないかと。

そう予感しているとき、ふと背後に殺気を感じた。

「危ない!!」

私はシンジの背中を押しやって二人して地面に倒れこんだ。

どさっ・・・ヒュウッ・・・グザッ！

ミヨとシンジが倒れこんだと同時に矢が放たれたのだ。

その矢はシンジたちの立っていた空間を突き抜け遠くにあった大木を貫いた。

バタン！！

その大木が折れて倒れる。

自分たちに向けられる殺気が増し、その気配は動き回った。

ミヨは体を起こした。

その下敷きとなっていたシンジも起き上がる。

「ごめん、強く押し倒しちゃって。
あのままじゃ、私たち、串刺しだったから」

ミヨはそう言い、折れた大木に目を見やる。

シンジもその大木を見て冷や汗を浮かばせる。

私はひざをつく体制となった。

シンジは立ち上がろうとしたが

「っ・・！」

と、うめいてひざを突く。

「あ・・・私のせいだね。
すぐ治療するから動かないで」

ミヨはそう言い、殺気を向けた者を警戒して結界を張り、治療を始めた。

シンジの足のすねには捻挫をしたかのように青くなってきていた。

ミヨは呪文を唱えながら、狙われる理由を考えた。

あれは・・明らかに私たち二人を狙っていた。

しかも二人同時に。

ルミルなら、一度狙われた前科があるから一概には言えないけど
シンジには・・狙われる可能性がない・・・。

いや、あると言えばある。

あの、人形をした精魔。

いつしか、シンジだけを狙って動いた襲撃者。

その記憶をルミルと共有していたことを私は思い出した。

あの時のことも謎のまま。

だが、あの精魔以来、狙われたのはルミルの一度きりだけ。

他にはない。

じゃあ、何が理由で狙われなければならないのだろう。

シンジの怪我の治療が終えて少し気を抜いたとき矢が結界に突き刺さった。

「！」

「！！」

ピキ・・ピキキキィ・・・・・パリン！！・・・・・ヒュヒュッ！！

結界は破れ、ミヨの腕をその矢はかすった。

かすった部分の布が破れる。

その傷からかすかに出血した。

「っーー。

シンジ、立てる？」

「あぁ」

ミヨは痛みを我慢しながら立ち上がる。

シンジは頷き立ち上がる。

「ここからひとまず隠れられるところまで

移動したほうがいいよね」

「あぁ。お前、平気か？」

ミヨの言葉にシンジは頷き、聞いた。

シンジって意外に優しいんだ。

ミヨは意外だと思いながら

「大丈夫。少しかすっただけ。
それより、今は移動だよ。
私が一点に集中してガードを固めるから
早くこの場から」

「・・・あぁ」

シンジは頷いた。

「背後に一人。
前方に一人。
逃げるなら右か左かの二選択。
どっちにする？」

「左。」

「そうだね、それなら一時、ジャングルを抜けた先に林がある。
じゃあ、そこまで走ろう」

ミヨはそれに賛成する。

確かにジャングルだと相手の動きが読みにくい。
だが、林なら相手の影でもつかめやすくなる。

「あぁ。いくぞ」

「うん」

シンジは頷き、私も頷き返した。

そして二人は走る。

草木を掻き分けて猛烈なスピードで。

だが、その掻き分けた草木が今回の敵だったらしい。

ヒュッ！！

シンジの掻き分けた木の枝が信じの腕に絡まりつき、持ち上げた。

「！？」

シンジは枝につるされた。

ミヨのほうも草のつるが忍び寄ってくる。

私はそれを剣でなぎ払う。

そして氷の呪で草を凍らせ、シンジを捕まえた木の主を私は見た。

その相手の眼光に私は悪寒が走った。

「シンジを放して！」

ミヨは叫ぶ。

「なら、代わりに宝玉を渡せ。」

相手は言う。

「やはりそのつもりで来たのか、お前ら、トレジャー怪盗は」

シンジはうんざりした口調で言う。

トレジャー怪盗・・

ミヨはその言葉に首をかしげる。

どこかでその言葉を聞いたことがあったからだ。

だが、思い出せない。

「宝玉はあげない。でも、シンジも渡さない」

私はそう言い放ちシンジを捕まえている枝を剣で切り刻んだ。

ギギィ・・・ザシュッ

「何！？」

相手は叫ぶ。

無理もない。

シンジを捕まえていた木の枝はとても強度があるものだった。

私でなければ切れなかったと思う。

シンジはつるされた高さからいきなり落とされた。

落下する直後に私が風を操りシンジを安定ある地面に降り立たせる。

「・・助かった」

シンジはボソッと呟くように言う。

「それはお互い様。
でも今はそれ言ってる場合じゃないみたい」

ミヨはそう言って身構えた。

「ふん、人質がいなくても実力行使するのが基本さ。」

相手は気取った口調で言う。

その言葉と共に枝が草が・・自然の全てが私たちを襲った。

「氷よ、全てを凍て尽くせ!」

ミヨは叫び、手をかざした。

そしてそれと共に枝たちが凍っていった。

それを見てミヨはシンジの手を引いて

「逃げよう」

と、言い、走った。

第五十八話　さすが従兄妹だけに鋭い人

ミヨとシンジは走った。

凍て付いたトレジャー怪盗は身動きができずおっては来ない。

林まで走ったと、すぐに大木の根元に背中をもたれさせる。

ハァ・・・ハァ

ミヨは肩で息をする。

シンジは息を少し乱す程度。

そこで二日、シンジと過ごした。

そして三日目、ついに・・・

「お前、本当にルミル(あいっ)か？」

と、シンジはミヨを鋭く疑うような視線で言う。

「えっ？」

ミヨは聞き返す。

「何でそう思うの？？」

ミヨは不思議そうにシンジを見やる。

「俺より先に敵の殺気に気づいた。
対処法が冷静。
ルミル(あいつ)らしくなさすぎる」

シンジは淡々と述べた。

『ルミル、シンジにばれた。やばい、早く来て。』

心の中でルミルに願う。

『分かった、今行く。』

ルミルは言った。

「よくわかったね、私がルミルじゃないことが。
いつから?最初から?」

ミヨは言った。

「おそらく入れ替わったときだ。
お前は誰だ?」

「さて、誰でしょう??」

ミヨは笑った。

「・・・・」

シンジは黙ってミヨを見つめる。

ルミルのとこに突然、ミヨが応答してきた。

そして二日たち、傷も軽症以前の傷となり回復していて順調だった。

だからすぐにリュックを背負って瞬間移動した。

よし、準備完了。

瞬間移動!!

私はミヨたちの元へ現れ、

「シンジ、ごめん」

と、言い指先で　睡魔　という字を空に描き、魔力で具現化させ、シンジに貼り付けた。

それはシンジに溶け込んでいった。

「っ・・・」

シンジの体はふらついた。
私はシンジを支え、
「ごめん、シンジ。」
と、謝った。
シンジはその後すぐに目を閉じ、完全に意識を失った。
シンジを大木の根元に寝かせ、私とミヨは話をする。
「シンジ、鋭かった?」
「うん、最初から怪しまれてたみたい。」
「うそ。あんな完璧な策だったのに。」
「うんうん」
会話は弾みお互い笑いあった。
「じゃあ、私がいろいろ説明しとくから」
「ルミルの力になれてよかったよ。」
「うん、ありがとう」

「こちらこそ、またね」

「うん、また会おうね」

会話は終えてミヨは帰っていった。

しばらくするとシンジが目を覚ます。

「大丈夫?体、だるいでしょ?ごめんね」

私は声をかけた。

シンジは大木に背を持たれかけた。

「お前、誰と入れ替わってた?」

「ミヨ・・だよ。」

シンジの静かな問いに私は不安をおぼえながら言う。

「何故、入れ替わってた?」

「それ聞くの?あはは。それ言ったら隠してきた意味がなくなっちゃうよ」

シンジの怒りが混ざった声に私は笑ってごまかす。

「・・・・」

「怖いよ、シンジ。」

シンジの無言の視線に笑ってごまかす私。

「隠し通す気か？」

「シンジだって私に言えないことの一つや二つあるんじゃないの？」

私はシンジに言い返す。

「・・・」

「だったら、私だけ言うのは理不尽でしょ。」

「・・お前、反抗期か？」

「これが反抗期って言うならもともとかも。
あ、でも、思春期も来たようなぁ・・・」

あきれた物言いのシンジ、呟くように言う私。

「お前は俺の何が聞きたい？」

シンジはまじめな顔つきで聞く。

まさか、そう聞いてくるとは思ってなかったから

「へ？」

と、拍子ぬけた声を出す。

「もう一度言う。
お前は俺の何が聞きたい?」

シンジは苛つき口調で聞いてくる。

「えっ・・・それはその・・・」

私は戸惑う。

「お前が言い出したんだ。
何もないなんていうなよ?そんなこと。」

シンジは挑発口調で聞く。

「あ、シンジはさ、私と旅する前は一人だったの?
ジュンたちにいろいろ誘われたみたいだけどそれを断ったのは・・
どうして?」

私は聞いた。

シンジは一人で旅をしていたと。

誘っても断るときのほうが多かったと聞かされたことを、思い出した。

「・・・。」

シンジは黙る。

「ほら。
いえないでしょ？
だからシンジも・・・」

「俺はあいつらが嫌いだ。」

私の言葉をさえぎるようにシンジは言った。

「え？」

嫌い？
そんな理由で？
というより、何故嫌い？？

私はシンジの答えに戸惑う。

「俺はああやって誰であっても笑ったり愛想を振りまく奴は嫌いだ。」

シンジははっきりと言い切る。

「私も？」

「？」

私は思わず自分のことも聞いてしまう。

シンジは眉をひそめた。

「私も誰にでも笑ったり、仲良くなりたいと思って接するけど。

私も嫌い？」

私は言ってしまった勢いで聞いてしまう。

「・・嫌いじゃない」

シンジは目をそらして言う。

「なんで？」

「・・・。お前はあいつらとは違う。」

シンジは私の問いに答えになってるような答えになっていないような言葉をつむぐ。

「私は私だから、違うのは当たり前だけど・・りゆうはそれだけーーー」

「お前は？」

シンジが私の言葉をさえぎって聴く。

「え？」

「お前は俺をどう思う？」

シンジは私を見つめて言った。

第五十九話　主人とはぐれた使い魔??

え?・・・シンジ??

シンジって　俺(そんなこと)をどう思う?　って言うキャラだった??

え・・・、なんていえばいい??

シンジの　嫌いじゃない(さっきの言葉)　・・は本心から??

本心だったら偽った言葉はいえない・・・言いたくない・・・

だとしたら・・・素直に思うことを言えばいい??

私は困惑した。

シンジの言葉一つ一つが私を惑わせる。

私は・・・

「私も嫌いじゃないよ、シンジのこと。」

と、素直に言った。

でも恥ずかしくて頬を染めて俯いた。

「・・・」

「・・・」

二人に気まずい雰囲気が訪れる。

ガサガサ

「!?」

「?」

私は茂みのゆれに思わず体を震わせた。

シンジは眉をひそめて茂みを見やる。

ガサガサ

また茂みが揺れる。

「な、なんだろう?」

私は思わず声に出す。

シーン

茂みの揺れがなくなった。

私は思わずその茂みに近づく。

ガサガサ・・・・スパッ

「うわぁ!!」

茂みの中から何かが出てきた。

それが私に飛びつく。

私はその衝撃でしりもちをつく。

「！」

シンジは目を見開く。

「ぇ・・？君・・・使い魔？？」

私は思わず飛びついてきた子に話しかける。

飛びついてきた子は震えている。

その子はコクンと頷いた。

「！？」

シンジはその子を驚きの目で見つめる。

私は震えているその子の背中を撫でる。

その子は誰かの使い魔だった。

それは知っている人なら見れば分かる容姿をしているからだ。

「主人とはぐれたの？？」

「・・・」

使い魔は一瞬戸惑ったが頷く。

私は使い魔の容姿をまじまじと見つめた。

それは人の形をした人ではない者。

幼いせいか、体は小さく、園児くらいの大きさ。

耳はとんがっていて、目は紅色。

口から牙が見えて・・・。

この姿を見たものは皆が　吸血鬼（バンパイア）　と呼び恐れるかもしれない。

でも、手の甲にある使い魔の印を見れば使い魔だということが理解できる。

「大丈夫?」

私は使い魔に話しかける。

「＃＊＋@;；$＃”」

使い魔は口を開き何かを言っている・・気がする。

だが、あいにくと何を言っているか分からない。

「ごめんね、私はあなたの言葉を理解できないの。」

私はそう言って背中を撫でる。

「”＃%&’」

使い魔は何か言葉を発し目から大粒の涙を流す。

「ごめんね・・使い魔の言葉は主人しか分からないから」

私はそう言って使い間を抱き寄せ頭を撫でる。

「$%#@」

それでも何か言葉を発し使い魔は泣き続けた。

しばらく使い魔は泣き、次第に泣き疲れ寝てしまった。

「・・シンジ、使い魔って知ってる?」

私はシンジに聞いた。

「詳しいことは知らない。
お前は知っているのか?」

シンジは私を見る。

「知ってるよ。
私も魔法があるから。
でも私は魔術師にはならなかった。なりたくなかった。」

私はそう言って使い魔を見る。

「・・・」

シンジは何も言わず私を見る。

「魔術師はね、使い魔を召喚して僕（しもべ）にするの。
私はそれが嫌だった。
主従関係自体が嫌いだったから。」

「・・・」

「使い魔っていうのはね、魔術師の属性に関連しているの。
たぶん、この子の主人は雲属性・・・増殖系だと思う。」

「容姿で判断するのか・・。」

シンジが呟くように言う。

「そう。
この子は吸血鬼。
だから増殖。
使い魔は両手の甲にある印で分かるの。
ほら、この子の手、見て」

私は使い魔の手を見せた。

「・・なるほどな」

シンジは納得したように言う。

「それで・・どうする？これから」

「このまま、里に向かう。」

シンジは私の問いに即答した。

「わかった。」

私はそれに頷いた。

はぐれた理由がこの子を泣かせた原因だと私は思う。

主人と使い魔は一心同体。

離れていても心がひとつなら居場所ぐらい分かるはず。

だが・・。

心が通ってさえなければ居場所を特定するのは不可能。

私はこの子を抱いて立ち上がった。

シンジも既に立ち上がって私を見る。

「行くぞ。」

「うん」

シンジが歩き出し、私も歩き出し始めた。

第六十話　敵の罠

しばらく歩き、ジャングルの中に入った。
そして里のほうに向かって歩き出す。
ジャングルに入ると使い魔も起きた。
「&#@&$」
何か言葉を発する使い魔。
降ろして欲しいのかな?
私はそう思った。
私は使い魔を降ろしてあげた。
すると、背後に殺気が膨れ上がった。
そして私に向かって矢が放たれる。
それを避けようとすると、使い魔が邪魔した。
「え・・・」
私の腹部に矢が直撃する。
「!?」

その始終を見ていたシンジが使い魔を蹴り飛ばした。
だが、使い魔はそのけりを紙一重で交わし、殺気を出した相手の元へ行く。
私はそのまま後方に倒れた。
「つぅ”」
私は矢を抜いた。
そして上半身だけ起こす。
その瞬間、腹部に激痛が走る。
「つ！・・・」
くっ・・。わ・・な・・・だったんだ・・・
私は油断したことを後悔した。
私に矢を放った奴が現れた。
「くくく、まさか罠にはまってくれるとは思わなかったぜ」
相手は僕を撫でながら言う。
シンジは身構える。

私は呪文を唱えた。

「さぁ、相方も負傷したんだ、宝玉を渡してもらおうか。」

相手は言う。

「フリーズ・・」

私は呟き、相手に魔法を放つ。

ズドーン・・・カチカチカチ

相手は避けた。が、腕が凍っていた。

「ちっ、まだ動けたか。やれ、僕よ、」

相手は舌打ちし、使い魔に命じた。

私は立ち上がろうとする。

「っー〜〜!!」

が、痛みでそれはできない。

すると、使い魔は私の首筋に牙を立てた。

ガブ・・・ゴクゴク・・・

使い魔は私の血を飲み砕く。

「んっ・・・つぅ！！」

私は表現しようのない恐怖と痛みに襲われた。

そしてその血を飲み砕くと共に何かが私の中に入り込んだ。

「ぐっ！！」

入り込まれた恐怖と強烈な苦痛が私を襲う。

私は苦痛に何とか耐え、魔力をこぶしに集めそれを解放させた。

その魔力を察したか、使い魔は主人の下へ戻る。

私はよろよろと立ち上がった。

めまいと鈍い痛みがした。

それを抑えるために天寿の力を解放する。

使い魔の主人とシンジは対峙している。

シンジは魔力の宿る刃を放つ。

相手は魔術でそれを食い止める。

私がシンジの助けになろうと呪文を唱えようとするが、

体に入り込んだものせいで唱えられない。

「う”ぅ”」

思わずひざを突く。

相手はにやりと笑った。

「無理に唱えるのはよしたほうがいい。
あんたは手ごわいが俺の僕の鎖には勝てないはずだ。
そして、こっちも俺の変術でな」

「!?」

「!!」

相手は長い呪文詠唱に入った。

その間、シンジも抵抗を試みるがどれも失敗に終わる。

私も何度も唱えようとした。

だが、体は縛り付けられるようで口から言葉を発せられない。

そして体自体も動かない。

傷がおくまで入り込んでる感覚さえしてくる。

そして長い呪文詠唱が終わる。

「姿を変えろ、アニマルチェンジ!!」

相手が呼び出した杖を振りシンジにその魔法がかけられる。

「シ・・ン・・・ジ・・！！」

私は何とか立ち上がろうとするができず、その場に倒れる。

その魔法はシンジを包み込み・・・シンジを・・・猫・・にかえた。

「ぇーーー？」

私は一瞬痛みを忘れてシンジの姿を凝視する。

「！？」

シンジは驚きの目で自分を見やる。

「おぉ、期待通りの姿になったな。」

相手は自分がかけたと言うのに気楽そうだ。

ねぇこぉ！？

私はほんとに体が動かないことを忘れて困惑した。

えっ！ぇぇ！？・・こんなまほうあるのぉ！？

ありえないと言う目で私はシンジを見る。

「あはは、クールを気取った奴が猫の姿・・あはははは」

相手は笑い転げる。

「あはははは」

「・・・・・」

シンジは怒りに満ちた視線で相手をにらむ。

私も怒りが込みあがってきた。

笑うのもいいかげんにしてよ・・確かにかわいい姿だけど・・。

でも、シンジの身にもなってあげてよ。

私そう思うと、腹が立って・・・

よし、あの大技をぶちかまそう。

私は心に決めた。

「闇夜を統べる漆黒の華・・・暁の空を統べる神々の華・・・
時に埋もれし、偉大なる・・天の華・・・我に力を貸したまえ・・」

私は起き上がり、ぶつぶつと呪文を唱える。

「その呪文はッ!?
ちっ、フレア!!」

相手は驚愕し、私に炎を放つ。

シュールルルルゥ

私の周りに結界ができたようでそれが炎を沈下させる。

「破壊の華・・降臨！！」

私は呪を解き放った。

ズドドドドーーン！！

相手がいる場だけジャングルが消えた。

相手はどこかへ吹き飛んだ。

「っ・・・」

私はその場に倒れる。

魔力が切れた。

だが、まだいろいろ終わってない。

私は背中に翼を生やした。

「！？」

シンジは私を驚きの目で見る。（まだ猫の姿）

私は動き、小さく猫の姿となってしまったシンジを抱く。

そして空に飛び立った。

ジャングルで一番隠れやすい、大木の穴に入った。

そこで翼をしまい、シンジも下ろす。

「う”ぅ」

私は腹部をおさえ、うずくまる。

「!?」

視界には猫になったシンジが・・・。

さて・・どうやってシンジを戻すか・・・

痛みに耐えながらも考える。

あ・・精霊の力・・なら・・

私は思い出す。

自分にも精霊の血はいくらか流れていた。

その力があれば・・・

そう思った。

だが、そう思うと同時に意識がもうろうとしてきた。

「！！」

シンジは目を見開いた。（おそらく）

「おいっ！！」

と、叫んだ。（たぶん）

そのとき、はっとした。

傷から出血している血にもいくらか精霊の血があったことを。

だったらそれをもとでに力を解放すれば・・もしかしたらできるかもしれない。

私はかすかな希望をこの手に取ったのだ。

第六十一話　敵か味方か、あなたはだぁれ？

私は意識をはっきりさせるためにこぶしに魔力を蓄える。

さっきの大技で魔力は切れた。

だが、天寿の力でよみがえらすことは・・・できるはず。

「お前・・・一体何をやろうと・・・」

シンジは私の魔力に気づいてか呟く。（おそらく）

私が精霊の血に魔力を送ろうと準備をし始めた。

小さく呪文を唱え始める・・。

だが、その呪文詠唱が終わる前に敵が現れた。

「こんなとこにいたんだな？

さがしたぞ。

だが、あんたの魔力ですぐに察知ができた。」

「%$#”（できた、できた）%$#”」（私がそう言ったように聞こえただけ）

敵とその使い魔が言う。

そして敵は呪文を唱え、私たちに解き放った。

抵抗することなんてできる暇も与えず。

ドガッシャァー！！！

大木は破裂し、私たちは無様に吹っ飛んだ。

「う”ぅ！！」

私はうめき、上半身だけを起こした。

シンジも起き上がる。（かわいい猫の姿）

「へぇ、まだ意識を保ってられるのかぁ。
案外しぶといな。」

敵はそう言い、私に近づく。

ヤバイ・・

私はじりじりと後ろへ下がろうとする。

だが・・・

「くっぅ”っ！！」

腹部に苦痛とさっきの衝撃の痛みが襲い、まともに動けない。

シンジは相手に殺気を放ち何かを投げつけた。

ビュン！！

「お、おっとと・・・っ！」

敵はよけるが腕をかすった。

ズザザザザァ

シンジの投げつけたものは地面に生えてた一部の草木を粉々にした。

シンジもそれで力尽きたのかひざを突く。

まじにやばい・・・

私は苦痛に耐えながらも後ろへ下がろうとするが

敵に襟元をつかまれ、体が空に浮く。

そして相手は空に浮き上がる。

「う”ぅ”” ！！」

私は苦痛にうめき、顔を歪ませる。

足が・・・つかない・・。

のどが・・・苦しい。

「先にお前からやらせてもらうぜ。

女だと思って油断してたからな。

あっちの野郎は変術で魔力の大半は封じられましてや

猫姿(あんな)だ。

さっきは油断したがもう何もできまい。」

敵は私をあざ笑う。

もうだめだっ！！

私がそう諦めたときだった、何かが私をつかむ敵の腕に矢を放ったのは。

「ぐあぁ”」

敵は悲鳴を上げ、私を放した。

ヒュー

私はまッさかさまに落ちた。

がしっ

私は落下中に誰かの腕につかまれた。

つかんだ場所は腹部辺り。

「う”ぅあ”ぁっ”！！」

ぐっときた衝撃と激痛に思わず悲鳴を上げる。

「ーーー！」

その誰かが悲鳴を上げた私を見て持ち方を変えた。

もう片方の腕を使い、私をひょいっと体を動かさせ、

上手に私の腰を抱く。

首がカクンと下を向く。

もう、私にも限界が来ていた。

首さえも上げれなくなるほどに。

下を向いたのに不思議と怖くない。

空中に浮いて、不安定にゆれているのに。

それは視界があやふやになっているせいでもあった。

焦点が合わなくてなかなか、はっきり、景色が映らない。

誰・・だろう?

私は思う。

一体・・誰が私を・・助けたの?

敵?・・味方?・・どっち?

あなたは・・・だぁれ・・・?

「っぅ”” ー!!お前は誰だ!?」

敵が腕をおさえて叫ぶ。

「・・。

こいつは俺の獲物だ。

勝手に手を出すな。」

私の耳元でその声は響いた。

どこかで・・この声を・・聞いた気がする・・。

誰だろう?

私は不思議に思った。

「そんなの・・早い者勝ちだろ!?

先手必勝さ!!」

敵は声を張り上げた。

とたんに使い魔が

「#$”” !!」

と、さけび、瞬時に相手に突撃した。

その衝動で私は落っこちる。

私は目を開けた。

ヒュゥウウ

風が耳元でなる。

シンジ・・・。

視界はぼやけて下に何があるか私には分からなかった。

だが、そこにシンジがいると、何故か確信した。

それと同時に呪文の詠唱に入った。

「ーー魔術でーー変化した姿ーー魔獣・・・
その姿ーー本来の姿へとーーーーいざなえーーーーー解術!!」

シンジめがけて精霊の力を解放した。

シンジは光に包まれる。

私はその光の下におっこちた。

どさっ

背中と腰あたりに鈍い衝撃が走った。

「っーーー!?」

痛みで視界が一瞬はっきり映った。

「シ・・ンジ・・！・・・」

私は驚く。

シンジが元に戻ったことだけじゃない。

シンジが抱きとめてくれたことに驚いたのだ。

「・・・・」

シンジは私を一瞬見て相手のほうに視線を向けた。

「っーーー。シン・・ジ・・、おろ・・して・・・」

私はこの体制がきつくて言葉を口からつむぎだす。

「・・・」

シンジは黙ったまま私を見つめ、降ろしてくれた。

降ろされて、私は立ち上がろうとしたがひざに力が入らず崩れ落ちた。

それを私の腰に腕を回してシンジが支えてくれた。

（続く）

第六十二話　敵だけど味方な気がする人物

シンジは私を支えながら空中戦を繰り広げる二人の戦いを見ていた。

一人は敵・・使い魔を持った魔術師。

もう一人は・・私を助けてくれた?謎の人。

んー・・・俺の獲物って・・・言われたんだよねぇ・・・・・

・・獲物って言われたってことはやっぱり敵??

私は考えた。

「・・・。大丈夫か?」

シンジはなかなか首を上げられない私に向かって言う。

「なん・・とか・・」

私は言葉をつむぎだす。

ズドーン・・・ボンッボン・・・スシャー

真上で騒音を立てる攻撃が続く。

私はそれが気になって首を上げようとする。

ズキッ

首を上げようとすると、首筋に痛みが走った。

あの使い魔にやられたところだ。

「っーーー」

「しばらくお前は動くな」

シンジが私に言う。

「・・・・」

何もそのことに反抗できない私。

ズドーン!!!ヒュー〜〜〜

大きな音を立てて敵が落下してきた。

ぼすっ

まるで落とし穴にはまったかのような音を立てて

草木が茂るところに落ちた。いや・・はまったというべきだろう。

そこに誰かがストンと降りてきた。

「!?」

「ぁ・・・・!?」

私とシンジはその人を見て驚いた。

あのときの・・・・!?

私は首筋の痛みを忘れてあの人を凝視する。

その人は・・私を襲った一人のハンターの姿だった。

そのハンターは敵に近づき、

「今のお前は俺には勝てない。諦めろ」

と、言い、

ハンターは敵は使い魔ともども吹き飛ばし、遠くの彼方に追いやった。

それを最後までまた後、ハンターは私たちのほうを見た。

「!」

自然と私の腰に回されたシンジの腕の力が強くなっていった。

シンジは、ハンターと目を合わせる。

私はぼやける視界の中

「あのときの・・・人?」

と、聞いた。

「・・・。
だとしたらどうする？」

ハンターは逆に聞いてきた。

「何故、助けた？
お前はルミル（こいつ）を狙ってただろ？」

シンジが相手に言った。

「今も、な。」

ハンターは強調させて言う。

「！」

「！！」

今も・・？
じゃあ、なんで？？

「どうして・・助けて・・くれた・・の？」

私は途切れ途切れに聞く。

「・・。
それより、お前らは回復したほうがいい」

ハンターは私たちの体にあるあちこちの傷を見て言う。

「・・・・」

シンジは黙ってハンターを見る。

私は自分からシンジの腕を解いた。

「？」

シンジは眉をひそめる。

スルリ・・・・ストン

私は地面に座り込む。

「・・・。

もう・・限界・・」

私は呟く。

ハンターは笑った。

「ふんっ、限界なのも当たり前だろうな」

そう言って私を見下ろす。

私はシンジの服をそっとつかんだ。

そして呪文を唱える。

瞬間移動!!　（こっそり）

ビュッ!!

私とシンジはその場から消えた。

シュパン!!

荒れていない草木が多い茂っているところに私たちはいた。

「っーー!」

私はいろいろな痛みに襲われ顔が歪んだ。

「!・・・・。」

シンジは目を見開き、
でもそれは一瞬のことで、すぐに私を戸惑うような視線で見つめた。

そして私をひょいっと抱き上げる。

「・・・・」

私は何もいえないままシンジに連れて行かれる。

シンジは近くの大木に私をおいた。

そして自分もその場に座る。

私はウィーミアを呼び出した。

「お呼びですか・・ってなんでそんなにぼろぼろッ！？」

現れて突如、ウィーミアは声を張り上げる。

「う”ぅ”」

私はそれに答えようとしたが

腹部にきた激痛と首筋にきた痛み、それと体の内からくる衝撃に耐えれずうめいた。

「おいっ！？」

シンジが叫ぶ。

私は耐えれず、その場にうずくまる。

なに・・これ・・。

体の中からなにかに・・蝕まれていくような・・感覚は・・・

それに加え、この激痛。

激痛、苦痛、衝撃

その三つが私を襲う。

「・・・。

あの使い魔にやられたな。

体のうちから蝕んでいる。
それにくわえ、お前、腹部からそうとう出血してるぞ。
重症だな。」

別の声が鼻で笑うような口調で言った。

「！？」

シンジが言葉を失い、そいつを凝視する。

私は痛みと戦いながらその人を見た。

瞬間移動で・・・まいたはずなのにぃ・・・・

う”ぅ”” っつ！！」

そして、そのとき、首筋から強烈な痛みが襲い、意識が暗転した。

第六十三話　謎が多いハンター

「・・・う”ぅぅう”」

私は首筋の痛みにより、意識を取り戻した。

ゆっくり目を開けて視界を広げる。

すると、目の前にはハンターとウィーミアとシンジが私を覗き込んでいた。

「意識を取り戻したのか？」

ハンターは言う。

ハンターは私の腹部に手をかざし白い光で怪我を包んでいた。

「・・・。

なんで・・あなたが・・私を・・・」

私は口から言葉をつむぎだす。

「重症なお前は高位の治療魔法が必要だろう？」

ハンターは涼しい顔をして言う。

「この人は無理やり魔法をかけたんですよっ、あなたに。」

ウィーミア心底嫌な顔をして言う。

「お前・・腕と足の怪我・・隠してたな・・・」

シンジが私に痛い視線を送る。

「・・・・」

私はその言葉に何もいえなかった。

当然、私は気を失っていたから体にある傷は隅々まで調べられてもおかしくない。

「・・否定はしないけど・・・」

私は弱々しく言った。

「・・この傷もふさがった。
あとは首筋の傷だ。」

ハンターは言った。

ハンターは私の首筋に手を伸ばす。

その手が怖くて私はビクッと一瞬震えた。

その瞬間、シンジがハンターの腕をガシッとつかんだ。

首筋に伸ばされた腕はその場で動きが止まる。

そのことに何故か私は安堵した。

「何のつもりだ?」

ハンターが聞く。

「獲物がルミル(こいつ)なのに、何故、治そうとする?」

逆にシンジが聞く。

・・ビリッ・・

ハンターの手の指先が一瞬電気を帯びた。

「ぇ・・あなた、私に何しようとしたの?」

私はその指先を見つめてハンターに聞く。

「俺のおかげで傷が治ったと言うのに
そこまで俺を警戒するのか・・。」

ハンターは独り言のように呟く。

「今、お前、こいつをどうする気だった?」

シンジが鋭い目でハンターを見つめて言う。

おそらくシンジも指先の電気に気づいたのだろう。

「その傷を治すためだ。」

ハンターはそっけなく言う。

「・・それは・・嘘でしょ？
きっと何か、私にしようとしたはず」

私は自信なさげに言う。

自分が負った傷のダメージ効果は身を持って私は知っている。

首筋に受けた傷はただの傷ではない。

使い魔は何かを傷を通して入れたはずだ。

それが分かるからハンターが本当に治そうとしてくれたのかどうかが判断つかなかった。

でも、あきらかに今の電気は治療のためではなさそうだった。

「ふっ。
ばれたか。
確かにこれはお前を治すためだけじゃないな。」

ハンターはうっすらと笑みを漏らして言う。

シンジはその言葉を聞いて腕を持ち上げハンターをふっ飛ばした。

ヒュッ・・・ずてっ

ハンターはその拍子にしりもちをつく。

私はゆっくりと立ち上がる。
多少ふらついたがもう大丈夫そうだ。

「ハンターのあなたが私に何故こんなことをするのかわからないけど、
とにかく、助けてくれてありがと。
でも、あなたは私の敵でしょ？」

私は言った。

「あの時は助かった。
だが、お前は信用できない。」

シンジが私に加えて言った。

「ふっ。
それもそうだな。
だが、俺は俺でいろいろあるからな、
お前らはお前らで旅でも何でもすれば良い。
俺は勝手にお前らについてく。」

ハンターがひょいっと立ち上がり、後ろに数歩飛びのく。

「わたしがねらい？」

私は聞く。

「ふっ、否定はしないな、だが、肯定もしない。」

ハンターは言った。

否定も肯定も・・しないかぁ。

私はやれやれといった風に首をすくめ、

「シンジ、もう旅を続けよう？
もう大丈夫だし。」

と、シンジに聞く。

「あいつは・・・」

シンジは不満そうに、ハンターを見る。

「……しばらくはって言ったから大丈夫でしょ。
だから私たちは私たちで勝手に行こう？」

私はそう言うとシンジは頷いた。

そして、私たちは歩き出した。

ジャングルの中を。

そして後から一定の距離を保ちながら歩く一人のハンターが。

こうして再び里へと向かって歩き始めたのだ。

第六十四話　古の遺跡　レドムの里

一名、私とシンジの後ろから来る人が。

背中にその視線が突き刺さって気が抜けない。

・・大丈夫・・かな?・・敵視されてる気もするし・・・

私は少し警戒を強めた。

「・・大丈夫とかなんとかいったの、オマエだろ。」

シンジが私の心の内をいとも簡単に見抜いた。

「!・・なっ、なんでそう思ったの??」

私は見開いてシンジを見る。

「すぐ顔に出る」

驚く私にシンジは一言はっきり言い放つ。

「そっ、そんなに私すぐに表情でるかなぁ?」

・・す、するどいっ・・!!

私は動揺を抑えながらも言う。

「でる」

シンジはきっぱり頷いた。

・・そっーーそこまでっっーー！！

「そこまできっぱり言わなくてもいいじゃんっ」

私はムキになって言い返す。

「事実を言ったまで、だ」

シンジは平然と言い返すがどことなく笑っている。

「じっーー！！？」

その平然とした物言いに私は言葉を失いかけ、反論しようとすると

「着いた」

と、言われ、シンジも私も立ち止まる。

「ッ～～。ーーここが・・レドムの里・・」

私はさっきまでの気持ちを静めて呟いた。

私は里全体を見渡した。

そこは大きな遺跡を中心としたきれいな石の町が広がっていた。

家は大理石で作られ、町の周りは林で囲まれている。

遺跡は何千年も前からあるようには思えないつくりになっている。

「・・行くぞ。」

シンジはそう言って歩き出した。

シンジの目的はおそらく遺跡なのだろう。

その遺跡には昔からとある伝承が伝えられているのだから。

「うん」

私は頷いて歩き出す。

そのまま私たちは遺跡の中へと入っていった。

遺跡に入ると共に後ろにいたハンターはいつの間にか姿を消していた。

遺跡の中は暗く、地面は大理石で靴からも伝わるひんやりとした感覚があった。

シンジは

「点火」

と、呟き、その手に炎を宿らせた。

それをコントロールし頭上に掲げる。

「シンジはこの遺跡の謎を解くためにここへ来たの？」

私はシンジの動作を終えると共に聞いた。

コンコンコン

足音が地面に響く。

「それもある。」

シンジはそう言った。

「目的は一つじゃないんだね？」

「あぁ」

私の問いにシンジは頷く。

「魔の古代文字・・読めるか？」

「えっ」

シンジの問いに思わず驚く。

魔の古代文字というのは魔方陣に刻まれる文字のことだ。

昔によく使われ、今はもう使われなくなった文字、それを魔の古代文字という。

「う、うん。おばあちゃんが教えてくれたから」

私は頷いた。

「・・。魔の古代文字がこの遺跡にはところどころに記されている。
だが、文字はそれだけではない。
俺たちが知らない文字までもが記され、意味があるかのように刻まれている。
まるで精霊の属記号のように、な。」

シンジは淡々と述べ、立ち止まり、炎を壁へと近づける。

「文字は人を選ぶ。
俺は読めるが意味までは深く知ることができない。
文字は呪文と同じ。
呪は真実の意味を理解しなければ扱えない。」

「・・・」

「信じられないか？」

黙る私にシンジは聞く。

・・だって、ねぇ？
・・自分ができてシンジができない、なんて・・そんなありえないこと・・

「・・・」

「・・なら、試してやる」

シンジはそう言ってポケットから黄金の鎖を取り出した。

・・開封の道具だ・・鎖(それ)。

「――レローネ。レローネ。レドムレローネ。
我、扉を開封する者。
我の問いかけに答えよ。」

シンジは唱えた。

シンジは“レローネ、レローネ、レドムレローネ”という古代文字をそのまま唱えた。

それで魔法は開封されるはずだった。だが・・

シーン

と、あたりは静まり返り何も起こらない。

「ほら、な」

シンジはそう言ってため息をする。

「俺は魔法に向いていない。
だから俺は魔法を学ばなかった。
俺がここへ来た目的は遺跡の文字の解読のためだ。
七色の宝玉を手にした今、全てがそろったからな。」

シンジはそう言って私に鎖を渡した。

「やってみろ。
神官がお前に教えたのなら、何かあるはずだ」

「・・うん」

私は頷いた。

神官・・それは神の声を聞ける存在。

おそらくシンジはおばあちゃんのことを言っているんだろう。

おばあちゃんは民の長であり神官者なのだから。

私は七色の宝玉を取り出しシンジから受け取った鎖を用いて古代文字を見た。

すると・・

“ーーー

ステップはかろやかに流れる。

「レローネ、レローネ、レドムレローネ。
我は扉を開封する者、
精と魔をつなぐ扉・・世界を隔てる扉、
七色の架け橋、鎖の契り、扉よ、今、解き放たれしとき、封印を解かれーー」

私は言った。

いや、扉が私にそうさせた。

するとっ

“ウ”ォン”

私には扉が開かれたように感じた。

その中へ吸い込まれるようにして私は目を閉じた。

シンジは鎖をルミルに手渡した。

シンジはほんの少しルミルに淡い希望を抱いていた。

神官には神の声が聞けるだけでなく、相手の情報全てを読み取ることができる。

思考も心境も能力も才能も余すとこなく全てを、そして未来を見通すことができる。

「レローネ、レローネ、レドムレローネ。ーーーーー」

ルミルは宝玉も用いてステップを踏み、唱え始めた。

すると、

ホワーン”” スシャー

壁に刻まれた文字が見たこともない魔法陣となって光を放出した。

その光が消えると同時にルミルの体ががくんと傾いた。

「オイッ!!」

シンジは叫び、慌ててルミルの体を支えた。

「!?」

ルミルは気を失っていた。

そして、ルミルからは誰もが秘めている自分の魂すらも感じられなかった。

「しっかりしろっ」

無駄だと分かっているがつい叫んでしまう。

シャラン。・・・・・コトン。

ルミルの手から鎖と宝玉が落ちた。

俺はそれを拾い上げ、リュックに戻す。

鎖は自分のポケットにしまい、

ルミルのリュックと自分のリュックを背に担いでルミルを抱き上げた。

ーーこいつの魂・・意識は・・おそらく・・・扉のその先・・だろうな・・

シンジはそう思った。

シンジはその後、遺跡を出て里を歩いていた。

やはり、人を抱える姿は目立つのか、白い衣を纏った者が舞い降りてきた。

顔はフードを深くかぶっているから分からない。

「そなたの腕の中にいる者に魂を感じられない。

そなた等は何者か？」

白い衣を纏った者は言う。

シンジは、

「俺はシンジ。
目的があって遺跡を訪れた。」

とだけ、言った。

「そうか。そちらの者は？」

白い衣を纏った者は聞く。

「こいつはルミル。
旅の連れだ。
遺跡の扉の文字を読み上げて気絶した。」

事実だけをシンジは述べる。

「・・。
我はフローラ。
この遺跡を守る守護者に値し、僧侶の職に就いている。」

フローラと名乗った者はフードを下ろした。

「・・・」

シンジは何も言わずフローラを見る。

「そなたは驚かぬのだな。
我が女だということに。」

「・・・。」

フローラの言葉にシンジは無言で返す。

そう、まさにフローラは女・・女性そのものだった。

声や口調こそ男だが、容姿や髪がそれを補うかのように清楚であった。

シンジにはそれに似た姉がいるし、別に気にも留めないけれど。

フローラの髪は銀色で長さは腰までである。
そして耳には十字架のイヤリング。

「よかったらそなた等泊まっていかぬか?
魂が離れている人間は不安定だ。
我の住む聖域はそれを脅かす存在はない。
存分に休めるぞ。
我にしても何の理由があって遺跡の扉を開こうとした者を野放しにできないからな」

フローラは柔らかい口調で言う。

だが、言葉そのものは脅迫に近い。

我らの域にいなければ、脅かすぞ　ーーーとでも言いたいのだろう。

「牽制か？それとも脅迫か？」

シンジは聞く。

僧侶は神官と同じくして人の才能などを見通せる力を持つ。

だから　　お前には一人で行っても無駄だ

という意味を含ませているのだとシンジは思っていた。

「ふふふ。

少しは警戒を解いたらどうだ？

それに我らはそなたが思ってるようなことはしないだろう。

我らは神に仕える者だからな。

神を裏切るようなことは絶対にしないと誓っている。

・・では案内しよう。

我らの聖域へ。」

フローラはそう言って歩き出した。

ーー・・俺に　拒否権はない　・・か。

シンジは心の奥底で呟きフローラの後に続いた。

第六十四話　古の遺跡　レドムの里　（後書き）

一ヶ月ぶりに書きました。
すいませんが、また事情でやれなくなると思います。
そのところはご承知いただけると助かります。

第六十五話　精の世界、魔の世界（前書き）

今回の話はルミルの魂の冒険物語です。
後々になってこの話は影響してくると思います。

第六十五話　精の世界、魔の世界

「ん・・ここは」

ルミルは目を覚ました。

「意識を取り戻したか」

「!?」

聞いたこともない声に思わずガバッと起き上がる私。

そこには青く長い髪を後ろで束ねた青年がいた。

・・えっ、だれこの人?、それより、ここ、どこ??

私は一瞬たじろぎ、きょろきょろあたりを見回した。

あたりはチョロチョロ流れる小川と大木が連なる林だった。

「そなたは何者だ?

突如、扉から姿を現して、いきなり倒れたのだが・・。」

青年は聞いた。

「え、えっと、私はルミルって言います。

連れがいたんですけど・・どうやら私、魂だけできちゃったようで。

」

私はしどろもどろ言った。

「そうか、そなたはここ、魔の世界と精の世界をつなぐ扉からやってきたのか。
では、何のためにここへ？」

青年は聞く。

・・えっ、別に目的があってきたわけじゃないんだけど・・
ていうか、ここが魔の世界？じゃあ、私のいた世界は精の世界？？

「えっと、あのっ、その、私・・
魔の世界のことが知りたくてあっちの精の世界にそれを役立てたくて・・
っていうか、あなた誰ですか？」

私は戸惑いながらも言って、聞いてみる。

「あぁ、まだ名乗っていなかったな。
我の名はリアン。
この森の主だ。
そうか、そなたはこの世界が知りたいか。
なら案内させてやろう。
我が案内させることは不可能だが・・。
あ、代わりがいたな。」

青年は言って林の奥を見て、

「雨羅（うら）よ、さっきからいるのだろう？
姿を現して来い。」

と、言った。

・・雨羅？誰かいるの？さっきから気配も何も感じないけど・・

私は首をかしげながら林の奥を見やる。

「おっ俺が案内なんてっ・・嫌だぜッ。
何で俺が・・見ず知らずの女と～～～」

そこから聞こえたのは少年のような声。

この、リアンと言う人、
人ではなくとてつもない何かな気がするけど・・。神聖な気を感じるし・・。

「雨羅、これは命令だ。
雨羅もキニナルのだろう？
この翼を秘める娘が。」

リアンは言った。

びくっと私は震えた。

・・つっ翼！？・・ヤッパリこの人只者じゃないっ・・

「ベッ別に気になってなんかいないっ！！
お、俺はただっ、そいつの光に惹かれただけだっ！」

雨羅と呼ばれた者は言う。

・・それもー気になっている理由になってる気がする。

「だっ第一俺は人間嫌いなんだっ。
だ、誰がそんな命令うけるかよっ」

雨羅は言う。

「雨羅よ、ここを追い出されたいか？
それとも照れ隠ししているだけなのか？
第一、一番最初にこの娘を見つけたのはお前だろう？
だったら面倒見てやれ。」

リアンは言った。

・・えっ、そうなのっ！？

私は目を見開いた。

「わ、私、人間じゃないんだけど・・。
それに、声だけじゃなくて姿も見せてくれると・・うれしいんだけど。
見つけてくれた恩人だし・・。」

私は小さな声で言った。

「ッ～～～」

雨羅はためらうような声を漏らした。

私の隣でリアンは微笑む。

「ちぇっ。
仕方ない、わかったよっ、見せればいいんだろっ。みせればっ～～～」

雨羅は舌打ちし嫌そうに言ったが、
どことなくうれしそうな声が聞こえたのを私は感じた。

そして、雨羅は姿を現した。

「!?」

私は驚いた。

そこには・・顔を赤くし、じっと私をにらむ少年のような鬼がいたからだ。

髪は黒でクセっ毛で、髪から覗くのは小さな角。

一見、まだ少し幼い少年に見えるが顔立ちからは大人びた感じが見られる。

「そうやって驚くから、自分の姿が嫌いなんだッ。
驚いただろッ!?神聖な龍の次には闇に潜む鬼なんだからなっ」

そう言う雨羅はどことなくすねているような感じが見られる。

「えっ、リアンさんって龍だったの?
人の姿じゃわかんないや。

どおりで神聖な気を感じるわけだと・・・」

私はそこで言うのをやめた。

だって二人は私を目を見開いてびっくりしたように凝視してくるんだもん。

「・・。

そなたには・・大きな力を感じていたが・・。

そこまで気の反応に鈍いとは・・。混血のせいだからだろうか・・。

それはともかく、雨羅、この娘を案内してやれ。」

リアンはそういった。

「あ、あぁ。」

雨羅は目を見開いたまま頷いた。

「ってどこに??」

雨羅はリアンに聞いた。

「森を抜けたすぐ近くの街だ。

そこには情報を記すものが多くあるだろう」

リアンは言った。

「・・ねぇ、雨羅君・・。

私のこと・・・、・・・?、雨羅君?」

私は言葉を続けようとしたが、
途中で雨羅はびしっと硬直し顔を真っ赤にしたのでとりあえず聞いてみた。

「ッ～～」

雨羅は顔を赤くし、何故か、プルプルと体を震わせた。

「？」

私がその様子に首をかしげると

「そんなに恥ずかしがるでない、雨羅よ。
同じくらいの年頃なのだからな。」

と、リアンが言った。

「そっそういう意味で言ったんじゃ・・ないっ！！
ただっーー」

「ただっ・・なに？・・雨羅君・・？」

私は雨羅の言葉に立ち上がり顔を覗き込むようにして聞いた。

「ッ～～～！？」

雨羅はさっき以上に顔を真っ赤にして体を震わせた。

・・どうしたんだろー？雨羅君・・

「こらこら、ルミルよ、そうからかうでない。
雨羅は恥ずかしいだけだ。
そんな問い詰めたら余計に参いってしまうからな。」

と、リアンは言う。

「からかう?」

私は鸚鵡返しに聞く。

「・・・」

さすがリアンは黙り込んだ。

・・・からかっているように見えたんだ、リアンさんには。
・・私は単純に聞いただけだったんだけど・・・

私はそう思った。

「いや、なんでもない。
それより、ルミルよ、何か言おうとしたのではないか?」

リアンはそう言って聞いてきた。

「うん。
ねぇ、雨羅君、私のこと、名前で呼んでくれないかな?
お前とかじゃなくて普通に、ルミルって、ね?いいでしょう??」

私は雨羅にねだるように聞いた。

私は女とかお前っとかって言われるのは嫌いなほうだ。
で、でも、シンジにはそう言うことができないでいる。
「っ～～～」
「ね？」
私が微笑みながら問い返すと
「・・・ルミル・・」
と、小さく呼んでくれた。
「ありがとう、雨羅君」
私はにこっと微笑んだ。
「フンッ・・不思議な人間だな・・ッ～～！？」
雨羅は私にそういったが私がまた接近したので言葉を失った。
「私・・、人間じゃないから。」
と、私は悲しく笑う。
「・・・」
雨羅は深刻な表情に変えて黙りこくる。

リアンが

「ほら、いっておいで。
魂だけでいる場合は一週間しか体が持たないからな。
雨羅、そんなに動揺してると身が持たないぞッ」

と、ニヤッと笑っていった。

「わっ、わかってるっ！！」

雨羅はムキになって言った。

「リアンさん、帰るとき、また言いますね。」

私はそう言って雨羅に向き合った。

「いっ、いくぞっ、ッ～～」

雨羅はそういってくるりと背を向けて歩き出した。

「うん」

私もそれに頷いてついていった。

「不思議な娘だ・・。
あの、誰も信用しなかった雨羅を惹く娘だけあって、
闇と光の混ざる混沌の光は強いと言うことか。」

と、その後姿を見送ったりアンは言った。

第六十五話　精の世界、魔の世界（後書き）

まだこの話は続きます。
ではまたの機会に。

第六十六話　魔法因果律

「ね、ねぇ、雨羅君、ほんとにその格好で行くの？？」

私は街へ行く途中聞いてみた。

だって、すごくすごく不気味なと言うか怪しい格好してるんだもん。

「お、俺は人間嫌いだって言っただろっ！っ～～」

雨羅はムキになって言い返す。

事は少し前までさかのぼる。

途中、雨羅は黒い衣を纏ったのだ。

そして頭もフードで隠し、フードを深くかぶって顔まで見えなくなってしまう。

全身真っ黒。

こんな怪しい格好、どの世界でも怪しいって思うよね。

さっきからこの会話の繰り返し。

そしてようやく街に着いた。

街は普通に人々が行き交っている。

あっちの世界の町並みは一緒。

そんなに変わっていない。

だが、違うところいくつもある。

建物のつくり、人々の服装、異国の文字、魔法道具、などなど。

特に看板らしきとこには見たこともない文字の羅列が・・。

とりあえず、魂だけでも魔法は使えるか試してみた。

「ーーー」

呪文を唱えて、創り出したのはレンズが張ってあるメガネ。

魂だけでも魔力は扱えるようだ。

そしてそれをかけていろいろ見て回る。

「とりあえず最初は図書館だ」

雨羅がそう言って案内してくれたのは、書物が棚にある図書館だった。

「う、うん」

私は頷く。

そして、中に入った。

雨羅が先頭を切って案内してくれた。

たどり着いたのは、世界の仕組み　という枠の中の棚だった。

雨羅はその棚から『世界と魔』という書物を取り出してくれた。

「字は・・読めるのか？」

雨羅は問う。

「このレンズがあればね。」

私はすました口調で言う。

そしてその本を手に取り呼んでみた。

『　　二つの世界

この世界は、もう一つの世界とつながっている。

ここは魔の世界、あちらは精の世界と、隔てられている。

隔てられた世界は一つの扉しか行き交うことはできない。

精の世界、それは、精霊が世界の中心である世界。

精霊の契約、力によってその他の生き物が存在できる世界。

魔の世界、それは、魔の獣、魔物、それらが世界の中心である世界。
魔の獣、それは、魔を司る力が好みに宿る獣のこと。
魔物、それは、闇に潜む者、この世を支配する者であり、強者に服従するものなり。

魔

魔の世界に住む者、魔法使うべし。
魔の獣に対抗する術、それは、魔法。
すなわち、律を壊し、強大な何かを生み出せるもの。
魔には魔を。
魔の獣に宿る力を移植し、その力を扱うこと。　・・・・・』

私は一通り呼んでふーと息をついた。
・・魔の獣に宿る力を移植・・・
その言葉に私は引っかかっていた。
魔法はあっちの世界でもできたけど・・
こっちはモット発展しているんだろうなと思った。

「どうだった？
何かつかめたか？」

雨羅は問う。

「うん、なんとなく・・。」

私は曖昧に答えた。

そして・・

「職業・・。
職業の本ってある？」

私はそう聞いた。

「・・あ、あぁ、あるぜ、」

雨羅はそう言ってその本を私に手渡してくれた。

「ありがとう、雨羅君っ」

私はにっこり微笑む。

「ッ～～。
べ、別にッ」

雨羅は慌てて真っ赤になった顔を隠した。

私はそれを読んだ。

『　　職業

魔法使い、　あらゆる属性魔法を使いこなし、魔の獣を倒す　職業

魔術師　　自分特有の僕を召喚し、僕と共に呪術を使い、害を及ぼすものを倒す　職業

旋律者　　音を奏でて相手に影響を及ぼす力を使う者

この職業にはいくつか種類がある。

魔奏者　魔の獣を音で操り、仕事をする者

魔旋律聴奏者　魔音を奏でられる楽器を使い相手に影響を与える者

魔催眠調律師　催眠効果を及ぼさせ、操る者

魔身士　自分の体に魔の獣の力を宿らせ、人外の力を用いり仕事する職業

この職業にもいくつか種類がある。

魔眼士　魔の獣の血を使い、眼力、念力、といった力を用いる者

魔聴覚士　魔の獣の血を使い、人外の持つ聴力を使う者

魔速体士　視覚、聴覚、皮膚、その全てで感じ取りすぐさま反応できる体を持つ者

魔聴眼速体士

　魔眼士、魔聴覚士、魔速伝体士、それらの利点全てを用いる者

魔剣士　魔の力を宿した剣を使う者

魔法剣士　魔法使いと魔剣士の利点を合わせ持つ者

　・・・』

私は職業名を一通り読んだ。

「・・・」

私は何か怖いものを見た気がする。

魔聴眼速体士・・・それはもう人ではない気がする。

・・そんな人がこの世にいるなんて・・もう人を捨ててる気がする・・。

「おいっ、気分悪いのか？
顔色悪いぞッ。」

沈んだ気持ちでいるとき雨羅が声をかけてくれた。

「だ、大丈夫。
なんか、あっちの世界とずいぶん違うなって思っただけ。」
私は力なく笑って雨羅に読んだ本を返した。
「ありがとね、よく分かったよ、いろいろと・・。
あ、まだ他に本あるかな？
よければ、職業の利点欠点が詳しく乗ってる本、見せて欲しいんだけど・・。」
私が雨羅にそう聞くと
「・・・。
あぁ、あるぜ、今持って来てやる」
雨羅はそう言った私に眉をひそめたがそれも一瞬ですぐに頷いてくれた。
そのあと、すぐにそれをもって来てくれた。
「ありがと、雨羅君っ」
私は微笑み、すぐにあの、魔聴眼速体士のページを開いた。
『　　魔聴眼速体士
魔の獣の血を取り込んだ体には多大な魔力体力を消費するが
魔の力・・人外な力を、自在に扱うことができる。

魔の力を自在に扱うことを代償に、その体には常に　苦　が纏わりつく。

第一に、血を取り込むとき、激痛が体を襲う。
　これは体が魔の獣の血を拒絶するからだ。

第二に、しばらく、体が不安定な状態にさらされまともに動けなくなる。

第三に、魔の力を使うとき、激しく体力を消費する。

第四に、魔の力を使用後、疲労により意識が不安定となる。

・・などなど。

さまざまな　苦　にみまわれることになる。

そういった点ではこの職業に就く者は数えるほどしかいない。

だが、それと同時に、なればほぼ無敵状態といえる。

だが・・無敵状態はあくまで魔の力を使っている状態のことだけであって
その他は無力に近い。

そのため、魔聴眼速体士になる者は、魔旋律聴奏者　が常に傍にいる。

それは魔旋律聴奏者は、魔聴眼速体士の苦を取り除くことができるからだ。

そういった点ではなる人も多くはないが少なからずいるということだ　』

それを私は読み終えて思った。

もし、シンジがそういうものになろうとしたら、私もそれを助けるものになりたいな　と。

私は本をパタンと閉じて雨羅に言った。

「今日はありがとう、雨羅君。
今日はもう夕方だし帰ろう?」

と。

「・・今日は、かよっ。
ちぇっ、仕方ない、またつきあってやるよっ・・ルミル。」

雨羅は最後、顔を赤くしながらも私の名を呼んでくれた。

「本当にありがとう、雨羅君」

私はにっこり微笑み、本を棚に戻した。

そして、リアンのいる森へ二人は帰ったのだった。

第六十六話　魔法因果律（後書き）

えーと、まだ異世界の話は続きます。
ですが、後一話で終わる予定です。
あ、あれ？ネタばれになっちゃってる？？
・・・。
で、では、またの機会に。ー～～～（焦る、慌てる）

第六十七話　異世界の政治

リアンの元へ二人が帰り、ルミルはリアンの龍の姿を初めて見た。

「リ、リリリッリアン・・！？」

私はそのときすごく驚いた。

自分と同じ髪色をしたうろこを持つ神聖な龍の姿を。

「・・ルミルは・・まだ見てなかったんだよなッ、
もともと人の姿をしている主はこの姿を誇りに思っているらしいが・
・
俺は・・」

雨羅は私の驚く様子にそう言って・・それから・・

「俺は・・どう見てもあのイケメンの青年が
こんなゴッツイジジィ風の龍の姿だとは思いもしなかったんだよな・
・プププッ」

と、言い、口元に手を当てて笑い出す。

「・・・」

その言葉に私は一瞬思考がショートした。

「・・・っ」

そして青年のリアンの様子を想像し今と比べてみた。

・・・ぷっ。

「っ～～～」

私は笑い声を漏らさぬよう必死に我慢した。

ゴッツイというより・・ひげ生やした不良風のおじさん・・、ぷぷっ

「そなたら、偉大な我になんと言う侮辱をっーーーー」

リアンは怒った。

正直言うと、・・怖かったというより嫌になった。

あれから散々、ガミガミガミガミ説教を食らったのだ。

「龍という者はこの世にとってなくてはならぬもので、それはもう
偉大な力を授かり
この世の秩序を守り続けなければならぬという重大な役目を持ちこ
の姿は
その象徴でもあるのだ。それをそなたらは、ーーーガミガミガミガ
ミ」

という長い長い説教を正座で聴いていたのだ。

それはもう辛かった。

そのあとー、

「ルミル、そなたには時間がないな、何が知りたい？」

と、人の姿で聞かれた。

・・龍の姿での、我　とか口調はすごく似合ってたけど・・

・・・その美青年の姿は似合わないからやめて欲しい・・・・

内心そう思いながら

「えっと、まずは、国とかの政治をするものとか魔物とかの立場とか、かな」

と、言ってみた。

「ではまず国の政治から話そうか、雨羅、話してやれ」

リアンは隣に座る雨羅に言った。

「えー、俺がかよっ。

俺だって詳しくは・・ーーっっ！？」

雨羅は嫌そうな顔をしたが最後顔を真っ赤にして黙った。

それはーー、私が頼み込むようにして見つめてーーー

「雨羅くんっ、お願いーっ、どうしてもっ教えてほしいーのっ」

と、言ったためだった。

心の中では

・・お願いっ、雨羅くんっ、リアンさんの説教じみた声で聞くのはイヤーッ

と、訴えていた。

「ッ～～っ！！

ー～～し、しかたないっよなっっ～～ルっー～ルミルの～～たっ頼みだもんなっ

おっ俺が、っ～～～せっ説明してやるしかっないんだよなっ～～～っ」

と、顔を真っ赤にして私から目をそらして言ってくれた。

どうやら頼み込まれるのには慣れていないらしい。

それから、雨羅は落ち着きを取り戻して説明してくれた。

「国の政治だが・・、この世界は国ごとに王が政治を行っている。

国ごとにそれぞれの頂点に君臨している者、それが王だ。

王の種族は当たり前だが生意気な人間どもだ。

森や海、泉や地下、それらは俺等、闇に潜む者がそれぞれやっている。

王は初めに王になった者の一族、身内が代々引き継いでいった。

今もそいつらの一族が王になり引き継がれている。

それが何故か分かるか？」

雨羅は私に聞いた。

「その一族は他の人間たちよりも・・強かったから?」

私は疑問系で答えた。

「あぁ、そのとおりだ。
そいつらは、人間でありながらも人外な能力を持っているからだ。
この森がある国は小国ではない。
ここは、大国というよりも・・王国に属している。
もともとこの世界には国の数自体が少ないんだ。
だから俺等のような者は闘いとかのいざこざには巻き込まれない。」

雨羅は私の言葉に頷き更に説明してくれた。

「えっ、なんで?　国同士争ったりしないの?」

私は聞いた。

「今はないな、だが昔、一度大きな戦争を人間どもは起こしたな。
それ以来、起きはしなかったが・・。」

雨羅は言った。

「へぇー、起きなかったッてことは今は国同士揉めたりしないんだ」

私は感心したように言った。

「そうだな。
そこまでは発展していないな。
なんだって、この国の王たちの一族はどの王族よりも強大な力を持っているからな。」

雨羅は言った。

「どの王族よりも?」

「あぁ。変身・・さっきの主のように自在に変化できるからな。
その変化した姿はまさに神のようだ、とか」

私の疑問に雨羅は答えた。

「そっか、その力のおかげで国は豊かで強国なんだね」

「そういうことだ」

私は納得した。

つまり、だ。

この国の王族はどの国の王族よりも優れた能力があり、
そのおかげでこの国は大きくて、強く、そして平和なのだと。

「ねぇねぇ、魔の者たちの立場は?」

「あぁ、それもあったな」

私の言葉に雨羅は頷き、話し始める。

「まず、魔の者、俺たちは、種族により階級が違う。
もちろん、強さが大きく変わるからその階級にも大きく影響を与えるがな。」

「うんうん＾」

「魔の者、要するに魔物には大きく分けて三つの分類に分かれる。

一つ、弱者を従わせるもの、それが人間たちで言う、王だ。

二つ、強者に従うもの、　それがにんげんたちでいう、臣下、だな。

三つ、その弱者の下にいて、そいつ等は・・好き勝手にどっかいってるな。

いくら階級があったって管理しきれるものでもないし、管理する側が面倒だ。

もともと、何かに縛られるのはどの種族も嫌いだからな。

おれたち、魔物は弱肉強食、絶対王政、なんだ。

あぁー、魔物って言っても人間が崇める奴等もいるぜ。

主たち、龍とか、そういったものたちはな。

ほかは・・それに服従してる俺たち、鬼とか、自然霊だな。

・・わかったか？」

雨羅は聞いてきた。

「うんっ、大体」

私は答えた。つまり

龍　支配者

―――――――――

鬼　絶対服従　自然霊　服従者

―　　―

そのほか魔物　管理しきれない

っていうみたいな感じだ。

「ありがとう、よくわかったよ。
いろいろ教えてくれてありがとね、雨羅くん」

私はにこっと微笑んでお礼を言った。

「っ～～！
べっべつにっ～～たいしたことっーーないぜっ」

雨羅は顔を真っ赤にしてそう言った。

それから・・私は一週間、この森に滞在した。

そして多くのことを学んだ。

少しは雨羅とも打ち解けれた気がする。

それなのに少しの間あえなくなるのは残念だと思う。

魂だけって不便だなっ。

そう思い悔やんだこともある。

でも永遠の別れではない。

これからちゃんと体を持ってきてここにやってくればいいだけだ。

ソシテ別れがやってきた。

「ぜっ・・絶対、またこいよっっ～～」

「うん・・・絶対会いに来るッ」

顔を真っ赤にして言う雨羅に私は別れをしみじみと感じさせられた。

私は涙ぐんできたが、でも別れだ

「またそなたがくるのをまっている」

リアンは言った。

「はいっ、また、絶対来ますッ」

私は言った。

「今までありがとうございましたッ、じゃあ、またっーー」

そう言って私は扉の中をくぐっていったのだった。

第六十七話　異世界の政治（後書き）

無理やり帰らせてしまいました。
あハハ。
では、またの機会でっ（やばっツギノコトッカンガエテナーイッ）

第六十八話　宝玉探しの旅

「んっ・・・」

「ようやく・・起きたか・・」

私は目を覚ました。

そして視界に入ったのは・・ホッと息をつくシンジの姿と見知らぬ人がいた。

「どこか体の痛むところはないか?」

見知らぬ人が聞いてきた。

私は上半身を起こし・・

「平気・・です・・それより・・あなたはだれですか?」

と、私は聞いた。

「我が名はフローラ、僧侶をしている。
ここは我の聖域、しっかり体に戻れただろう?」

見知らぬ人はそう名乗りたずねてきた。

「はい、なんとか・・。」

私は曖昧な笑みを浮かべた。

「一週間もお前・・異世界に魂だけでいたのか？」

シンジがたずねた。

「一週間・・うん、いた・・ね」

私はまたもや曖昧に笑ってみせた。

「・・・・」

シンジは黙る。

「よっとっ」

私はベットから這い出た。

「・・・・」

シンジは私をじっと見つめる。

「フローラさん、シンジ、ありがとね」

私は二人に言った。

「いえいえ」

「・・べつに」

二人はそれに答えてくれた。

「シンジさんたちはこれからどうするんですか?」

フローラさんは聞いてきた。

「どうするの?シンジ。
私はもう大丈夫だけど。」

私は聞いた。

「年に一度開催される大会が半年後に行われる。
参加するためには七色の宝玉が必要だ。
それをとりにいく」

シンジは言った。

七色の宝玉?

まだ参加するための条件はいくつかあったはずだけど・・。

「んー、分かった。
で、はじめはどこに行くの?」

私は聞いた。

「宝玉のありかを示す地図はもうある。
まずは・・一番近い場所のブルーガの街だ。」

シンジは言った。

「そっか。で、もう出発？」

「お前がいいなら、な」

「ならいいよ、さっそくいこう？」

「・・あぁ」

シンジの言葉に私は頷き、問いかけシンジも頷いた。

「じゃあ、いろいろとありがとうございました、フローラさん」

私はぺこっとお辞儀して身支度して出発した。

その後シンジと共に聖域をでて、ブルーガの街に向けて出発した。

道なき道を歩き、しばらくしないうちにブルーガの街が見えてきた。

・・そのまま街に直行かと思ったら・・

シンジは崖があるほうへ歩き出した。

「宝玉って・・湖の中？」

私は聞いた。

「あぁ」

シンジは頷いた。

「じゃあ、潜るの？」

「あぁ」

私の問いに平然と頷くシンジ。

「息は？
魔法なし？」

「別にどっちでもいい」

そこまで聞くかというようなうんざりしたような口調なシンジ。

「じゃあ、魔法唱えてあげるね」

私はそう言って、そこで会話をやめた。

「・・・」

「・・・」

無言状態が続く。

ソシテその沈黙を破ったのはーーー

「一週間・・」

シンジだった。

「え?」

私はシンジの呟きに耳を傾ける。

「一週間、お前、異世界で何していた?」

シンジは私のほうを見向きもせず聞いてきた。

・・珍しい・・シンジから聞いてくるなんて・・

私はそう思いながら

「あっちの世界はこっちの世界より『魔』が発展していたよ。
魔物の主従関係とか政治とか魔法関係とか
文字もモチロン違ったし・全てが違ってたなぁ。
私が落ちた場所では鬼や龍がいたけど。」

と、口にした。

「伝承に記される龍が、か?」

シンジはこのとき、私を見てたずねた。

「うん、そうだよ。
私もあったときびっくりしたんだけどね。
まさか、人型と本来の龍の姿とじゃ分からなかったから」

私は言った。

「いろいろ調べたけどあっちの職業とかの分野はこっちとはリスクの大きさがまるで違ったよ」

私は続けていった。

「そうか・・。なら、人型に具現化できたんだな？」

シンジは問う。

「うん、一週間の終わりごろ消えかかってたけどね」

私は言った。

そういう会話が続きようやく湖に到着した。

「ここが・・ブルーガ湖だ。
この中は深く広いらしい。」

シンジが言った。

そして湖に近づく。

「じゃあ、まずは着替えだね。
・・・・・。」

私は言った。

なんか気まずい雰囲気が流れる。

「・・・・」

「・・・・」

「わっ私、あっちで着替えてくるねっ」

私はとっさに早口で言ってそそくさ茂みのほうに言って魔法を使って瞬時に着替えた。

シンジも着替え終わった頃に私も茂みから出て行った。

格好は半そで半ズボン、乾きやすいつくりになっている。

「じゃあ、魔法唱えるね・・」

「ーーーー」

私は唱え始めた。

そして、魔力を手のひらに集中させ二枚の護符を創り出した。

そして一枚シンジに護符を渡した後、光球を二つ生み出した。

「この護符があればこの光球が消えるまでの間は水の中でも息はできるよ。
だから光球の光量には気をつけてね。」

私は簡単に説明した。

「あぁ」

シンジは頷いた。

「じゃあ、青い宝玉さがそうー！」

私はおーと気合を入れる。

ズボォオーン

二人は湖の中に入ってそれぞれ探索し始めたのだった。

第六十九話　ただで持って帰れない宝物

湖の中は太陽の日差しでらんらんと輝いていた。
水もさほどは冷たくない。
きれいなうろこを持つ魚があちこち泳いでおり
湖の中はまるで世界が違っているかのような世界だった。
どこにあるのかなぁ？・・やっぱもっと奥深く？
シンジも深くもぐりこんでいる。
私も深くもぐることにした。
「あ、あれ・・なんだろう？」
思わず声に出してしまった。
そうそこには大きな大きな貝がそこにはあったのだ。
そう、それこそ人一人体育座りでもしていれば中に
入ってっていられるぐらいの大きさの貝がそこにあった。
「・・青色の・・貝？」
思わず首をかしげる。
色にしてみればとても珍しい色の輝きを放つ貝であった。

シンジも私の声が聞こえたのかこちらを振り向き近づいてきた・・
が、
そこで大きな何かが私とシンジの間を断ち切るように横切った。
「!?」
「ーーー!!」
えっ、なにっ!?
ビリッ・・ビリビリッ
横切った何かは黄の輝きを放つ。
ヒゲ・・の部分にあたるのだろうか、その部分がわずかに電気を帯びていた。
「なっ・・ナマズ!?」
驚きの表情を隠せず言葉にしてしまう。
「!?」
シンジもそのことに驚いたらしい。
そう、それはナマズだった。
とても大きい二人三人のっても平気なくらいの大きさのナマズがい

たのだ。

グゥオオオンゥ

デンキナマズは何かの音波を流した。

キィイインッ！！

耳に強烈な痛みが走る。

「う”ぅう！！」

慌てて耳をおさえる。

「っ～～～！！」

シンジも耳をおさえるが・・その隙にナマズが動いた！！

「シンジッ！！」

私は叫ぶ。

もう、呼吸できる時間もあとわずか。

私はともかくシンジがあぶないっ

私はシンジのほうへ駆け寄ろうと近づくが・・ナマズが邪魔をする。

グゥォオオン

ビリィ”” ビリリッ！！

感電しないだけでもマシだと思わなければならないかもしれない。

超音波が私たちを襲う。

「くっーーー！！」

シンジが苦痛で顔を歪ませた。

光球の光量がどんどんなくなっていった。

「シンジッ・・・」

私も息が苦しくなっていった。

ガハッ

シンジが息を吐き出した。

とたんにシンジの体が傾く。

「ーーー！？」

私は何とかナマズ二邪魔されないよう泳いだ。

だが、ナマズが電気をうまく使い邪魔をする。

・・このままじゃっ・・・やばいっ

私は焦る。

私も一応人間だし肺呼吸だから苦しいっでもこの場を何とかできるのは私だけ。

私は自分の魔力を糧に大きな炎球を生み出した。

「ーーーー!!」

いっけー!!

私はナマズに向かって炎球を放った。

魔力で創り出したものは普通のものとは違うから炎といっても水で消えるわけじゃない。

ナマズにそれは激突した。

グゥオォオォオオ”’

悲鳴のようなものを上げる。

だが、それでナマズを倒すことはできなかったが・・隙はつくることができた。

私はその隙をつかってシンジに駆け寄り、シンジの肩を担いだ。

「ーーー」

シンジはうっすらと目を開いた。

まだ意識はあったようだ。

そして何かを私に言っていたと思う。

でもそれが何かわからなかった。

私は心の中から

『シンジッ・・おねがいだからしゃべらないで・・もっと苦しくなるから・・』

と、伝える。

そして、私は一気に水面へと泳ぎ始めた。

バシャッ

ようやく陸へあがることができた。

「シンジッ・・・けほっけほっ」

私は多少むせながらもシンジを抱き起こした。

「っ～～、た・・す・・かっ・・た・・・・」

シンジはのどの調子を元に戻しながらも言ってくれた。

「シンジッ・・聞こえる?・・耳は大丈夫?」

私は聞いた。

二人はずぶぬれのまま陸で会話を続けた。

コクン

シンジは頷いた。

「なら・・よかった・・」

私も安心することができた。

「・・のど・・まだ調子悪いんだよね？
・・治してあげるから・・・」

私はそういって魔力を手のひらに集中させて

自分の手をシンジの、のどもとにかざした。

淡い光を放った。

そして、しばらくすると私のほうに限界が訪れた。

「っ～～～。シン・・ジ・・だっだいじょうぶ？」

私は聞いてみた。

光は既に消えていた。

魔力の限界がやってきたのかもしれない。

「あぁ・・。
おまえ・・もう魔力が・・・・」

シンジは心配そうに私を見る。

「大丈夫、・・少しすれば・・回復するよ・・・」

私は力を振り絞って微笑む。

「・・・・」

シンジは何かもの言いたげな顔をしていた。

「大丈夫だって、それより、あのナマズどうする?
次は護符を二三枚つくって息ができる時間は増やせるけど・・
あっちの対策は・・」

私がそれを聞こうとしたとき、もうしゃべるなと制するように、

「アーウィルを使う。
あいつは水属性だ。それならあいつをたおせる」

と、シンジが言った。

「そうだね・・だったら私は・・ウィーミアを呼ぶよ、
風と音属性だから、風を纏えば息はできるし音のほうも対処できる」

私も言った。

「あぁ、これならあいつを倒せる」

シンジは頷いた。

「うん・・にしても・・ちょっと寒いね・・・」

私は頷き、少し震えた。

私の髪は長いから腰まであって、ぬれた髪で体が冷えちゃうし・・。

「・・・・」

シンジは何か言いたげな感じだった。

私はすっと、自分の髪を一つに結い、前に持ってきた。

そして体をシンジに摺り寄せた。

「・・・・」

ぴくん、とシンジの眉がはね上がるが・・シンジは拒まなかった。

面倒だったのかもしれないし、拒もうとしても何もいえなかったのかもしれない。

「・・・・」

「こうしてると、・・・あったかいよね・・・」

「・・・」

私は呟く。

シンジは何も言わない。

そしてしばらく二人は休憩した。

しばらくシンジに体を寄せていた私はすっとシンジからはなれた。

「・・もうだいぶ魔力が回復したみたい。
そろそろ、やる？」

私は聞いた。

「あぁ」

シンジは頷いた。

「じゃあ、まずは精霊を呼び出そうか。
念のため、ウィーミアには音を消してもらうようにかけてもらうから」

私はそう言ってウィーミアを呼び出した。

「ウィーミア、ちょっと、てつだってくれる？」

私は聞いた。

「はい、まずは音からですね？」

ウィーミアはたずねてきた。

「うん、そう。ウィーミア、お願い。
シンジ、私たちの会話はできなくなるけど、
ウィーミアとアーウィルなら会話ができるから
それを通して会話しようね？」

私はウィーミアに頼みシンジに聞いた。

「あぁ。」

シンジは頷いてアーウィルを呼び出した。

「お呼びですか？
・・おやおや、ウィーミアさん、久しぶりですね」

アーウィルは言った。

「うん、久しぶりね。
今日は久々に役目をもらいました、一緒に頑張りましょう？」

「そうですね、ようやくリングから出れたところですからね」

ウィーミアとアーウィルは互いに笑いあった。

結構仲がいいみたいだ。

「じゃあ、お願い、ウィーミア。」

「はいっ」

私は言った。

ウィーミアは私たちに音波の聞かない守(シュ)を纏わせてくれた。

『ありがとう』

と、ウィーミアに伝えた。

そして呪文を唱えた。

そして護符を六枚作り上げた。

三枚、シンジに渡した。

『シンジにこれがあれば数時間はもつよって伝えといて』

「はい、わかりました。」

私がウィーミアに頼むと

ウィーミアがシンジに直接言った。

あ、そういえば、守をつくったのはウィーミアなんだから会話ができるじゃんっ

内心、そう思った。

ウィーミアはシンジにそのまま伝えたと思う。

「・・・・」

シンジは私のほうを見て頷いてくれた。

私もそれに応え、微笑む。

そして護符を貼り付けて四人は湖にもぐった。

ある程度、深く潜るとあの大きな貝が見えた。

きっと、あの中に青の宝玉があるはずだ。

そして、案の定、あのナマズは襲ってきた。

グォオオオオン

たぶんナマズは音波を出したと思う。

でも聞こえなかった。

『ウィーミア、風の刃で切り刻んでッ』

私はウィーミアに命じた。

「ーーーー!!」

シンジもたぶんアーウィルに命じた。

そんなしぐさをしていたから。

ナマズはウィーミアの風の傷を受けたにもかかわらず
その傷は徐々に治っていった。
治癒能力が高いのかもしれない。
ウィーミアの攻撃から休む間を与えずアーウィルが攻撃をした。
氷系統の技みたいだ。
水全体が冷たくなっていった。
ナマズがそれに激突する。
何度もそれを繰り返したがいっこうにナマズは倒れない。
やはり急所か弱点の系統をつかなければならない。
私はシンジに近づき、そっと、腕をつかんだ。
そして・・
『ナマズに電気を浴びさせよう?
私があのナマズを結界に取り囲んでその隙に魔法で叩けば倒せるかも。
ウィーミアとアーウィルの融合魔法なら技の系統を電気に変換できるかもしれない。
ならいいでしょ?』
と、たずねる。

「ーーーー・・・ーーーーー・・・ーーーー・・」
だが・・そうすると・・お前が・・・
たぶんシンジはそういいたかったと思う。
『大丈夫だって。
結界の大きさも電気にも耐えられるよ。
・・・私には人外の持つ力があるから・・」
私は最後声に出した。
きっと、シンジには聞こえなかっただろうけど。
「ーーーー」
シンジは私の表情を見てなにやら言った。
『と、いうことで、さっそく開始、ネ』
私はそう言ってウィーミアに伝えた。
ウィーミアも頷いてアーウィルに伝える。
そして両者が頷いたとき私は結界でナマズを押さえ込んだ。
「くっ、う”ぅう」
意外と大変だった。

結界が大きいのと閉じ込めたナマズの攻撃ががんがんと振動してくる。

そして、ウィーミアたちは呪文を唱えた。

普段はそんなことはナシでできるが融合技なだけに必要なのかもしれない。

「つぅ・・”・・うっ”」

必死に私は耐える。

余裕がなくなりシンジもそれは察したようで何か言う。

体がふらつくたびに何か言われ支えられる。

そのたびに必死に歯を食いしばって耐えた。

そして呪文詠唱が終え、結界の中にそれは爆発した。

ズドォオオーン！”””

その反動に一瞬意識が遠のく。

だが、何とか取り持った。

そして終わっただろうと思って結界をとくと大きかったナマズが・・

「ちっちゃっ！！」

と、思わず声に出してしまうほど、

ちっちゃくなってしまったのだ。

そしてそのナマズはわたしたちをみて、

「ー！！？」

ひぃーってな感じで一目散に逃げていった。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

四人は互いの顔を見合わせる。

なんだか、最後はあっけなかった気がしたからだと思う。

達成感よりも脱力感が沸いてきた。

そしてそのあと、青の宝玉を取りに行き、宝玉を手に入れた。

そして陸に戻り・・

「ウィーミア、アーウィル、ありがとね。

シンジも・・体を支えてくれて・・ありがとう」

と、みんなにお礼を言った。

「ルミルもがんばったよ、次も呼んでね？」

「いえいえ、ルミル様のほうこそ頑張ってくださいました
何かあったときにはまた呼んでください」

「・・べつに」

みんなはそれぞれに返してくれた。

「本当にありがとね、みんな！」

私はめいいっぱい微笑んだ。

その後私とシンジは他の宝玉も取りに行った。

手に入れるとはいっても命がけだった。

苦労したし二人でなければ取れない玉もあった。

そして、すべての宝玉を手に入れた頃には・・

大会開催まであと一ヶ月をきっていた。

そして、それぞれ大会が開かれる最寄の街で私とシンジは修行に明け暮れました、とさ。

つぎは私とシンジの修行からどうぞっ！

第六十九話　ただで持って帰れない宝物（後書き）

無理やり一話で終わらせてしまいました。
ごめんなさい。
どうしても終わらせたい一身で。
なんせ、もう頭には第二部がうかんでいるものですから・・・。
では、またの機会に。ではでは～。

第七十話　大会までラストスパート！

宝玉を集め終わって早一週間、私とシンジは修行していますっ。

「ユーライ、ゴッドサンダー！！」

「ヴィオラ、ブラッドリアス！！」

ダーン”””

と、雷が相手に落ちるが・・

ガガッァッッ！！

と、食い止められる。

そう、今、私とシンジは練習試合・・をしているのだ。

シンジは最近、シンジの兄に預けていた精霊を使っている。

シンジには兄のほか、姉と弟がいるらしい。

私は今旅に出ている姉が一人と母がいるけど・・。

さて、そんなことよりも集中！！

ヴィオラは悪属性でユーライとは相性がよくない。

弱点を克服、それが今回のテーマだ。

「ユーライっ、ブレインスラッシャー！！」

「ヴィオラ、フウラガリュウ！！」

ヒュッヒュンッ！！

ギッガガッ

ユーライの飛ばしたいくつものの刃が相手を切り刻む。

そしてヴィオラはそれを風で押し返した。

そのまま刃が帰ってきた。

そしてその刃が私に向かってくる。

「！！」

私は天寿の力を使いそうになった。

でも、使わなかった。

試合前にシンジに言われたからだ。

『力は使うなよ。お前は力に頼りすぎだからな』

と。

ヒュッ・・・シュッシュッ

私は自慢もできる視力で刃を見切るが
・・途中融合して大きくなった刃は交わすことができなくなった。
当たる！！
「っーー！！？」
私は反射的に目をつぶった。
そして当たる瞬間、体が突如浮いた！！
恐る恐る目を開けると
「くくっ、
このぐらい俺がいなくても避けろよな、あいつが怒るぜ・・いろんな意味で、な」
と、余裕かまして笑うユーライがいた。
なんと、私は空中でユーライに抱かれていたのだ。
「・・・・・」
シンジは私たちをにらんだ。
あ・・ユーライのいうとおり怒ってる・・どうしよ・・
私が避けなかったから・・・あぁ・・怒られる
私はあたふたする。

「くくっ、シンジもザマぁないな。
何も言わないからこいつが勘違いしてやがるぜ」

ユーライは笑った。

「・・勘違い？」

私は聞いた。

え？私が避けなかったから怒ってるんじゃないの？？
え？違うの？？？？

「・・・・」

シンジは黙ったまま私とユーライを見据え、

「ヴィオラ、ラガートデロナ！！」

と、命令を下した。

グゥオン！！

大きな闇がヴィオラを包んだ。

「ユ、ユーライっ、ザルクワンスロート！」

私は冷静さを取り戻し命じた。

ユーライは片腕で私を抱え、

「ーーーー！！」

と、何らかの呪文を発し、技を発動させた。

ルゥル”ウウオォン””

闇に近い色をした黒がヴィオラを包んだ。

グゥワァッァァアア””！！

ヴィオラの悲鳴が聞こえた。

「ヴィオラっ、ギルドドルレイン！！」

シンジが叫ぶ。

すると、ユーライの技がどんどん吸い込まれていった。

シュールルゥルゥウウ

そしてそこにはヴィオラだけが残った。

ユーライは私を地面に降ろした。

「さすが悪属性だな。

なら・・ちょっとオマエさんの力をわけてもらわないとなっ」

ユーライはそう言って私の額に手を伸ばした。

「ちょ・・・ーーーーー・・・・」

抵抗する暇もなく額に手を当てられ力が抜けた。

第七十一話　克服特訓ラストスパート

私はへなへなと座り込む。

少し頭がぼぉーっとしてきた。

・・ユーライはちょっと本気になりすぎじゃないんだろうか

・・・私の・・力は使っちゃいけないのに・・・

私はぼぉーっとした頭で考える。

ユーライは不敵な笑みを浮かべ

「ククッ、これで俺の嫌いな悪属性に勝てる。

まぁ、こいつの力を使わないと勝てないとは情けないが・・。

ククッ、でも実験のやりがいはありそうだ」

と、言って私の魔力を玉に具現化させ、

片方の手でそれを持ち、反対の手で自分の魔力を具現化させた。

「力は使うなと言ったはずだが・・。

弱点克服のためにはなる、か」

シンジは呟いた。

「ユーライ・・融合ヴァイラル・・・」

私は言った。

まぁ、言わなくてもユーライはしただろうが。

「ーーーー」

ユーライは何らかの呪文を唱え、
私の魔力の玉から魔力がユーライの魔力に取り込まれた。

ズヴヴヴゥッォン

周りの自然エネルギーも共鳴しそれに取り込まれていった。

「ヴィオラ、ディストレアム！」

シンジは命じた。

ルゥウウヴォン”’

ギググヴブゥォン”

ユーライは
大きなエネルギー玉を自由自在に変化させ、刃、槍となって襲わせた。

だが、ヴィオラは防御し、闇の波動を打ち出した。

ヴォ”ウォオン

ユーライは私を抱え空中に逃げた。

最後に私の魔力を自分の体と融合させた。

ユーライは漆黒の炎を相手に打ち出し、闇の波動を打ち消す。
勢いあまって炎がシンジたちのほうへ襲いにかかった。
ブワァァアア
ヒュッーー
炎で煙があたりを包み込む。
私やユーライも煙に巻き込まれた。
「けほっ・・けほっ」
思わずむせてセキが出る。
「やったか・・・」
ユーライが安堵の声を漏らす。
だが・・・
ヒュンッ・・グサッ
突如一条の光る矢が現れユーライに直撃した。
「けほッ・・・ユー・・・ライっーー！！」
私は叫ぶが煙で声がかすれる。

「ぐっ・・・ーーー」

ユーライはうめき、腕の力がなくなった。

と同時に私が落っこちた。

おっおちるぅうううう！？

反射的に目をつぶった。

ヒューーーーーどさっ

「っ～～～～」

私の耳元からそんなうめき声が聞こえた。

うめいているというより・・なんか、痛がってるというか・・

私はその声に目を開けた。

「シン・・ジ・・？ーーーー！！」

私はかすれた声で恐る恐る呼ぶ。

煙は徐々に消え去っていった。

徐々に私が誰の上に乗っているかがわかる。

そして完全に煙は消え去った。

「・・だいじょうぶ・・か?」

シンジは聞いた。

「う、うん。・・ありがと・・」

私はかすれた声で言った。

「わぁっ・・ど、どくねっ・・」

私は慌ててシンジの上からどいた。

立ち上がり、とりあえずどいたが・・足元がふらついた

ふらっーーー

体が言うことをきかない。

立ち上がったが足に力が入らず地面に倒れこんだ。

「ぇ・・なんで・・・」

自分でも分からない・・。

「ハァ・・っ・・ハァッ・・ぁれ?・・こきゅぅも・・・・・」

息が突然荒くなり呼吸が苦しくなった。

「ハァ・・・っーーー」

シンジも苦しそうにあえいでいる。

そしてシンジの傍にヴィオラとユーライがやってきた。

「ィテテっ、ん？・・苦しそうだな・・。
ーーあの炎の煙のせい、だな・・・」

ユーライが腕を抑えながらやってきた。

そして・・・ひょいっと私を抱き上げる。

「ーーぁ・・っ、ーーーー～～」
なっ・・・っ～～～～

私は思わず驚きうめく。

「ーーー！？」

シンジは立ち上がったが・・・足がふらついている。

スッーーー

ヴィオラがシンジを支えた。

「・・主、無理は良くない」

ヴィオラはそう言って、ユーライに目を向けた。

「そう睨むなって・・。

確かに悪いのは俺だがな。
俺がやると、余計に有害物質が増えるぜ？
オマエさんがやるんだな」

ユーライは俺には無理だとお手上げな感じでヴィオラに言った。

「・・・・」

ヴィオラは黙ってしまった。

そして・・

「ーーーー」

ヴィオラは呪文を唱えた。

唱え終わると同時に手を空中に振りかざした。

そして、一気に呪文を発動させる。

シュワーァッァアアン

すると、呼吸が楽になった。

「スーハァ、スーハァ」

何度も息を吸って試した。

もう大丈夫みたい

「ぁ・・呼吸が楽になった・・。
ありがとう・・ヴィオラ」
私はお礼を言った。
「まさか、俺とお前の魔力の融合物が有害物質を作り出すとはな・・
」
ユーライは私を見て言った。
「・・ユーライがわるいんだよ・・
・・ユーライが勝手に私をぉーーーー」
「別にいいじゃんか、本番は使うだろ?」
「まぁそうだけど・・・・」
ユーライの言葉に私は責められなくなる。
「・・今日は終わりだ。
また明日からはじめる。
ーーーーーーーーーーーーーーーー」
シンジはまだいいたげな顔をして私とユーライを見た。
ユーライが
「ククッ。そんなに妬くなよ。
はっきり言えばいいじゃないか。
早く返せーーってな」

と、ククククッと笑いながら言った。

シンジが妬く??
どういうこと??

私にはよく分からなかった。

「・・・・」

シンジはじっと私を見つめた。

「・・・?」

私はその見つめる意味が理解できなかった。

少しの間、シンジは私を見た後、

「フンッ、いつまでそうしている気だ?」

と、聞いた。

かなり不敵な笑みを浮かべている。

「ぇ?」

私は?だった。

だが・・あることに気づいた。

私は今、ユーライに抱き上げられたまま　だということに。

「ぁ・・、ユッユーライっ！は、はやくおろしてっ！」

私はシンジの言う意味を理解し即座に言った。

「ククッ、気づくのが遅い奴だな。
俺はこうしててもいいが？」

と、ユーライはからかい半分な口調で聞いてきた。

「なっーー！
も、もう大丈夫だからっ、お、降ろしてよッ！
でなきゃ、うごけないでしょ！！」

私は言った。

「チッ、仕方ない」

ユーライは舌打ちして私をしぶしぶ降ろしてくれた。

「ククッ、お前はほんと面白い奴だな。
じゃあ、また呼べよ？」

そう言ってユーライはリングへと帰った。

ヴィオラもシンジはリングに戻した。

「自分の精霊くらい、従わせろ」

シンジは不機嫌そうに言った。

「従わせるって・・・。
まぁ、すこしはしつけするけど・・・。」

私はシンジの言葉に抵抗を感じた。

・・従わせるって言われても・・犬とかじゃないんだから・・・。

「しつけ、か。
まだ、技を素直に出させてるだけマシなほう、か。」

シンジは呟いた。

「精霊は道具でもないんだから・・いいじゃん、少しは」

私は言った。

「甘いな」

シンジは鼻で笑う。

「少しはっていってること自体、お前は甘いままだな。」

「あ、あまくてもいいもんっ」

私はシンジに言った。

・・甘いって言われても精霊とは主従関係だけじゃいやだもの！

「ふんっ、まぁ、それが大会でアダにならなければいいがな？」

シンジは俺はそんな失敗しないという風な感じで言う。

「頑張るよっ、少なくともそれで足引っ張りはしないよっ！」

私はムキになって言う。

「なら、いい。」（フー）少し諦めがち。

シンジはそう言った。

どうやら説得を諦めたらしい。

小さく息をつくのが聞こえた。

そんなこんなで特訓は続いた。

私も精霊使いとしては技量も上がり並大抵の人には後れを取らぬほどに成長した。

まぁ、シンジはそういう面では勝てっこないが。

特訓を続けようやく大会日がやってきた。

さてさてこれから一体どうなるのでしょう？

第七十一話　克服特訓ラストスパート（後書き）

やっと、ここまでかけました。
物語は終盤を迎えようとしています。
まぁ、これを完結させても続編は書くので終わりませんが。
ではまたの機会で。

第七十二話　年に一度の大きな大会

「・・ここがクルスタルタウン・・なんだ・・・」

私は街に着き呟いた。

「あぁ」

シンジは頷いた。

そう、私たちは着いたのだ。

技量溢れる精霊使いばかりが集まる大会が開かれる街に。

ガヤガヤ、ワイワイーーーーー

街は祭りがあるかのように人で溢れていた。

クリスタルタウン・・名前どおりクリスタルで栄えた街である。

近くにある鉱山で取れる鉱物の純度が高いらしく、

加工する技量をかね添えた者が活躍し、

精霊の助けもあって今は有名な街の一つとして数えられる。

そしてその中へと私とシンジは入っていったのだった。

ガヤガヤーーギュゥギュゥウ

道は広いはずなのになぜか、なぜか・・歩くのにも一苦労。

私より一歩前にいたシンジが遠くに感じるのは何故か。・・・

ハァ、ハァ、ゼーゼー

シンジについていくのもやっとの有様。

そんなとき、私は誰かの足につまずいた。

「ィタッ・・・」

ズテっと軽く転び、ひざを突いた。

「何をやってる」

そのとき、シンジが私のほうを振り向き立ち止まる。

「ぇ・・・？」

そしてシンジは私に手を差し出した。

「早くしろ」

シンジは私を見つめて不機嫌そうに言う。

・・・シンジ・・どうして・・手なんか・・・

私は不思議でたまらなかったが・・手をつなぐことに関してはうれしかったから

「う、うんーーっ」

私はシンジの手の上に自分の手を乗せた。

シンジはグイッと引っ張り私を立たせた。

シンジの手は意外にも大きく頼りがいがあった。

そして・・その手からは・・ぬくもりも感じた・・。

「いくぞ」

「うん」

シンジはそういうなりきびすをかえして歩き出した。

私も頷きつないだ手にしたがって歩いた。

しばらく歩くと大会会場が見えた。

「こ、ここが・・大会会場・・・」

私は緊張した。

シンジと手をつないでいたせいもあり声もどこと無く引き締まって

いた。

「・・・・」

スッとシンジが何の前触れも無く手を放した。

「・・・？」

私がそのことに疑問を持つと・・

「あ、シンジじゃんかっ！！それにルミルも！！」

と、明るくそして懐かしい声が私の耳元に届いた。

「やっと見つけた、探したぜ？それにしても・・久しぶりだな、シンジもルミルも」

そしてもう一人も私たちを見て懐かしそうにいった。

第七十三話　再会とーーー

私とシンジに声をかけたのは・・・

「ジュンっ！サトルっ！！」

私は声に出してしまうほど驚きとうれしさが混じっていた。

そう、再会したのはまさにジュンとサトルだった。

「・・・」

シンジは黙ったまま二人を見据えている。

「また会えたぜッ！
シンジならこの大会には必ずでるはずだもんな！！
探したかいがあったぜ！！」

ジュンはいつも以上に喜んでいた。

「ほんとに久しぶりだな
げんきだったか？」

サトルは聞いてきた。

サトルはジュンほど声には表れていないが嬉しそうである。

「うんっ、元気げんき」

私は微笑みながら言った。

「おい、ルミルたちはまだ参加届けだしてないよな？
はやくだしにいけよー！でないと罰金だーっ！！」

ジュンが焦らせる。

「ジュ、ジュンっ、そんなに焦らなくたって大丈夫だって。
じゃあ、早速いこう？シンジ。」

私はジュンをおさめてシンジに聞いた。

「あぁ」

シンジは頷き、すぐさまジュンたちに背を向けて歩き出した。

後ろからーーー

「チェッ、シンジの奴、少しは俺が来たんだから喜べってんだっ」

と、ジュンのすねた声が聞こえた。

「すねるなよ、ジュン。
いつものことだろ？」

サトルがジュンをなだめてた。

そんな会話を聞いていると
・・ちょっぴり私はシンジを責めたくなっちゃいそう。

まぁ、責めたって事態は変わらないだろうけど。

そして私とシンジは参加届けを提出する場所までたどり着いた。

「こんにちわ、大会に参加してくださる方々ですか？」

その場所のスタッフが問う。

私とシンジは頷いた。

「では、こちらに記入をしてください」

スタッフはそう言って白い羊皮紙を渡してきた。

「はい」

私はそれを受け取って記入欄に名前などいろいろ書いた。

シンジも記入した。

記入し終えると

「ルミルさんと、シンジさん、ですね。
お二方ペアで、ということになりますが、よろしいですか？」

スタッフはそう聞いてきた。

私はシンジのほうを見た。

ーーペアーーで・・いいのかな？

少し不安になって見つめたつもりだが、シンジはすんなりとあっさり頷いた。

「・・はいっ」

私は頷いた。

「はい、かしこまりました。
では登録します。」

スタッフはそう言って、コンピューターで登録をした。

「はい、登録し終えました。
・・・これで二組目・・ですね・・」

スタッフはなにやら最後ボソッと小声で呟いた。

シンジは眉をひそめた。

私も疑問に思い・・・

「二組目って何が、ですか？」

と、直接聞いてみた。

「あ、えっと・・。」

スタッフはなにやら戸惑い始める。

ソシテ吹っ切ったように

「男女ペアの組があなた方で二組目なんですよ。」

と、にっこり笑ってかえってきた。

そして私たちが何か言う前に・・

「これをどうぞ、お部屋の鍵になります。
それと、あなた方の登録番号は５０番になりますので。」

と、言って私に鍵を渡してきた。

番号はいいとして・・・鍵はーー、一つだけ？・・・・っていうことは・・・

も、もももしかして・・シンジと相部屋ーーーっ！？

私は内心の動揺を抑えながら

「あ、ありがとうございます・・・・っ」

と、礼を述べたがなぜか声が震えてた。

・・前だって相部屋っていってもおかしくなかったし平気だったのに・・

・・どうしていまさらになってすごくきんちょうするの？！！

私はシンジたちに気づかれないよう心を落ち着けた。

隠しきれていない気がしたけど、まぁ、そこは考えない方向で・・。

そのあと、私とシンジは部屋に荷物を置いた。

そのときはもう、ジュンもサトルもいなかった。

先にホールへ行ってしまったようだ。

渡された鍵で部屋のドアを開けるとーー

「うわー、ひろーいっ」

思わず声が出るほどその部屋は広かった。

さすが二人部屋というかなんというか・・。

「あたりまえだろ、二人で使うんだからな」

シンジはあっさり当然口調で言った。

・・シンジには抵抗ないのかなぁ？

・・二人でって言葉を使うのにーーーー。

私はそう思いながらも

「そ、そうだけどね・・・」

と、同意する。

部屋は二つのベットがあって、そのほかにテーブルといす、ソファもあり、

お風呂もあって、そのほか必須用具もそろっており、まさに豪華な部屋だった。

「シンジが・・鍵もってる?」

私は一応きいてみた。

今までそういうことは私ではなくシンジがやっていたのだ。

まぁ、そこまで頼られる存在でなかったし、ネ・・。

「いい、お前がもってろ」

シンジは私をチラッと一度だけ見て言った。

そして荷物の整理を続けた。

「う、うん、わかった。もってるね」

シンジの意外な言葉に私はとりあえず頷き、大切に持った。

「・・・」

シンジはそのあと何も言わず荷物を整理し終えた。

私も一応整理し終えるとーー

「あいつらはもう先にいっている。
俺たちも行くぞ」

と、シンジが私に言い、部屋を出た。

「うん、いこう」

私もそう言い返し、部屋を出て鍵を閉めた。

あいつらっていうのはきっとジュンたちのことだろう。

なんだかんだいってシンジはジュンたちのことを気にしているようである。

そして廊下を歩いた。

部屋は大会会場からつながる建物にあった。

そして大会会場のほうへむかった。

大会会場は大きなホールで、七色大会よりも広く大きかった。

当然といえば当然なのだが。

そのホールへと向かった。

ホールへと入った。

そしてしばらくすると大会創立者の人が・・話をした。

・・長かったのでそれは省略する。

そして

「では、今から対戦表をお見せします。
その前にルールを説明しますので良く聞いてください」

と、説明が行われた。

「一つは、昨年から負傷者が続出していますので
それもあってのダブルバトルとなりました。
ですので、どちらかの精霊が瀕死状態になればそこで試合終了となります。
そしてもう一つ。
武器は使用禁止です。
魔法で具現化されたものなら許可しますが
刀や剣などは禁止です。

以上、で特別ルールの説明は終わりです。
そのほかの詳しい説明はもう皆さんはしっているでしょう。
どちらかが倒れるまで勝負、それが基本ですからね。

では対戦表をどうぞ！！」

と、言われ、正面にあるスクリーンにそれは映された。

はじめの相手は・・・

「えっえぇ！？、もう！？こんなにはやくに！？」

私は驚きすぎて混乱した。

だって・・だって・・そのペアはーーーーーーーーー。

第七十四話　対戦相手はーーーーーーペア！？

だって・・だって・・

私が戸惑っていると後ろからーー

「あ、見つけた見つけた。
さがしたぜっ、二人とも！」

と、言う声がした。

こっ・・この声はッーーーっ

「ジュ、ジュンっ！サトルーーっ！！」

私は振り向き叫んだ。

対戦表でのことでの驚きが隠せない。

「ん？どうした？ルミル。」

「おいおい、そんなに驚くなよッ」

サトルが眉をひそめ、ジュンはへらへらと笑って言う。

・・二人とも・・・こんなに早くに当たったのに平気なんだ・・

・・それとも・・これが・・当たり前なの？？

私はその強さが信じられなかった。

勝つ自信がないわけじゃない。

ただ・・ただ私は・・もう少し勝負を先送りにして欲しかった・・

ただ・・私はもっとみんなで以前のように話したかっただけ・・

・・これは・・思っちゃいけないこと??

「あ、ごめん・・びっくりしちゃって思わず叫んじゃったっ、アハハ・・・」

私は今ある気持ちを伏せて笑った。

シンジは私のほうを一瞬に見て・・

「・・・。

強くなったか?」

と、ジュンたちに聞いた。

たぶん、私を気遣ってくれたのだと思う。

たぶんだけど・・。

驚きすぎて私は自分を抑えられないでいるから・・・。

「当たり前だろッ?

今日のためにどれだけ特訓を重ねてきたと思ってんだ!!

絶対勝ってやるからな、覚悟しろっ！！」

ビシーーッ！

っと、私たちを指差してジュンは宣告をする。

「あぁ、そうだ。
俺たちはあのときのバトルと大会での悔しさは忘れていない。
絶対負けないからな！！」

サトルはこぶしをぎゅっと握り締めシンジに向かって突き出した。

「受けてたつ」

シンジはサトルを見て言った。

サトルやジュンを映すシンジの瞳には強い意志が宿られている。

・・シンジは・・うれしいんだね、ジュンたちと戦えて。・・・

私も・・うれしいけど・・でも・・・・ううんっ

・・そんなこといってられないっ、・・受け入れて勝たなきゃ！！

私は一人、決意して

「私もッ、負けないからッ、次も絶対勝つからね？」

と、二人に向かって言葉をなげかけた。

「ぜぇーたいっ！勝つのは俺たちだ！！」

ジュンが身を乗り出して言う。

「いぃーやっ！勝つのは私たちだよ！！」

私も身を乗り出していった。

「・・・」

「・・・」

私とジュンは顔を見合わせて、

「「アハッハハッハハッハハッハハハ」」

と、一緒に笑う。

笑い終わってから・・

「ま、そーいうことで、お互い悔いの無いバトルにしようね？」

と、私は言った。

「あぁ、当たり前だろ？そんなの」

「最高のバトルにしようぜ」

ジュンもサトルもそう言ってくれた。

そのあと、二人と別れて対戦時間を確認したうえで
バトル場に向かった。
そうそう、ここまでくれば対戦相手が誰だかわかるでしょ？
言ってるも同然だし、じゃあ、改めて・・
対戦相手は・・　ジュンサトルペア　でーす！！
私が最初に戸惑ったわけをわかってくれました？？
と、いうことで、私とシンジはむかったのだ。
誰でいくかはもう決まっていた。
その辺はシンジと打ち合わせをしている。
まぁ、ほとんど話を振ったのは当然のごとく私だけど。
シンジもバトル系だから少しは話してくれた。
「・・あいつ等とのバトル・・いやか？」
シンジは聞いてきた。
それは向かう途中で二人きりになったからだ。
ソシテ立ち止まる。

「ううん、嫌じゃないよ、ただびっくりしただけ。
あのときはまさか、こんなにも早いなんて思わなかったから」

私は自嘲気味に笑って答えた。

バトルに甘かったのは私なんだ。

驚いて嫌がるような気持ちではいちゃいけない。

「・・・」

シンジは私を見つめた。

「・・なに？シンジ・・」

私はドキッとして聞く。

なにか、一瞬心を覗かれたような気がして・・。

「お前、自分を抑えるのはやめろ」

シンジは私を見て答えた。

なにか、真剣なまなざしで・・
真剣な表情で答えてくれるシンジはいつもと違う気がした。

いつもより・・感情を表に出していて・・
そして私を思ってくれているのだと思えた。

シンジは・・私を・・・どう思っているの？？

「自分を・・抑える・・?・・・・どうして?
どうして私が・・そうだと思うの??」

私は聞いた。

このとき何故か声が震えた。

シンジは私の瞳をじっと見据えるように見て

「同じことを何度も言わせるな」

と、言って私から顔をそらし、いくぞと小さい声で言って歩き出す。

同じこと・・、それって・・思ってることがすぐに顔に出ること??

私は考えた。

そのことなら以前に言われた気がする・・きっぱりと。

私は自分ではうまく隠せていると思う。

でも、いつもシンジには見透かされていた。

他の人ならたぶんごまかせただろう。

「・・あ、まってよっシンジーーっ!」

私は考え事をしながらもシンジに追いつこうと走った。

「ねぇねぇ、シンジはなんでさっき抑えるなっていったの??」

私は明るい声を出して聞いた。

冷静に考えればそんな疑問が頭に浮かんだのだった。

「・・・」

シンジは何も言わない。

けど一瞬私のほうを見た。

私は答えてくれるかなとキラキラした瞳で見つめた。

フーッ

シンジは小さく息をつく。

そして思い切ってみょうにあっさりと・・

「自分を抑えるお前をみたくないからだ」

と、きっぱり言った。

「・・・え?」

いつも自分を責められると何も言わないシンジが言うとは思っても見なかった。

私はビックリしすぎてちょっと頭が混乱。

「なっ、なんで??なんで、なの??」

私は聞いた。

さすがに答えてくれないだろうと思ったけど・・・

「不愉快だからだ」

と、あっさりきっぱり冷たく言い放った。

「・・・・」

今回ばかりは撃沈。

・・さっきは優しかったッと思ったのに。

シンジ・・ごまかしてるの??

どういう意味で不愉快??

「ふ、ふーん、そう。・・そう、なんだ。

へ、へぇー。う・・うん、わかった・・。

努力は・・するよ、うん。」

私は頷いた。

ちょっと頭も混乱、心も混乱でなんか言葉も言い方がぎこちない

「・・・」

シンジは何も言わず歩く。

しばらく歩いてようやく頭も心も整理がついた。

「じゃあ、あの作戦でやるんだよね？」

私はバトルの方に頭を切り替えた。

「・・あぁ」

シンジは頷いた。

そしてバトルは・・始まった！

「ラル！お願いッ」

「ユーラル！バトルスタンバイ！」

「ペルン！！ＧＯ！ＧＯ！」

「ライデルっ、お前の出番だ！！」

私とシンジ、ジュンにサトルは精霊を呼びだした。

バトルゾーンは大きく、今回は相手の行動が丸見えの草原ゾーンだ。

こんも大会は、一回戦ごとにフィールドが違う。

それは場を盛り上げるためでもある。

ラルとユーラルのコンビは前々から訓練を重ねてきた。

意外と技の相性も良く

これなら相手を確実にしとめられるとシンジも判断した。

先手必勝！そのために先制攻撃を仕掛ける。

まずは相手の器試しヘ

「ラル、サンダールシード！」

私は叫ぶ。

ヴヴッ・・ズドーォオオオオ”

ラルは毛を逆立て正面に大きな盾のような雷の塊を作り上げ、それを放った。

「わぁお、おっきぃな！！」

「試してるのかもな」

ジュンとサトルの声が聞こえる。

そして二人と精霊はあっさりと避けた。

避けた瞬間っ

「ユーラル、デッドヴラン！」

シンジが命じた。

ユーラルはそれを聞き、漆黒の翼を背に生やし、そこから妖艶な波動を打ち出した。

ヴォオン”！ヴォオン”””！

「イッ”」

「なっーー”””」

あちらの二人は驚き、反応が一瞬遅れる。

そして体中のあちこちに小さなかすり傷を負った。

波動を浴びたからである。

「っ”””」

「ヴールルルゥ」

ペルンは顔を歪ませ、ライデルはうなる。

「ペルンーッウォーターハッド！」

「ライデル、ヴォルトウォンド！」

二人はかすり傷など目もくれずそのまま命じた。

ズボボボボォオオオ

ビリッヴィイイイ”

二体の精霊が二つの技を組み合わせコンビ技を発動させた。

「・・・」フンッ

シンジは精霊たちとあの二人を見て鼻で笑った。

楽しめると思ったのかもしれない・・

いや、勝利を確信・・・かな?

ズヴォオオ、ビヴォイイ・・ヒュゥウぅ”ーーー”””

電気と水の融合技が襲ってきた!!

「ラル、フォウヴォルト!」

「ユーラル、ヴッドリドール”!」

私とシンジは攻撃を命じた。

融合技を消し去りなおかつ攻撃するためである。

ヴォオオンーーー

ラルが雄叫びを上げ体を変化させていった。

そして私は呪をラルにかける。

ラルの変化と私の呪を融合させたらーーー

ヴォウヴォンボォウウ

ラルの毛並みは赤々と炎のように燃える赤になった。

そして・・

ヴォオゥウウ、ビヴィィイイイ

電気と炎が混じった攻撃力、大の電気球が創り出された。

そしてユーラルは・・

ヴゥウウヴゥウウグッギィイイイ”

と、地面から闇色の植物をはやさせ、融合技を押さえ込んだ。

そしてラルが電気玉を打ち込みーーー

ズッボヴォオオン！！

ビリッヴォォウヴォォオウボォオウ

グヴォォオオオオオン

技が爆発しあう。

「ユーラル、ブラッドデーモン”」

騒音が響く中でシンジはユーラルに命じた。

ユーラルが体中闇色に染め、大きな闇を闇色の植物に放った。

ヴォオオン”

技が影響を与えない植物の根のほうに漆黒の卵をみつけたーー。

おそらくそれを技で召喚したんだろう。

「っ～～、ペルンッ、アイスシャルード！！」

「”ライデル、ダーツヒュッド！！」

二人は、顔色を悪くさせながらも命じる。

たぶん、それに気づいているのは見ている人のみ。

おそらく自分では気づいていない。

ペルンは氷のつぶてを私たちの真上に召喚させ落とす。

ライデルは電気の矢を打ち出し植物を裂こうとしている。

ヴウウウ”

漆黒の卵は徐々に大きくなっていく。

「シンジ・・もうすこし」

私はシンジに聞こえるよう呟く。

「あぁ」

シンジは頷いた。

私の意図を察したようだ。

「ユーラル、真上にドット”」

シンジは命じた。

私は今、ラルにかけた呪文詠唱で無防備な状態だからだ。

ラルも技の影響を植物の外に出ないよう押さえ込んでいる。

ズッドーーーン!!・・・シャラシャラっ

真上で爆発がおき、氷のつぶてが粒と化す。

「ライデル・・っ・・ヴィダム・・っ」

サトルの声が小さく聞こえた。

・・えっ!?

私はその声にはっとした。

「シンジッ！！」

叫んだが・・でも、一瞬遅かった。

その瞬間、シャラシャラーーと落ちてきた氷のつぶてが電気を纏った。

ビリッヴィィイリイイイイ”ヴォオオンンッ”！！

粒が干渉しあい、その場は電気で包まれた！！

ウ”ァァァアアアアア”！！

体中が放電で引き裂かれたような痛みに襲われる。

私たちは、ばたっと倒れる。

「う”うぅ”」

「ッ”〜〜〜」

私はうめき、呪文は完全に中断になってしまった。

シンジも動けないらしく、目を薄く開け、うめく。

・・やられる・・かも！！

そう思って辺りをゆっくりと見るが何も追撃が来ない。

あたりは・・

シーン

となっている。

第七十五話　闘いの行く末は・・・

視界の中には・・精霊たちと傍にシンジがいることをしめしている。

だが・・それだけでは追撃が来ない理由にはならない。

「う”～～～ッ」

私は痛みに耐えよろよろと立ち上がると・・

向こうには倒れて苦しむ二人の姿が見えた・・。

・・ようやく・・っ・・あれが・・効いた・・・？

私は目を見開いてその光景を見入る。

「ヴールルゥウウ」

「ヴーールルゥウウウウ”」

精霊たちは両者ともうなり声を上げる。

草原はもはや草原ではなく焼け野原と成り果て、漆黒の植物がそびえたつ。

そして植物の根元にある卵が

ドクン・・ドクン・・と音を鳴らし大きくなっていく。

それに伴って・・

「う”ぅう”」

「くっ”ーーーっ」

と、ジュンたちがうめく。

融合した技は先ほどで消滅しており、
植物が技の影響を吸い取って闇の波動を打ちはなっていた。

きっと、それがジュンたちを苦しませているのだろう。

私が呪文を中断させたせいでラルは元の姿に戻っていた。

ジュンたちはもう戦う気力が無いのだと私は思ったが・・

「ペ・・ルンッ・・・、アウォー・・アイシャロー・・っ」

「ライ・・ッデル・・ッ・・ヴオルゥロー・・・っっ」

と、精霊に命じた。

「!!」

シンジは目を見開く。

そして一瞬、私のほうを見て・・何か言った。

「ーーーー」
後は頼む
そういわれた気がした。
私は頷き、
「ラルっ・・レドートリサーロ！」
と、ラルに命じる。
ユーラルには目で卵を守ってもらうよう訴える。
ビヴィィイイっズッシャーーッ・・ヒュウウーーーー
水、氷、電気、
それらの集まった矢が私たちへと・・いや、卵へと襲う。
・・気づいた・・みたい・・でも・・おそかった・・ね・・
私は力なく笑う。
ヴォオオンン
ユーラルが卵を守るバリアを貼った。
ズッダダッダダダッダダンッ”！！
雷がペルンたちのほうへと迫り、

ペルンたちはそれを避ける。

だが、避けることで精一杯だった。

そのうちに卵にひびが入った。

ピキッ・・ピキピキピキピキ・・パッカーーーンっ！

そして卵から幼虫が誕生したーー！！

ヴォオン”ヴォオンンヴオォオン””ーーーブオォオワァァアっ！

誕生とともに煙のような闇が具現化して波動となり周囲を襲った。

ラルはシュッと退きユーラルはそれを神々しく見守った。

ペルンたちはその闇に飲み込まれ吹き飛んだ。

「う””ぁぁあああああ””！！」

ジュンが悲鳴を上げたーー。

「う”っ～～～～”」

サトルも苦しそうにあえぎ顔を歪ませる。

卵から誕生した幼虫はもぐもぐと植物を食べだした。

「・・・」

「・・・」

シンジも私もこれにあっけをとられた。

シンジは薄く目を見開き痛みに耐えながらもその光景を見入る。

ガツガツムシャムシャガツガツムシャムシャ・・・

幼虫の食べっぷりに精霊たちもあっけにとられている。

「ふふふっ」

ユーラルだけがほほえましく見守っていた。

そしてその幼虫は植物の根元まできてサナギとなった。

「「!!?」」

ジュンたちは目を見張りたとうとするが・・

「うぐっーーーっ”」

うめき、思うように動けない。

闇が妖気と化し人を蝕むのだ。

ジュンたちはたぶん気づいたのだろう。

サナギ(あれ)が成虫となれば確実に自分たちは負けるだろうと。

ヒュッーーー

ジュンたちの指示も無いのにペルンとライデルが動いた！！

「ラルッ！」

私は叫び、呪文を唱える。

ラルはダダーーッと走り出す。

私は走り出したラルに詠唱途中の　攻　をかけた。

字のごとく攻撃力を挙げる呪文だ。

「ーーーー^」

私は呪文詠唱をしながらもシンジのほうをちらりと見る。

シンジは・・

「ユーラル・・・・あれを・・守れ・・っ」

と、顔を歪ませながら命じていた。

あの放電が体を思った以上に苦しませていたとわかる。

シンジーーッ！

私は心の中で叫ぶ。

今すぐ治してあげたいっ！でもーーー今はできないーーっ

「アヴォオオオオン」

ライデルは叫び神々しく輝きを放つ。

そして変化した。

毛並みが金色に輝き、体が大きくなった。

ペルンはズシャーッ！っと水を操り襲わせる。

ズバババァン”ビリッヴィィリイイっ！！

ラルが水に突進して電気を水に流した。

そしてペルンにも電気が伝わる！

「ウ”ァァァアアアアァァッ」

ペルンは悲鳴を上げ、ばたんと倒れるが瀕死状態には陥らなかった。

「ヴォオオオオオ”」

ライデルが叫び、雷が

ズッダーーダダンッ

と、ラルのほうへ、ユーラルのほうへ、そしてサナギのほうへと襲う。

ラルはそれを待ち構えた。

・・ラルッ、あれをやりたいのねっ・・

私はラルの意図を察し呪文を切り替えた。

「ーーーー!!」

ラルに護符である　吸雷（キュウライ）　をとばした。

ピタッ

っと、ラルに張り付き、その瞬間

ダーンッ!

と、雷がラルに当たった。

ユーラルはサナギを守り、自分自身も避けて交わす。

ビリッ・・・ヴィリリィ

ラルの体には雷の電気が帯びていた。

「ルルゥウウ””」

ラルは相手に牙を向け毛を逆立てた。
護符はしっかりと役目を果たしたようだった。
そしてそのときっ！
ビリッベリッ・・スポンッ
と、サナギからかえった!!
ズヴォオオオオオ
漆黒の妖気が周囲に漂い強風となってジュンたちを襲う。
そして・・
バッサバッサ・・ヒラ～ヒラ～・・・
と、サナギからかえったものは舞う。
その姿は・・まさに　漆黒の蝶　だった。
闇を羽にまとい羽の色はまるで何かを誘うような紫色に光り、
羽から落ちるリンプンは妖気の粒そのものだった。
そしてその蝶を見て・・シンジはゆっくりと立ち上がった。

「シンジーーッ！」

私はシンジに駆け寄り支えた。

蝶が誕生したことで相手はなすすべも無かった。

ジュンたちも立ち上がったがたちすんだままだ。

「妖気に満ちたその蝶が今回の・・鍵だった」

シンジは呟く。

シーンとした静かなバトルゾーンでは
呟いた言葉ですら相手にも聞こえるほどだった。

「くそーっ！」

ジュンがこぶしをぎゅっと握る。

シンジはそれを見て・・

「ユーラルのあの波動、あれは蝶の妖気でお前等を蝕ませるものだった。」

と、言う。

「あのときにあれを打ち出させ、傷を負った。
その傷がお前等を蝕んでいる。
それでも立っているお前等は強いと認めるが、俺のほうが一枚上だ

な」

シンジは勝利に満ちた声で言った。

余裕そうに言い放つ。

そんな姿を見てると責めたくなる。

電気でやられそうになったシンジは・・あれは演技でしたか?と。

「くーっ、ヴィダム!」

サトルが悔しそうにいいはなつ。

「なーっ!?」

シンジは驚く。

「シンジーッ!!」

私はシンジをかばおうとしたが二人で・・

ビリビリビリヴィリビリリリィイ

と、放電を浴びてしまった。

「っ〜〜”」

シンジはがくんと体を傾ける。

「シ・・ンジッ・・っ！！」

私は少し力を使ってシンジを支える。

・・シンジ・・調子に乗りすぎ・・まだ・・おわっていないのに・・

「シンジッ！」

私はシンジをゆする。

シンジは顔を歪ませながらも

「悪あがきも・・そこまでだな。
漆黒の蝶・・ヴォルーラ・・ブラッデリドンダッ」

と、命じた。

漆黒の蝶はヒラリヒラリとペルンやライデルの真上までやってきて、

ズヴォオオオオオオっ”’

と、闇と妖気の混沌の渦を作り上げた。

そしてそれにペルンたちは飲み込まれていった。

ウ”ガァァッァァァアッ”’

ズゥヴォオオオン”’

悲鳴と渦の騒音が交じり合ってすごく耳に響く。

そして・・勝敗は決まった・・・。

渦がシューーと消え残ったのは倒れた精霊たちが残り・・

瀕死状態を現していたのだから。

勝負は終わった。

作戦通りにバトルは進み、私とシンジの勝利に終わった。

だが・・これほど苦戦を強いられると思わなかった。

ジュンたちを侮りすぎていたわけではなかったのだが・・。

ジュンたちも強くなっていたというわけである。

対戦が終わり、それぞれ部屋に戻った。

シンジは・・あのあと、気を失った。

電気が体に帯びすぎて体がもたなかったからである。

私は部屋に戻りベットにシンジを寝かせた。

七十六話　雷と・・・その代償

シンジをベットに寝かせ、私はそれを見つめる。

ビリッ・・ビリリィ”

シンジの体からはいまだに電気が帯びている。

これは・・あとあと厄介なものになる・・

今のうちに・・抜かないと・・

私は床に座り込み、リュックから黄色のクリスタルを取り出した。

中には封印されているかのように魔法陣が見える。

そして私は額宛のバンダナも取り出して、

クリスタルの封印をといた。

そして・・・

「汝の雷、我の陣にいざなえ。

汝から害となりうる雷全てを我に・・・」

私はそのバンダナにクリスタルの魔法陣を刻み

それをシンジの腕に当てた。

シンジから雷が吸収されていく。

それと同時に・・

「う”ーーっ”」

私にもその代償は来た。

私は人間じゃない。

だからシンジよりは雷に耐性があるはず。

そう思っての対処法。

あとでシンジにばれると思うと気が気でないけど・・。

しばらくその作業は続いた。

・・ビリッ・・ビリィリリィ”ーーー!!

私の体全体に電撃が走った!!

「う”ぁああ”っ」

思わず悲鳴を上げる。

どうやら・・バンダナにも吸収に限界があったようだ。

だとしたら・・もう私の体に・・刻み付けるしか・・。

意識が朦朧としてくる。

私はぼんやりとシンジを見つめる。

さっきより顔色が良くなった。

回復してきているようだ。

よしっ・・やるしか・・ないっ

私はリュックから文様の描かれた白い紙を取り出し

両手の手のひらに押さえつけシンジの腕を軽くつかんだ。

「雷・・吸収封印っ・・！」

私は言った。

ウォン”’

雷を徐々に手のひらへと吸収していく。

「う”っーー””っ～～”」

体に異様なものが入る違和感。

それを感じられずに入られなかった。

そしてそれも終えるとシンジは目を覚ました。

「・・・」

「お・・きた?」

私は問う。

疲労と雷のせいで意識は朦朧としている。

「ーーー!?」

シンジは私を見て頷き、驚いた。

一応、処理の片付けも終わったし
封印も見えないからばれないけど・・

なんか感づかれた??

「どう・・した・・の・・・・?」

私は聞いた。

言葉が途切れ途切れになってしまう。

「・・お前も・・休め」

シンジはそう言って起き上がり・・立ち上がった。

「ぇ?・・シンジ・・具合は・・!?」

私はシンジの調子を聞こうと思ったけど
それより先に浮遊感に襲われた。

グヴァンっ”

視界が歪み、意識はさらに遠ざかっていく。

「お前よりは平気だ。
・・あの時は・・助かった・・」

シンジは私を抱き上げてベットに私を横たわらせる。

「シン・・ジ・・・」

重い瞼がもう寝ろというような感じでのしかかっていく。

・・シンジ・・・・

私はそこで意識を失った。

第七十七話　もう一組の男女ペア

私が起きたときにはすでにシンジも起きていた。

「・・わたしーーあのままーー」

自分で呟いて窓から差し込む朝日を見つめる。

「相当体力を消費していた。
お前もかなりダメージを受けていたようだな」

シンジが言った。

そう言うってことはまだばれていないみたい、雷のこと。

「ジュンたち・・強かったからね。」

ばれていないようだから私は曖昧に笑った。

「今日も試合がある。
その疲れを引きずるなよ」

「シンジも、ね？」

お互い言い合う。

私なんかよりダメージを受けていたシンジの方が心配。

そんなこんなで二回戦目をした。

私たちの圧勝だった。

疲れていても問題なかったみたい。

そのまま、3、4、5、・・・と試合を続けていったが
一回戦目程疲れる試合など無かった。

そして驚いたのが九回戦目を終えてからの対戦表だった。

「・・ぇ？
ーーーーーーミヨ！？」

「アイツーーーっ！！」

私もシンジもこればかりは驚いた。

ミヨが対戦相手だということより・・・・
ペアの相手が何よりも知っている奴のほうにもんだいがあったからだ。

『これで二組目ーーー』

申し込みのときのスッタフさんの言葉が頭によぎる。

二組目って・・この二人・・だったんだね・・っ！！

ミヨだけならシンジだって驚かないはずだ。

私は・・驚いてたかもーーだけどね。

対戦表には・・その人の写真と名前が載ってあった。

シンジ、ルミル　ＶＳ　ルカ　ミヨ

ルカ！

それが相手の名前みたい。

写真を見ると、どうにも知り合いだった。

ハンターだとか名乗ってて名前とか教えてもくれなかったけど・・

まさかーーこんな名前だとは・・・

「まさか・・あのハンターが

出場するなんて・・思わなかったよね・・？」

「あぁ。
アイツが精霊を持っているとは思いもしなかった」
私もシンジも唖然とする。

そしてその二人と試合することになった。

第七十八話　ついに対決!!　相手は謎の多い二人!

ドクンッドクンッドクンッ

心臓の音が高鳴る。

シンジも緊張しているらしく表情が引き締まってる。

そう、今は二人と正面に向き合っているバトルゾーンにいた。

ジュンやサトルの時とは比べ物にならないくらい緊張し体が震える。

武者震いっていうのかな?

まさか・・ミヨがあのハンターと組むとは思わなかった。

いつ出会ったのだろう?

どうして組んでいるのだろう?

疑問が次々と思い浮かぶ。

「ようやくお前等と戦うことができる」

ハンター(ルカ)はいった。

「そんなに闘いたかったの?ルカさん??」

私は挑発口調で聞いた。

ルカ・・侮れない奴だ。

私の傷をいとも簡単にふさいだ。

そして私を異空間に閉じ込めた奴だ。

異空間・・あれは不思議だった。

この世界では作れないもののはず。

・・ルカはこの世界の住人じゃないかもしれない・・

その謎はこのバトルでわかるかも。

「俺の名はルカではない。

あれは偽名だ。

闘いたかった理由は俺の力を目の当たりにしてもらうことだ。」

「本当の理由はそんなことではないだろう?」

シンジがいった。

シンジもおそらくルカを怪しんでいる。

「それはバトルのあとに種明かししてやる」

「・・・」

「ミヨ！・・・・。ミヨにもバトルが終わってから聞くね？」

「えぇ」

会話は終わった。

そしてバトルがはじまった。

「ウィーミア、ステージ、オン」

「アーウィル、バトルスタンバイ」

「ユーム、闇と異空と共に」

「ヴィリュウ、
―Ｗｈｅｎ ｉｔ ｃｏｍｅｓ ｐｕｒｅ ｃａｐａｃｉｔｙ ｎｏｂｏｄｙ ｃａｎ ｔｏｕｃｈ ｙｏｕ《お前には誰にも負けない能力がある》！」

四人は精霊を出した。

ハンタールカは精霊の名のあと異界語でいった。

誰にも負けない能力・・

その言葉で確信が生まれた。

ルカはこの世界の住人じゃないのだと。

「シンジ、・・あの精霊には気をつけて。
あれは異界の精霊・・だよ。たぶん」

私は言った。

あちらの世界で精霊を見たわけではないけど、
そうだという自信があった。

「あぁ」

シンジは頷いた。

ユームは以前闘った伝説の精霊だ。

ヴィリュウは　龍の形をかたどった神気を漂わせる精霊だった。
まるで・・ほんとの龍が・・精霊に変身したかのよう・・。

「お前等からかかってこい」

ルカがいう。

「「・・・」」

私とシンジは顔を見合わせる。

「ウィーミア、刃斬!!」

「アーウィル、水柱」

コンボ技を命じた。

ザシュッーッッ

ズヴォオオザバンッ”

アーウィルを中心に水が立ち上る。

それにウィーミアが生み出した刃が激突し、水を切った。

そして水を纏い、水柱と共に二体の精霊に向かって襲い掛かる。

「ユーム、避けて」

「ヴィリュウ、退け」

二人は避けることを選択する。

向かい打つ手段には出なかった。

そのことに引っかかりながらも次の手段に移る。

「アーウィル、アーシャーヴィズラム」

シンジは命じた。

おそらくユームにだと思う。

夢と無をつかさどるユームは
浴びれば幻に囚われるこの技に効果は抜群。

ヴォイォオオオ”
ズヴァォウォオ”” ！

水と何かの音が響きあう。

「ユーム、闇に切り裂け、そして催眠」

ミヨは言った。

「・・・」

シンジはふっと不敵な笑みを一瞬浮かべる。
それに気づいたのはおそらく私だけ。

ズシャッッ、ヴォオオンッ””

ユームは技を闇で切り裂きアーウィルに催眠をかける。

「・・・」

シンジは何も言わない。

「アーウィル、ウィーミアに攻撃」

ミヨは言う。

「ウィーミア、シュザートヴァイオリン”」
（アーウィルは気にせず、ヴィリュウに攻撃して）
心の中で私は言う。
ズザァァアアッ”
ヴォオオンン”
刃と音が重なり融合技が完成する。
そしてヴィリュウに向かって襲い掛かった。
「ヴィリュウ、シャドウ結界」
ルカは言った。
これでルカは防げるはずである。
「・・・」
シンジはアーウィルを見た。
アーウィルは腕を振り上げ
ウィーミアにでなくユームに向かって振り下ろした。
カキンッ”
凍った音がした。

「な・・・っ」

ミヨは驚く。

「・・・」

シンジは何も言わなかった。
ただ・・不敵な笑みをしていた。

そしてーー

「アーウィル、ブレイズブローっ」

と命じる。

ヒヤーーン・・・ザシュゥーーッ”’

凍った冷気と共に
アーウィルの刃がユームを切り刻んだ。

ヒュッーーシュパ

ユームは攻撃を受け、その場を退いた。

ミヨの傍にユームはいた。

一発でしとめそこなったらしい。

「チッ」

シンジは軽く舌打ちする。

私はシンジにあらかじめ
アーウィルと意思疎通ができるよう魔法をかけた。

ユーム対策というわけである。

ダダッーー

いきなりルカが私たちにむかって走ってきた。

「ーーーーー」

相手は呪文を唱えていた。

「・・!!」

私は身構える。

するとーー

「ローズフロート”!!」

ルカは叫び私たちのほうに手を突き出した。

ヒュルルルルルゥウウウウ

すると相手の手のひらからツルが伸びてきた!!

たんっーー

私とシンジはすぐさま左右に飛びのく。

標的は・・私だった。

シンジのほうより私のほうが多い。

私は片手で片腕を押さえ、後方に飛びのきながら・・

「放電!!」

手を突き出して叫ぶ。

ビリビリリッ”””ーー!!

ツルが電気を帯び、ルカに電気が通った。

「っーーー!!」

ルカはうめくがツルは伸びたままだった。

ヒュルルルッーーガシッ

私は捕まった。

「ぐっーー」

私は何とか振りほどこうとする。

ギシーーッキシッ”

ツルが軋む。

「さっきの放電返してやるよ」

ルカが言った。

私は抵抗する暇も無く、電気が体に走った。

ビリビリビリッーーーッ”

「っぁあああっ”」

私はたまらずうめく。

視界がぼやけ、体が動かない。

「っ”ーーーー!!」

けれど負けじと自分から電気を放出した!

ツルを伝いルカにも電気が帯びた。

ビリィイっ”・・ぐさっ

「くーーっ・・・っあっ」

ルカはうめく。

ぐさっ・・その音は矢の刺さる音だった。

・・ツルが一瞬緩んだ。

ヒュァッ

私はすぐに抜け出す。

すぐ傍にいたシンジは弓を構えていた。

ーーということは矢はシンジのものだったのだろう。

視界には他にもミヨやユームの姿もあった。

あ、ーーミヨが!!

「アーウィル、ヴォーターレドっ」

シンジはさけんだ。

ズバババババーーーッ”’”

ガンッ

技は激突。

そして互いに防ぎあった。

「ッーー”ヴィリュウ、周波集結！！」

ーーえ！！ヤバイっ！！！

シンジーーー！！

心の声は叫べなかった。

キィイインッ”””

音が空気を伝い耳に届く。

バタッーーー”

私もシンジも倒れた。

グッーーーうごけ・・・ない・・

耳に届く音は体を地面に押さえつけた。

「っーー」

シンジもうめく。

ズッーー

ルカは矢を取った。

「ヴィリュウ、ヤレ」

バン・・ババンッーーーズシャーーッ

真上から騒音が鳴り響く。

きっと精霊たちが闘ってる。

私もシンジもなんとか立ち上がった。

キィイインンッ”””

「ぐっーー」

音に負けぬよう歯を食いしばる。

「・・強い心の持ち主だな、お前等は。」

ルカが言った。

私は呪文を唱えた。

ーーーーーーーーーーーーー心で。

ズヴォオンッ”

そんな音をたててミヨの周りが悪で満ちる。

「なーー!?」

ルカもミヨも反応が一瞬遅れた。

（シンジーー今のうちにルカをーー）

心でシンジに言う。

ヴォオオン”””

ミヨは空間に閉じ込められた。

次第にーー

「ぅぁあああああああっ～～～～”””」

と悲鳴が上がる。

「ゥウウウウウウ”””」

ユームの悲鳴もあがった。

あれは悪で満ちた空間。

夢も無もすべては何も無いところからのもの。

所詮そこからうまれた悪には弱い。

キン”キンッ”

刃物のぶつかり合う音。

シンジとルカはお互い剣を持っていた。

己の魔力での武器を。

キンッ！！・・ビッーー”

何度も剣はぶつかり合い、最後にーー

シンジの腕に傷を作られたーー。

「ッ”～～っ！」

シンジはいったん後方に飛びのく。

「剣の技量は俺のほうが上。」

ルカは言った。

ポターーッ

血が滴り落ちる。

「シンーー・・・グァッ””」

シンジと叫ぼうとしたとき

体に大きな衝撃が走った。

グワァン”’

激しい頭痛がした。

「ぐっーーー」

シンジは地面に手を突いた。

「ッア”っーー”」

シンジは波動を解放する。

「ハァッ!!」

ルカも波動を解放した。

ヴァン”

二つの波動がぶつかり合った。

そして圧倒的にシンジは負けた。

ズガザサアアアアアア”!!

私もシンジも吹き飛ばされ、地面を引きずった。

私たちは地面に倒れふす。

頭は頭痛、体は痛み。
激しい痛みに体はボロボロ。
「魔力も波動もケタ違い。
・・まだ試すのか？」
そう聞かれる。
私もシンジもこんなところで負けたくなかった。
「っーー”」
「ーー”」
私もシンジもよろよろと立ち上がった。
私は天寿の力を使って、シンジを癒す。
自分自身の力を解放した。
シンジは
「ーーーー」
何か唱えた。
するとーー

ズヴォオオオオ

と、闇の波動魔がシンジの中心に渦をつくりだした。

「なに！！？」

ルカが驚愕する。

「シンジーーッ！！？」

私も目を見開きそれを凝視した。

シンジーーそれはっ・・・！！？

第七十八話　ついに対決！！　相手は謎の多い二人！（後書き）

続きでごめんなさい。
そろそろ終わりそうですね。
このまま頑張ります！！

第七十九話　従兄妹という繋がり　ー圧倒的な差

ゴゴゴゴォオオオ”

シンジを中心に波動魔が渦巻く。

「まさか・・お前が
魔の波動使い　だとはな・・。」

ルカは驚いて言った。

「・・・」

シンジは何も言わない。

・・波動魔は　魔の波動のこと。

そして魔の波動使いは波動をコントロールすることだできる。

・・シンジは今までー
私にも教えてくれなかったし使わなかった。

そのことにさびしさも感じるが私も人のことは言えない。

まだはっきりとは天寿の力のことを言っていないのだから。

・・私の母から受け継いだ天寿の力。

私の母の母、おばあちゃん　は民の長、そして神官。

母の兄弟は何人かいる。

今ではなくなられた母の兄がシンジの父親にあたる。

私にこんな力があるのだから・・

シンジにもーーあるだろう・・とはうすうす思っていた。

けど・・これほど大きな波動の使い手だとは思っても見なかった。

「なかなかいい組み合わせだな。
世にも珍しい天寿の力と、この世界には惜しい魔の波動使い、
俺も悠長なことはしていられないな」

ルカが言った。

「ーーーー」

ルカは小さく何かを唱えた。

するとーーー

シンジのつけた背中の傷がみるまにふさがっていった。

「なーーー！？」

私は凝視する。

・・ありえないっーー！！

短時間で完治なんてーー！！

「ーー！！」

シンジはなにか発した。

ビュゥォオオオ”

波動音を響かせ、魔の波動がルカに襲い掛かった。

バシッ！！

ルカはシンジの波動をいともたやすく片腕で振り払った！

「なにーー？」

シンジは眉をひそめた。

「俺の能力、見せ付けてやる」

ルカが不敵に笑い、私たちの手のひらを突きつけた。

「ーー？」

一体の何をするのかと身構えると

ズシッーー”
重い重圧がのしかかってきた。
ガクっ”バタン”
重圧に耐えられず私もシンジも倒れ付す。
「これでわかったろ？
俺はお前等より強い。
まぁ、本格的に俺とお前等は“違う”がな。
・・さて、精霊のほうを始末するか」
ルカが言った。
「っーー！！」
私は起き上がろうとしたがだめだった。
・・ちか・・ら・・ぁっ・がーーっ
体全身に重圧がかかり重い。
動かない。
「ミヨ、何をやっている。
悪魔なんかに取り付かれやがって」
ルカは言った。

いまだ私の空間から逃れずにいたミヨだった。
その空間に近づくルカ。
その光景はぼんやりと映し出される。
バンっ！！
ルカがその空間に触っただけでそんな音がした。
パラパラパラ・・・・っ
空間は壊された。
そして千切れた紙のように残骸が地面へと落ちる。
「ぅう”」
ミヨはうずくまっていた。
「ヴゥウ”」
中にいたユームもなにやらうめいている。
「精霊どもを始末する。
手伝え、ミヨ」
コクン
ミヨは頷いていた。

ヴォオオー
バンバンッ！ドゴーン”・・ズドドーン”
騒音が空中から聞こえる。
ウィーミアたちがヴィリュウに対して戦闘を繰り広げているのだ。
「・・ユーム、闇の・・矢」
ミヨが命じた。
ヒューー
それはウィーミアに攻撃したものだった。
宙で闘うウィーミアはそれに気づかない。
「ウィーミア！！」
私は力を振り絞り天寿の力を解放した。
ズヴォオオオオ”
ビュンッーーガガッ！！
ウィーミアに私の力が届いた。
そして、それはユームの攻撃を止めた。

「なーー」

ルカは驚き私を見る。

・・負けたくない負けたくない負けたくないーーー

頭の中はそれだけだった。

・・誰にも・・怪我させたくないッーー

・・あいつ等にーー勝ちたい勝ちたい勝ちたいーーーー

心の中にはそれだけだった。

ズウォオオオーー

天寿の力は私を飲み込んだ。

バン”

フワーーーン

私は重圧を吹き飛ばし宙に浮く。

バサッーー

翼を広げたーー

「・・暴走したのか」

ルカの声が遠くで聞こえた。

ビュヴォオオオ”

風が、音が、翼がーーーうなる。

バトルゾーンはもう荒野と化していた。

ビュウーーードサ

ミヨもユームもヴィリュウも吹き飛んだ。

だがルカだけは押し返そうと対抗してきた。

ズズッーーズズーー”

足の引きずる音。

ルカでも苦戦しているみたいーー

私でも止められないーーーこの力に。

ピカッッ”

一瞬ルカが輝いた。

するとーー、ガシッ

と、首をつかまれた。

握力が強い。

「グーーッ」

必死でつかんできた腕を放そうと抵抗する。

ルカの顔は間近に迫っていた。

「ッ”ーーー!?」

ルカの顔は青年ではなかった。

面影はあったがもはや人間ではない。

悪魔のような形相をしているが美形そのもので、でもまるで氷のように表情が冷たかった。

「お前の暴走など、
本気の俺には叶わない」

ルカは言った。

その直後ーー

グヴァンッ”

視界が真っ暗になった。

シュゥウウウ”

体から力も抜けて翼も消えた。

自分を宙で支えられなくてそのまま落下するはずだったがルカに支えられた。

「ーーっ”」

私を抱き上げるルカを
薄らとする視界の中、最後に見て私は気を失った。

そうして・・私とシンジは・・二人に負けた。

目覚めたのは試合が終わった翌日だった。

「んーー」

うっすらと目を開けると・・ミヨがいた。

「・・だいじょうぶ?」

ミヨが聞いた。

まだ頭はぼんやりとしていたが、
私は軽く頷いて起き上がった。

近くにシンジはいなかった。

「・・あれから・・どうなったの・・？」

私は聞いた。

よくみるとここは私とシンジの部屋。

ベットに私は寝かされ、いすにミヨが座ってた。

「・・ルミルが気を失って、
ルカがルミルをつれて地面に着いたときには
もう決着はついていたよ。
ウィーミアはリングに戻っちゃったし、
シンジ・・も気絶してたからアーウィルも
瀕死状態とほぼ同時にリングの元へーー。

・・あれから急いで、二人を運んで治療したの。

幸い、ルカが治療してくれたから命に別状は無かったけど。」

ミヨが言った。

「んーー気絶・・」

私は考える。

負けたくない、勝ちたい・・
そう思って力を解放したところまでは覚えてるのにーー
なんで・・そこから覚えてないの??

「・・・。
ねぇ、シンジはどこにいるの?」

私は聞いてみた。

「ルカと話してる。
きっと、会場の外で。
・・ルカがルミルが起きたら
連れて来いっーーって言ってた。
・・歩ける?」

「うんーーたぶん」

私は曖昧に頷いて立ってみせた。

そしてーーー私とミヨは部屋を出た。

会場の外へ出る途中、

「ミヨは・・なんでルカと・・?」

と、聞いてみた。

「ルカとはルミルと別れた後に出会ったの。
出会った時、
ルカは私を天寿(ルミル)の力の持ち主だと勘違いしてね、
そこからいろいろあったのよ・・」

ミヨは思い出しながら言った。

第七十九話　従兄妹という繋がり　――圧倒的な差（後書き）

次回はミヨの過去編です。
バトルが終わると思いきや“謎明かし”ですね。
先が知りたい方もあたたかい目でご覧下さい。
ミヨ視点で書きたいと思います。

第八十話　ハンターとの出会い　（ミヨ編）（前書き）

ミヨ視点です。
では、どうぞ！

第八十話　ハンターとの出会い　（ミヨ編）

ミヨはルミルと別れた後、ユームを連れて一人川原を歩いていた。

・・ふぅ。

・・上手くいったかな・・あの二人・・。

別れた後でも、そう思ってしまう。

そう思いこんでると瞬時に殺気が私を貫いた！

「ッ”ーー！？」

とっさに避けるがフードをかすり、フードが地面に落ちた。

「見つけたーー、天寿の力の持ち主」

そんな声が頭上からした。

「・・・？」

・・この人・・誰？？

私は頭上を見上げる。

すると、その人は宙に浮いていた。

「!?」

私はその人を凝視する。

・・宙に浮いているだけなら驚いたりしない。

なんせこの人は異空間を周りに作っているのだから。

「なぜ、分からないという風な顔をする?」

その人がストンと地面に降りてから問う。

私はその人と距離を置きながら

「・・初対面でしょう?」

と、言ってみた。

だって・・見たこと無いもの。

・・異空間からやってくる人なんて。

それに・・私の素顔を暴いたのは

今までにルミルとこの人だけだし。

「は?」

その人は間の抜けた声を出す。

傍にいたユームは

「ゥルルルゥウ”」

とうなる。

ユームは警戒しているようだ。

「その精霊は・・

以前には感じられなかったが・・」

その人は食い入るようにユームを見つめた。

「以前？

誰かと勘違い・・してる？」

私は聞いた。

・・初めに言ってた。

・・天寿の力の持ち主・・と。

「勘違い・・？」

「天寿の力・・というのは

私は持っていないよ。

私は闇一族の一人。

強いて言うなら・・

闇の守護の力の持ち主、ね。」

私は説明した。

「・・だがーーー」

その人は私が説明しても納得してくれない。

「顔はルミルと似ているわ。
まるでドッペルゲンガーでもみた感じよ。
・・それに以前会った子はもう一人、連れがいなかった？」

私は聞いた。

ルミルはいつもシンジと行動を共にしている。

もしかしたら、
この人と会ったときも一緒にいた可能性が高い。

私はこの人が・・

私とルミルを勘違いしたのだと、そう確信した。

「そういえば・・一人いたな。
悪かったな、勘違いだったようだ。」

そう言ってこの人は去ろうとした。

「待って」

私はそれを止めた。

「なんだ？」

「あなたは・・異界から来た人よね？

・・それがどうしてルミルなんかをーー」

私はそう聞いた。

「・・それを答える代わりに一つ条件がある。
それでも聞くか？」

この人は私を伺うように訪ねた。

「条件？
それは何？」

「それはーー年に一度開かれる大会のパートナー
になることだ。
今年は生憎とダブルバトルらしいからな」

私の問いにやれやれという風に首をすくめるその人。

「・・それなら、いいよ。
私もそれには困っていたから。
じゃあ、質問に答えて？」

私は承諾した。

私もそれには困っていたところだ。
それも叶って質問も聞けて、まさに一石二鳥。

「あぁ。
俺の名は　ルシア・ヴアーリド・レドカ。
ルカでいい。

お前の名は？」

「私の名はミヨ・リーフィア。
ミヨでいいよ」

お互いに名を名乗った。

「質問の答えはーー、
あの天寿の力は世にも珍しい。
俺はハンターだ。
獲物の力を奪うハンターー。」

「・・・」

・・ルミルの命・・を狙っている!?

「べつに命が欲しいわけじゃない。
それに今回はそれは諦めた。
今はただ、あいつらに俺の世界の力をみせつけあいつらに俺の世界に来てもらうためだ。
俺は宿命を背負って生きているからな。
そっちが最優先だ。
だから、あいつ等に力を見せ付けるために闘う。
それが理由だ。
以前狙った理由もそれが当てはまる」

・・まだなにか隠してそう・・。謎だーー

「そう・・」

私はそれを聞いて安堵した。

命・・という目的じゃないのなら・・いい。

ルミルがーー初めての“友達”
だからーー、失いたくなかった。

「わかった。
なら協力する。」

私は頷いた。

「よろしくな」

その人は・・ルカは手を差し伸べてきた。

「こちらこそ＾」

私はそれを手に取り握手する。

それから大会に向けて修行が開始されたわけだけど、
途中、ルカはルミルたちの場所を知りに探しにいった。

・・冷静な人だと思ってたけど
そういう意味では冷静ではないのかもしれない。

そのあとしばらく戻っては来なかった。

ルカが戻ってきて二人で修行を開始する。

そして申し込み日

私が聞くと

「ルカ、・・本名は書かなくていいの？」

「偽名で十分だっ」

と、むっとした口調で答えるルカ。

あんがい、自分の名を書くのが恥ずかしかったりして・・

そう思ってしまう自分に苦笑する。

それからいろいろあって標的と対戦できたというわけだ。

「ーーというわけ、分かった？ルミル」

「んーなるほどね・・。
よくわかったよ。
・・にしてもなんかまだいろいろ謎なところがあるねぇ？」

「そうだね」

ルミルとそんな会話をしながら二人でルカのところへ向かったのだった。

第八十話　ハンターとの出会い　（ミヨ編）（後書き）

ミヨ視点終わりです。
次はシンジ視点です。
シンジとルカの会話・・ぉぉおぉぅっ！！
なんか不穏な空気が漂いそうですね。
ではでは～、またの機会に

第八十一話　宿命と想い　（シンジ編）（前書き）

シンジ視点です。
では、どうぞ。

第八十一話　宿命と想い　（シンジ編）

俺が意識を取り戻すとルカが俺を連れ出した。

話があるーーらしい。

俺も疑問はあった。

だからそれに応じた。

会場の外、二人で話をし始める。

「話はなんだ？」

俺は聞いた。

「お前はーールミル（あいつ）をどう思う？」

ルカは聞いてきた。

「！？」

俺は眉をひそめる。

どう・・ってどういう意味だ・・？

「・・好きか嫌いかの話だ」

「・・・。

嫌いじゃない」
俺は言った。
アイツは俺から見ればまだまだだが、
あいつはーーー
「何故聞く？」
俺は聞く。
「・・気になっただけだ」
ルカは言った。
本当か？
と、疑わしく思う。
「お前は何故、ルミル（アイツ）をーー
狙うようなマネをした？
命を狙っていたのならあの時助けはしなかっただろう？」
「あぁ、命を狙っていたなら、な。
俺にも“お前のように”宿命があるからな。
それが狙った理由さ。
助けた理由はーーあいつの力を試すためさ」
ルカは空を見上げて言った。
「・・・」

その言葉に偽りがないとはいえないように見えたのはーー
俺の気のせいか？

「結果、俺の能力には叶わなかった。
だが、あれは天を支配する。
やがて時空までもを支配するだろう。
均衡を崩さないためにもーー
そういう意味でここへ来たがーー
どうやら必要なかったようだな」

「ーー？」

「お前がいればアイツは無闇な暴走しないだろう。
ーーだが、お前がきっかけで暴走する可能性がある。
・・そしてあいつを狙う奴は他にもいる。
・・異世界の連中がこの世界へと侵入しているんだ。
“お前等”の実力があれば
そいつ等には脅かされないだろうから心配ないだろうがな」

「ーーーー」

俺は理解した。

ルカは遠まわしに言っているようだが、ようするに

『お前がいればたとえ敵が来ようとも俺は必要ない』

と言っているのだ。

「俺はアイツには生きて欲しいからな。
だから俺はあいつを手放す。
お前に譲るさ」

ルカは俺を見て不敵に笑う。

「ーーー!?」

俺は目を見開く。

「あーー来たな」

ルカがそういって俺の後ろを見つめた。

「・・・・」

俺は振り向き視線をそこへ向かわせる。

そこにはアイツとーーミヨがいた。

「あ、シンジーーっ」

「・・・・」

アイツは俺のほうへ来た。

「話がある。
二人で、な。」

ルカはそういった。

「ーーー！」

あいつは一瞬表情を引き締めた。

「・・俺は戻る」

俺はそう言ってあいつの傍を通り過ぎ、部屋へと戻った。

・・・アイツをーー
ルカと二人きりにするのはいささか不安だが、
とりあえず、ルカはアイツを手放すみたいだからなーー
まぁいい、許してやる。

俺にはルカより時間があるからなぁ

そう心で思い、余裕のあるシンジであった。

第八十一話　宿命と想い　（シンジ編）（後書き）

おぉーー！！
久しぶりのシンジ視点！
どうでした？
初めの頃のシンジとは少し違う気がすると私は思ってしまいました。
不穏な空気はなかった・・かな？
男同士の話にしてはなんかルミル関係が多かったですね＾
もしや二人ともーーー恋してる？？
そう思う方はどうぞ、完結した後の連載もお見逃し無く！！
そういう予定ですので！！
ではまたの機会に

第八十二話　二人の会話　（前書き）

主人公であるルミル視点のお話です。

第八十二話　二人の会話

「・・俺は戻る」

シンジはそう言って去っていった。

「ーーーっ？」

私はその言葉に何も返せなかった。

シンジがやけに機嫌がよさそうで
なぜか余裕綽々とした表情をしていたから。

私はそれを不思議に思って何もいえなかった。

「私もーー戻るよ。
ルミルをここへ送りにきただけだから」

ミヨもそう言って去っていった。

「うん・・」

私は頷くことしかできなかった。

そしてーールカと二人きりになる。

「・・なにを考えている？」

ルカが眉をひそめて聞いてきた。

「・・え？」

私も眉をひそめて聞き返す。

「今、
ミヨに対してもシンジに対してもいつもの会話はできてなかっただろ？」

ルカは言った。

ーーよく見てる人・・。

私は一瞬そう思った。

思わず・・

「ルカは私をよく見てるんだね。」

と言ってしまった。

「フッ・・、そうだな」

ルカは肯定する。

「・・・」

「一一で、何を考えている？」

「さっき、シンジの言葉を聞いたときに・・
なぜか余裕ありげな表情をしているな・・と思って。
一体・・シンジはルカと何を話してたのかなって・・
そう思ったの。
シンジが余裕ありげのときって珍しいわけでもないけど・・
でも、気になったから。」

私はシンジを思い出しながら言った。

「・・・。
お前こそ、シンジをよく見ているな。」

ルカが苦笑した。

ーールカ・・？

今・・さびしげな表情を・・一瞬・・

「・・・？」

私は戸惑いを浮かべる。

だってそれは・・
ルカが苦笑すると同時に寂しげな悲しそうな表情をしてたから

「そうそう、お前とはそういう話をするために呼んだわけじゃない。
意味、分かるよな？」

「・・うん」

私はルカの問いに頷く。

頷くのに少し間があったはずなのに何故か彼は聞いてこない。

彼はわかっているのかな？

それを聞いたら自分が困るかもしれないことに・・。

「シンジにも話した。

お前を狙った理由、それはお前のその力だ。」

「・・・っ」

「天をも支配し、時空をも支配しかねないその力は

今のお前には強力すぎる力。

そしてもともとは俺の世界で使用が可能な力だ。

お前はそれを母親から・・そしてその母親は天寿の民の長の祖母から

受け継いだはずだ。

のそれはこの世界にあってはならない。

お前にはこっち側の世界に来てもらわなければならない。」

「それは・・私、だけなの？」

私は戸惑いながら聞いた。

だって、天寿の力は母から受け継いだ。

そして祖母は天寿の民の長。

それはルカの言うとおり・・事実そのもの。

なら・・なぜ、私だけ雨羅のいる世界・・
異世界に行かなければならないの??
母も・・祖母も・・天寿の民も・・
私と同じ力を持っているのに!

「お前は・・」

ルカは一瞬言葉を切った。

なんだか戸惑うようなためらうような・・そんな感じで。

「お前は“特別”だからだ。
天寿の民はもともと俺の世界の民。
その民のもつ力は一族に一人、
抱えきれないような大きな力を持つ。
すると、他の民の力は制御できる位に力は小さくなる。
本人は気づかないがな。
そうなると民はこの世界にいても意味を持たない。
あってはならない存在にはその民たちはならない。
つまり、お前だけ、ということになる。」

ルカは言った。

言われたことはもっともらしいことばかり。
でも・・なぜか・・何か・・隠してるって思ってしまう。

重大な・・何かを・・私に隠してる気がする。

「そうっなんだ・・っ。
っーーー、でも、ルカが異世界に来いといわなくたって行くつもりだよ。
そう、約束したから・・。
あっちのことも気になってたし・・。」

私は言った。

冷静に言ったつもりだけど動揺しているのがよくわかる。

「シンジは・・連れて行かないのか?」

ルカは聞いた。

「なんで?シンジはこっちの住人だよ?
私のこの大きすぎる力のせいで
シンジを巻き込むわけには行かないでしょ?」

私は言った。

大きすぎる・・と思う。

ルカの言うとおりこの力は強大。

暴走したら止められないもの。

「ーーということはシンジが行くといわなければ
一緒には行かない・・ということだな?」

「うん。そうだけど・・？」

私は首をかしげて頷く。

なんで確かめるようなことをきくのかな？

「・・。

そうか、わかった。

・・俺の話は終わりだ。

お前がいずれ俺の世界にくるなら、それまで待つとしよう。」

「うん・・。ーー？」

私は頷くが・・ルカがどうにもたくらんだ顔してるから私は戸惑う。

「俺は・・次の試合があるから話はこれで終わりだ。

お前も聞きたいことは無いだろ？」

「・・うん。一応ね」

私は微笑んだ。

どうせ肝心なとこは教えてくれないだろうし、ね。

「じゃあな」

そう言ってルカは去っていった。

「・・私も戻ろうかな」

私はそう思って部屋に戻っていった。

第八十二話　二人の会話　（後書き）

なんとか書けましたーー！！
これでようやく完結に向けての準備が・・。
っていっても続きはまた書きますけど、ね。
ではまた次の機会に

第八十三話　私の想いと彼の想い

シンジのいる部屋に私は戻った。

「・・何を話した?」

シンジが早速聞いてきた。

私に何か言う暇も与えず。

「・・シンジこそ、ルカと何話したの?」

「・・お前のこと」

シンジは一瞬ためらいを見せたが即答した。

「私の・・こと?」

私はやや戸惑い聞き返した。

シンジにも・・ルカは話したの!?

力のことーーー。

「そうだ」

シンジは頷いた。

「私も・・自分の力について言われた。」

私はさっきのシンジの問いに答えた。

「こんなに大きすぎる力はーーー
私には制御できないといわれて・・自分も納得できた・・。
私の力は他の民よりも大きくて暴走が当たり前だと言われて・・
私の周りにいる人たちを傷つけるっていうことだって・・
分かってたんだけど・・でもーーしょうがないっよねっーー
言われてッ・・当っ然っ・・だよっね・・っ
私は・・甘く・・見てたんだよねーーッ」

ほとんど私は独り言のように言って私はその場に座り込んで俯き
手で顔を覆いつくす。

涙がスーと頬を伝う。

ほんとは分かってたーー、
自分の力のことも・・その大きさも・・っ
でも、その力で守りたかったーーっ
大切に思うものを・・この力で・・守りたかった・・
でもっーーでもーーっ
あんな風に言われたら・・もうこんな気持ちになれないーーっ

「ーーー」

シンジがなにか小さく呟いた。

そしてシンジは私に近づく。

「泣くな・・」

シンジは私の傍でひざを突く。

そしてなぜか私の背中に腕を回した。

シンジはぐいっと私を抱き寄せた。

・・シンっ・・ジ・・??

シンジは私を優しく抱きしめてくれた。

「・・そんなことで泣くな。

・・泣かなくていい」

そう言ってシンジは私の手を顔から引き離し私の涙を拭う。

「・・どうっ・・して・・?」

私には・・私には分からなかった。

どうして抱きしめてくれたのか・・どうして涙を拭ってくれたのか・・

どうして・・そんなことを言ってくれるのか・・

シンジの言動すべてが分からない。

「・・・」

シンジは何も言わず私を見つめる。

「どう・・してっ?

私の力がっ・・大きすぎるのはホントのことだよーー?

だってーーっ、みたってでしょ・・？シンジ・・っも。
私の暴走・・っ。それっに・・シンジになにも言わなかったーーっ
わたっし・・っ、シン・・ジに・・っかくして・・ったっ
なのにっ・・なのにーーっ、どっうしてーーっ、どうしってーーっ
シンジっはーー、私ーーかくしっごと・・してたのにーーっ
どうしってーーーっ」
そんなに優しくしてくれるの？

そう言いたかったのにいえなかった。

自分で言っているのに自分でその言葉に傷ついてた。

言えば言うほど涙がこみ上げ嗚咽でしっかり話せなかった。

心ではそんなことわかってたのに・・

言葉にしたら余計に苦しくなって心に突き刺さった。

シンジは私の言葉をさえぎって再び抱きしめた。

強くそれでいて優しく抱きしめてくれた。

「・・もういい。
もういいっ、何も話すなっ
話さなくていい」

シンジは言った。

「っ～～～」

言葉からはなにも得られないのに
なんでだろう?

ーー安心する。

シンジは私を理解・・してくれたようで・・
わかってくれたようで・・

「・・自分の力を否定するな。
その力で俺は助けられた。
だから否定する必要は無い」

シンジは優しく抱きしめながら言う。

「シンジ・・っ」

私も・・シンジの背に腕を回して抱きしめた。

私の力で・・シンジを助けたこと・・
いままであったような無かったような
そんな“曖昧”なことしかなかった気がする。

でも・・シンジは言い切った。なんでだろう?

シンジは嘘は・・いわないと思う。

・・はぐらされることやノーコメントのことはあったけど。

シンジに触れられて安心した。

力のことで私だけだと突きつけられ、
それが苦しくて辛くて・・
それらをルカには見せないよう努力していた。

でも・・たくさんーー言葉を心をーー外に出してしまった。

だからーー余計に私を支えるシンジにーー妙に安心感を覚えて・・

そのあとーーまたたくさん泣いて・・シンジを困らせた。

そして・・いつしかーー眠ってしまった。

・・シンジは・・シンジはどう思ったのかな?

どんな想いで私の言葉を聴いて、
どんな想いで抱きしめてくれて、涙を拭って・・
どんな想いで言葉を口にしたのかな?

私は・・分かるはずも無かった・・・。

目が覚めると・・視界はシンジで覆い尽くされていた。
どうやらそのままの状態で朝を迎えたらしく、
窓からは暖かな太陽の日差しが部屋に入り込んでいる。

「・・・」
シンジ・・

私は目を閉じているシンジをみて
そっとシンジの胸元に顔をうずめた。

安心するーー。

シンジの腕の中にいることに心地よさを私は感じていた。

「・・・。
起きたか?」

上からそんな声が降りかかった。

「シンジ・・。
うん・・起きたよ。」

私は顔を上げて微笑んだ。

「・・・大丈夫か?」

「うん、もう大丈夫。」

私はにこやかに笑う。

ほんとにもう大丈夫。

昨日、全部外に出したから。

シンジがそれを受け止めてくれたから。

もう悩まない。

「そうか・・」

シンジは呟く。

「・・・」

「・・・」

二人の間に沈黙が訪れる。

「もう、朝だよね・・？」

「あぁ」

「あぁ」

「・・シンジは体のほうは平気なの？」

「・・・私のほうも平気だけど・・それより、昨日ご飯何も食べてないよね？」

「あぁ」

私の質問にすべて同じように頷くシンジ。

「・・・・朝食・・たべにいかない？」

「あぁ」

これにも平然と頷いた。

シンジは・・頷く意味と・・

私の・・気まずさを・・・わかって頷いているのだろうか？

それとも・・わざと・・？

そんな・・わけ・・ないよね？

「じゃあ、食べにいこっか」

「・・・」

私はそういったんだけどなにも言わない。

私は動こうともがいたが・・なぜか、それは受け入れてはくれなかった。

「シンジ・・？」

私は戸惑い気味に聞いてみる。

「・・・」

ひょいっとシンジは唐突に私を抱き上げ、立ち上がった。

「えっ！？」

私は目を見開く。

「・・立てるか？」

「っ～～、う、うん」

シンジは私を見下ろして聞き、私は恥ずかしながらも頷いた。

そしてシンジは私を降ろす。

「・・・」

「っ～～～”

い、いこっか」

私は明らかに動揺しながら部屋を出てシンジと共に朝食を食べに行った。

その後も私は動揺しまくっていたことを記しておく。

第八十三話　私の想いと彼の想い（後書き）

やっとかけたッ、
そして次回はシンジ視点でこの話をお送りします。
そして次回のそのまた次回は・・なんと最終話!!の予定です。
最終話といっても別の連載で続編を書きま～す。
って前にも同じようなことを言った気が・・。
では、次の機会に

第八十四話　俺の想いとあいつの想い　（シンジ編）（前書き）

前回のシンジ視点です。（いろいろ省略してます）
では、どうぞ

第八十四話　俺の想いとあいつの想い　（シンジ編）

ルミル（あいつ）は部屋に戻ってきた。

なんだかあいつは深刻そうな表情をしている。

なにかを我慢しているかのようにも思えた。

「・・何を話した？」

俺はアイツが何か言う前に即座に聞いた。

「・・シンジこそルカと何を話したの？」

アイツは話題をそらそうとしたのか聞いてきた。

一瞬俺はためらう。だが・・

正直に言ったほうがいいだろうな・・

俺はそう思った。

「・・お前のこと」

俺は言った。

詳しく教えてやるほど俺は冷静じゃない。

それに・・ルミル（お前）のことばかりなのも事実だ。

「私の・・こと？」

あいつは戸惑った声で聞き返す。

「そうだ」

俺はあっさり頷く。

どうやら思い当たる節がありそうだ。

「私も・・自分の力について言われた。」

あいつは俺の問いに答えた。

“も”をつけたあたりからすると
どうやら同じような話をされたみたいだなと俺は推測した。

そのあとーー、アイツは半ば独り言のように

「こんな大きすぎる力はーーー
私には制御できないといわれて・・ーーーー」

言い募り、その場に座り込んで涙を流した。

泣き顔は見られたくないようで手で覆い隠す。

・・何故否定する?
何故・・そんな言い方をして自分を責める??

そんなことで・・・

「泣くな」

俺は小さく呟いた。

おそらくアイツには聞こえなかっただろう。

反応を示さない。

俺はあいつに近づく

そして再びーー

「泣くな・・」

と言い、あいつの傍でひざを突く。

するとーー俺はどうしようもなく、こいつを支えたいと思った。

自分の力を責めるこいつの気持ちは分かった。

だから余計にそんな想いがこみ上げーー俺はアイツの背中に腕を回した。

俺はーー

今までにこいつに対してここまでするほど優しかっただろうか？

誰に対しても心を開かなかった俺が、

なぜ、こんな理屈では抑えられない感情に流されていくのだろうか？

不思議でたまらない。ただーー

自分の力のことで・・泣くなんてしないでほしい。

ルカにそれをなんていわれたかは知らないが
俺はお前の泣く姿を見たくない。・・のは確かだ。

「・・そんなことで泣くな。
・・泣かなくていい」

俺はそう言ってアイツを引き離し、アイツの涙を拭った。
すると・・アイツは分からない・・というような表情をした。

「・・どうっ・・して・・？」

アイツは聞いてきた。
何がどうしてなのか、俺にはわからない。

「・・・」

ただ・・
分かるのは俺の言う意味がアイツに伝わっていないということだけだ。

俺はお前を見る。

「どう・・してっ？
私の力がっ・・大きすぎるのはホントのことだよーー？
だってーーっ、みたでしょ・・？シンジ・・っも。
私の暴走・・っそれっに・・シンジに何も言わなかったーーっ
ーーー

ー」

俺は聞いていられなかった。

以前もそうだったがこいつは自分を責めることが多い。

俺はコイツが自分を責める声は聞きたくなかった。

なぜか、自分に訴えられている気がして・・。

俺が責められてる気がして・・

コイツが・・自分を否定してる姿が見ていられなくて。

だから俺は気がつくと再び抱きしめていた。

「・・もういい。

・・もういいっ、何も話すなっ

話さなくていい」

俺は心の底から言った。

もう聞きたくなかったんだ。

お前の言葉そのものが俺自身を狂わせる。

余計にお前を支えたいと思ってしまう。

それと同時にーー

こいつの言いたいことは痛いほど理解できた。

俺はお前の力をおまえ自身から聞いてなどいない。

俺は別にそれでもいいと思っている。

俺も話していないことなんて山ほどあるからな。

だが・・俺とお前は考え方が根本的に違う。

お前は自分より相手を気遣い、優先する。

それがお前のいいところであり、お前の欠点でもあるが。

そのせいで、今回俺はお前を泣かせているんだろうな。

「・・自分の力を否定するな。
その力で俺は助けられた。
だから否定する必要は無い」

俺は言った。

お前は・・覚えていないだろうな。

お前はあの時俺に自分の名を言った・・。

お前は・・俺と一度会っている。

そしてそのとき、俺は救われた。

お前の力で、な。

旅立ってからも幾度となくお前は力を使い、俺を助けた。

自分では助けたなんて思っていないだろうが、な。

とにかく・・お前は・・否定なんかしなくていいんだ。

俺の気も知らないで勝手に否定なんかするな。

「シンジーーっ」

お前は俺の背に腕を回した。

・・!?

お前が・・俺を受け入れるとは・・な。

俺は不思議な気分でいた。

だがーーー。

だが・・俺は安心した。

お前に触れてお前が傍にいることを実感した。

それがお前にも伝わったんだろうな。

お前は俺に本心をぶつけた。

お前に何度も俺が話さなくていいと言っているのにあふれ出したお前の感情はとまらなかった。

俺はそんなの聞きたくなかったんだけど、な。

だが、それと同時にお前の本心が聞けるのが
俺だけであって欲しいと思った。

お前を安心させられるのが俺なら・・いくらでも
聞いてやれると思った。

だが・・さすがにきつかった。

俺はお前の言葉に振り回されすぎて
お前は泣きつかれて眠るーー

俺もーー疲れた。

そして俺はこのまま、目を閉じた。

俺は目を開けた。

するとーールミル(あいつ)が俺に体を預けていた。

起きてたのか・・そう思って

「起きたか？」

と聞く。

アイツは起きたといって微笑んだ。

「大丈夫か？」

と俺は聞く。

あれだけ聞いたのだから大丈夫でなければ困るが・・

「もう大丈夫」

と言って笑う。

「そうか・・」

俺は呟く。

そのことに安堵するが・・なぜか妙に残念だ。

もっとこいつの本心がきけたらーーと思ってるのかもな。

「・・・」

「・・・」

俺の言葉を最後に沈黙が訪れる。

しばらくすると・・それに耐えられなかったのか・・

もう朝か？

と聞かれた。

あぁ

と俺は頷く。

体は平気か？

と聞かれても

あぁ

と、俺は同じように頷く。

頷いていて思った。

コイツは気まずいとおもっているのだと。

「昨日ご飯食べてないよね？」

とあいつは聞く。

「あぁ」

俺は頷く。

気まずい＝早く抜け出したい

と思っているのだと確定した。

はっきりと拒絶してるわけではないことも分かる。

だからなおさら放したくなかった。

「・・たべにいかない？」

そう言ってあいつはもがく。

俺は無意識にアイツを押さえつけた。

なぜか、放したくなかった。

自分のことは自分がよく分かるものだと

思っていたが、いまだにこの感情は計り知れない。

「・・・」

放したくない・・

だが、いつまでもこうしてるとあとあと問い詰められそうだな。

俺はルミル（こいつ）を抱き上げた。

「立てるか？」

と聞く。

「う、うん」

コイツはすごく動揺していた。

そのあとも・・

コイツは動揺していたが俺はさほど気にしなかったことを記しておく。

第八十四話　俺の想いとあいつの想い　（シンジ編）（後書き）

お前、こいつ、あいつ・・それはすべてルミルを示します。
シンジの性格の事情によりいろいろと変えてしまったので申し訳ありませんが。
さてさて、次回は最終回。
今までの登場人物を出せるよう心がけます。
ではまたの機会に・・。

最終話　それぞれの道

ついに・・ミヨたちとの別れがやってきた。

「ミヨは・・これからどうするの？」

「まだ旅を続けるよ。
私の一族は私を狙ってるからね。
同じ場所にずっとはいられないから・・。
ルミルはどうするの？」

「私は・・あっちの世界を調べてみようかなって思うの。
とりあえずは家に戻るけど・・
そういえば、ルカはこれからどうするの？」

「俺は元の世界へ帰る。
俺は多忙でな、いろいろと忙しいんだ」

ルカも答えてくれる。

「そっか、大変だね。
まぁお互いいつかまた会おうね、二人とも」

「そうだな」

「うん、またね」

私の言葉に二人は頷く。

それらの言葉を最後に私たちは別れた。

そして他のみんなはこれからどうするのかーーということを
先に教えるね。

まずはジュン。

ジュンはバトルめぐりだって。

そしてこのごろはボクシングにはまっているらしい。

次にサトル。

サトルもジュンとともにバトルめぐり。

サトルは空手にはまってるみたい。

大会で負けてからすぐに旅立ったようだけど、
今はよくケンカするらしい。

たとえば・・何をするのにもーー先を争うみたいで・・
実話をもとにすると・・

まずは場面。

人通りの少ない道に不良一人と女の子がいた。

そして不良は女の子を脅すーー。それをジュンたちはみたらしい。

「よしっ・・さっそく俺の力をためしてやるっ」

ジュンは張り切る。

「オイオイ、そんな張り切って油断するなよ・・まったくっ・・」

やれやれ口調のサトルだが、彼も気合が入ってる。

「おいっ！そこのおっちゃん、
女の子をいじめるったぁーみていられねーなぁ？」

ジュンは腕まくりして問いかける。

「あぁ！？ガキがなにいってんだよっ。
おいっ・・やっちまえっ！！」

「「おうっ」」

不良の後ろからぞろぞろとたくさんやってくる奴等がいた。

そしてそいつらはジュンを襲う。

「あぁいいぜッ俺が相手になってやるッ」

ジュンはボクシングの構えを取って相手を打ち倒す。

そうやって戦闘は始まった。

サトルはその間に女の子を助け出す。

「だいじょうぶか？」

「あ・・はい。
ありがとうございます」

「まだそこにいて、あぶないからな」

そんな会話をしながらサトルは女の子を脅した不良を見た。

まぁ、そのころにはジュンは他の奴等をぶちのめしていたが。

「このジュン様があいつをぶちのめす！！
サトルはてだしすんなよっ」

「お前、いいとこ全部横取りじゃねぇか！！
俺がやるさ」

「おれの獲物だっー！！
てぇだすなよ、サトル！！」

「いいや、おれがやる。
ジュンこそだまってみてろっ！！」

そういう口論の中・・

「お前等・・おれ様を無視すんじゃねぇ！！」

と言う声が。

「「あんたはだまってろ！！！」」

ジュンもサトルも声をはもらせて怒鳴る。

そこからまたジュンたちは言い合いを続けたらしく、
不良はそこから居なくなった・・ということがたびたびあったみたい。

不良さん・・かわいそうだね。

ほかにも・・マリアは・・なぜか暁と旅してる。

マリアは暁と・・なぜか気が合うらしい。

そんなこんなで旅をしているようだ。

まぁ、ひとそれぞれ、
みんな頑張ってるらしいということは見て取れた。

さて・・私とシンジのたびも・・終わりを告げていたーーー

私とシンジとの分かれ道がやってきた。

「・・ここで・・っおわかれ・・だね」

私は言った。

涙をこらえて我慢しても声は・・震えた。

一年はーー短かった。いろいろあったけどーーでもっ

もっともっとシンジと旅がしたかった。

でも・・私にはやるべきことがあって・・シンジにも・・それはある。

だからここでわかれなければ・・ならない・・っ

「また・・っ・・あえるっ・・よね?」

私はついに涙がこらえられなくて・・泣いてしまった。

もう会えない・・そう思うと・・

そうシンジから言われるとおもうと・・怖かった。

でも・・そうじゃないと思いたかった・・ッ

こんな・・っ思いをしてるのは・・私だけでいて欲しくなかった。

「・・！
そんな顔・・するな。
また・・会える・・。
ーー会えるに決まってる。」

シンジは私にふっと近づき
私の・・涙をぬぐって、背中に腕を回した。

・・私だけじゃなかった。
私だけがこんなに寂しいだけじゃないんだーーっ
そう思うと涙がまた溢れ、・・ついで欲が出た。

「っーー!?
・・またっ・・またーー」

「?」

「また・・旅がーーできる・・っよね?
これが・・最後・・っじゃないっ・・よね?」

私はシンジに抱きしめられながら聞いた。

「あぁ。これを最後で・・終わらせたりはしない。
・・だが・・次は・・互いに記憶を取り戻した後、だ。」

「・・記憶・・っ?」

シンジの言葉がうれしいものの
記憶という言葉が引っかかった。

「そうだ。
祖母が・・お前に導いたときが初めて出会ったわけではなかった。
それより前に一度お前と会っている。
二度目は・・驚いたが納得した。
お前自身も記憶を封じているままなのだと、な。」

シンジは抱きしめる腕を解き、私を見た。

「そっか・・。
だから驚いていたんだね・・あの時・・」

私はシンジと会ったころのことを思い出した。

そういえばシンジは驚いていたはずだ。

ーー私のことに。

そしてもう一つ引っかかったことがあった。

「ねぇ、シンジ・・。
おまえ自身も・・ってどういうことなの?」

そう、これだった。一つ気になったのは。

「お前に俺は助けられたんだ。
そしてお前はそのとき俺の記憶も一部封じている。
つまり、お前は自分自身の記憶と俺の一部分の記憶を

封印しているんだ、過去に、な」

「そう・・なんだ。
私が・・シンジに・・。」

私は納得した。

だからシンジはあのとき驚いていて、
私が泣いたとき、助けられたと言い切ったんだ。

「そうだ。
そしてその記憶は俺とお前が傍に在ることで封印は増す。
逆に傍に居なければ封印は弱くなり記憶は取り戻せる。
・・もとは二度目にあったあのときに封印はとかれているはずだっただろうが。
とにかく、だ、次に旅をするのは・・」

「互いに記憶が戻るまでお預け・・ってことなんだね?」

私はシンジの言葉をさえぎって聞いた。

「フッ・・まぁそういうことだ。
じゃあな」

「うん、またね」

「「共に記憶が戻るその日まで」」

これが・・シンジと交わした別れの言葉だった。

きっと、
私は今まで作り上げてきたシンジとの思い出は心にしまっておくだろう。

そして・・新たに歩む我が道の糧として・・
精霊使いの名を下に

歩んでいくだろう

ＥＮＤ

最終話　それぞれの道（後書き）

ようやく完結いたしました。
ここまで読んでくださりホントに感謝しています。
感謝し切れません。

さて、ここでようやく完結！！で・す・が！！
続編を出そうと思います。

そうですねぇー、タイトルは・・

『　聖魔精霊使い　』

です！！

続編なんでどうぞお読みください！！
っていってもまだ書いていませんが。
すぐに書きますので、これから読んでくださるとうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6177m/

精霊使い

2010年12月20日23時46分発行